

---

# バグキャラの気まぐれ

猫ヶ洞 一休

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バグキャラの気まぐれ

### 【Nコード】

N1364K

### 【作者名】

猫ヶ洞 一休

### 【あらすじ】

禁忌の身となりし、少年は魔法使いから忌み嫌われた。それに関わらず自由気ままに放浪し自分の存在を忘れさせないために、自分が退屈しないために、良い事やら、悪い事やら、やり続ける……！

## プロローグ（前書き）

処女作品で駄文ですがよろしければ、どうぞ！

## プロローグ

旧世界の辺境の地にて禁忌の実験が行われる…

「ウツ… ガアアアア… ! ガツ…」

男性がビクツビクツと痙攣しながら徐々に息をしなくなって死亡した。

「また失敗か、今度は上手くいくと思っただがね」

その死亡した者のそばに一人の研究者とみられる者がその者を見つめていた。

「まあ、ストツクが無くなったら、また集めればいいのだからね。

さて、最後は君だけだよ、お嬢さん」

研究者は次の拘束された東洋系の少女に目を向ける。

「俺は女の子じゃねえよ、この屑っ!!」

少女と見られた少年は、罵声をあげる。

「ハツハツハ、君は潜在魔力が高いから、成功したら今より倍になるかもね…」

罵声を気にした様子もなく儀式の準備を進める。

「そして私の優秀な手駒になるのだよ。 ああ、君にこの不老不死と魔力の倍加と共に服従の呪いも掛けて置くから安心したまえ。成功すれば君は人形同然になるだから。」

研究者は言い終わると儀式を開始した。魔方阵が妖しく赤く光り少

年を包み込む。

「グツアアアアアアア - - -!!」

魔方陣が少年の体を作り変える。情報を分解し構築する…その繰り返し…身も裂かれるような痛みが走りつづける。

「ガアアアアア！」

そして赤き光が縮小していき、少年の拘束が外れて行く。

「おお、おめでとう！晴れて君は私の優秀なn」

研究者は喜びを口に出そうとしたが、最後まで言い切ること無く自らの血の海に倒れた。彼の上半身が心臓と共に抉られていた。

「誰が言いなりになるかってっのあーいてえ、っーか何この量？  
魔力ヤバくね？ ガン ムからヤキン エだよwww おっと、  
さっさと、ここ、燃やして逃げた方がいいな。 ヒヤハツハツハ  
気分最高」

少年は建物の燃える様を見て、その場を立ち去った。

## ブローグ（後書き）

シリアスじゃねえ

多分ギャグよりなるかと

：

はあ

学年末テスト頑張るか

## プロフィール

名前

レント・A・ツヴァイベルク

(レント・アウレリアン・ツヴァイベルク)

愛称：レン

二つ名

『混沌王』 『不死の魔法使い』 『神出鬼没の悪戯童子』 『幻想種』

始動キ   ：アフ・アン・リ・マダマユ・ケイオウス

加護精霊：全て

種族

チエンジ・リング(取り替え子)

性別：男

年齢

肉体年齢：16才

実年齢：606才

身長：159cm

体重：42kg

外見

中性な顔立ちをしてる

髪はディープブルー

目が右目が金色で左目が銀色のヘテロクロミア（金銀妖瞳）女装すれば女性にしかみえない

性格

悪戯好き、善悪の判断は自分で決める

固有能力

・全精霊の加護（全ての系統が強化される。レントが好むのは闇と火）

・不老不死（儀式によってなった。吸血鬼ではない。）

・魔眼「妖精の瞳」相手に幻覚を見せる。（実際には波長をいじくって見せている）

対象は一人だけにしか使えない

オリジナル呪文

・終焉の光

全系統の複合魔法。

最初は小さな球体だが、術者の好きなタイミングで膨張し、1000程度に四方八方に分散する。着弾すると燃える天空と同等の威力で爆発する。

一つ一つの爆発した時の精霊の系統はバラバラである。



## 第一話 千里の道は一步から

少年は南西に向かって砂漠を歩き続ける、ただ歩いているならば、おかしな点は無いのだが少年は一般人から見ても魔導書と思うような表紙をした本を読みながら、炎天下だというのに汗一つもかくこと無く歩いてるのだ。

（あんな奴が禁書に近いものを大量に持つてるなんてメシうま状態だぜ。東洋の本もあるのもラッキーだな。まあ、東洋文字はゆっくり覚えればいいさ、時間は永遠だしね。）

少年は読み終えた本を自分の影に落とす、本は音無く影に飲み込まれ消えた。

少年は影の倉庫を発動したのだ。見かけによらず結構な量が入るものだと感心する。

少年は研究所を出て、この数ヶ月で魔導書のみで基礎的なことを理解せずに、なんとなく感覚で上級魔法を発動することができるようになっていた。

そして、何を思ったのか走りだした。

「あーもー 何ヶ月歩けばいいんだよー！」

（いらつくどうしよう無くイライラする あれだ 蜘蛛の糸が顔に付いて、糸がまだ付いてんじゃね？って思っ、顔を手でまさぐっている人を見てると同じ位いらつく。）

少年は砂漠の中心で砂煙を上げながら走り、不機嫌になる。そして

疲れたのか一時間後に走るのをやめて、また歩く。

(もういい、3日まえに読んだ気を使って虚空瞬動って奴で一気に最初の目的地であるフランスにさっさと行こう、んっ…：そういうば昨日やった魔力と気の融合で失敗した時にものっそい自爆力だったよな？

ピキーン！！ 閃いた！ 爆発力をも利用すればいいんだよ！  
よしやるう！)

集中する 自分の魔力と気が混ざる感じを思い浮かべる。

ブワツと合成時に起きた

風力が砂煙と共に起きる。そして、上に高く飛び、南西の方角に向けて、地面を蹴るような感じで膝を曲げ力を込める。

「よしっ いざ、フランスへ！」

(足の裏からわざと魔力と気を相反させて、その爆発力で飛ぶ！)

「命名！ 長距離虚空瞬動 ！」

(成功した！) 「フッフ ハーハツハツハツ やっぱり、 天才  
だ 俺は」

少年は喜びを隠せずに高らかに声を上げ、今後の行動について目を瞑り考え始めた。

(フランスに到着したらそこからウェールズに行って、魔法世界に

行く！

よし OK あつ！ ゲート通る時に身分証とお金かねえとダメだな… まあいつかその時になればなんとかなるだろ。 あっつ  
風が気持ちいいぜ)

「うおお…！ 俺は風になるぜ！ いや、もうなってるんだ！  
為せばなる！びゅうーん！」

少年は支離滅裂になりながら有頂天になった。

その状態で30分位騒ぎながら暴走していた。

そのため自分の先に馬鹿でかい城がそびえ立っているのに全く気がつかなかった。

そして顔から激突しドゴオン！と良い音を出して壁を突き破り転がり失速した。

「ぶべらあつ！ 行ってええ くそつ 誰に許可取って建てたんだ

ゴラァア！」

逆ギレである。何の権力を持たず文句を言う様は

さながらチンピラのごとくだ。だが、その屋敷の部屋の広さと高そうな家具を見回し、怒りが収まった。

(…！豪邸じゃないか！誰も居ないみたいだし…)

よし、怪我しなかったから慰謝料としてもらっていきますねー、はいありがとうございます〜じゃ失礼して お金〜 お金〜 お金〜 お金〜  
が俺を呼んでいる〜 んっ？犯罪だって？関係ねーよH A H A H A

HA)

少年は、ノリノリで即興の歌歌いながらを豪邸の中を歩き始める。  
歩いてる自分を陰から

見ている少女に気づかぬままに少年はお金になるものを探し始める。

Side Out

エヴァンジェリンSide

ドゴオン！

『ぶべらあつ！ 行ってええ くそつ 誰に許可取って建てたんだ ゴラァア！』

ビクッ！ 体が震える。

(まさか、私を吸血鬼に変えた叔父の仲間がいたの？まずい、早く逃げないと、何されるか分からない)

真相になったエヴァは叔父を殺した。純白の寝間着が黒ずんだ血で真っ赤に染まっている。

そのまま、殺害した部屋から、通路に出て出口にありったけの力を振り絞って、駆け出した。

通ったドアの向こうから、なにやら声が近づいて来る。(まずい！)

エヴァは急いで通路の曲がり角に息を潜めた。

するとティープ・ブルーの髪をして、ローブを羽織った少女が出てきた。

(わあ、綺麗な人)

いつの間にか少女に見とれしまった。

「お金〜 お金〜 お金が俺を呼んでいる〜 全員〜皆殺しに〜  
全てを奪え〜」

男性と知り、びっくりしてしまった。

(伯父に関係がないみたいだけど、皆殺しって まずい 見つかったら殺す気で来る…)

そう考えると恐怖で体が

震え、ここから動けない。「うーん 右と左どちらに行こうかな？」

少年はどちらに行こうか迷ってる。

(！ 左を選ばれたら、  
こっちに来る！ 逃げないと！ あれっ… 体が動かない 嘘っ動  
いて…)

逃げなければと本能が告げている。されど体は動かない。

「よしっ！ こっちだ！」

(え… どっち?)

心臓がかつて無いほど、  
ドクッドクッと響く。

どうやら、右を選んだらしい。

「お金、お金……」

少年はまた歌を歌いながら右の方へと歩いて行った。

「助かった……綺麗な人だったな……」

本当に綺麗顔立ちだったのだ。思い出すとなぜだか 分からない  
が顔が熱く 火照る。

少年の姿が見えなくなった。

「んっ 今のうちに」

エヴァは今度こそ出口に向かい城を出て、これから先は地獄のよう  
な日々があるのを承知であっても無い放浪へと出た。

## Side Out

### 少年Side

うん……なんと言つかね……

今、猛烈にびっくりしたねドア開けたら、おっさんが血まみれで死  
んでるだもん

まあ、高く売れそうな本があったからラッキーだけどね……

「真新しい儀式が行われた後があるね」

俺は魔方阵に目を向ける。はつきり言つて、胸くそ 悪い 被害者はどうやら、逃げたみたいだな がんばつて逃げるよ。

同じ被害者として願う。 少年はめぼしいものを影の倉庫に入れ、この場を去ろうとするところあるノートを見つけた。実験内容に関する考察らしい、内容から真祖を産み出そうとしたらしい。

「本当にやる事が理解出来ないな…」

少年は忌々しそうに呟いた。外に出て、逃げたであろう被害者のために城を燃やすことにした。

「アフ・アン・リ・マダミュ・ケイオウス 契約に従い、我に従え、炎の霸王。来れ、浄化の炎、燃え盛る大剣。ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄。罪ありし者を死の塵に。『燃える天空』」

爆発と共に城が炎で燃え盛る。少年はそのまま、都市部に向かった。

少年は都市部に着き城で手に入れたものを売つて、 ウェールズで通用する身分証を大金積んで、作成してもらつてる。

「ううーん わ、わかりましたよ わかったからその ナイフをし、閉まってくれ！」

偽身分証を発行する男は+脅して承諾させられた。

「ありがとんねー 感謝するよ」

少年は軽薄な笑みを見せる。

「最近は、危ないから 請けなくなかったのに…」

ブツブツ呟く。

「何か 言ったかな？」

ナイフを突きつける。

男は慌てた。

「い、いえ 何でもありません。 あ、ああそうだ、身分証に名前を入れるので 名前をお、教えてください。」

中性的な顔立ちをした、少年は高らかに声を上げ  
名前を言う。

「レント・A・ツヴァイベルクだ！」

それが、右目が金で左目が銀のヘテロクロミア（金銀妖瞳）を持つ少年の名前であった。



## 第二話 退屈な航海

空は雲一つ無い快晴だ。

レントは建物と共に揺られている。なぜなら今、貿易船に乗ってイギリスに向かっているからだ。無論、フランス国籍ではない他国の貿易船である。

なぜ、他国の船かと言うと現在、後に100年戦争と呼ばれる真っ只中でフランスとイギリスの関係が悪化中なのだ。

今は、あまり目立ちたくないから我慢してきたが、いかんせん、退屈過ぎて死にそうだ。

船が進むスピードが予想以上に遅すぎる！ もう我慢できん！

レントは全力で船長の所に駆け込んだ。

「船長！ いつになったら、着くんだよ！？ 1ヶ月半位で着くって言っただろが、予定の1ヶ月半からもう2ヶ月立ってんぞ あああん」

ガクガクガクツ 船長らしきダンディなヒゲをした、おっさんが首を揺らされる。

「また お前か！ 毎日約三時間ごとに聞きに来るんじゃない！」  
レントの手から逃れ、乱れた服を直す。

「ヤダね、高い金払ったんだ。さつさと船をブリテン本土に到着させる。」

人の迷惑なんて知っちゃこつたない… 船乗りの目がやべえんだよ。なんか遠くから俺の体をなめ回すように見つめて

『レンたん、ハアハア／＼』とか聞こえるんだよ。

『いいなあ 船長…』

うあつ、まただ、キメエ このままだと本当にやべえよ

「じゃあ 後、何日だ、おっさん？」

「おっさんって… はあ、」

おっさんが俺の前で頭を抱えてる、40になるやつをおっさんと言つて何が悪い？

「…予定では今日の夜に着く予定だよ…」

「そうか、わかった 着かなかつたら、また来る」

レントはそのまま、どこかに立ち去っていった。

ただ、そのあと船乗り達の喜びの悲鳴が聞こえたが、あいつらがそういう趣味だということについては、なにも知らない うん…私はホントになんにもシラナイヨ…

船長は耳をふさいで、現実から目を逸らす。

何なんだよ？ 本当キメエ、変な目で見ていた野郎をぶっ飛ばしてやったら、懲りるところか、喜んでるし…

思い出しただけでも背筋がぞわぞわする。

レントは部屋に戻り、直前に起きた出来事を思い返し、船乗りへの評価をかなり下げた。

夜に到着するって 言ったからな 寝ていれば 着くだろうしな

レントはベッドに入り寝て、暇を潰すことにした。

昔の光景だ…

目の前に、喜び涙を流しながら、僕の名前だろうと思われる名前を呼ぶ夫婦がいる。

「よかった、戻ってきて」

「レント、レント…」

夫婦は僕の両親だという、知識がある。昔、二人から愛情を注がれていたという知識がある。

記憶とか思い出を覚えているとかじゃない。知識として分かるの

だ。両親が言うに一年前、両親達の目の前で消えて、今日、現れたらしい。消える前と違う点はヘテロクロミア（金銀妖瞳）だけだが他の部分は変わってないと聞いた。

しばらくの間、両親に愛され過ぎていたが、その日々はある日を境に崩れ去った。

「！何をやったの!？」

母が叫ぶ。僕はバラバラの欠片になったカップをよく分からないが母の目の前で魔法みたいに直してしまった。

「分からない…お母さん どうしたの？」

僕は震えている母に近づくと突き飛ばされる。

「来ないでっ！この悪魔っ！」

突き飛ばされた時頭を強く打って、気を失った。

目が覚めると真っ暗で声が出ず、体も動かせない。目隠しと拘束されている。

「明日、バルトさんが買ってくれるそうだ」

「そつだね、悪魔の子に呪われる前に捨ててしまおう」

両親の声が聞こえる、どうやら捨てられるらしい。  
僕はそのまま寝てしまった。

朝になり男に引き取られ  
そして研究所に連れてこられて暗い部屋に閉じ込められた。男が  
嘲笑うかのように言う。

「ハツハツハツ 素晴らしい！ 君はチェンジ・リング（取り替え  
子）か！ 全ての精霊に愛されし子だ あはははっ よろしい私が  
最高の 化物にしてあげるから、 楽しみしてるがいい」

そこから痛々しい、人を人と思わぬ、実験が始まった。

『レ…君、起き…まえ、  
レ…ト…』

うつすらと目を開ける。

目の前にヒゲジジイが俺の体を揺さぶっていた。

「なんだ… ヒゲジジイか、俺に何か金物くれんの？」

レントとは気だるそうに ヒゲ船長に聞く。

「あげないよ！ヒゲジジイって… 私は まだ、そんな年じゃない  
！」

「カリカリして、ストレスが溜まると 髪、ハゲンぞ」

「誰のせいで 溜まってると思ってるんだ！」

ヒゲジジイはわめく。

「船乗りでファイナルアンサー！」

ビシッ！ 人差し指をヒゲジジイに向けて指す。

「お前のせいだよ！ はあ、もういいそんなことより、着いたぞ  
「まじか！ ヒゲジイ、サンキュー！」  
うあっ、危なっ

レントは着いたと聞いて 全力で走り出ようとして、ヒゲ船長に  
ぶつかりそうになるがお構いなしだ。

「まったく、忙しいやつだ。…うちの子もあんな感じだな 今 どうしてるかな」

レントの行動を見て、ヒゲ船長は自分の子のことを考え、想いにふけた。

「ふう、 悪魔の子か、ホント よく言うよ。俺から見れば、人の欲望のほづが悪魔に見えるよ…」

レントは夢のことに対して呟いた。

「チェンジ・リング（取り替え子）ね…  
おっと、ウェールズのゲートに行かないと。」

レントは目的を思い出し、ウェールズに向けて出発した。

「長距離虚空瞬動！」

バツ！ 「フィッシュ アンド チーズ 嫌いなやつに…」

歌を歌いながら順調にウェールズへと進んで行く。

……

「スコーンはね、まずいけど、食べたくないよ、やっぱり食べない……」  
「ん？ あれかな？」

歌ってから何分かした後、ゲートに入る前の受け付けの小屋らしき建物を見つける。

よしっ、降りて入るか。

レントは地上に降り小屋に入った。

「すいまつせん」

夜中で皆寝てるであろうのに気にせずはゲーターを呼ぶ。

そして一人の女性が眠そうな顔をして出てきた。

「ふあ、何の用なのよ。」

「んっ、向こう側に行きたいんだけどね、ほいっ、身分証とお金っ、でいつ開きますか？」

レントは身分証とお金を笑顔で渡す。



「確認するわね。ゲートは明日の明朝に開くわ」

女性は身分証が問題無いことを確認し、レントに返した。

「どうも（よしっ！）」

偽身分証が通って胸の中でガッツポーズする。

「まだ 時間があるから、 部屋で休んでください」

レントは部屋に案内され、硬いベッドに入り寝ようとする……

「……眠くならねえ」

船で寝すぎて、眠れなかった……

眠れないので、即興の歌を口ずさむ。

その結果、隣室の人に怒られたが反省することなく歌った。歌は朝まで途切れることなく続いた。

## 第二話 退屈な航海（後書き）

次の話で時間を飛ばしてナギ達と合流させたいと思います。

### 第三話 運命の出会い（前書き）

オリジナル魔法を作ってみました。

### 第三話 運命の出会い

魔法世界に来て数百年、色んな意味で有名になっていた。何もせず生きるのは、退屈なので目立って見たのだ。

主な経歴は正規軍への攻撃、国を問わず会談や国事行為中の悪戯（お偉いさんを武装解除を使い下着だけにする、大人数に幻覚を掛け大混乱を引き起こす）や国のトップの汚職を民衆に公表したりした。やられた国はプライドが、許さないため、俺を捕らえに来るが、全部返り討ちにしてやった。

指名手配にもされ、賞金が400万\$掛けられている。魔法使いからは『不死の魔法使い』『混沌王』と恐れられ、民衆からはその二つと『神出鬼没の悪戯童子』と呼ばれるようになった。

で…今、俺はヘラス帝国の皇族の宮殿に忍びこんでいる。女装姿で

女装の方が人を騙しやすいんだもん。特に男が引つかかやすいんだ

むっふっふっ 今日第3皇女の誕生日だ もう サプライズするしかないじゃないか！

もう皇女以外のものは眠らしてある、後は実行するのみだ。

レントは我が家のように 迷わず皇女の部屋の前に到着する。

そして紳士のごとくノックし、扉を開ける。

「誰じゃ？ 勝手に入って来る者は？」

褐色のヘラス族の第3皇女 テオドラはレントを見て 警戒する。  
なんせ見知らぬ少女が目の前にいるのだから。

「どうも〜一般市民の男性です」

「へ、変態だ 誰かつ 引っ捕らえる！」

テオドラは警備を呼ぶが誰も反応しない。

「無駄無駄、 皇女様以外眠らしておいたからね。それと変態とは失礼だな」

「普通、男は女装しない！貴様、妾に何の用じゃ」

「そんなに警戒しないでくださいよ、じゃじゃ馬さん」

「皇族に向かってその物言いはなんじゃ！」

テオドラはレントを睨みつつ、レントが影から何か出すのを警戒する。  
四角い中くらいの箱が取り出される。

「誕生日プレゼントをどうぞ」

「は？」

テオドラはあっけにとられる。

「だから 誕生日プレゼントだよ ハッピーバースデー」

「へっ・・・？はっ・・・？ あ、ありがとう？」

「どういたしまして」

祝福されるのは嫌いではない。

軽くスカートをつまみお辞儀する少年を見つめる。

あっ、笑った よく見ると中々・・・ って、 なに、妾は考えてるんじゃ／＼／

「あ、開けてもいいかのう？」

「どうぞ、どうぞ、（早く開ける フフフフ）」

「そ、そうか では、失礼して・・・」

パカッ ドツ バアア ！！

「ふひゃあっ ケホッ、ケホッ、な、なんなんじゃ！これはー！ー！ー！！

テオドラの顔に箱に入らないほどの生クリームが溢れ、勢いよく降りかかったのだ。

おかげで部屋も生クリームでいっぱいである。

「プッ、ハハハハア〜ヒヤヒヤヒヤッ 間抜け面でふひゃあっ、だってwww 期待した以上反応だったぜwww」

腹を抱えて爆笑している奴に対して怒りが湧いてくる。妾を馬鹿にしおって…

「死にさらせ！（魔法の射手 光の10矢!）」

テオドラから放たれ、交錯しながらレントに着弾した。が…

レントはそこにはいなかった。

「逃げられたか… んっ？ 紙？」

テオドラの目の前に一枚紙がひらひらと落ちてきた。

紙には『じゃじゃ馬さんにどつきり！をプレゼント！by混沌王』と殴り書きされていた。

「あ奴め、次に会ったら 殴ってくれる！」

テオドラのやり場の無い怒りが空に虚しく響いた。

今、暇なので帝国とドンパチやってるぜ。

「行くぞ！帝国さん

アフ・アン・リ・マダムユ・ケイオウス 我に応えよ 精霊の王

来れ 破滅の光 全てを呑み込み 滅びの救いを 後に残るは た

だ混沌のみ そらっ！終焉の光！」

禍々しい小さい球体が一つ帝国艦隊に向かって放たれる。球体は膨張し四方八方に数えきれぬほどに分散し爆発する。

辺りの艦隊や鬼神兵に一つ一つが「燃える天空」と同等の威力の被害を与えた。

「ほいつ！ もう一つ持ってけ（右腕解放 千の雷）」

ズダアッ！！地面を抉り鬼神兵をなぎ倒して行った。

『百重千重と重なりて 走れよ稲妻 おらあ！ 千の雷いい！』

レントから少し離れた所からそれは放たれた。

「およつ？ 誰だ？ あの赤毛？ お！ 帝国さんが逃げてく」

ふむ、あいつ 面白そうだね 周りにはいる刀と重力出してる奴とあのちびも仲間かな？ よし

（魔法の射手 氷の89矢！）

赤毛を包み込むように襲いかかる。

S i d e O u t

S i d e ナギ



「ナギ！帝国が攻めて来たそうだ！」

「言われなくてもわかってる！ 急ぐぞ！」

「ええ、急ぎましょう」

「うむ、急がないとじゃな」

全力で帝国が攻めて来た所に向かったが、誰かが一人でやってやがる。

何だ！？あの魔力の量は！？ 俺の倍以上あるぞ！？

「おい……アル……」

「はい……すざましい魔力の量ですね」

「おいつ、何者なんだ、あの少女は……」

「あれは……恐らく、『混沌王』じゃろっ……」

混沌王？ あれが……？

『行くぞ！帝国さん』

アフ・アン・リ・マダマユ・ケイオウス 我に応えよ 精霊の王  
来れ 破滅の光 全てを呑み込み 滅びの救いを 後に残るは た  
だ混沌のみ そらっ！終焉の光！ 』

帝国の兵力が一気に半分以下になった。

「……！?!?」「……」

言葉を失う…… いや、俺だけじゃない アルや詠春だけでなく、師匠もだ。

師匠も黙るとなるとそれだけやばい奴だ。

あれは！千の雷！へっ、おもしれえ

「おい、ナギここは引いたほうがい」「百重千重と重なりて 走れよ  
稲妻」「ナギっ!?!」

うるせえ 詠春、もう止められねえ。

「おらあ！ 千の雷いい!」

俺も同様に鬼神兵に仕掛ける。

「馬鹿か!?! 何で俺らがいることを知らせる!?!」

「まだ、敵かどうかわからないだろ 詠春?」

「……馬鹿弟子が……」

「……」

師匠とアルまで頭押さえてるが…気にしねえぜ!

まず話を……

「ナギっ!」

魔法の射手が迫ってくる。まずい障壁を… よし…

キンツキンツキキキ…パリンツ

なっ！？ 障壁が！ くっ…  
残りの矢が襲いかかり、ナギは紙重一重で避けるが1矢、腕にくら  
う。

「ナギっ！ 大丈夫かつ！」

「大丈夫だ 詠春。 おいつ手を出すなよ！」

「はっ？ なん「わかりました」アルっ！？」「うむ」「ゼクトまで！  
？」

うしっ行くぜ。

少女に瞬動で近づき、殴りかかるが流される。少女も腹部に蹴り  
を入れるが避ける。しばらく肉弾戦の攻防が続けられる。

そして、ナギは距離を取り。魔法で仕掛ける。

「雷の斧！」 少女に直撃し、煙が辺りを覆う。

お！ 決まったか？

「うん、俺の勝ち」

ナギの首に剣を象った魔力があてられている。

いつの間に！？ すげえ

「なあ、名前なんていうんだ？」

「俺か？ レントだよ。」

「レントか、俺はナギっていうんだ。なあ、レント 俺らの紅き翼アララアラに入れよ！」

「ナギ！そいつが入るわけが「もちろんいいぜ！」はああああー！？」

「よしっ これから 頼むぜレント！ お師匠、詠春、アルも良いよな？」

「お主が言っならいいじゃろ」

「もちろんです。ところでレント、その服にはネコ耳を付けてくれませんか？」 キラーン、

ぽんつとネコ耳が出される。

「おっ、よくわかってますね 同志よ！」

レントはアルからネコ耳を受け取り装着する。

「あなたもね。 ふふふふ」

「ん… 詠春、どうした？」

あれ… 詠春が頭を抱えてやがる？

「これから先どうなるかで頭が痛い…」

まったく、考えすぎなんだよ。詠春は。

「よしっ！ 街へ戻るぞ！」

「了解（ええ）（うむっ）（はあ）」

ナギ達は街へ帰って行った。

## 第四話 ラカン合流

今日の夕食は詠春の国の鍋料理に決まったぜ

「じゃ 早速肉を」

「あつ ナギ おまつ・・・ 何 肉を先に入れてんだよ」

「トカゲ肉でも旨いかのう？」

「いいじゃねえか 旨いもんから先だよ なぁレン」

「ああ、旨いもんは早く食べなきゃだからな」

ナギと共に肉をどんどん鍋に入れてく

「バツ バカ お前ら 火の通る時間差というものがあってだな」

「あー うっせ うっせーぞ えーしゅん」

「そうだ 生真面目な奴は おにゃんこにもてないぜ」

「なっ、なぜその話なるっ」

お・・・動揺してるしてる

「ふふ・・・ 詠春知ってますよ 日本では 貴方のような者を」  
「ん？ なんだ アル？」

「『鍋將軍』・・・と 呼び習わす そうですね」

( )(ナベ・シヨーグン!?) ( )

「っ・・・強そうじゃな」

「わかったよ・・・ 詠春 俺の負けだ 今日からお前が鍋將軍だ」

「鍋奉行じゃ・・・? んーうれしくないなー」

「全て任す 好きにするが良い」

「鍋將軍様 どうぞ お願いします」

おっ 煮えて来た来た 凄いね 鍋將軍って さあて 食おう  
む  
っ うめえ

「姫子ちゃん にも食わしてやりたい くらいの旨さだな」

「そだね あまりの旨さにびっくりするぜ」

「まあ・・・ 戦が終われば 彼女を自由にする機会をも掴めるやも・  
です」自由になれば 笑顔になるだろうね

「その戦だが・・・ やはりどうにも 不自然に思えてならん」

「俺から見れば 戦はいつでも不自然だけどね」

「そういうことじゃなくてだな・・・ おいつ ナギ レンお前ら肉  
ばっか食うな」

「「いいじゃねえか(じゃん)」

食わないのが悪いんだろ　んっ？　何か来る！

ドカツ！　鍋の場所に大剣が突き刺さり、レントに鍋が飛んでくる

「うおっ　あぶね！　あ・・・」

ブオツ　レントは風圧で鍋を跳ね返し、鍋は詠春の頭にすっぽりと入る

「食事中　失礼ッ　俺は放浪の傭兵剣士　ジャック・ラカン！！  
いっちょやろっぜッ」

「何じゃ？あのバカは」　「帝国のって訳じゃなさそーだな」

「雇われたんじゃね？　あゝ　詠春・・・わりい」

やっちゃったぜ　てへッ

「？　どうかs・・・むお!？」

「フ・・・フフフフ・・・フ・・・　食べ物を粗末にする者は・・・」

「どーしたー　来ねーのかあー」

ラカンって奴が崖からあー言ってるし　詠春を向かわせよう

「おいっ　詠春　鍋をぶっ飛ばしたのアイツだぜ　やっちゃって  
鍋將軍」

「フフフフ・・・　そうだな・・・」



よしっ これで・・・ ええっ!?! あぶなっ! ブオン  
俺に目掛けて刀振ってきやがった

「おいっ 相手が 違っぞ!」

「いいんだよ こっちで・・・よくも鍋を被せてくれたな」  
詠春の様子が変だぞ?

「はっ? いや・・・だから・・・原因は俺じゃなくて アイツ  
うおっ! 待てっ 詠s「問答無用ッ!」 ナ、ナギッ!」

「ナギならあっちでやりあってますよ」

アルがほくそ笑み答える。

「うむっ レン 一人で頑張るのじゃ」

ええっ ひでえっ! 仕方ない 使つか・・・

(妖精の瞳!)

俺を襲ってくる 詠春に魔眼を使い、幻覚を見せる

「逃がすかつ! レン!」

詠春は俺の向こうの岩に目掛けて刀振るい続ける うん 成  
功!

「見事ですね・・・」

「相変わらず すごい魔眼じゃの」

「あゝ 疲れた ナギはまだやってるみたいだし 鍋を再開しよう

ぜ

「「そうですね（じゃな）」

三人で鍋を再開する。

『千の雷!!!』 あ・・・ 詠春に当たった・・・  
まっ いったか うん やっぱ肉旨っ

戦闘が終わったのは13時間後で傷ついたナギを俺が背負い、アルが詠春を背負った

なんか知らんがラカンも付いてきて仲間になった  
中々、話しの合う奴だったので、後で手合わせした・・・ もちろんフルボッコにした フッフフ・・・

数ヶ月後

紅き翼の圧倒的戦力で「グレードIIブリッジ奪還作戦」は勝利に終わった この作戦を成功させてから俺の評価がぐーんと良くなり  
連合から今までの罪をちらにしてくれたぜ

まあ、俺の免罪を納得出来ない人も結構いるけどね・・・

紅き翼にガトウとタカミチが入った、二人とも女装姿の俺を見てすっ  
っかり、勘違いしてておもしろかったな

「レン 何、ぼーっとしてんだ」

「ん？ 前のことを振り返ってたんだよ」

「ふーん で ガトウ会って欲しい協力者って誰だ？」  
「ああ もうすぐ 来る」

向こうから来たのは……

「マクギル元老院議員！」

「いや わしちゃう 主賓はあちらのお方だ」

おめ じゃねえのかよ！ まぎわらしい！

向こうの方からフードを被った女性がくる

「アリカ王女様だ」

へ…… おっ、ラカンがいったぞ

「気安く話しかけるな 下衆が」  
ラカンに向かつて冷たく良い放つ

「ぶっははは おい見ろよ ナギ ジャックの間抜け面WWW ?  
おい ナギ？」

どうしたんだ皇女様をぼーっと見つめちゃて…… ! なるほど

「ナギ」 もしや 一目惚れ？」

ナギの首に腕をかけ 小声で呟く

「はっ! ? んなわけねーだろ 俺がそんな「いいと思っぜ ほら

っ 行つてこい」 バカッ！ 押すな！」

ナギをアリカ王女の前に突き出す

ひゅー 結構 いい雰囲気じゃん

「ジャック・・・もしかしたら・・・」

「おう 俺も 同感だ」

ジャックも気付いたみたいだね フフフフ 頑張れナギ

今回、姫さんが来た理由は姫さんは調停役となり 戦争を終わらせようとしたが力に及ばず 俺らに助けを求めて来たということだった

そして、ガトウから「完全なる世界」が操っていると聞かされたが さっぱりわからん

で・・・休暇中に内偵を開始したが俺とジャックとナギは調査に向いてないということ以外された

俺はジャックと共にゆったりバカンスを楽しんだ

ナギは姫さんにラブラブデート？で関係が進んでるようだね

「また 買い物だあ？ 何でいつも俺なんだあ！？ レンやジャックがいるだろが」

ばちーん おお また いい平手打ちだな ナギの奴 鈍感だね

「ナギ」 いい加減、反論するのは無駄だと思つよ

「うむ レントの言つとおりじゃ 行くぞ ナギ」

「ちっ 引つ張んな ちょ レン！ 帰ったら覚えてろ」

「行つてらつさい」

アリカ王女に引きずられてゆく ナギに手をふる

さて 今日は魔法具の開発でもしよう

## 第五話 一夜開けて反逆者

ナギたちは「完全なる世界」に関する証拠を渡すためにマクギル議員の所に訪問中だ

俺は何してるかという宿でゼクトとポーカーをやって暇つぶし中

「今度こそ 俺の勝ちだ 行くぞ」

「はあ〜」

同時にカードをオープンする レントの役はストレート ゼクトのはというど……

「ロイヤルストレートフラッシュだとおおお！ くそ また 負けた！」

なんで 勝てねえんだよ

「もう 一回やるぞ」

レントは虚ろな目でゼクトとポーカーを再開する

「またか？ もう やめないか 飽きてしまったしのう」

「おかしいだろツ 20回 やって 一回も勝ってねんだぞ  
一回も勝てないとか 悔しすぎる

「はあ…… ナギ達早く帰ってこんかのう」

ゼクトは諦めないレントの相手に疲れていた

レントがトランプをシャッフルしてまた ポーカーを始めようとしたら

ドンツ！ どこかで爆発する音がした

何だよ！？また何かやったのかよ！

「のう・・・ レン今 大きな音がしたの・・・」

「・・・気のせいじゃね？」「ゴッ！！ バラッ！ バラッ！」  
「・・・」

建物が崩れる音が遠くで聞こえる

マジかよっ おいおい まだ ポーカー勝ってねえぞ

「ほれ ほれ」

ゼクトが促す

「仕方ないね・・・ アルに聞いてみよう」

アルに急いで念話を掛ける

「アル なにがあつた？」

「レンですか？ どうやら「完全なる世界」の罠にかかって 反逆者にされたみたいです・・・ 首都からすぐ 逃げて下さい」

はは 何それ？ 面白いことになってんじゃないん

「了解」 じゃ また後で

「ええ それでは」

「で なんじゃ？」

「敵さんにはめられて 連合の反逆者になったらしいよ」

「そうか・・・ ではさっさと逃げるのじゃ」

部屋を出ようとすると兵士がレント達の所に襲ってくる

「居たぞ！ 捕らえろ！」

数人の兵士がレント達に向けて捕縛用結界展開弾が放たれるが二人はすいすいと避けていく。

「殺つちや駄目だよな・・・？」

「当たり前じゃ やったら敵の思うツボじゃ！」

「めんどくさっ うおっ」と

うざい、その君に幻覚をプレゼントしてあげようじゃないか

レントが空中に飛び全方向からの光矢を避ける

そして、一人の兵士に一気に近づき、魔眼を使用する

「なっ・・・ なぜ こんなに居るんだ！」

掛けられた兵士は味方に対して結界弾を狂ったようにばらけるよう



に撃ちまくる

「何をする!？」

兵士は味方からの攻撃をもろに受け、動けなくなる

「何を見せたんじゃ？」

「んっ 何 あの兵士には味方が俺らに見えるようにしただけさ  
ゼクト、あの角で転移しよう」

「うむ まかせる」

角に曲がり、兵士が混乱してるうちに影の転移を発動し、街を脱出した

その後、辺境を通り紅き翼の隠れ家に渡り アリカ王女が囚われている「夜の迷宮」へとナギ、レントは救出に向かう

「魔法の射手 闇の551矢!」

レントが今いる警備を全員戦闘不能にする

「ナイスだ レン! おらあ!」

ドゴオッ!

おしっ ナギが開けたか

「よお 来たぜ 姫さん」

ナギ 白馬の王子っぽいな。姫さんは相変わらずだし

「遅いぞ 我が騎士」

姫さんは来て当然という、顔をして座っていた

「俺も来たぜ！」

「お前は知らん」

冷たく言い放つ・・・ぐっ・・・ まあナギにメロメロだから  
しゃーないか

「あっ！？ お主はぁー！？」

ん？ 誰だ？ 奥の奴 暗くてよく見えん

声の主はレントに向かって走り出し顔にジャンピングキックをする  
レントはそれをもろにくらった

「ぐおおー！！ 誰だテメっ キレんぞ！」

痛い、油断して障壁張って無かったから本当に痛い

「うるさい！ お主のせいで妾があの後 説明するのにどんな大変  
だったか・・・」

あっ、あの時のか！プッ！

レントと言い争う少女は褐色肌と角を持つテオドラだった

「レン 言い争ってないで早く逃げるぞ」

増援が来るのホント、早いね

「了解〜 じゃね じゃじゃ馬姫」

「たわけッ!」

シユボツ 今度はアリカがレントの頭にチョップを下す

「痛〜ッ 何なんだよ!?!」

お前もか!

「テオも我らに協力してくれるそうじゃ だからテオも連れていくのじゃ」

そうアリカは囚われてる間テオに協力を持ちかけ、それをテオは承諾した

「そうなのか?」

レントはテオに首をかしげ、聞く

「そうなのじゃ」

へ

「じゃ 行きましょ」

レントは影の転移魔法を展開し、ナギ達を隠れ家へと送り自分も行く

「何だ　これが噂の紅き翼の秘密基地か！　どんな所かと思えば・・・  
掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してたんだ　このじゃりはよ」

「ジャック　こいつは一般人と違って頭がパーなんだ」

「貴様ら無礼であろう！」

「へっへっくん　生憎　ヘラスの皇族にや　貸しはあっても借りはな  
いんでね」

「俺もだ」

「嘘つけ！　貴様はおおありじゃ！」

ちっ　いつまで根にもってんだよ

「じゃ　レン　後は任した」

ラカンは瞬動で小屋に逃げていく

「あっ　おいっ　」

ジャックの野郎、俺に押し付けやがった・・・  
逃げよ

「これっ　置いてくでない　妾の話相手になれ」

レントは「逃げる」を使った　だが逃げられなかった！

「はあ　わかりましたよ皇女様」

レントは逃げるのを諦めて、丁寧な口調で答える

「う、うむッ　わかればよいのじゃ　あと妾のことは呼び捨てでよいぞ」

「了解　じゃ、テオ、とりあえず向こうまで肩に乗せてやるよん」

レントはテオを肩に乗せ、ナギの所へ向かう

「なっ　！　ちよっ！」

顔を赤く染め慌てる

「いやだったなら　降ろそっか？」

「いやっ　いい　このままで・・・／＼／＼」

？変な奴だな、んっ？姫さんが何か言ってるらあ

「世界全てが敵　良いではないか　こちらの兵はたったの八人  
だが最強の八人じゃ」

「一番強いのは誰なのだ？」

テオは小声で聞いてくる

「そりゃ もちろん俺だ 数百年間 ずっと世界に悪戯してきたんだぜ」

「やはり そうなのか」

おっ、嬉しいね認めてくれるとは

「そうなんだよ」

「レンさん 少し黙りましょうよ」

うっさい タカミチ！

前から思うんだがお前、 髪を刈り上げてるけど・・・似合ってるね  
えからタカミチが口を挟む

「なんだよ？ タカミチ羨ましいのか なら変わってやるか？」

「えっ ぼ、僕ですか？」

はは 凶星かよ

「なっ 妾はレンが良いのじゃ！／＼／」

「「そりゃどうも（えっ！？）」

・・・

二人の時間が止まる

「おっ、いい画になってるぞ」

レントの指す先にナギが騎士の叙任を受けてる最中だ

「の、のう レン・・・」

「何だ？」

「お主も・・・妾の騎s「めんどい」 何故じゃ!？」 「束縛されんのがヤ・ダ 堅苦しいし、つまんね〜し 何より俺、不老不死だし」

悪戯出来ないからね

「なっ、 そんな理由で断るとは!」

「はい はい この話は終わり」

「納得がいかなぞ!」

ギヤイギヤイ!!

「フフフフ 二人は仲が良いですね・・・」

「何で、いとも簡単に仲良く出来るんだ? くそッ 俺も女性と仲良くなりたいよ・・・」

「ふふふ 詠春は生真面目ですからね」

「お前もそれか アル!」

「一理あると思いますが・・・ まあそれより戻りましょう」

「あっ くら 待て、アル」

詠春とアルの他にも小屋に戻った

Side テオドラ

逃亡生活からもう半年がたとうとしている 頭脳班が 敵組織を割りだし、肉体班が潰しにかかる

そして、アリカと妾は主に味方を増やすためのあちらこちらに移動し、説得する

そんな多忙な毎日で普段はあまりレンと会ってないのじゃが・・・

今日は珍しく一緒に過ごせる日だ

ふふふ・・・ レン、今日こそは絶対に騎士になってもらうぞ・・・  
／／／

む 居た居た！

「レン〜」

テオはゼクトと何か話をしているレントを見つけ、首に飛び乗る

「うおっと！ またテオか・・・」

むっ 何故うんざりした顔をするのだ

「レン、ちょっとお願いが」断る、そういつのはタカミチに言っ  
てね〜」まだ、何も言っていないぞ」

「どうせ 騎士になれって言うんだろ」



「うっ 何でじゃ 何が嫌なんじゃ・・・」

うっっ 嫌われてるんだろうか？

「騎士なんて 面白くないし、俺がなると問題が起こる」

問題？・・・ 何じゃろうか

「問題とは何じゃ？」

「それはワシも気になるのう」

「・・・チェンジ・リング（取り替え子）だからだ・・・」

チェンジ・リング？

「なるほど・・・ だから、魔眼を持っていた訳なのか」

「ゼクトは知ってみただね」

「何じゃ まったく分からん 説明するのじゃ」

「チェンジ・リングとは 精霊に連れ去られて帰って来た人のことだ」

「そして、魔眼と膨大な魔力を持ち、そのほとんどが力に溺れ、人間に被害を与えていくと伝えられておる」

「そのため、魔法使い達はチェンジ・リングを災厄をもたらす者と名付けた」

「今でも現れたら、真っ先に殺すべき幻想種として指定されてるの  
う」

レンとゼクト殿が交互に  
説明する

「だから、そんな奴を騎士にしたら テオは死刑確実もんだよ、だ  
から無理だ」

レントはテオをゆっくりと下降ろし、髪をくしゃくしゃと撫でる

そんな理由でなんて・・・ 絶対におかしい！

「嫌じゃ レンは優しいし そんなことをする訳が無いじゃなかろ  
う！」

そっだ 今だって世界を救おうとしてる だったら、 そんな認識  
だって消える

「はあゝ テオ、俺は数百年間好き勝手にやって来て何百人も人を  
殺した

今だって、面白いからこの戦争に参加してる明らかに悪だ」

「じゃあ 出来るだけ一緒に居てくれるかのう・・・」  
せめて、これだけでも・・・

「まあ、出来るだけね」

「ホントか!？」

自然と笑みがこぼれる

「うん、本当だよん」

嬉しくて たまらないのう・・・／／／

願わくばこの日々が長く 続いて欲しいものじゃ・・・

テオは今日、丸一日レントに構ってもらった

第五話 一夜開けて反逆者（後書き）

早く、本編に入りてえ

**第六話 決着×放浪 【修正しました】（前書き）**

お気に入り登録が100件を 越えました。  
ありがとうございます。

## 第六話 決着×放浪 【修正しました】

「不気味なくらい 静かだな 奴ら」

「ラスボスはだいたいそんなもんだろ？ なあ、ジャック？」

「まっただ」

紅き翼はラストダンジョンである「墓守り人の宮殿」を見据え決戦に備える

「ナギ殿！ 帝国・連合アリアドネー混成部隊 準備完了しました」

20代位の鎧を着たアリアドネーのセラス総長が報告する。

おっ！ やっと 宴の準備が整ったのか

「おう あんたらが外の自動人形や召喚魔を押さえてくれりゃ 俺達が本丸に突入できる 頼んだぜ」

「ハッ！ それで あの……」

総長はナギにサインを書いてもらっている

お姉さん、それって職権乱用だと思うんだけど

「これで最後か……」

「ハッ 怖じけついたのでか レン」「んな訳ない、むしろ逆だ  
今までの中で一番ワクワクしてんだよ 「よおしっ 野郎ども」  
時間だ ジャック！」

「行くぜ！！」

ナギの合図で世界を賭けた戦いが始まった。

「まず一発目！！ アフ・アン・リ・マダムユ・ケイオウス 我に  
応えよ 精霊の王 来れ 破滅の光 全てを呑み込み 滅びの救い  
を 後に残るは ただ混沌のみ  
『終焉の光』！！」

レントから放たれ、膨張し分散し自動人形や召喚魔はなすすべもな  
く、燃やされ、凍り、潰され、消滅する。

「なんていう 破壊力なの・・・」

たった一発の威力にセラスは呆然とする。

だが一発で終わることなく何発も『終焉の光』を射つ。

「ナイスだ レン！ 総長 俺らは中に乗り込む！  
残りを頼むぜ！」

「は、はいッ！ 了解しました」

ナギ達は敵中を一気に突破し、宮殿内に入る。  
そこで待ち構えていたのは白髪の男と4人。

「やあ 「千の呪文の男」 また「必中の神の矢」！」  
サジタリウス

矢の形をした魔力が白髪を貫こうとするが魔法障壁を2、3枚破った所で消滅した。

「くッ 酷いじゃないか 『混沌王』 いきなり攻撃するなんて」

白髪は弓を持ったレントを見る。

「俺の世界という遊び場を壊そうとしてる奴の話なんか聞きたくもね よ」「こんどは5人全員に向けて放つが同様に防がれる。」

そして、紅き翼は別れて戦闘を始めた。

ナギとレンは白髪の相手をする。

「そらそらそらッ」

必中の神の矢を射つ射つ射つ射ちまくる

「くっ…」

白髪は地面から石の槍を出し防ぐ。

「こっちだ」

ナギが後ろに回り込み上から雷の投擲を放つ。

かじろつてそれを避けるが・・・



休ませねえ！

レントが間合いを詰め、魔力を込めて障壁ごと破り 腹に一撃を食らわせるが相手の槍を同時に右胸を貫く。

レントは細胞を再生させて、体勢を立て直そうとする相手にかなり魔力を込めたサジタリウスを射つ、矢は白髪の右腕を細胞を溶かし貫く。

「ナギッ！！」

ナギはその声に応え、白髪の首を片手で掴み持ち上げる。

「見事 理不尽なまでの強さだ・・・」

「黄昏の姫御子は・・・どこだ？ 消える前に吐け」

ふう 他のみんなも勝ったみたいだな・・・

4人はボロボロな姿でこちらに歩いてくる。

「フ・・・フフフ・・・まさか君は いまだに僕がすべての黒幕だと思っっているのかい？」

白髪は殺されようとしているのに不敵に笑う。

どういう意味だ？・・・黒幕はこいつではない？

「なん・・・だと？」

まさか！ 黒幕は別の奴！ まずい

「ナギッ！ 今S・・・」

俺の言葉を言う前に一筋の光線が白髪ごとナギを貫いた。

「ナ・・・ ナギィッ！！」

俺らはナギのもとへ駆け寄る。

！・・・魔力の反応！！

「ゼクト！」

「うむッ！」

ゼクトに合わせ、何重のも障壁を展開する。

（（最強防護！！））

強大な衝撃波のようなものが襲ってくる。

一回、二回は耐えたがやばい、マジやばい 後を考えずに外ではんばん『終焉の光』使っんじゃなかったー！！

魔力がだいぶ無くなったし、今現在進行形でも維持すんに魔力、食われているし！

三回、四回とまた襲ってくる。 耐えきれず障壁が次々と破れ、レ

ント達に五回目の衝撃波が降り注ぐ。

まずい、ゼクトが吞まれる！

レントはゼクトを自分の後ろに蹴飛ばし庇い、即席で障壁をはる。

く、障壁が意味をなさねえ 俺、死ぬのか？  
あ、てつか不老不死じゃんこのk

衝撃波をモロにくらい上半身からブシャア！！という血の吹き出る  
生々しい音と共に肉体が消滅し、レントの意識はそこで途切れる・  
・

・  
・  
・  
・

あれ？ どうしたんだっけ？ 確か・・・ゼクトを庇ったんだよな？

レントはゆっくりと目を開き、上半身を起こす・・・  
視界に入ってきたのは・・・

「レン！」

テオが思いっきりレントの胸に抱きつく。

「うおい！ 何だよ？ ん？テオか・・・」

あゝ痛てえ

「テオか・・・ではないわ！ 目を覚まさないかと心配したんじゃ・・・」  
「うっ」

うっすらと涙を浮かべる。

「え？ どういうこと？」

「それについては私が説明しましょう」

アルがいきなり現れる

「いきなり現れんな！」

びっくりする

「それは失礼しました

どうやらお楽しみの邪魔をしてしまったみたいですね」

は？ 会話が噛み合ってねえ あっ！・・・

「テオッ 抱きつくのやめてくれね？」

未だに抱きついているテオをやめさせようとするが・・・

「嫌じゃ しばらくはこのままが良い・・・」

ええええ！ 逆に強くなってるしい！

「フフフフ・・・」

「殴るぞ・・・アル」

ほくそ笑みがかなりムカつく

「恐いですね さてレンがゼクトを庇った時ですね  
あなたは上半身がなくなりました」

上半身・・・うへえグロッ

「マジで?」

「はい おおマジです あなたの上半身の外側は自己再生したのですが魔力不足で中身が完全に再生しなくてあれから3日間仮死状態でした」

「マジで!?!」

「おおマジです 黒幕はナギが倒したのですが・・・ゼクトが・・・」

アルは顔を曇らせる。

「亡くなった・・・のか」

「はい 残念ながら・・・」

結局、ポーカー一度も勝てなかったな・・・

「儀式はどうしたんだ?」

「儀式は発動してしまっただが、両軍で反転封印したんじゃない」

「・・・オスティアは落ちたのか」

「はい・・・」

ふむ・・・

どたばたと誰かが近づいてくる。

「よ！ レン 3日ぶりだな・・・へ？何やってんの？」

「ナギかこれはテオが勝手に抱きついてきたからだ」

「ふうん ま、どうでもいいけど 式典がすぐはじまるんだ 急い  
うぜ」

式典？ ああ、なるほど

「わかった・・・テオ、そろそろ・・・」

「もう少しだけじゃ」

ぐっ、上目遣いとか反則すぎだろ 惚れてしまいそうじゃねえか！

テオを引き離し、式典場へと向かう。

ちっとも面白くないから 俺の魔法を空にあげてやろうとしたけど、全員にとめられた。

これで晴れて俺も英雄になったが悪戯が出来なくなるのでつまらない

これからどうしようかね」

「レン おま、これからどうするのじゃ」

考えている途中でテオが話しかけて来た。

「ん」 放浪することになるかな」

「そう・・・なのか・・・  
のうへラスに来ないかのう？」

「へラスねえ・・・ん」、まだ手配されてるから  
パスだな」

そう未だに帝国ではレントは指名手配されたままである。

英雄になったといえ、世界の多くの人々はレントのことを悪と認識  
している。

「それについては妾がなんとかして・・・あたッ！」

テオの額にデコピンをする。

「俺のことなんかほっとけ、お前はお前しか出来ないことがあるだ  
ろ 連合と仲良くやっていくためにさ」

「・・・うむ・・・わかった・・・」

「悲しい顔すんなよ また会えるさ・・・多分・・・」

「多分とはなんじゃ！ 多分とは！」

うん テオはやはりこの表情がいいな

「ははは、 じゃ、 10年後位に会いに行くよ」

「ホントじゃな？」

「ああ、約束するさ」

「絶対じゃぞ！」

「もちろん さ、もう時間だな 達者でな」

「うむッ！」

テオは俺を見ながら去って行く。

ナギに別れでも告げるかな・・・

「おい ナギ」

「なんだ？ レン」

「俺、旧世界で放浪するわ」

そう、今度は旧世界で旅でもしてみようと思う



「そうなのか？　じゃあ、これ渡しておくぜ」

何か書かれたカードとマジックアイテムを渡された。

「なんだ？」

「麻帆良学園の住所と通信用のマジックアイテムだ、何か困ったら掛けてこい」

「そりゃどうも、他の皆もよろしく言っといてくれ」

「おう！」

太陽のような笑顔に見送られ、別れ、旧世界へと向かう。

・  
・  
・  
・

次はどこに行こうかな

麻帆良も行ったしね

詠春とこの家も行ったし、そーいやアイツ結婚したっていったな  
・  
後でからかいに行つてやる

姫さんが災厄の原因にされた話をアルから聞いて、やっぱりそうだったかと思つた

姫さんは救出されてナギとめでたしめでたし万歳だそうだ

ん？　あの幼女大丈夫か？

金髪幼女が崖を歩いている。

！落ちる！

何も考えずに一瞬で幼女の手を掴み助けた。

・・・でたき火をして魚、焼いているんだけど、どうすっかな

「おい、貴様、600年位前フランスで城にぶつかっただろ」

はっ？ 城にぶつかる？

600年前・・・？

「あゝ そんなこともあったなゝ てか何故知ったの？」

「見ていたからだ」

見ていた・・・というとあの城の被害者か！

「なんだ 真祖のキティちゃんか」

「なッ！何故、お前がその名前を知っている！」お、赤くなってる

「研究日記？に書いてあったんだよん 可愛いキティちゃん」

「か、可愛い・・・ノノ じゃなくてキティはやめる！」

「わかった、わかった 真祖さん」

「お前も同類だろう 『混沌王』」

「俺は真祖じゃ、ありません」

「不老不死なのだろう」

「不老不死だけど真祖ではないってこと　じゃ　俺はこれで」

面倒なことになるまえに  
さっさと立ち去る

「待て、どこへ行く？」

「世界をぶらぶらするだけだけど？」

「行くあてが無いなら、わ、私のモノになれ」

ハイッ、面倒なことになりました。無視、無視  
行こう

「おいッ！　無視するな！」エヴァはレントの服を引っ張る。

しっこい！

ドッ！　エヴァのみぞおちに拳をいれる

あ　やべ　なんか言われる前に眠らしておこう

「うッ　がッ　貴様・「眠りの霧！」　なッ　ま・・・て・・・」

うん、どうしよ

そうだ ナギに任せよ

てっててってんてん

マジックアイテム『掛けるく〜ん』（今命名）

「あ！ナギ、今すぐ に来てい あ？理由？

いいから来い 面白いもんがある おしッ じゃ」

これでよしっ 今すぐに、逃げるぜ！ 次は詠春のところでも行く！

レントはここに来るであろうナギに問題を押し付け、逃げ出した。

第六話 決着×放浪 【修正しました】（後書き）

説明コーナー

必中の神の矢 サジタリウス

ギリシャ神話のケンタロスの弓矢を模倣した宝具。

矢は自分の魔力で作り、放つだけで効果を発揮する

矢は自分が見えている範囲ならばどれだけ離れていても当てることができ、追尾性もある。

魔力の込めた量だけ威力が変化する。

## 第七話 京都といたら餡蜜

「階段多すぎ・・・」

ナギに問題を押し付け、俺は寄り道しながら詠春に頼んで神鳴流の道場に紹介してもらった。

ここに来るまでナギからのマジックアイテムによる連絡がうるさかったので壊して捨てておいた。

「やっと、のぼりきった・・・ん？」

どこかで剣を素振る音が聞こえる。

詠春か？

レントは音のする方へと向かう。

そこにいたのは詠春ではなく羽根の生えた白い髪をした10才位の少女が懸命に木刀を振っている。

レントはその様子を美しいと感じ、目が離せない。

「だ、誰なん？」

目の色も白いのか・・・

「俺か今日から神鳴流を習う者だ　ところで嬢ちゃん、その羽根」

「あ・・・見ないで！」

「綺麗だ」

「え・・・きれい・・・？」

少女は予想もしなかった言葉に呆然としている。

「でも・・・私、化物やし・・・」

化物ねえ、避けられているというところが

「君は化物じゃないぞ  
可愛い少女だ」

「か、可愛い・・・？」

「そ、可愛いぞ」

頭を撫でてやる

「あ・・・／＼／＼」

「名前なんて言うんだ？」

「桜咲 刹那 です・・・」

「俺はレントだ よろしくな 刹那」

「よろしくお願いします レントさん」

「刹那、ここ師範に会わせてくんない」

「あ、はいこちらです」

刹那に案内され、師範に会って、明日から習い始めた。

剣の修行時は魔力を封じて、気だけ使うようにしておこう

・  
・  
・  
・  
・  
・

修行はマジ死ぬかと思った。死ねないけど・・・

もう、二年位、通っているのだが、こちらでも俺の悪評と魔法使いであることが重なって、避けられた。

そのため、練習相手が避けられている刹那か神鳴流最強の鶴子さんが相手してくれるのだが・・・

「ほな、ウチの勝ちやな」

鶴子さんにボコボコにされました

「手加減しろやー!」



「冗談じゃないよ、手を抜いたら逆にウチの方がやられてしまうわ」

魔力解放してフルボッコしてやるっか？

倒れ伏す俺に刹那が駆け寄って来る。

「レントさん 大丈夫ですか？」

ああ優しい子だな刹那は

「この馬鹿女と違って優しく可愛いな刹那は」

「い、いえそれほどは・・・／＼／」

「誰が馬鹿女やと」

鶴子の怒りのパワーが上がった！

「斬・岩・剣〜！」

レントの腹に決まりボキッボキッと骨の折れる嫌な音が鳴る。

「死ぬッ！死ぬッ！」

そして、瞬時に再生する。

「お、流石、不老不死やな」

「不老不死でも痛みがあるって何度、言ったら分かるんだ？」

こいつ、俺が不死であることをいいことに全力でストレス発散の対象にしてないか？

「じゃ、ウチはこれで帰るわ」

「あっはい ありがとうございます」

「死にさせ……」 ボソツ

ドゴツ！

木刀が飛んで来て俺の頭に当たる。

「痛ッッ！」

「言わなければ良かったのに……」

あゝやっとな痛みが引いた引いた

「そっいや、刹那今日でお別れだったな……」

「そうですね……」

もうすぐに刹那は麻帆良学園に通うのだ。

制服姿見てみたいな

「あのッ！ レントさん……！」

「なんだ？」

思い詰めた表情してどうしたんだ？

「えつとですね・・・このあと、甘味処にいきませんか？」

えつと、これはデートの誘いなのか？ だとしたら応じなくては！

「いいぜ」

「あ、ありがとうございます」

「じゃ、着替えたら行こっか」

「はいッ」

さっさと着替えて刹那といっしょに甘味処に行くことにしよう

Side out

Side 刹那

長の戦友であるレントさんが神鳴流を習い始めてから、2年しか経たないというのに神鳴流最強である鶴子さんに本気を出させるほどに上達した

どうやったらそんなに早く上達するのかと聞いてみたことがあったが・・・

『えっ？ 普通じゃね？』

と、自分で上達が早いとは感じていないらしい  
本当に規格外な方だ

「そついや、詠春の娘を護衛するんだっけ？あ、おばちゃん餡蜜二  
つ」

レントさんが私が麻帆良学園に通う理由のことを聞く

「はい、長から護衛するよう命じられました」

「命令だからって固く考えなくていいと思うぞ」

「いえ、長にはご恩のこともあり・・・った！」

なんでデコピンするんですか？

「ホント、詠春によく似てるよね、おばちゃん餡蜜あと六つ頼むわ」

長に私が似ている？

もう食べたんですか！

「どこがですか？」

「生真面目なところと色気系に弱いところ」

「そんなことはありませんッ！」

「へっじゃ、初恋の人って誰よ？」

にやにやといじめツ子のような笑みを見せる

初恋……レ、レントさんなのだけでも、恥ずかしくて 言えない

「……………／／／」

やばい、顔が火を吹くように熱い

「刹那ちゃん せっちゃん どんな想像してるの？」

「ひゃわッ!」

レントさんの手が私の髪をくしゃくしゃにする

心地よい、ずっとこうして居たい

「麻帆良は面白い所だし、刹那も柔らかくなるとおもっぜ」

「あ……」

手が離れる。

「どっした？」

「いえ、レントさんはこれからどうするんですか？」

「フフフッ よくぞ聞いてくれた!」

あ、この目は何か悪戯する時の目だ……

残りの餡蜜をかつこみ叫ぶ。  
よくそんなに食べられますね

「女装姿で観光しようと思っている!」

レントさんがたまに女装するのを見ていて綺麗だなとは思っていたが・・

女装で観光をする意味が何かあるのだろうか?

「何故ですか?」

「なんか おもしろそうだからだ」

「ハア」

「わかってないようだな、刹那は、いいか女装とはな・・・」

この人は本当に掴めない人だと改めて認識した最後の日だった

S i d e o u t

S i d e レント

女装での観光はあまり面白くはならなかった

暇だ・・・暇すぎる

次は何をしようかと考えていると携帯が鳴る、妖怪ジジイからだつた

「なんだ？ 面白くない話だつたら殺すぞ？」

「電話に出てすぐそれか！」

「用件をさつさと言え」

「むう、お前さんなら面白がつて受ける依頼があるんじゃないか・・・」

なんだと！ 老いぼれジジイでもたまには役に立つもんだな

評価を1ミクロンだけあげてやる

「依頼とはなんだよ 面白そうじゃなかったら、学園襲撃するからな」

「・・・」

何故だまる！

「よしっ、破壊活動を「待つ」のじゃ、言うからやめて！」 じゃ早く言え」

「実はのう、1ヶ月後にナギの息子が学園に教師として就任するのじゃが、レント君には副担任をお願いしたいじゃ」

ナギの息子が・・・面白そうだな

「いいぜ、今すぐそっちへ行く」

「依頼を受けてくれるんじゃない？」

「ああ、じゃね〜」

あ、名前聞かなかったや

ま、あんま関係ないしいいけどね

さてさて、ナギの息子だし、どうしてくれようかな？

レントはまだ見ぬ戦友の息子で遊ぼうと悪巧みしながら麻帆良へと向かう。



## 第八話 男がスカートを履いてはいけないって誰が決めた？

ふははは！ 麻帆良よ俺は帰えってきたぞおおお！

一回だけ訪れただけなんだけどね・・・

まずは服装の確認だ 黒のフリfrisスカートのごスロリ服、黒ニーソックス、そして、認識阻害のフレーム無しの教師風のメガネ・・・

オールグリーン 全て問題無しだ

さて、どうしようか・・・ 只今、校舎内絶賛迷い中

広すぎて、どこにジジイの巣窟があるのかわからん

「タカミチ少年ー ロリコンタカミチー ペドタカミチー バカミチー」

とりあえず、魔法でタカミチが好きそうな幼女声に変え、呼んでみる

・・・来ないなあ

仕方ない、最終手段だ 携帯を取り出しジジイに掛ける

「おー、レント君か今どこ」音楽室前に5秒で迎えに来なかつたら、破壊活動を行使する 5」 高畑くんッ！ 音楽室前に急いでええええ！」

地獄へのカウントダウンは止まらない

「4」 3」 2」 1」 ぜ」 「レンさん ストップ！ストップ！ストップ！」 遅いぞタカミチ少年！ 5秒で来いと言ったら、3秒で来いと言っただろう」

全力で来た高畑は乱れた息を整える

「いつ、言いましたそれッ！あ、危なかった・・・ レンさんお久しぶりですね」

結構予想以上に老けてるな

「そんなこといいから、  
校長室に案内してタカミチ」

ロリボイスで案内を促す

「・・・わかったよ ついてきてください・・・レンさん何故そんな恰好・・・？」

「何故つてそりゃあ、面白くなりそうな気がするだろ？」

「いえ、全然・・・着きましたよ」

相変わらずだねえ、あと刈り上げ髪も・・・何なの？ 刈り上げの呪いでもかかっているの？

タカミチが学園長室の扉を開け、そこで待ち構えていたのは妖怪ぬらりんひょんが脱力していた

「間に合ったようじゃな」

「ええ、なんとか・・・」

「いいから、話、進めろよ」

破壊活動なんて冗談に決まってるだろ・・・40%だけ

「レント君ひさ「本題に入れよ」・・・ごほん、君には3 Aの副担任を担当して1ヶ月後に就任するネギ君の補佐をしてもらいたいんじゃない」

葱？ 根木？ 変な名前だなあ

「俺がその深谷ネギ君の味方になるとは限りませんよ」

「死なない程度ならやっても構わんよあとそれと葱じゃなくてネギじゃからな」

英雄にしようって企みか・・・

「死なない程度にボコボコにしてやるよ」

「おてやわらかに頼むよ」

「担当教科は何にしようかのう」

「悪戯学！」

悪戯の真髄を植え付けてやる

「や、そんなん無いから」

「ねーのこの学校？」

「どこにもありませんよ」

うんざりした顔すな、タカミチ

「しょうがない、世界史だな」

「了解したぞい・・・ところでレント君」

「なんだ？ 妖怪」

その頭取れねえのかな？

「・・・スーツに着替えなさい」

何ほざいてんの？ この未確認動物？

「なんでだ」

「色々、問題があるからじゃ 当たり前じゃろ」

わかってない わかってないぞ

「妖怪、いいか女装とはな」

学園長室から約20分間に及ぶ女装に関する話が始まり、時節「偉人人にはそれがわからんです！」と言う叫びが響いた

S i d e o u t

S i d e エヴァ

ちっ、なんで私が15年も学校に馬鹿どもと通わなくてはならないんだ

ギヤアギヤア、朝からうるさい奴らだ

ナギが3年たつたら、レンが呪いを解きにくるとか言ってたが・・・

来ないし、連絡もよこさない はあ・・・

鬱だ、サボろう

「おい、茶々」はいはい静かにしなさい」 エヴァ、サボりは駄目だよ「ちっ」

タイミングが悪すぎる

高畑に釘を刺され、仕方なく席につく。

「今日は新しく副担任が就任することになったから紹介するよ」

えっ誰誰？ 男の人？ ギヤアギヤア！

どうでもいい・・・

誰がこようとこの永遠の地獄から抜け出せないのだから・・・と思  
っていたのだが

「今日から世界史を担当し、このクラスの副担任になる レント・  
A・ツヴァイベルクだ よろしく」

スーツ姿の忘れもしない奴の姿があった

ギヤアギヤア！クラスの奴らが質問責めをしているがはつきりいっ  
て、邪魔だ！

次の瞬間私は奴に突っかかっていた

「おい！ レン何故ここにいる！？」

「あるえー？ なんでエヴァがここに？」

「惚けるな！ 貴様何故すぐ来なかった！」

「へ？へ？ どういうこと？」

ほお、まだ惚けるつもりか

「お前がいつまでたっても来ないから呪いのせいじゃじゅう」エヴァ、  
ちよっとその話は「うるさい タカミチ！ じゅうひえひひゃん」

レンが私の両頬を引っ張るので上手くしゃべれん

「なにをする！」

その手を払いのける

「エヴァ、今ものすごく目立ってるからね」  
「はあ？何言ってるんだ？」

教室内を見渡すとクラスメイト達がこちらを見て、驚いたり、ひそひそしている

注目されていることに気づくと恥ずかしさで気が動転する

「な、なんだ貴様から見せもんじゃないぞ！」

「エヴァちゃんが大声あげるところなんて初めてみたな」

黙れ 明石！

「皆！ 静かにしなさい」

高畑の一声でクラス内は静かになる

「ほれ、エヴァも戻れ 話は後で聞く」

「逃げるなよ」

「逃げないから席につけ」

おおー

いちいち騒ぐなお前ら！

恥ずかしさを隠し早歩きで一番後ろの席につく。

ん？桜咲がこつちを見つめてたな ま、どうでもいいが

ふふふ やつとこの日々から抜け出せるな

会ったからには決して逃がしやしないからな レン

ふふふふ「ははははーはっはっはっはー！」

先のことを想像し心の笑いが声に出てしまい、周りから生暖かい目で見られていた。

「エヴァ、痛い人に見えるぞ、プッククク」

「マスター……」

グッ・・・茶々丸お前までそんな目で見ると

レン、お前は絶対に屈服させてやる

S i d e o u t

S i d e レント

「それじゃあ、一時間目よろしく」

そう言うとタカミチは教室から出ていく。



「ん、ああ、わかった よしお前らー授業始めんぞー」

授業を始めようとした時、一人の生徒が手を挙げる

「先生、提案があるんですが」

「なんだ？ えーと 朝倉」

「この時間なんですけど、先生の質問タイムにしませんか？」

めんどい授業やらなくてすむし許可するか

「いいぜ、 授業より面白そうだしな」

「「「「やった〜！」「」」」」

ギアアギアア 先ほどの質問の嵐が巻き起こる

「「こちらで指名するから静かにしろー！」」

レントの一声で静まる

うん、いい子達だ

「ほい 一番目 明石」

「え〜と 出身地はどこですか？」

「フランスの边境の村 次、釘宮」

「年齢は？」

「・・・16才(だったよな?)」

もっと面白い質問しないのかねえ

「面白い質問しなかったら、授業にするぞ」次、超

「ん、先生は火星人と火星をどう思うかね」

！ 俺のことを知っているような目をしてるな  
火星ねえ

「ん、案外人間と同じ問題で悩んでんじゃね？」

超、なかなか面白い質問だ」

超の名簿を見ると肩書きが多い・・・ うん、怪しいマークしてこ

「次、神楽坂」

ツインテールの女子を見る。

・・・姫御子だよな？ カグラって時点でガトウに結びつきそうなんだけど 詠春あたりでも聞いておくか

「高畑先生とはどんな関係なんですか？」

ダウト 声が似てる、口調が違っけど

「友達？」

「なんで疑問形？」

や、だってさあ、微妙だもん

「次、せし、桜咲」

名前で呼ぼうとしたら一瞬ほんのり紅くなったが大丈夫だよな？

「そ、そうですね・・・好きなタイプはどういう人ですか？」

うん、びっくりしたな、刹那からそんな質問が出るなんて

「タイプねえ（なんかエヴァと刹那の視線がかなり気になるんだけど・・・）」

しつこくない人かな」

バキッ！シャーペンの折れる音がする

ちよっとおおお！ 何で？ 何でエヴァから殺気がバンバン来てるんですかあああ！

「つ、次、近衛」

「そやなー 趣味はなんやろ？」

「趣味はだな、観光と悪戯と女装だ」

ザワ・・・ザワ・・・

「先生、女装って・・・」

朝倉のみならず周りも同じような感じた。

「悪戯する時によくやるんだよ　タカミチが俺を女性と勘違いするほどだぞ」

「ええー！　本当ですか!？」

嘘ついて何になるんだよ

「ああ、今日も女装姿で来たんだけどね・・・妖怪ジジィとタカミチに着替えさせられました」

（（当たり前だよ）（））

クラスの心のツツコミがはもった

「機会があれば着替えて来る」

「先生、それは色々問題がありそうな気が・・・」

「朝倉・・・」

威圧ある声が朝倉に向けられる

「は、はい　なんででしょう・・・」

「女装の何が悪い女装して似合ってるならいいじゃないか　そもそも女装とはな」

暴走モード突入！！

またもや、レントの女装の話が始まり、授業終了チャイムがなるまで続いた

この瞬間、レントに対する女装の批判は絶対にしないという暗黙のルールが出来上がった

## 第九話 人は眠気に勝てないと思う

1日の束縛された長い授業は終わり、解放された放課後がやって来た。

生徒達は校内に残り談笑する者や部活動に励む者など人、様々だ。

レントはというと刹那に呼び止められ事情を説明している

「来月に親友の息子が就任するからそいつで遊ぼうと思って、ここに来たんだよ」

「えつと・・・私が心配で来たとかではなくてですか」

「それもある・・・で見てみたら近衛と仲良くしているみたいには見えなかったんだよな」

「う・・・」

レントの言葉に怯む。

「その距離感を暇つぶしがてらに縮めてやるよ」

「そ、それはダメです！ 私のようなものがお嬢様と仲良くするなと絶対にダメです！」

断固拒否かよ・・・

「わかった、わかった何もしない」

それを聞いて刹那は一安心する。

嘘だけどね でもなあ、刹那を説得するのは一苦勞だからな  
なんならかのきっかけがあればいいんだけど・・・

「あ、そうだった レントさん いまから教室に行きましょう」

「は？ なんで？」

住む場所を探さないと今日、野宿になるし

「私は先に行きますね」

「あ、おい」

刹那は先に教室の方へ行ってしまった

仕方ない、俺も行くか

レントも後を追うように教室へ向かい、ドアを開けると・・・

「「「ようこそ！レント先生」」」

3 Aの生徒全員がそこにいた。クラス内はお菓子やらジュースやらでパーティー会場になっていた。

「えっ？は？」

予想もつかない出来事に対してレントはポカーンとしている

「ほらほら、先生突っ立ってないで、こっち座りなよ」

朝倉に促され笑っているタカミチの隣に座る。

「なにがおかしい？」

「いえいえ、レンさんがそんな顔するなんて　ふふふ」

ム力つくなあ、後でボコしておこう

「ねえねえ、レン君レン君携帯もってない？」

ジュースを飲んでいると佐々木が聞いてきた。

「持ってるけど」

レントはひらひらと携帯を佐々木に見せる。

「じゃあさ　メアド交換しない？」

「いいよ　ほい」

佐々木に携帯を投げ渡す。

「わわわッ」

佐々木は携帯を落としそうになるがかるうじてキャッチする。



「いいの？」

「減るもんじゃないからね」

「ウチらもいい？」

佐々木につれて他も食いつく。

「問題ないよ」

「ありがとッ」

何人かがレントの携帯とアドレスを交換する。

「おい レン」

「んぐんぐ」

「この料理、旨いな」

「無視するな！」

うるさいな、料理食ってんだから黙れエヴァ

「15字以内で用件言ってね」

「このあとすぐ私の家に来い」

本当に15字以内で言いきったよ！こいつ！

「場所、知らないけど」

「ほら、地図だ　いいか！絶対に来いよ！」

「わかってるって、んぐんぐ」

この肉まんジューシーでうまッ！

超包子製の料理を次から次へと食べる。

「・・・　茶々丸、帰るぞ」

「わかりました」

エヴァと茶々丸は教室から出ていった。

茶々丸って従者か？　後で聞けばいいだろうな  
むっ！　紅茶もつまッ！

「レンさん」

タカミチが小声で話しかけてきた。

「あん？何よ？」

「7時に世界樹の広場で顔合わせがあるからね」

あゝ、ここの魔法使いとの顔合わせか

「了解、了解」

「じゃ、僕は先に行ってるからね」

そう言くと教室から出ていった。

今、何時だ？

時計を見ると・・・6時50分になっていた

後、十分んんん！ ってかどこだよ広場！ ふざけてるだろ場所を  
教えないとか うん、死刑だなアイツ

よく見ると刹那もない

関係者、全員もう集合してるってこと？ まずいじゃん！

「近衛！ 世界樹の広場は何処にある！？」

近くにいたこのかに聞く。

「世界樹広場？ 学園で一番でっかい木の前にあるで〜」

でかい木か！

「サンキユ 俺は急用ができたから 帰るわ」

「そうなん ほな、さよなら〜」

レントはダッシュで教室を出て、世界樹に向かう。

あれか！ もう集合してる

広場に集合している人達の真ん中に着地する。

ドゴー！

「到着！！！」

「おお、ちょうど到着した彼が紅き翼のレント君じゃ」

学園長は到着したレントを紹介する。

だが、彼らの何人かはレントを心よく思っていなかった。

おいおい、敵対的かよ、特に色黒メガネ

「学園長、本当に彼に教師と警備をやらせるのですか？」

「本当じゃよ ガンドルフィーニ君」

ガンドルフィーニは確認をとる。

「っ！ エヴァンジェリンやレントのような存在を何故、学園に居させるのですッ！？」

「そんなこともわかんないの？ 正義の魔法使いさん」

レントは馬鹿にした口調で話す。

「俺は暇を潰したい、学園は強力な人材が欲しい相互の利害が一致

しているから俺はここにいる OK?」

所詮、利用されつつ利用する関係だ。

「文句があるならどちらが正しいか力で白黒つけよう?」

「レンさ「黙れタカミチ」……」

魔力と共に純粋な殺意をこの場に流す。

「文句はあるのか?無いのか?どっちだ?」

レントの殺意のこもった声を当てられ、この場の全員が蛇に睨まれた蛙のように動けなくなり冷や汗をかく。

「な……い……」

「びっしょり」

その言葉と共に、殺意を消し魔力を抑える。

殺意から解放されて未熟な者はそのまま倒れ伏し、他の者は高畑や学園長でさえ倒れるのをこらえるので精一杯だ。

やり過ぎたか……ありや、龍宮と刹那は若いのによくこらえたな

「いやゝ悪かった、何も考えずやっちゃった、まあしばらくしたら落ち着くだろうから、俺はこのへんで」

ほっといてもよさそうだし、エヴァの所に行くか

エヴァから受け取った地図を取り出し見ながら家へと向かう。

迷った・・・歩けば歩くほど森じゃねえか この地図間違ってるんじゃない？ムカつくなあ

「ある日、森の中、キティちゃんに、出会った、キティキティキキキキキティキティちゃんに出会った」

替え歌でエヴァを呼んでみた。

その時、枯れ木がパキリと鳴った。

「キティカツ!？」

「いえ、茶々丸です。 レント先生迎えにきました。

キティではなく、長髪のロボ子もとい茶々丸だった。

「いや、助かったよ」

レントは茶々丸の後をついていく。

「茶々丸ってロボットなんだよね？」

「はい、だいたいそのようなものですが、一般と違って魔力が動力源となっています。」

魔法科学か・・・ やってみよっかなあ

そんなこんなでエヴァの家の前だ。

「マスター、レント先生を連れて来ました。」

家の中に入ると中はぬいぐるみやらでファンシーだ。

「ご苦労・・・で、貴様森の中で何故私の名を呼んだ!？」

そこには全然怖くないエヴァが怒っていた。

「地図通りに来たら、迷ったからに決まってるじゃん」

「この家は道、一直線だぞ！」

「まあ、悪かったよ 大体さあ、俺地図なんて使ったこと無いんだよ」

旅をする時は大体で動いてたしね

「・・・まあいいとりあえず、そこに腰掛ける」

「おっ」

レントは人形で一杯のソファに腰を掛ける。

「おいッ！ 何で人形の上に座る！」

だったら置くんじゃねえよ  
面倒くさそうに人形を隅によせて改めて座る。

「先生、どうぞ」

茶々丸が紅茶を持って来てくれた。

「ありがとう」

気がきくなあ

「で、貴様よくも15年間も待たせてくれたな」

「や、何よそれ？ 説明してくんない」

全くもって、意味がわからんし

「は？もしかして貴様、ナギから聞いてないのか？」

ナギ？ エヴァを押し付けて「掛けるくん」壊したんだっけ？

「だから、何を」

「3年たったら私の呪いを解くことだ」

え？何それ？

「聞いてないぞ」

「アイツめ、会ったら八つ裂きにしてくやる！ー！ー！」



この場にはないナギに対してエヴァは怒りをあらわにする。

「よし レン早く呪いを解け」

「いいけどさ その代わりに、ここに住ましてくをない？」

住む家を確保しないとまずいからな

「構わん だから解け (レンと一緒に・・・／／／)

「交渉成立ってことで・・・ま、どんなんか見せてもらっわ」

呪いの術式を見るためにエヴァの頭に手をおく。

「・・・／／／」

エヴァは頭に手をおかれ、顔が火照るほどに熱くなる。

うわゝ 何これ、穴だらけじゃんwww 力任せに呪いをかけたみたいだね

「どうだ？」

「ん、俺が魔力を送って内側から破ればいいだけだな 後、もう1つ呪いがかかっているけど、この媒体はどうも学園結界っぽいけど、魔法科学は専門外だから解けん」

「十分だ」

「じゃ、魔力送るよ」

エヴァに魔力を送り込む。

「ふッ・・・んッ!・・・はあああん!・・・//」

エヴァは魔力を送られ、気持ちがいいのか、体をけいれんさせる。

うーん これ、えろいね・・・ そろそろいいだろう

魔力が十分に流し終え、膨大な魔力は内側からから呪いを食い破る。

「どごよ」

「ふふふふ、魔力が半分しか戻らないとはいえ、最高の気分だ」

「そりゃよかつたぜ ふあゝあ、なあ、そろそろ寝たいんだけど寝る場所どこよ」

だいたい魔力を消費したため疲れがたまった。

「ん? もう寝るのか?」

「ああ、結構疲れた」

「私はこれから色々と話がしたかったのだが、まあいいだろう ついでに」

「二階にあんの?」

エヴァの後を黙ってついていき、エヴァの部屋らしき部屋に入る。

「このベットだ」

「……俺の目が正しければ、ベットが1つしかない  
「なあ、ベット1つしかないんだけど」

「二人で寝るスペースはあるだろうか／／」

おいおいマジかよ 駄目だ眠い

「襲わないでね」

「も、もちろんだ」

不安だ、ものすごく不安だ

レントは眠気には勝てずエヴァのベットで眠りに落ちた。

「寝たか・・・私も寝るとしようか／／」

エヴァもレントのとなりに入る。

「・・・／／／ おやすみだレン」

レンの頬に軽くキスをし、体を密着させ、エヴァも眠りへと落ちる。

## 第十話 ネギ襲来

ん？朝か・・・

窓から朝日が入って来る。

もう、ここに来てから1ヶ月か・・・結構、色んなことがあったな。

例えば、エヴァの呪いを解いたことで魔法先生との一悶着があったが、エヴァがあと1年在学することで合意させた。

他には暇つぶしに仕掛けた落とし穴にジジイがかかったり、クラスの奴らとそれなりに親しくなってきた。

生徒から先生じゃなくて、レン君で呼ばれるようになってきたがまあ、良い・・・傾向？

ソファから起きあがるとするか

ん？何故、エヴァのベッドで寝てないかって？

一緒に寝てると襲われそうで怖いから、ソファで寝ることした。



エヴァを抱え、部屋の窓から外へ思いっきり投げ飛ばす。

「やめッ、ぶッ！」

おゝ遠くに飛んだ飛んだ、中々、おもしろいな

「ケケケ、レン、朝カラオモシロイコトシテクレンジャネエカ」

ちびっこい人形のチャチャゼロがいつのまにか隣で見っていた。

「おはよさん チャチャゼロ、馬鹿はほっというて飯食おうぜ」

俺の腹はもうペコペコだ

「イイノカ？ゴ主人ガ怒ルゼ？」

「いいのいいの、茶々丸〱朝飯出来てる〜？」

「はい、レン先生このとおり出来ていますので先にどうぞ 私はマスターを探してきます」

「ああ、了解 いただきます」

「ガンバレヤ、我が妹ヨ」

茶々丸はエヴァを探しに行つて、俺とチャチャゼロが朝飯を食つ。

チャチャゼロは酒なんだけどね・・・

朝食を終え、登校する時間だがエヴァが帰つて来ない飛ばしすぎたか・・・  
ほっとこ

「もう行くか あとは頼んだ」

「マカゼロ」

レントは学園へと出勤する。

特に何も考えずに昇降口にたどり着くと何やら騒がしい。

「おはようさん 朝から何やってんの？」

「あゝ、レン君おはようゝ　なんかこの子が先生やるんやって」

このかが示す先には赤髪の少年と言いつ争いしているアスナがいる。

来た来た　遊び道具がキタ　　！！

「タカミチ、コイツが奴の？」

「そつだよ、彼がネギ君だ」

なるほどねゝ　なんかナギと正反対な奴っぽいな

「高畑先生！レン先生！　ガキが教師やるなんておかしくないですか!?!」

「俺も16で教師やってんだから問題なくね？」

「うっ、そついえば……でもッ反対です!」

アスナの髪がネギの鼻をくすぐり、それにつられてネギはくしゃみ



をした。

くしゃみと共に魔力がアスナにあてられ、制服がどこかへぶっ飛んだ。

制服が脱げたことにより、その姿を現した下着は・・・

毛糸のくまのパンツだ

このかは納得したように、タカミチはタバコで冷静を装う。

アスナはそのまま手で体を精一杯隠し、座りこんだ。レントはとうと・・・

パシャ、カシャツ、パシャツ！

一眼レフのシャッターを押しフラッシュをたいて、アスナの脱げっぷりを撮っていた。

グッド エッチ！ ネギ！

このネガを朝倉に売れば、それなりに金になるはずだ

「ちよっ！ 何撮ってんのよー！」

「レン君駄目やで〜」

ドゴッ！..

このかハンマーがレントの頭に炸裂した！！ 会心の一撃！ レントに9999のダメージ！ レントは気絶した！！

「「「.....」」」

「ほな、カメラデータ消しておじいちゃんどこへ行こか？」

三人はただ頷き、気絶したレントを学園長室まで運んだ。

「もっつそんな何から何まで学園長 「っ

アスナの怒鳴り声が頭に響く。

「どうやら俺はこのかの一撃によって気絶してあたまいたいだな  
とり  
あえず

「俺、復活!!」

ジャンプし、腕を突き上げアピールするが・・・

「」「」「」「」

「ま、そういうわけじゃから頼んだぞい」

無視!? 誰か構ってよ! ちっ、また落とし穴を掘つとこ

「あの、レント先生これから、よろしくお願いします」

他人行儀な奴だなあ コイツは・・・

「レンでいいぜ 俺は教師って柄じゃないし」

君で遊ぶためになった訳だしね

「え と レンさんで」

「まだ固いがまあ、いいだろう しずな先生、俺は先に行くから頼んだわ」

新任祝いのイタズラを仕掛けないといけないからな

「あ、ちょっと」

「ああ、後、学園長秘密バラシたら、あなたの大事な所バラシますからね」

秘密とは俺が紅き翼の一員で英雄？であることだ

「バラしませんん！」

学園長室をさっそうと去って行った。

「おーし、鳴滝姉妹！畏の準備だ！」

「もう、出来てまーす」

「ほお、連鎖トラップか中々だ　しかあし、甘い　甘すぎる！  
ケーキに砂糖をかける位甘い！　教壇の机に最後当たるのだから、  
机の側面にペンキを塗るんだ！」

「なるほど」

鳴滝姉妹と共に側面にペンキを塗る

ふふふふ、上手く引っかかってくれよ　さて、そろそろだな

これから起こるであろう、惨状を眺められるように教室の後ろへ立つ。

「おお、エヴァどうした？　そんな疲れ果てた顔して」

「お前のせいだ」

「はははは、悪かったよWWW　まあ、ナギの息子が今日来るから

そいつで遊ぼうじゃないか」

「協力しろって言うなら、それなりの代価が必要だぞ？」

代価ね・・・どうせ、私のものになれ、だろうしな

「じゃ、いいや勝手にエヴァの恥ずかしい姿に変化して、やるから」

「ふざけるなっ！ 何故私の姿でやる必要がある!？」

「知名度の高い悪だしね

お願いだよ」 協力してよ」

だるそうに肩を組む。

「ばっ！ 引っ付くな！」

まんざらでもないような顔をしながら怒鳴った。

「なんなら、今日位いっしょに寝てもいいぞ」

俺が楽しむためならば悪魔に魂を売ったって構わん

「む…… いいだろう やってやる」

「ありがとう エ」へぶっ!? あば あああああ ぎゃふん  
っ」かかったwww」

ネギが鳴滝姉妹 + 特製連鎖トラップに面白いようにかかった。  
あ、ペンキが狙い通りにべっとりついたザマアwww。

「レン先生ッ」

教室のドアの近くに怒りを抑えている修羅がいるつつつ。

「俺は急用を思い出したのでここらへんで サラバ!」

脱兎のごとく教室から逃げ出した。

「で、わしの所に来たと……授業はどうしたんじゃ?」

学園長室でパチリ、パチリと交互に碁石を打ち囲碁をやる二人。

「授業? 全部プリントで自習だ それにもう、そろそろ放課後だしほいつ これで終わり」

俺の最後の一手で対局終了。 結果……俺の圧勝

「年上なんじゃから、手加減してくれないかのう」

「やなことた ところでネギを遠見の魔法で見張ってたら、早速、魔法使いだとバレたぞアスナ姫に……」

初日でバレるとかどんな奴だよ

「フオフオ、まあ良いではないか」

「それに、忘却の魔法を勝手にかけようとした それなのにお咎め無しとは、甘くない?」



ガキのくせに1人で解決しようとしてるし

「フオフオフオ、厳しいのう」

「あんたらが何を企んでいるか知らんが、俺はネギで遊びたいから何も言わんよじゃあな」

メールでネギの歓迎会を開くと聞いたので参加しに行く。

ワイワイ！ 教室の中から生徒の喋り声が聞こえる。どっつやら、もう始まっているらしいな

俺はドアを開け、中に入る。

「遅れてわりい」

「レン君遅いで〜」

いつも笑顔のこのかが迎えてくれた。

「だから、悪かったって言ってるじゃん このか〜」

「そやな〜許したろ あ、そうそう エヴァちゃんがな〜 7時に  
は家に来てって言うてたけど 恋人同士なん？」

恋人……？

「ないない、間違ってもありえね〜 エヴァとは腐れ縁？ みたい  
なもんだ」

パタパタと手をふり、否定する。

「なんや〜 つまらんな〜」

俺としてはこのかは見合い相手の誰を選ぶのが楽しみだなあ、な  
んて言ったらハンマーで殴られそうなので言わないでおこう。

だがレントの頭にハンマーが炸裂した！

「痛い痛い痛い！ 俺、なんかしましたか！？」

「なんかな〜 失礼なこと考えてたやる」

なんでわかる！？ エスパー！？ エスパーなのか？

「失礼な人とはしばらく会話したくないわ〜」

このかは別の所へ行ってしまった。後であやまっておくか…… 今、しばらくはこのパーティーを楽しむとしよう

「到着〜 遅くなっちゃったぜ」

エヴァ宅に帰って来た。

現時刻：10:00 うん…… 3時間のオーバーだ いや〜少し時間があるからって超包子で瀬流彦と飲まなきゃよかった……  
ハア……

中に入ったら、殺されるよな〜 恐る恐ると家に入る。

「遅い！！ この馬鹿が！ そこに正座しろ！！私は何時に来いと  
言った！？」

当然、怒り狂ってました。俺が圧倒的に悪いので素直にエヴァの  
前で正座する。

「7時です……」

「覚えてるならば、なぜ時間通りに来なかった？」

エヴァの怒りを誰かに向けるんだ俺！

「いや、あんまりも瀬流彦が飲もう飲もう言っただから……」

これでどうだ？

「そんなもの、断れ！」

チクシヨ ッ

「ケケケ、ゴ主人、レンガ来ルマデズットマドノ外ヲ見テタジャネ

「カ」

やべえ、乙女だ……

「嘘をつくな！ この人形！」

だが、言葉とは裏腹に顔は赤みを帯びている。

「茶々丸、その様子を俺のパソコンのエヴァの恥ずかしフォルダに入れといて」

「はい、わかりました」

「ええい、送るなこのロボ子！！ なっ！？ 離せッレン！」

エヴァをお姫様抱っこで抱え、二階のベッドに下ろす。

「お詫びにいつしよに寝ようぜ」

「ふん そんなに私と寝たいか？」

「寝かして下さい（幻覚に溺れる）」

エヴァに魔眼で幻覚をかけてやった。

エヴァは見事にかかり枕をレントと認識する幻覚をかけられた。

「ふふふ、そうか 素直な奴だ ご褒美をやるっ、んっ………チュッ  
………」

エヴァはただの枕を力強く抱きしめる。

そして、枕を相手に熱く接吻する。 おもむろに服を脱ぎ捨て、下着まで脱ぎ、生まれたままの姿になる。

そうして、再度、枕を抱きしめ身悶え続ける。

「良い夜をWWW」

小型カメラを設置し、俺は1階のソファでいつも通り眠りに落ちる。

明日、エヴァはどんな表情をするかな？WWW

幻覚を維持するための魔力を流しつつ、この日の活動を終了する。

第十一話 休日はいつも誰かに邪魔される(前書き)

PV20万突破!!

大々感謝です!



## 第十一話 休日はいつも誰かに邪魔される

太陽が輝き、雲一つも無い快晴な休日だ。今日は久しぶりに刹那と剣の稽古でもやろうと約束したのだが

そんな思いは目の前にいる金髪少女の吸血鬼によって粉碎された。

今日はエヴァとのいわゆるデートとなってしまった。イヤなら逃げ出せば良いのだがそんな願いは叶わない。

何故このような状況になったのか……簡単な話だ

俺が寝てる間に血を抜き取られ、その血の情報で悪魔の強制履行券を勝手に契約されたからだ

エヴァに今日は刹那と稽古をやる約束があるから無理だから、明日にしてと、頼んでみたら……

刹那の名前を出した途端、おもしろくなさそうな表情をして

「なおさら今日、使わねばな」

この悪魔！ あ、悪魔だっけな吸血鬼は……

と、まあこのようなやりとりがあった。

「何ブツブツ言っている」

「いやなに、どうしてこうなったのか考えていただけ」

注文した餡蜜をパクつく、うん、うまい

「どうしてこうなったか、ここ最近のことを思い返してみるがいい」

エヴァはパフェをパクつきながら不機嫌そうに言う。 ……あ、ほ  
おにクリームついた 無視、無視

ここ最近のことか……

何があったか思い返してみるのも少しは退屈しのぎなるかもしれな  
い……

……

…  
…

【昨日】

「え、体育担当が今日お休みなので、Aは俺が代わりに担当することになりました。授業は屋上の使用許可を取ったから、内容は任せる。」

「「「やったー!!」「」」

さて先に屋上へ行くか

今日は天気もいいし、昼寝日和だな……

軽快な足取りで屋上へ着くともうどこかのクラスに使われている

あり？ おかしな？ お、ネギじゃん

「ネギ、ここ2-Aが使うんだけど」

「あ、レンさん えっと、高等部の方もここを使うことになってるんですけど……」

「え、高等部って他に使える場所空いてるだろ？」

中等部より使える設備が多いはずだ。

「どうも皆さんここを使いたいそうぞ」

今日、確か高等部といざこざがあったからなあ　その当てつけっばいな

「ちよつとー！　何で高等部が使ってるわけ！？」

「あら　また会ったわね　あんた達　私達　自習だからレクリエーションでバレーやるのよ」

「わ、私達もバレーよー！！」

ケンカになるねこれは

「いいぞー　もっとやれー」

激しくなるように煽るとしよう

「レントさん、それは教師としてどうかと思いますが……」

「そうか？ おもしろくなるぞ……刹那、夕凧を体育の授業まで持ち歩くのもどうか思っけどな」

「いつ、お嬢様が襲われるか、わかりませんから」

考えすぎだろ……

それにしても長い刀を持ち歩いても一般生徒に怪しまれないとか、ある意味すごいよね この学園……

「ハクシュン！！」

ネギが無意識に魔力を含む風を発生させた。

シャッターチャンス！！

パシャツカシャツ！ うん、中々のパンちらだ 高値で……

シャキ 背中に刹那に刀を押し付けられ、エヴァに伸びた爪で脇腹を切り裂けられそうだ

「今のを消せ」して下さい」

「……ハイ、ワカリマシタ」

仕方ない、消すか……なわけねー！ 逃げる！

次の瞬間、首に衝撃が走り、意識が途切れた。

「両クラス対抗でスポーツで争って勝負決めるんです。レンさんもいいですよね……？」

返事が無いただの屍のようだ

「な、何があっただんですかー!？」

「大丈夫です。寝ているだけですから」

「そうなんですか それじゃあ始めましょう」

レントを気にせずにとんどん進めていく。

ん？ あゝまた気絶させられたのか……

ゆっくりと目を開けると目の前には高等部の皆さんが肌を露出して  
いた

「何！？ またまたシャッターチャンス！！ がっ！？」

だがまたまた首に衝撃が走り、気を失った

……

……

…

「 のじつか？ 」

「違うぞ この馬鹿 ふむ、この服もいいな これもだ」

エヴァは気に入ったゴスロリ服をカゴに入れる

「そーなのかー あ、この服着てみてえ」

目をつけたのは正統派のメイド服だ これ、次着ていこう

というか、買い物カゴは溢れるほどの服類で一杯だ 結構、重いし、支払いは全部俺だからなあ ヤバイな……

「お前は何で女装なんかするんだ？ はっきり言って、気持ち悪いぞ」

「別に似合うからいいだろ？ 次、女装を馬鹿にしたらキレんぞ？」

「ふん、知らんな あとはこれだけだ」

買い物カゴの中に追加された商品は10才には似合わない大人向けの下着だ

何枚か透けてやがる……



「……これで、全部か？」

「ああ、そうだ」

レジで精算する。かなりの出費になるなこりゃ

「24万3820円になります」

「リアーリー……？」

「は、はい……」

店員は困惑しているが本当らしい

「……」

言葉が出ない　いくら何でもこの金額は無い

「エヴァ……」

「私に支払わせる気か？ 貴様が払え」

マジかよ！？ あれ……？おかしいな……？ 目から塩水が……

ああ、夕陽が目に染みるぜ え？ 24万？ 払ったよ！！

二人は自宅へと帰宅中だ

「うん、満足だ」

周りから見てもエヴァの顔は実に満足そうだ

けっ、そうですね よかったですね！

「ホント、どうしてこうなった？orz」

「なんだまだわからないのか 最近の貴様の行動に頭に來たからな  
その埋め合わせだ」

「3日前はネギの惚れ薬で騒動があつたなあ」

あれは面白かつたなあ

ネギが女子生徒追っかけられる姿

「その前の夜の出来事のことだ」

夜…… ああ、幻覚のことか！

「中々、良い夢だつたるWWW」

「どこがだ！！ カメラにも撮られて…… ホントに消したんだろ  
うな！？」

「もちろんWWW」

元の映像は消した……だがコピーしたのは茶々丸の中だ

今日は定期点検の日だったはずだから　ハカセ達は見たはずだ

「なんだその笑みは！！　消してないだろ！？」

「消した　消した　ほら、中に入るぞ」

あっというまに家に到着だ。　二人を迎えたのは茶々丸だ

「お帰りなさい　マスター、レン様」

「ただいま　ハカセと何かなかった？」

「はい、マスターにこれをと　何やら可哀想な人を見るような目をしておられました」

「なんだ？　これは？」

エヴァに手渡された錠剤入りの瓶を見つめる。

瓶に書かれていた文字を読むと【超特製！精神安定剤】と書かれていた

「ぶつwww ははははははwww！ 見たんだアイツ アツハツハツハツハツ！ 腹が痛て〜」

あの映像を見て固まるハカセの顔を想像する……耐えられんwww まさしく、腹筋崩壊級だ

「キ・サ・マ〜 流したな〜 殺す!!」

氷矢が無詠唱で放たれ、俺の顔をかする。

「うおっ！ 危な ちよっ 何やって」

「死ね 今すぐに死ね」

「ああ、マスター」

「クケケケ、ゴ主人、手伝ウゼ」

茶々丸はオロオロとし、チャチャゼロはエヴァに加勢しやがった！

「くんなよ おりゃ！」

レントも派手に応戦し、魔法の隠匿もへったくれも無い状況に無い。

数時間後……タカミチらがボロボロになりながらこの場を収めた。

この騒動の元凶であるレント曰く

「反省はしている だが、後悔はしていない」

清々しい程の満面の笑みを見せ、魔法先生達の反感を買うことになった。

この大きくなった不満をどうしようかと学園長は頭を悩ますことと

なる。

第十二話 学生の最大の敵はテストだ 【前編】

「はい、授業終了了」

5限目の授業終了のチャイムが鳴る、レントはゲームボーイアドバンスSPをしまった。

それは何故か？ 普段の授業内容はプリントに任せ、自分はゲームを楽しむという教え方だが、生徒の方も万々歳だ。

プリントさえ終われば、残り時間は何をしてもいいのだ。また、プリントは重要な所が頭の中にすんなり入るようになっていたため、大好評だ。

次はホームルームか 何をやるのかな あ、ネギだ

「よ、ネギ ホームルーム何やんの？」

何やらネギは白い紙を持っている

「あ、レンさん 次の時間は勉強会やろうと思っっているんです」



「あ、学年末テストか…… 頂き！」

「あ、ちょっと」

ネギが持っている紙を奪い取る。

何々、次の期末試験で、二-Aが最下位脱出できたら 正式な先生にしてあげる。……

「難しいね この課題」

「え、簡単そうじゃないですか？」

どうやら、クラスの成績を知らないみたいだな

「2-Aの成績表見てみ、中の下が多いから」

「あ、ハイ、わかりました」

教室にちょうど到着し、ネギは教壇へと上がる、俺は隅で立つ。

「今日のホームルームは大・勉強会にしたいと思います 次の期末テストはもう すぐそこに迫ってきています あっそのっ…うちのクラスが最下位脱出出来ないと大変なことになるので」

うん、俺も困る 大事な遊び道具が無くなるから

「皆さん がんばって猛勉強していきましょう」

「ネギ先生 素晴らしいご提案ですわ」

ホント年下好きだな 委員長は

「はい 提案提案」

「はい！ 桜子さん」

「では！！ お題は『英単語野球拳』がいーと思いまーすっ！！」

なん……だとっ！

「ちよっ！？ レン先生だっているの」賛成 賛成 俺 超さんせ  
「ーい」 ちよっとー！

フツ すまんな 委員長 悲しいけど男の性には逆らえないのよ  
ね……

懐からカメラを出し、撮る用意はすでに準備出来ている。

「レンさんもそう言うんでしたら、それで行きましょう」

ネギはわからないのだろうか、生徒の自主性に任せた。そして、  
まだ確認していないクラスの成績表を目を通し 考え始める。

「よしっ 早くやってk ッ！」

レントがそう言いかけた時、ハンマーが顔面を目掛けて飛んでくる  
が手で掴み、激突するのを防ぐ。

ハンマーはこのかの方から飛んで来たようだった。

「残念だったね　このか」

一撃で仕留められなかった君の負けだ

「そやかな〜？」

依然としてにこにここと微笑み続ける。

レントは一回だけで終わると思った油断から一瞬の間が出来上がる。

その隙を突いて、自分の後ろにいた茶々丸によってロープで身動き出来ないようにロープで縛られた。

「なっ！　オイッ！　ほどけ！」

ロープなんて力を入れれば簡単に千切れるが……面倒な事態になるので千切ることは出来ない。

「すみません　マスターの命令ですから」

「エヴァ！ ほどいてくれ！！」

「そうか……」

エヴァは縛られて立っているレントの所へゆっくりと歩む。

「この馬鹿がつー！！」

「ぐぼあッ！？」

腹を蹴られ床に倒れる。だがそれだけでは終わらず、蹴りを加えてくる。

「うあ！ ちょっ！ やめ！ あ、パンツ見えた 似合わな」

下から見ているのでスカートの中が見える。

「黙れっ！！」

エヴァの最後の渾身の蹴りが入る。

「グハッ！　もう勘弁して……」

「なんだまだ意識があるのか　茶々丸、コイツを廊下に捨て置け」

「わかりました」

茶々丸によって転がせられ、廊下にだされる。

「え、マジかよ」

『キヤーツ　やっぱりっ』

『何やってるんですかー！？』

教室からの声が聞こえる。

「何でネギは良いんだよっ！？　ふざけんなババア！！」

レントは滅びの呪文を唱えた　　千鶴が葱を持って現れた。

やべっ 千鶴がいるんだった！

「先生、誰がババアですって……」

攻撃的な笑みを浮かべ近づいて来る。

「ち、千鶴のことじゃなくてだな…… あ、やめっ ごめんなさい  
ごめんなさい 葱入れないで！ ア ツ！！」

レントの懇願は聞き入れられず。無情にもお尻に葱を刺され、意識がブラックアウトした。

目を開けると真っ白な天井が見える。 どうやら、保健室へ運ばれたらしい。窓の外はすでに日が暮れている。

「痛てえ　全部、エヴァのせいだな……　あああ！　腹立つ！  
今日は絶対に帰らねえ」

ム力つく野郎とは顔を合わせたくは無い……今日はどこで寝たらよ  
いのか……

女子寮とか……　うん決定！　刹那辺りが泊めてくれるだろう……  
多分

携帯で刹那に電話をかける。

「刹那か？　今日泊めてくれね？」

「へっ…あ、あのっ　男子禁制なんですけど……」

「今日だけだ　今日はロリババアの家に戻りたくないんだよ」

「駄目です駄目です　そんなの……でもレントさんならブツブツ」

最後まで聞き取れないが駄目みたいだな



「無理言って悪かった　じゃあな」

「あっ、まっ」

刹那が何か言う前に切ってしまった。

ん〜どうしよう　困った

レントは校舎外をあても無く歩く。

ん？　瀬流彦だ

偶然、瀬流彦を見つけ、瀬流彦も気づいたのかこちらに近づいて来た

「レンさん、新田先生もいっしょなんですけど、これから飲みに行きませんか？」

そうだなあ　飲んで忘れよう

「いいぜ　行くぜ」

レントと瀬流彦は超包子へと赴き、愚痴をこぼしあった。

その頃エヴァ邸では……

「オイ　ゴ主人、何ソワソワシテンダヨ？」

エヴァは落ち着かず、しきりに窓の外を気にする。

「姉さん、　マスターはレン様を気にしているのかと」

「だ、誰が気にするか！」

「素直ジャネーナ」

「黙れ！　お前ら！」

のような感じだ

……

……

……

「じゃあ 僕達はここで わわわっ 新田先生しっかりして下さい」

新田先生はかなり出来上がっていた。ちなみに俺も結構飲んだ。

あ……俺、100才以上だからね、未成年じゃないよ 未成年の皆  
ー！ー！お酒は20才になってからになってから飲酒するように  
絶対だぞ！

「私はまだまだやれる！ そうだろうレン君！」

「ええ、もちろん これからも頑張りやしょーや」

「若いのにしっかりしてて、感激だ！」

「新田先生っっ」

瀬流彦は新田先生を支えながら帰宅して行く。

あゝあ、次、どこ行こっかなゝ もう夜中だし

とりあえず、校内をうろつくとぶらつく。すると闇の中から二つの影が現れる。レントは声をかける。

「誰よ？」

「あつ！ レン君！ 助けて！」

「夕映達が！ 通信不能に！ ど、どうしたら……」

影の正体はパルと本屋だった。二人はとても混乱しているようで話が見えない。

「とりあえず落ち着いて話せ！」

少女落ち着いて説明中……

「ネギ達が図書館島に魔法書を求めて入ったが音信不通になったと……」

「はいはい」

図書館島、それは世界各地の貴重な本が集まり、地下に納められ、侵入者を阻む罫が仕掛けられている。

まさにゲームで言うダンジョンにあたる。

「地図持ってるか？」 「持ってるけど 入る気なの！？ 危険だよ  
」！

危険であればあるほど燃えるね

「ああ、そうだよ お前らはもう寝ろ じゃな」

「あつ！ レン先生ー」

本屋から地図を奪い取り、図書館島へと向かう。

フフフ、ダンジョンなぞ全て看破してくれるわ！  
ああ、最高の暇つぶしができる

しかし、さすがネギだなトラブルを呼び起こすなんて

レントの頭の中は図書館島しかないあまり、自分の携帯に電話がかかっていることに気がつかなかった。

ちなみに電話の主は……

「出ないな……」

「クケケケ、嫌ワレタンジャーノ？」

「私もそう思います」

「うるさいっ 絶対に奴は出る！」

電話の主はエヴァ達だった……

エヴァはこの日、レントは必ず帰って来ると信じて、この日はずっと起きていることになった。

第十三話 学生の最大の敵はテストだ 【後編】

図書館島の魔法書のある部屋を目指しているレントは今大変なことになっていた。

「あれ？ おかしいな…… あっはっはっはっ 迷っちゃった」

地図通りに来たはずなのになあ 全然違う場所に出ちゃったな

レントは広い空間でバカデカイ扉の前にたどり着いた

ま、いつか 扉の向こうは何があんのかな？

扉に近づくと何かが急降下してくる音が聞こえた。

「？ 何だ？」

上を見上げるとレントの数十倍の大きさのドラゴンがこちらを目標けて襲って来ている

「グルアアアアッ!!」

「ドラゴンか…… うん、中位くらいだな 弱いな」

魔法使わなくても余裕だな

ドラゴンは火を吹き、レントを焼きつくそうとする。だがレントは障壁で楽々と防ぐ。

ドラゴンはさらに数メートルまで近づき、尻尾を振り回す。

「よっよ」

「グルッ!?!」

一撃でもくらはば即死クラスの衝撃のある攻撃を弾き飛ばす。

「自分より強い人に攻撃を仕掛けるなって習わなかったのか?」

フッ、ならばしつけしてあげよう



「ポチ、お手」

ドラゴンは言葉など無視し、鋭く尖った爪で切り裂く。

手を乗せるよう促したが明らかに攻撃行為なのでしつげだな

「伏せえええっ!」

ドラゴンの爪を上へ飛び避けて、気を適当に込めた拳を振るう。  
拳圧によってドラゴンが地面にひれ伏す状態になる。

「まったく、俺に齒向かうとどうなるかその身で思い知れ」

連続して拳圧をうちだすために気を溜める。

「グルアツ!」

ドラゴンは自分よりも圧倒的に強い相手に恐怖を感じ、羽を広げ逃げようとする。

「ポチ！ 逃がすか　オラオラオラオラオラオラ」

瞬動で間合いを詰めドラゴンの腹へ、羽へ、腕へ、頭へ、レントの拳圧が障壁を打ち砕き、容赦無く拳圧がモロにドラゴンの体に降り注ぐ。

「グルッ　グアッ　グオオオン！」

体がすぎましい痛みには耐えられなくなり倒れ伏す。

「決着ッ！！　終了ッ！！」

やっぱり、弱かったな　さて扉を開けよ

ドラゴンを放置し、扉を開けるとそこに広がる空間にいたのは……

「おや、やはり　貴方でしたか」

元、紅き翼のメンバーだった、アルがいた。

「お、アルじゃん おひさ〜 何でここに居んの？」

うん、ホント何年ぶりだろうか？

「色々ありましてね、現在ここで療養中です」

「へえ〜 そうなんだ」

「ところで今から朝食を食べようかと思っていたのですが いっしょにいかがですか？」

「え、マジ？ いつの間にそんな時間なん？」

携帯で時間を確認すると時刻は七時を回っていた。

もう、朝なんだ…… 気がつかなかったや

「じゃ、お言葉に甘えて頂くわ」

近場のテーブルへ座る。

「では、頂きましょう」

出された料理はケンタッキーフライドチキンだった……

「なぜにファーストフード？」

え、何？ 朝からフライドチキンとか、かなり重い食事なんだけど

……

「私は毎食、食べてますが一向に飽きませんよ ホント、カーネ  
ルさんのフライドチキンは偉大ですね」

「……食った後に何している？」

コイツ療養中とか言っただけだからな予想したくないが……

「そうですね 他者の人生を読んでいた……」

よしっ！ 外れてくれた！

「読むものが無くなったので最近は寝てますね」

と思ったら、当たったよ！

皮肉を込めてアダ名をつけてやろう

「……………引くわ お前食って寝てるから今日からクウネルな」

「なるほど！ 中々良い名ですね 気に入りました 今日からクウネル・サンダースと名乗りましょう！」

オイオイ……………、気にちゃったよコイツ しかも、どんだけケンタッキー好きなんだよッ！？

「いや、冗談だからな？ アル」

「……………」

アルはレントの声を無視し、目を合わさず紅茶を優雅に飲んでいる

あれ…………… 無視？

「オイ、アル？ アルビレオ？ アルビレオ・イマ！？」

そんなに気に入ったのかよッ！… めんどくさッ！…

「……クウネル」

レントは本名で呼ぶことを諦め、偽名で呼ぶ。

「どうしました？ レン？」

清々しいほどの笑顔を向けてくる。

「いや……もういや クウネル、俺、しばらく寝るわ」

昨日からずっと起きていたから眠気が半端ない

「おや、私に言っておいてそれですか」

「ぐっ…… 別にいいだろ あ、そうそう俺の人生範疇したかったらしてもいいぜ」

「フッフ、持つべきものは友ですね…… ああ、約300年分ですから退屈せず済みそうですね」

クウネルの言葉を聞き終わると俺はそこから辺に寝っころがって目を閉じる。

この空間は温室なみに暖かいのですぐ眠ることが出来た。

……

……

…

「学園長、お嬢様は本当に無事なのですか？」

学園長室にそう問う刹那の姿があった。

「うむ、今回のことはワシが起こしたことじゃから 安心するとい  
い」

そうは言うもののお嬢様が心配でたまらない

「そうですか……あとレン先生が図書館島に入って行ったと聞きま  
したがこれは？」

「ワシの仕業じゃないのう搜索させておるが未だ行方知れずじゃ」

昨日の電話を断らなければこんなことにならなかつたはずだ　でも、それだと同じへ、部屋で寝ることに……／＼／　ち、違う！　そうじやなくて　ええと……

頭の中で勝手に想像し、身悶える。

「おい、ジジイ、レンは何処にいる？」

エヴァが学園長室に突然入って来た。

何故ここに？　しかし、目の下の隈を見るにずっと待っていたみたいですね

「エヴァか　レン君なら図書館島に入っただけり行方知れずなのじゃ　目の下に隈ができてるぞい」

「フンッ」

それだけ聞くとエヴァは部屋から出ていこうとする。不意に学園長



室の電話がなる。

「もしもし？　　おお、君か　なんじゃと？　　そつか連絡を感謝するぞい」

「レンからか？」

エヴァはレントからと判断したのだろうか顔が険しくなっている

「いや、図書館島の司書からじゃがレン君は無事じゃそつじゃ　　明  
日位に戻って来るぞ」

レントが無事と聞いて二人は顔を緩める。

よかった、無事で　エヴァンジェリンさんもホッとしてるようですね

しかし、相当執着してるみたいだから、手強いライバルになりそうです

「何だ？　　桜咲？　　殺気を飛ばして」

「あ、すみません」

いつの間にか殺気を向けていたらしい……この程度の私情を表に出すなどまだまだ未熟

「さあ、これで二人とも期末テスト勉強に心置きなく励めるじゃろう」  
「う」

「は？ 何でそうなる？」

「今回2・Aは最下位脱出しなければネギ君はここを去り、またレオン君も留まる理由が無くなるから去るかもしれないのう」

「むっ……」

エヴァは痛い所を突かれたレントが麻帆良に居る理由はネギが居るからなのだ

ネギがいなくなればレントもすぐに雲隠れしてしまうだろう

そういえば、そうでしたねならばこうしてはいられないですね

「私はこれで失礼します」

「ジジイ、邪魔したな」

それぞれがテストに向けて勉強をし始めた。

……

……

…

「お前ホント飽きねえの？ フライドチキン」

「何を言いますか！ ああ、嘆かわしいケンタッキーの素晴らしさを理解出来ないとは」

さすがに毎回これだと飽きる というかそろそろ戻るか……ここに  
来てから1週間位経っている気がする

「そろそろ帰るか……」

「そうですね？ ならばエレベーターまで案内してあげますよ」

「いや、悪いね 何から何まで」

クウネルに案内され、エレベーターに乗る

「ああ、そうだ これをキティに渡して置いて下さい」

袋に包まれた物を渡された。

「了解、じゃあな」

また会いそうな気がするけどね……

「ええ、また」

エレベーターの扉が閉まり上へと上がる。

地上に到着すると太陽の光がかなりまぶしい。

「ふー、テストどうなったかな？」

もし最下位だった場合、ここにいる意味が無くなるからな

そんなことを考えていると曲がり角で人とぶつかり相手が倒れるしまった。

「悪い ってこのかか」

ぶつかった相手は着物姿のこのかだった。

お、着物がはだけて下着が……白か いいね

「レン君 どこ見てるん？」

慌てて立ち上がり、修羅と化している

「どこっで…… パンセじゃない着物姿が可愛いな〜って見惚れていただけだ そ、そうそうテストどうなった？」

危ない危ない……

「テストならな　なんと学年1位になったで！」

笑顔がまぶしいな

「マジ？　すげえ」

「レン君、今までどこ行っていたんや？　心配してたで」

「図書館島でダラダラしてた」

「あはは〜　駄目教師や〜　「お嬢様〜っ」「アカン　逃げんと！」

遠くから黒服の男がこちらに来る。

追っかけられてんのか……手伝ってやる

「このか　失礼っ」

「はわわっ　レン君!？」

このかをお姫様抱っこし、追ってから逃げる。

「隠れる場所はっと……  
教室だな」

校舎内の教室に入り、このかを下ろす。

「びっくりしたで〜 いきなり抱えるんやもん」

「だから断りいれただろ ま、とりあえず何故追っかけられてんだ」

「おじーちゃんのお見合い趣味でないつもすすめられるんよ 無理矢理 こういう人とか」

見せられた相手の見合い写真はこのかより10才以上も離れている。

え、何考えてんのあのジジイ……

「で、見合いから逃げて来たと……」

「今日は見合いです写真を撮る日やった　なあなあ、うちまだ、中学  
生やで早すぎると思わへん？」

「うん、ジジイがおかしいだろ　逃げていいと思つぜ」

「そうやる　やっぱり話がわかるなあレン君　今見直したで」

今……？

「前はどんな評価だったんですか？」

「そやな　どすけべさんや」

「そ、そう……否定できないな　そうだ、止めてやるよジジイの  
趣味」

「それが出来たらもう止めてるで」

「まあ、任せる」



ジジイに電話をかける。

「よ、ジジイ あん、ダラダラしてたんだよ まあいい、用件がある このかに見合いを強いるな！ もし今度やったら、大変なことになるよフッフ、じゃあね」

脅迫終了〜

「もうやらないって」

「ほんまにもう見合いないん？」

まだ信じられないようだ。

「ああ、そつだよ もしあったら俺に言ってね」

「すごいなあ〜レン君 ありがとう〜！」

かなりの喜びようで抱きついて来た。

「ちよつ！？ いきなり何！？」

俺は嬉しいからいいけど……

自分のやった行動に気づき離れる

「嬉しくてついな……」「カシャツ！！」 ふへっえ

「いやゝびっくりしたよ

ネタが落ちてくるとは……で詳しく知りたいんだけど答えてくれるかな レン先生？」

ドアの所にいた朝倉に他人から見れば、このかが俺に告白している  
しか思えない場面を撮られたああああ

「このか、後、任した サラバだ！」

面倒なことは誰かに押しつけるに限る。

「ああ、ちよつとー！ ちっ それじゃあ近衛に聞かせてもらおう  
か」

「あ〜ん ひどいやんかレン君〜！」

「フハハハハ」

レントが逃げ、このかが追いかけて、朝倉が追いかける。別の場所でもネギがある理由で逃げていた。

休日だというのに校舎内から二つの騒ぎがあり、しばらく治まることは無かった。

その後、エヴァ宅へ逃げ帰り、エヴァにとても怒られた。

また、クウネルからの贈り物（猫耳、メガネ、セーラー服、スクール水着セット）を渡したことで一悶着が起こったのは言うまでもない……

## 第十四話 ゲームは偉大だ

桜が並ぶ桜通りを月が花びらを幻想的に照らす様子は心を奪われる程だ。

そんな桜を見ながら、木の影に潜んでいるのはエヴァとレント。

「お、来た来た24人目の獲物が ん？まき絵じゃん ま、いつかほら行けよ」

「言われずとも分かっている」

そう言うとエヴァはまき絵に襲いかかる。 それに気づいたまき絵は、人では無いナニカから全力逃げる。

人とは自分の命に危険が迫ると思わぬ力を発揮すると言われている。

だが、まき絵の本能は、逃ゲロ、ヤバイ、キケンダと告げ、圧倒的な恐怖が体を支配する。 そのため、体が恐怖で思うように動かないくなる。

とうとう、まき絵は木の下に追いつかれ、逃げられない状況に追い込まれた。

「キ……キヤアアアア！」

まき絵の悲鳴が虚しく響き、ナニカは首を噛み血をすする。その姿を人々はこう言うだろう

「吸血鬼……と」

「何へんな回想をしている？」

「いや、ちょっとやってみたくてね」

気を失ったまき絵の前で談笑する二人。

「これくらいやれば噂になるだろう　あ、残り香を消さないで」

エヴァが魔力の残り香を消そうとするのを止める。

「ああ、なるほど、やっと坊やにちょっとかいを出すというわけだな」

「正解。後はネギが気づいたら、もう一人襲うだけだ」

「ククク、英雄がこんなことをしていいのか？」

「別に公にならなきゃ問題ねーよ」

「フフフ、やっぱりお前はおもしろいな」

「あゝ、腹減ったな。さっさと帰って、茶々丸の飯で食って寝るか……」

「人が真面目に話している途中で去るなッ！」

しかし、エヴァの言葉など無視し、さっさと行ってしまった。

……

……

…

新学期が始まり、生徒達はすでに席についている。

「……3年！ A組！！ ネギ・レン先生ーっ」

クラス全員で金八先生のネタをやる。

やっぱり、このクラスはノリがよくていいね

「えと…… 改めまして3年A組の担任になりました。ネギ・スプリングフィールドです。こるから来年の3月までの1年間よろしく  
お願いします」

「……はい よろしくー」

次は俺だな お、ネギがエヴァの視線に気づいたか

「同じく、3年A組 副担任になった みんなのヒーロー、レント  
だ よろしくー」

「……よろしくー」

俺の冗談の紹介を元気に応じてくれた。

「ネギ先生。今日は身体測定ですよ。3・Aのみんなもすぐ準備してくださいね」

教室に知らせに来てくれたしずな先生が扉に立っていた。

「あ、そうでした。ここですか！？ わかりましたしずな先生」

身体測定だと……つまりあれだ 女性生徒達が下着姿になりワイワイ測定する。男の理想郷の1つだ！

本心を言えば、見たいけどなあ ここは我慢しろっ俺っ

「で、では皆さん身体測定ですので……えと、あのっ今すぐ脱いで準備してください」

ネギ、アウトー！！ さすがは変態英国紳士、格が違っな

レントはネギに悟られないように教室からそろりと避難する。

俺の予想なら『ネギ先生のスケベっ！』と来るはずだ



「「ネギ先生のエッチ〜ッ」「」

ちっ、外れたよ

「うわ〜ん 間違えました！」

生徒に言及され、ネギは慌てて教室から出ていく。

「ハハハ、この変態紳士めっ」

「だ、だからっ 間違えたんです」

必死に弁解するネギを見て笑うレントとしずな先生。

さて、導火線に火をつけますかね

「そっいや、二人とも知ってるか？ 最近の噂」

「何ですか？」

「噂って桜通りの吸血鬼のことかしら？」

しずな先生は知っていた。だがネギは知らないようだ。

「そうそれです。しずな先生。ここ最近、桜通りで吸血鬼に襲われたと言う生徒が何人もいるんですよ」

レントはおもしろそうに噂を二人に話し始める。

「吸血鬼……ですか？」

「そう吸血鬼だ。もう23人が襲われたって証言してるんだ」

「でも、全部、作り話だと思うわ」

それが一般人の普通の反応だ。吸血鬼とは一般人には空想の存在でしかないからだ。

「23人も証言が同じで、全員、親友関係ではない。おかしいと思うだろ？ ネギ」

「ハア、でも僕もただの作り話かと……」

予想通りの答えだな。だが まき絵が発見されれば絶対にネギは食いつくはずだ。正義側だしね

「先生ーっ 大変やーっ まき絵が… まき絵がー」

廊下の奥から和泉が慌てて走って来る。

やっと見つけたか さあ、ネギ、俺の手のひらで踊れ

「何！？ まき絵がどーしたの！？」

教室のドアと窓がいきなり空き、そこから見える下着姿の生徒達。

「わあ〜！？」

「シャッターチャンス！」

ここで撮らなかつたら男が廃るっ！

カメラを懐から出し、撮ろうとするが横からカメラを取られる。

「レン先生、あなたは一度指導しなくていけないわね」

しずな先生が怒りのオーラを纏っていました……

「戦略的撤退！」

「あっ、コラッ！ 待ちなさいッ！」

待つわけねーじゃん

レントはこの後逃げ切り、普通に授業をし、さっさと家に帰った。

「ただいまーっ」と

「オッ、ヤット帰ッテキタカ」

レントの帰宅を迎えたのはチャチャゼロだけだった。

「あれ？ エヴァは？」

俺より先に出たはずだよな？ あ、そうか 後一人襲っただったな

「マダ帰ッテ来テネーンドヨ」

「まあ、とりあえずマリオカートでもやるっぜ」

「イイゼ、今度こそ、俺ガ1位ダ」

「フッフ、それはどうかな」

ゲームキューブセット完了ッ！ 起動オン

二人はマリオカートをやり始める。

…… 1時間後

「オイッ ソコニバナナ置クンジャーネーヨ」

「甘いな、このゲームはバナナを制した者が勝つんだよ」

「クッ、ナラコレダッ！」

「サンダー？ ところがどっこい、スター発動ッ！」

「アアアアッ！ 卑怯ダゾ」

「勝てればいいのだよ 勝てれば よしっ！ 1位だ」

「クッソオオオオッ！」

完全に熱中しているところでエヴァ達が帰って来た。

「今、帰ったぞ」

「モウ一度ダ」

「フハハハ、何度挑もうと無駄だ」

「オイッ！ 反応しろッ！」

「あん？ 何その恰好、捕まるぞ？」

エヴァは下着姿で帰って来た。

「坊やにやられたんだよ 私が手加減したのもあるがな」

「生で見たかったな、その場面。あ、茶々丸、戦闘の映像をパソコンに送っておいて」

ネギの実力がどれ程なのかが知りたいしね

「かしこまりました」

「レン、神楽坂 明日奈は何者なんだ？」

「アスナが関わったのか？」

「ああ、坊やの血を吸っている最中に障壁を抜けて蹴りをくらった。何か知ってるか？」

うーん アルとかに王女に関する話を話さないでねって言われてるしなあ。

でも能力なら話してもセーフだよな？ すぐに明らかになるだろうし

「彼女はね魔法無効化能力を持ってんだ 素性は知らん」

「ジジイが学園に通わせる位だからただ者では無いというわけだ」

「オイ 続キヲ早クヤローゼ」

チャチャゼロが続きを早くやりたくてウズウズしているのが目に見える。

「ああ、悪い悪い、じゃ再開しよう」



レントは画面に目を向け、マリオカードを再開する。

「私もやるとしようか」

滅多に参加しないはずのエヴァもコントローラーを差し、参加してきた。

「オーケー、エヴァもボツコボコにしてやんよ」

「フ、いくらでもほざいてる」

「今度こそ、俺ガ1位ダ！」

さてさて、明日はネギはどう動くかな？

そう思いながら、ゲームでのバトルを開始する。

ゲームは眠気と戦いながら夜が明けるまで続けた。

勝者はただ1人……フラフラになりながら、眠ってしまった敗者の血をすすする。

## 第十五話 オコジョって毛皮にすると暖かそうだよね

昨日、ゲームをやり過ぎたせいで睡眠不足だ。後、それと体がかかりだるい。

今日は屋上で寝よ……うん、決定だ。 学園に着くまで我慢だツ！  
俺ツ！

眠いのを我慢しながら、学園に出勤する。ネギの様子はエヴァが昨日かなりやってくれたおかげで怯えていた。

朝なんか、アスナの肩に担がれて登校して来たらしい。ま、とりあえず今は睡眠を摂らないとな

レントは日当たりがいい屋上へと向かった。屋上に着いた時、もうすでに先客がいた。

「授業に行けよ。学生」

「授業をしるよ。教師」

壁に寄りかかって、日向ぼっこしていた先客はエヴァであった。

「無理だ。なんか体がだるい」

「そうか。私は日が昇っている時は眠いんだ」

ん？ 俺の授業の時は起きてちゃんとやってたよな

「まあいいや。俺は寝に來ただけだしな」

エヴァの隣に座り、心地よい日にあたり、ぼーっとする。

「レン、坊やはどう動くと思うか？」

ネギの行動ねえ……

「そうだな。アイツは1人で解決しようとするからなあ、タカミチとかには助けを求めないな。多分、ずっとあの調子のままだろうな」

助言者が現れれば良いんだけどなあ

「つまらんな」

「そつだな……」

レントはコックリ、コックリとさせ、とうとうエヴァの肩に頭を乗せ、眠ってしまった。

「オイッ！ レ、レンツッ！」

嬉しいのだが誰かに見られたら……という感情から起こそうとするが完全に寝入ってしまった、起きる気配がない。

「こ、困ったな……で、でもこついうのも悪くは無いな……／＼」

レントの寝顔を見てみると、1人占め出来るのは私だけだろうとそんな優越感と言つべき感情が沸き上がる。

そして、エヴァはレントの寝顔を飽きること見続け、温かな時間を過ごす。

…  
…  
…

「困ったのう……」

学園長は悩んでいた。エヴァをどうやって負かさせるかを。

何故なら、ネギが最強の魔法使いに勝ったという自信をつけてもらいたいと考えているからだ。

「あやつことじゃからな……手加減せんじやろう」

あやつ レントは殺しはしないと書いていたが、恐らくネギが戦えば勝負すらならない。

だから、遊ぶ……つまりは、じわりじわりと攻め、相手が戦えなくなるまでやるということだ。

そうなのは、困るのだ。そうした場合ネギの心が折れてしまう恐れがあるからだ。

「ダメ元で頼みこんでみるか…… ん？ この手紙はネカネちゃんからじゃな」

学園長はネカネからのエアメールを開封し、読む。

「ふむ、もしかしたら、うまくいくかもしれんのだ」

内容をまとめると、下着泥棒のオコジヨ妖精がネギの従者となり、罪から逃れようとしている。これを防いで欲しい、という感じだ。

これは、ネギに助言者がつくということだ。

「侵入して来た時に、見逃すよう言っとかんどのう」

学園長はつぶやき、お茶をすすった。

……

……

…

時刻はもうすぐ昼すぎになるうとしている。屋上のサボリ魔達は

相変わらず、同じ場所にいた。

だが、レントがエヴァの肩に頭を乗せ寝ているはずが、エヴァの膝の上で寝ている。

「最高だ…… / / / やはり、膝枕させてよかった」

そう、エヴァがレントの頭をエヴァの膝へ移動させたのだ。

「かなり眠りが深いみたいだし、キスしても大丈夫かな？ …… / / /」

エヴァは暴走し、レントの顔に近づく。

「むふふ……もふもふ……だ……せつ……な」

唇同士が触れる寸前で、レントが寝言を呟いた。エヴァはブチッと何かが切れた。

今そばには自分がいるのに、他のヤツの名前が口から出るのか？  
不愉快でたまらない。

エヴァがいきなり立ち上がった。そのため、レントの後頭部が硬い地面に激突する。

「痛ってーッ！！ な、何何！ え？ 何で怒ってんの？」

レントは後頭部に走った痛みで慌てて起き上がる。

せっかく、人が気持ちよく寝てたのに、俺なんかしたっけ？

「桜咲ともふもふとはどういう意味だ！？」

もふもふ？ …… ああ、刹那の羽根のことか！ もしかして、寝言に出ちゃったのか？ とぼけよう

「何を言ってるのか、まったくわからないな」

「なら、桜咲とどんな関係だ？」

何なんだよ？ まったく…… 刹那との関係か



「うん、保護者的な関係が近いかな」

「そうか……ん？」

エヴァは安堵したような顔をし、その後何かに気づいた表情を見せた。

「どうした？ 侵入者か？」

「ああ、学園の裏の方からだ」

昼間からとは術者は馬鹿なのか？ しかし怪しいな

「俺が捕まえに行くよ」

「ん、感謝するよ」

そう聞くとレントは影を媒体とし、目的地へと移動した。

……

……

：

「俺つちとしたことが 裏の方まで結界が張られていたとは大誤算だったぜ」

一見、白いオコジヨにしか見えないが、猫の妖精に並ぶ由緒正しきオコジヨ妖精である。

そのオコジヨ妖精であるアルベール・カモミールは逃げていた。

結界が張られていたということは誰かが確認に来るはずだからだ。

捕まれば、刑務所に強制送還され計画が水の泡になってしまう。

「早く、兄貴と合流しないとマズイ」

カモミールの前方の木の影から手がにゅッと現れ、続いてレントが這い出てきた。

「お、侵入者発見」

「ヤバイッ！」

カモミールはすぐさま方向転換し、レントから逃げる。

「逃がすかよ（戒めの風矢）」

一本の矢がカモミールを捕らえ、束縛した。

マジかよ……ここまで来たのに……

カモミールは束縛した主を睨み付ける。

コ、コイツは……

「あ、あなたは紅き翼の『混沌王』!!」

「」名答。ところでオコジヨ妖精がここに何の用だ?」ピリリ  
ッ!」と、悪いな」

目の前の男の携帯が鳴った。

「なんよ？ ふーん、了解。喜べ、見逃せと連絡が入った。」

「！マジっすか！？じゃ早く解いてくれよお」

なんという、幸運だ。 神に感謝するぜ。

「まあ、待てよ。 誰の所に行く気なんだ？」

カモミールは早く解いてもらいたいがために質問に答える。

「ネギの兄貴んところッスよ」

「へえ、じゃあ俺に関することを忘れてもらおう。」

レントはそう言い、呪文を練り上げる。

意味がわからない。何故、目の前のレントについての記憶を消されなければならぬのか？

「なんでっす！？」「じゃあね」「待ちやg……」

カモミールの疑問を明らかにすることなく忘却術をかけられた。だんだんと意識が朦朧とし目が霞む。そして、ついにその場に倒れ伏した。

「フッフ、おもしろくなる予感がしてきたな。さてと、午後位は授業やるか……」

レントはネギに助言者がつくことで、どう動くのか楽しみでたまらない。それはまるで中身が分からない箱をプレゼントされたような気分だ。

箱を開けたら出てくる物はいったい何なのだろうか？ 出てくる物は当然、誰も予想出来ない。もちろん、ネギ自身もだ。

……  
……  
……

日が傾き、学園全体をオレンジ色の夕陽が照らし、細長い影が出来る上がる。

「ネギーーツ」

そんな中、アスナはネギを探していた。先ほどまでネギと帰宅中だったのだが、ちょっと目を離れた瞬間にいなくなってしまったのだ。

ホント、どこに行ったのよアイツ。まさか、あの二人にまた襲われたの!?

頭の中でネギが襲われ、自分の助けを求めてる様子が思い浮かぶ。

早く、見つけなきゃ!

「どこにいるのー? !?」

角を曲がると昨夜、ネギを襲った二人がいた。

「ほう……神楽坂 明日奈か」

エヴァはアスナを見つめ、その隣で茶々丸が一礼する。アスナは警戒し、体を身構える。

「……あんだ達! ネギをどこへやったのよ」

「ん？ 知らんぞ」

「え……」

この二人がさらったという予想が外れ、アスナは鳩が豆鉄砲食らったみたいなお表情をした。

「安心しろ、神楽坂 明日奈。少なくとも次の満月までは、私達が坊やを襲ったりすることはないからな」

「え……？ どういうこと」

「満月を過ぎると魔力が落ちて、ただの人間同様になるんだよ。ほら」

エヴァが口の中を見せ、  
牙が無いことを見せる。

ホントだ。 安心した〜……そうだ、こんなことやめさせなきゃ

「それよりもあんた達！ ネギ襲うのやめなさいよ。あんたの家に住んでるレンだって、このことを知ったらショックを受けるわよ」

この子はレンの授業だけはしっかり受けているから、なんならかの想いがあるはず……

「アイツが……？ プツ、ハハハハハ」

な、何で笑いだすのよ、この子

「な、何がおかしいのよ！」

「教えてやるよ、神楽坂 明日奈。ネギを襲うよう指示したのはレンだよ」

「え……？」

私の体は雷に打たれたように動けなくなった。

いつも、みんなを楽しませてくれるレンがそんなことをするはずがない。

「な、何デタラメ言ってるのよ」



「本当のことだ。それじゃあな神楽坂 明日奈」

二人がその場を去った後でも私は未だ信じられずいた。

「嘘よ……絶対に嘘だッ！」

アスナの問いに答えるものは誰もいない。

その頃超包子では……

「ふあッ、ふあッ、ブエノスアイレスッ！」

「だ、大丈夫かい？ レン君。さっきから変わったくしゃみしているけど……」

「ん、誰か俺の噂をしているな。あ、瀬流彦先生しようゆ取って

ください」

「はい、しかし、レン君の噂ですか……　いつもさねてると思いま  
すけどね」

「サンキユ、へえ、そうなんだ」

瀬流彦とレントが超子特製の料理を味わっていて、よくレントは、  
くしゃみが出ていた。

第十六話 茶道は堅苦しいものだなあ

職員室

「あゝ、まだかよ。瀬流彦先生？」

「後、少して終わりますから……」

瀬流彦は書類仕事している。その傍らではレントが暇そうにイスでぐるぐる回って、待っている。

「んなこと、言っただってさあ、昼休みは貴重なんだぜ？」

二人は昼休みにたまには学園内で外食をとろうじゃないかと朝、話し合ったのだ。

「あと少し、少しだから」

この繰り返しにレントは盛大に溜め息をする。仕方ないのでネギの現状把握をすることにした。

まず、オコジヨ妖精は問題なしにネギに合流したことを朝、会った時に確認した。

オコジヨ妖精は中々、頭の切れるっばいからな。エヴァに仕掛けて来る可能性は10%。茶々丸に仕掛けて来る可能性が80%だな。

よって、茶々丸の動きに注意しておこう。不確定要素がアスナだな。ネギにつくかつかないかでだいぶ違ってくるだろうな。

気になることは、アスナの態度がおかしいんだよね。授業中に俺を見て、思い詰めた表情していた。エヴァに聞いてら、にやにやしなから知るかって言われた。

絶対、アイツが俺のことについて何か話したに違いないな。後で、いじめよ。

「終わったよ。レン君」

瀬流彦の書類仕事を終えてレントに話しかける。

「よし、それぞ」レンさん、学園長がお呼びですよ「……………」

狙ったようにくるなんて、何？ 嫌がらせ？ ふざけんなタカミチ。  
恨みこもったようにタカミチを睨み付ける。タカミチは困ったように苦笑する。

「ふざけやがって……すまん瀬流彦先生1人で行ってくれ。俺はど  
うやらジジイを潰さなければならぬらしい」

「そうですか…… レン君学園長を潰さないでね」

「気にするな、半分冗談だから」

「も、もう半分は……？」

恐る恐ると瀬流彦はレントに聞いてみた。レントはただ、にやりと  
するだけだった。

……

……

…

「死ねっ！ ジジイ、何の用だ!？」

学園長室に入るなり、レントはそう叫んだ。

「酷くない？ もう少し、優しくしてくれんかのう」

「あ？ 妖怪をいたわる法律なんてねえよ」

せつかく、唇ご飯が食べそうだったのに。

「ハア、本題を言うぞい。ネギ君を今回、勝たせてやってくれんかのう？」

学園長はヒゲを撫でながら話す。

ん？ どうすつか…… そうだ！

「それは保証できないな。俺は勝手にやると言ったはずだ」

「そこをなんとか……」

「俺の言うことを実行してくれたらなあ。考えてやらないこと  
もないけど」

さあ、食いつけ！

「なんじゃ？」

学園長は神妙そうな顔をして聞いてきた。

ヒットオオオオオ！ 掛かったよ。

「今日の放課後、エヴァに1人で学園長室に来るよう指示し、出来るだけ話でここに留まらせる。話の内容はそうだな……吸血鬼事件の追求で……」

「承諾した。それじゃあ、ネギ君を……」

「交渉成立だな それじゃあな。クソッ！ もう昼休み終わりじやねーかよ。マジ、地獄に堕ちろ未確認動物ッ！！」

そう言って、学園長室から去って行った

「去り際も罵倒なのじゃな……まあ、これで安心じゃな」

学園長室から嵐が過ぎ去り、学園長は二つの意味で安堵の息をついていた。

……

……

…

放課後だ。自由な時間の訪れのはずが、何故か今現在、茶道部で拘束されている。

「じつもついてないとは……今日は厄日なのか……？」

後で龍宮に厄祓いを頼んでおくべきだろうか？

「ほら、飲め」

エヴァから茶菓子和茶を出される。エヴァの髪はというと後ろ髪が一つに束ねられていた。



はつきり言おう、ものすごく可愛い。あ、可愛いと思っただけだからね。決して惚れてしまったとかじゃないぞ！俺はロリコンじゃないからな！？」

「あ、ああ……」

レントは受け取り、茶から飲む。抹茶、独特の苦味が口の中に広がる。苦いのが嫌いな人はこう言うだろう。

「ニガツ！そしてマズッ！」

「お前な……抹茶のどこがまずいと言うんだ？」

「いや、抹茶は好きだよ。……抹茶アイスとか濃厚でうまいし」

レントの発言をエヴァは侮蔑の目で見た。そして、自らも一口飲む。

「まだまだ、子供だな……」

黙れ、一生幼女体型め！　しょうがないじゃん。　好みの問題なんだから！

「……帰るわ」

立ち上がり、茶道室から出ようとすると、他の部員らに出口を阻まれた。

「帰るからどいてくれないかな？」

「いえいえ、せっかくですから。茶道の真髄を教えて差し上げますよ。先生」

代表格らしき女子生徒が変なオーラを出しながら、微笑む。

「断る」

「一時間もあれば、抹茶大好きになれますよ」

二人目が囁く。どうやら、俺は茶道部のプライドを刺激してしまったらしい。

「だが断」「さあ、どうぞ」「おいッ！ 引っ張るな！ え、エヴァ、こいつらに何か言っちゃってー！」

暴走する、部員達を静めてくれ。エヴァ。

「まったく」

おお、助けてくれるのか。まるで、今は仏のように感じる。

「一時間じゃ足りんぞ。洗脳するなら徹底的にやれ」

「ぶざけんなッ！ 待って！ 嘘だろ！？」

エヴァはそう言い放った。そして、にやにや笑いながら、茶々丸と  
いっしょに茶道室を出ていった。無情にもレントは茶道室の奥へ  
と連れていかれた。

……

……

…

「やっと、解放された……」

茶道部に洗脳訓練とも言つべきものをくらって、かなり時間が立つ

ていた。もう、空が茜色に染まっている。もう二度と茶道部には来るものか。

予定外の出来事だ。本来ならば、ネギが茶々丸を襲った場合、そこに介入し、ネギの茶々丸を襲う心を打ち砕く予定だ。

そのために学園長と取引をしたのだが、自分が動けなきゃ意味をなさない。急いで確認しに行くか……

そう思いながら、影を使った転移で茶々丸の影へと繋いぐ。周りに誰もいないことを確認してから、ずるりと音を立てながら転移を試行した。そして、数秒も立たないうちに茶々丸の所に転移した。

「茶々丸〜。！！どけッ！」

正にギリギリと言ったところだろうか。茶々丸の目前には魔法の射手が迫っていたのだ。レントは瞬時にそれを理解し、障壁を張り、防いだ。

「なッ！」

声の主はネギだ。そばにはアスナにオコジヨ妖精もいる。

「レン様……」

「大丈夫か？茶々丸」

「はい、おかげさまで」

よし、茶々丸に外傷無し。

「「レン（さん）！？」「」

ネギとアスナは驚きの声を挙げる。

「何すんでえい。邪魔するとは、お前はエヴァンジェリンの一味だな！」

オコジヨ妖精はレントに向かって、声を挙げる。

「一味というより、黒幕と言ったほうがいいな」

「や、やっぱりそつなの！？」

「ど、どういふことですか……?」

やっぱりとは、アスナはエヴァから聞かされたということだな

「生徒達を襲うよう指示したのはこの俺ってこと」

「ど、どうして、こんなことすんのよ！」

アスナはさすがのように質問する。

「理由は暇つぶしだ。 分かりやすい理由だろう?」

「そんなことで生徒達を襲ったんですか!? レンさん先ほどの魔法ですよね? 魔法使いならどうして悪いことをするんですか!」

ふう、コイツも正義の塊か……まあ、当たり前か

「そつするとおもしろいからだ」

「ッ！　そ、そんなの」

「許さないと？　ならば、問う　生徒である茶々丸に危害を加えようとしたお前はどつなんだ？」

「そ、それは……」

「あ、兄貴、敵のいうことを、聞く必要ないっすよ！　さっさと倒すっす」

オコジヨ妖精がそう促すがネギの耳には入らないようだ。

ネギへの追い詰めはこんなもんだろう。一応、アスナには警告しておくか。

「それとアスナ。軽い気持ちで首を突っ込んでいるなら、こちらに來ない方がいい。死ぬぞ？」

「そ、そんなこと言ったって戻れるわ　」

アスナが何か言う前にレントは茶々丸を連れ、去って行く。

満月の晩まであと少しか……。フッフ、皆、俺の手の中でよく踊っ  
てくれるな……

レントは内心で笑いながら、満月の晩を楽しみにする。 エヴァに  
教えてない、計画を秘めながら……



## 第十七話 夢を観る者

休日に茶々丸と学園内をぶらついて、今カフェで休憩中なのだが茶々丸の様子がおかしい。

「本当に大丈夫か？ 茶々丸」

「……あ、は、はいっ」

さっきから返事が遅かったり顔が赤くなったりの繰り返しだ。俺、何かしたかなあ？

「あのレン様。先日は助けて頂いてありがとうございます」

また、顔を赤くしながら話しかけてきた。

「茶々丸を助けるのは当然のことだよ。いなくなったら、悲しいからな」

「そんな風に思って頂いてうれしいです」

茶々丸はもじもじとしながら答える。反則級の可愛いさだ。あゝ、茶々丸には話しておこうかな。

「茶々丸だけに学園の停電時について話したいことがあるんだけどいいかな？ あ、これエヴァに話さないでね」

「私だけに……ですか？」

「そう。エヴァに内緒の話だ」

「わかりました。マスターには言いません」

コクリと頷き、はつきりとそう約束してくれた。まあ、仮にバラされても決行することには変わりはない。

「じゃあ言つぞ。時に するんだけど って訳じゃないから安心してくれ」

周りに聞こえない程度の声で話す。茶々丸はそれを懸命に聞いていた。

「そうですね。話してくれてありがとうございます」「納得したようですね。これでよしと。」

「どづいづことなんだ。レン」

「あ、マスター」

エヴァがやって来て、俺の隣の席に座る。何故か不満そうな顔をしていた。まさか、聞かれたのか？

「昨日のジジイが桜通りの件を聞いてきたことだ。そう仕向けたのはお前だろう？」

あ、そっちな。そっちな昨日、面倒だから無視してたな。あ、説明すんの面倒くせえ。無視でいいや。

「なんのことがさっぱりわからないな。」

「白々しく嘘をつきおって。」

「細かいこと気にすんな。ホレ、コーヒー。」

エヴァに飲みかけのコーヒーを渡す。ちょっと砂糖を入れすぎて俺でも飲めない味になっているが。

「ん？ いただきます」

エヴァは頬を赤く染めながら飲み始めた。しかし、数秒も経たないうちに顔をしかめた。

「お前はいつたい砂糖を何本入れたんだ？ コーヒーがゲル状になっているんだが……」

「30本くらいかな。 エヴァは甘いのが好きだから飲めるだろう？」

「これは無理だ」

「茶々丸、どっか行こうぜ」

「え？ しかし、マスターは……あっ！」

エヴァを無視して茶々丸の手を引っ張り、連れ出す。

「ま、待て！ 私を置いていくな！」

置いていかれたエヴァが慌てて、付いてきた。よし、今日はたっぷりとからかってやろう。

この日はエヴァをからかいつつ、茶々丸と散策を楽しんだ。

……翌日

「なんでコイツ風邪なんかひくんだろ？」

朝、エヴァが上から降りて来ないので見に行ったら風邪に花粉症を患って寝込んでいた。お前は本当に吸血鬼なのか？

「ん？ レンか……。大丈夫だしだるいだけだ」

「息を切らしながら言われても説得力ないぞ。今日は休め」

「お前は行くんだろう？ だったら私も行くさ」

そう言ってベットから起き上がり歩こうとする。しかし、体がふらふらと左右へと揺れ足元が不安定だ。

なんでそこまでして俺と行きたいのかねえ？ 仕方ないな

「俺も休むから安静しろ」

「いてくれるのか？」

「側にいるから休めよ」

「分かった」

側にいると言つ言葉を聞き、安心したのか力が抜けてその場で崩れ落ちそうになる。レントはすんでのところで支え、エヴァを抱えてベットに降ろす。

「レン様。マスターの具合は？」

茶々丸が上に上がって来て、エヴァの具合を聞いて来た。

「見ての通り風邪だな。後、花粉症もだ」

「そうですね。なら、私は大学の病院から薬を貰って来ますので、その間をマスターをお願いします」

「わかった。じゃあ気をつけて行けよ？」

「は、はい。では行って参ります」

茶々丸は少し嬉しそうな顔をして出かけて行った。レントは学園に連絡し、エヴァの側に居続けた。

「ふう、緊張するなあ」

ネギはエヴァとレントに果たし状を渡すために訪問しに来たが少し緊張している。

まさか、レンさんが父さんの仲間だなんてびっくりしたなあ。

一昨日、ネギはカモがまほネットで調べた情報によりレントが父親の仲間であると知ったのだ。

「あのー……こんにちはー。担任のネギですけどー家庭訪問に来ましたー」

呼び鈴を鳴らして見たが、誰か出てくる気配はしない。

「誰かいませんかー」

ノブを捻るとどうやら空いているようだ。ネギは恐る恐ると家の中に入る。

「アアアアアーッ！！ 死ンダッ！ テメーノセイダ。 ドウシテクレンダ!?」

「に、人形が喋ったーっ!?」



家に入るなり、小さな人形に怒鳴られた。ネギにとっては怒鳴られた内容よりも人形が喋ったことの方に驚きを隠せない。

「うるせえよっ！ 静かにしろってのがわかんねえのか？ チャチヤゼロ！」

その騒ぎを聞きつけたのか二階から降りて来た。

「後少シデクリア出来タノニヨー。腹立ツゼ」

「まあ、気持ちわかるがな……根気よく頑張れよ」

「クソッ！ 理不尽ダ……」

レントに諭され、とほとほとテレビ前に歩む。そして、何事も無かったかのようにゲームを再開する。

「で、ネギは何か用か？」

自分の方に向きレントが聞いてきた。

「そ、そのエヴァンジェリンさんとレンさんに果たし状を持ってきたんです」

懐から手書きの果たし状を取り出し、レントに突きつける。

「そりゃ、どうも」

あ、あれ？ 軽いなあ

本ではもっと深刻そうな顔をしてやり取りすると書いてあったのに。

「え、えと、エヴァンジェリンさんは……？」

どこにいるのだろうか？ 家主ならば真っ先に現れてもいいはずだ。

「風邪で寝込んでるよ」

「ま、またそんな……不老かつ不死である彼女が風邪なんかひくわけないでしょう」

「そのとおりだ」

声の主は階段のほうから聞こえた。そこには手すりに腰をかけているエヴァンジェリンの姿があった。

「よく1人で来たな。大人しくやられにでも来たか？」

「ち、違います！ 果たし状を渡しに来たんです！ 僕ともう一度勝負してくださいっ」

果たし状を広げ、エヴァに見せつける。エヴァはというと呆れたような顔つきで見ていた。

「それにサボらずに学校に来てくださいっ。このままだと卒業できませんよっ」

「別に退学すればいいだけの話だろうが」

「ダメですっ。卒業してくださいっ」

「エヴァ、お前まだ熱があるだろう？ ベットに戻れ」

レントは話が中々治まらないと思ったのかエヴァの腕を引っ張り、ベットに戻らせようとする。

「何大丈夫」

そう言いかけたところでふらりとし、気を失った。

「言わんこっちゃっない」

。ネギ看病するの手伝ってくんない？」

え、どういことだろ。敵同士のはずなのに……？

「は、はい。わかりました」

ネギは承諾し、エヴァを抱えたレントの後を追って二階へと上がった。

「ネギ、そのクローゼットからエヴァの下着出してくんない？」

「へっ？ な、な、なんでですか!？」

予想だもしない言葉を聞き、すつとんきような声を挙げた。

「？ 汗で体が冷えてるからな着替えさせるんだけど……」

「そ、そうですね」

自分の心を納得させつつクローゼットを開ける。

うわ。エヴァンジェリンさんには似合わないスゴイ下着だなあ。

ネギはあまり見ないようにして取り出し、レントに渡す。レントは慣れた様子でエヴァの下着を着替えさせた。

「こんなもんか……」

どうやら、終わったらしい

「あの、レンさんは父さんの仲間だったですよね？」

ネギはレントに父の仲間だったか確認をとる。もしそうであるならば、父のことについて教えてもらおうと思った。

「あちゃー。バレたか」

「でしたら父さんの事について教えて」

「俺に勝てたらいいよ」

やっぱり、そう簡単には教えてくれないか……

「その言葉は本当ですか？」

「ああ、本当だよ。絶対に無理だけどね」

むっ、なんかカチンとくる言い方だなあ。

「やめる……サウザンドマスター……」

ベットに横たわっているエヴマがうめくよつに呟く。

もしかして、父さんに関する夢を見てるんじゃない……？覗いてみたいけどなあ

「フフ、よかったなあ、エヴァがナギの夢を見ていて。少し覗けるぜ」

「ええええっ！？ いいんですか？」

「何、知りたく無いの？」

そんな訳がない。父さん  
の人柄というのを見てみたい。

「知りたいです！」

ネギの素直な言葉をレントは満足そうに見る。

「じゃ、行きますか。夢の妖精 女王メイクよ 彼の扉を開き 我  
らを夢へといざなえ」

レントが呪文を紡いで、二人はエヴァの夢の中へと入り込む。海岸

を舞台にナギと見られる男とチャチャゼロを引き連れた大人なエヴァが対峙している。

『これは昔のエヴァンジェリンさん……!?!?』

『あーそれ、幻術だよ』

『へえ〜そうなんですか』

「ついに追いつめたぞ『千の呪文の男』この極東の島国だな。今日こそ貴様を打ち倒し……『混沌王』の居場所を教えてもらおうぞ」

『混沌王ってレンさんですよな? いったい、エヴァンジェリンさんに何をしたんですか?』

『秘密だ』

どうやら教えてくれないようだ。

「奴のことを聞かれても言う訳が無い。……諦める  
何度挑もうと俺には勝てん」



夕陽に照らされながらフード男の顔がちらちらと見える。

『この人がサウザンドマスター!? カッコイイ〜っ!』

『顔は良いけどね……まあ、剥がれると思っけどね』

「パートナーもない魔法使いに何ができる!? 行くぞ。チャチャゼロ!」

「アイサー。御主人」

エヴァのかけ声によってチャチャゼロはナギに向かって行く。

「えーと。この辺だっけ……」

ナギはというと杖で何やら地面をつついてる。

「フ……遅いわ若造! 私の勝ちだ」

数秒も経たないうちにナギの目前にエヴァ達が迫り、攻撃されようとしていた。

『と、父さーん！?』

だが、あと一歩というところでエヴァ達の姿が消え去った……いや、下に落とされた。

「アブツ。なっ……これは!？」

「落トシ穴ダ。御主人」

「見りゃわかるッ」

ナギは魔法使いにあるまじき落とし穴という方法を取ったのだ。そんな古典的な罠にかかるのはどうかと思うが。

「ふははは」

落とし穴の中には水が張られており、ナギはそこにネギやらニンニクやらを入れていく。

「なアツ!? 私の嫌いなニンニクやネギ〜!?」

「い……いやあ〜っ。やめろ〜っ」

悲痛な悲鳴を挙げる。死にはしないがどうしてもエヴァは苦手なのだ。

「フフ、お前の苦手な物は全て調査済みよ」

「あつっっ」

「アアツ御主人ノ幻術解ケタ!!」

ぼんつと軽い音と共に現在のエヴァの姿となった。

「ひ、ひきょう者。き、貴様は『千の呪文の男』だろ魔法使いなら魔法で勝負しろーっ!」

「やなこつた。俺は本当は5、6個しか魔法知らねーんだよ」

「魔法学校も中退だ。恐れ入ったかコラ」

ナギはフードを脱ぎ、自信たっぷりに答える。カッコよく聞こえるが言っていることは情けないことだ。

「なっ……………」

『えっ……………本当ですか!?!』

『本当だ。呪文唱える時もメモを見ながらやってた』

「お、おいサウンドマスター!! 奴の行方なんで教えてくれない!?!」

「ああ? レンの行く場所なんて知らねえって言っているだろうが。しかも、音信不通だしよー」

「私はアイツに会わなきゃいけないんだ」

「あれだ。悪事から足を洗えば会えると思うぞ」

ナギは思いついたことを適当に述べる。

「嘘つけッ!!」

「あゝ、面倒くせえ。この呪文だったかな？ えーとマンマンテロ  
テロ……」

「私を無視して、テキトーに呪文を使うなバカー！ たっ、助けて  
誰か助けてーっ」

膨大な魔力を込め、魔法書を見ながら唱える。そんな姿に不安を覚  
えたエヴァは助けを呼ぶが当然の如く誰も来るはずがない。

「あつ。やめッ……ひどいぞサウザンドマスター」

「登校地獄!!」

「いやぁあーっ!!」

エヴァの悲痛の叫び声と共に場面が崩れて行く。本人の目が覚める  
ためこの世界は終わりを告げる。

『げっ！ 夢が途切れる!?!』

『えっ？ へっ？』

ネギは何も分からぬまま、強制的にシャットアウトされた。

……

……

…

「うあああーっ！ ハアハア。夢か……」

嫌な汗をかき、エヴァは起き上がった。

「まったくもって忌々しい夢だ」

ぶつぶつと呟き、ベッドの傍らに目を向けるとネギが杖を持って無防備に眠っている。

「これでは殺れと言っているようなものだろう」

ん？ 杖……？ まさか……見られた！？

「責様っ！ 私の夢を覗いたな！？」

「ふへっ？ あれ？ あわわわっ。エヴァンジェリンさんこれは違うんです！ えっとその……」

ネギは起き上がり、目の前を見て今状況を理解した。

最悪だ。こんな奴に私の……記憶を……

「殺す！ お前ら親子揃って、殺してやる！？」

「うわーん」

片っ端から破壊するエヴァ、逃げ惑うネギで部屋の中は騒がしくなる。

「ゲッドラック」

レントはというと既に外に避難し、その状況を傍観するだけだった。

この状況は2時間くらい続き、レントが説得したことにより無事に  
に終結したのであった。



第十八話 月下の決闘（前書き）

PVが50万を越えていました。大感謝です！！

今回、遅くなりましたがどうぞご覧下さい。

## 第十八話 月下の決闘

「ここに居たのか」

学園内一斉停電まで後、三時間を切ったところで、レントは屋上に居たエヴァに話しかける。エヴァの傍らには茶々丸が直立不動でいる。

「何か用か？」

「ああ。ジジイからの頼みでな今回負けてくんない？」

「誇りある悪の私かなぜ負けなければならん？ その話は断るぞ」

無い胸を大きく張り、誰であろうと手加減をしないのは当然だ  
というような顔を見せる。エヴァがわざと負けるといつのを拒む  
のは目に見えていた。

このまま行けば真祖たるエヴァが赤子の手をひねるような感覚でネ  
ギに勝つだろう。

「そう言うと思ったよ。ま、軽くやってくれ」

「もちろんだ。貴様は奴の悪あがきを楽しんで観ているがいい」

「楽しみに待ってるよ。あ、そうそう。もし負けたら罰ゲームな」

「ふ、よからう。私が勝った場合は私の言うことを聞けよ？」

「いいぜ。この交渉は成立だな」

「ククク。結果が分かっているのに賭けに乗るとは何だ？ 期待で  
もしているのか？」

「ニヤニヤとしながら問いかけてくる。これで下準備が済み条件が揃  
った。」

「どうだろうな。さて、俺は別の場所で待機しているよ」

「レンを手に入れてあんなことやそんなことやったりして  
フフフフ」

顔を抱え、いやんいやんと妄想モードに入ってしまったって聞いちゃい  
ない。そんなエヴァ達に背を背けて屋上を立ち去った。

午後8時 学園内の電気が止められる合図の放送が流れた。その数秒後に一斉に停電し、闇が学園、全てを包み込む。空は不吉そうな色をした雲がまばらに浮いており、その雲間から満月が妖しく輝く。

威風堂々とそびえ立つ世界樹前広場で露出の高い黒い衣装を身に纏う女性が佇んでいる。その姿は男の性欲を掻き立てる程の艶やかさだ。言葉にするならば『夜の女王』といったところだろうか。

「マスター。只今、戻りました」

メイド服を着た茶々丸が艶やかな女性 幻術で大人の姿に見せているエヴァンジェリンのもとへと降り立つ。

「ああ。ご苦労だった」

「ありがとうございます」

茶々丸に学園結界の予備電力にハッキングをお願いしたおかげで、停電時間が延びた。これでしばらく時間を気にすることなく坊やと

全力でやり合える。佐々木を使って坊やを呼び出したから、もうじきに来るはず。

この勝負は負けるということは絶対に考えられない。レントとの賭けがある以上なおさらだ。さっさと勝ってレントを手に入れ、永遠に自分の傍らに居させる。そう考えただけでも背筋がゾクゾクする。

「エヴァンジェリンさん!!」

杖にまたがるネギが上空から降り立つ。風によりローブがめくれる。めくれたローブからちらほらと魔法銃やら剣のマジックアイテムが見える。

「ようやく来たか」

「あ、あなたは……!?!? どなたですか!?!?」

ネギは目の前にいる女性をエヴァと分からず、問いかける。予想だもしない一声にエヴァは思わず、ずっこけてしまった。

「私だ。私……ッ」

「あーっ」

仕方なしに幻術を解く。普段見慣れた少女　エヴァの姿を見てや  
っと認識する。

親子揃って本当に腹立つ性格だな……

「一人で来るとは見上げた勇氣だな。さあ、魔法使い同士での決闘  
を始めようじゃないか」

「いいでしょう。でもこの勝負は僕が勝たせてもらいます。」

「雑魚がキャンキャンと吠えおつて。茶々丸！」

「ハイ」

茶々丸は主に呼ばれ、何をすればよいか瞬時に理解する。ネギに向  
けて駆け出す。その後ろではエヴァが呪文の詠唱を始める。

「失礼します。ネギ先生」

茶々丸が優先すべきことはネギのローブに隠し持っているマジック

アイテムの排除だ。茶々丸はネギのアゴに目掛けて下から殴り掛かる。右に避けられたが、その時にロープの中のアイテムを片方で強引にはぎ取り、捨てる。

「ああっ!？ 僕のコレクションg」魔法の射手 連弾・氷の1  
7矢!」 「ッ!」

避けた先に向けて氷矢が交差しながらネギを切り裂こうとする。鋭利な氷矢をくれば、肉を抉られるだろう。それを防ぐためにネギは懐から媒体となるべき、液体を投げつける。

「風障壁!」

呪文を唱え、媒体を通して障壁を形成し、氷矢を防ぐ。防ぎ切った直後に茶々丸にネギの腹に蹴りがヒットし後ろに吹っ飛ばす。

「クッ……」

たかが一撃されどそのダメージは大きい。本格的な戦闘をしたことの無いネギの戦闘技術は0に等しい。そのため、最強の幻想種たるエヴァに勝つことなど不可能なのだ。

「休ませんぞ。『氷爆!』」

ネギに目掛けて爆発が起こる。ネギは杖に乗り、巧みに避ける。爆発した中心は軽くへこんだ跡ができていた。

「ほう、なかなかしぶといなあ」

ネギは杖にまたがったまま上空へと逃げる。ネギはエヴァ達に向けて魔法銃を放つ。だが、それは障壁によっていとも簡単に弾かれた。

「ふはははっ。どこに逃げる気だ？」

エヴァ達もネギを追撃すべき上空に上がり追いかける。全力で逃げるネギをエヴァ達は首を真綿で絞められるようにじわじわと追い詰める。

「マスター。残り時間は142分です」

「そろそろ決着を着けるか。『こおる大地』」

硬いアスファルトに氷の槍がネギに次々と襲いかかる。懸命にネギは避けるが右腕に食らい、地面に落ちる。右腕からは鮮血が流れる出ている。



「ほう、学園の端に逃げるとは考えたじゃないか？」

辺りを見るといつの間にもやら学園の端である橋のところに来ていた。ネギは登校地獄に掛かっているエヴァならば、出ることは出来ないと考えたのだろう。

「だがな……残念ながら呪いはすでに解けているんだよ」

「なっ……!？」

「ふふふ……これで私の勝ちだ」

これでアイツが手に入る。やっと、待ち望んだ物が永遠に私の物に！

起き上がれないネギを自らの手で気絶させようと歩みよる。あと、もう一步という距離で片足を踏み込む。刹那、地面に呪式が起動し、エヴァ達を拘束する。

「これは捕縛結果か……」

「や……やったーっ。エへへへ。ひっかかりましたね、エヴァンジェリンさん」

エヴァ達が罫に掛かったと同時に立ち上がり喜び声を挙げるネギ。

「もう動けませんよ。エヴァンジェリンさんこれで僕の勝ちです！  
さあ、大人しく観念して悪いことも、もうやめてくださいね！」

「ふ……アハ、アハハハ！」

こんな罫に掛かった程度で勝った気では、可笑しくてたまらない。

「な、何が可笑しいんですか！？ ご存知のようにこの結界にハマれば、簡単には抜け出れないですよっ」

そう、いかなる者であろうと掛かれば簡単には抜け出せない。だが全ての事柄には例外というのがある。

「貴様は忘れているぞ？ 私は高位の龍と並ぶ『幻想種』だぞ」

エヴァは魔力を放出し、強引に解いていく。結界は数秒も経たないうちに碎け散った。

「なっ……えええええっ！」

「貴様は吸血鬼の真祖を馬鹿にしているしか思えないな」

「うっつ……ラス・テル　あうっ」

ネギは呪文を紡ごうとする。だが、茶々丸が杖を奪い取り中断させられた。その杖はエヴァへと手渡される。

「むかつく野郎の杖か……」

その杖を忌々しそうに見つめ、橋の外へ投げ捨てた。

「ああっ！」

その光景を見てネギは驚愕した。

「うわーん。ひどいー。あれは僕の何よりも大切な杖……」

ネギは杖が重力に従って水の底へと沈んでいく姿を涙ぐみながら見

つめる。

「ひ、ひどいですよエヴァさん。本当なら僕が勝ってたのにー。うあーんっ。一對一でもう一回勝負してください〜っ」

ネギは泣きながらエヴァにがむしやらに殴ろうとする。しかし、茶々丸に頭を押さえられ、空回りする。

なんて情けない奴だ……エヴァの心の底から苛立ちがふつつと沸き上がる。とうとう、我慢の限界が来てネギの頬に平手打ちをする。ネギはよろけて地面に座り込む。

「うるさいっ！ 闘いに二度目などあるか！！ 負ければ死ぬだけだ！！」

「う……」

大体の西欧の決闘はどちらかが死ぬまで続けられる。すなわち、二度目は無いのだ。

「ま、真祖を相手によくやったよ。一人で来たのは間違いだったがな……」

エヴァは敗者であるネギの無謀を称える。そして、手をかざし、ゆつくりとネギへと近づいた。

「さあ、気絶してもらおうか」

魔力を込め、ネギを気絶させようとした時だった。学園の方から人が声を挙げて、爆走して来る。

「コラー！ーッ。待ちなさいーっ」

「神楽坂明日奈か。茶々丸、やれ」

「ハイ」

茶々丸はアスナを止めるために向かう。

「カモ！ー！！」

「合点。姐さん」

アスナは肩に乗せているカモに呼びかける。それに応じてカモは肩から飛び、

「オコジョフラーッシュー!!」

マグネシウムに火を付け、辺りが眩しい光で覆われる。茶々丸の視界が一瞬、閉ざされた。

「ごめん、茶々丸さん」

その隙を突き、アスナは茶々丸の横をすり抜け、エヴァに飛び蹴りを仕掛けた。

「ちィッ！ 人間風情が！」

エヴァは障壁を張る。だが、忘れていることがある。彼女 神楽  
坂明日奈は『魔法無効化能力者』であることを……

「あぶるぱあッ」

当然のように障壁は紙のように突き破られ、エヴァの左頬に蹴りが

炸裂する。それによって後方に吹き飛ばされるが勢いを殺し、倒れるのを耐えた。

「忘れてた。アイツは特殊だったな……」

あれ？」

そう呟き、辺りを見回すと、

「くっ……どこだ!？」

アスナが見当たらなかった。いや、それだけでは無く、ネギまでいなくなった。

「申し訳ありません。マスター」

「ええい、どこへ行った!？」

坊やを気絶させないと、レンが手に入らないじゃないか!？ ああ  
あつ! 神楽坂め、余計なマネをしおって。絶対に探しだしてやる。

「マスター、鼻血が……」

エヴァはぼたぼたと鼻から流れる血を気にとめることなく、ネギ達

を血まなこになって探し続ける。

そんな様子を離れた所で遠見の魔法で鑑賞する、三人の姿があった。

「クケケケ、御主人ニ、トテモ愛サレテルナ」

「ホント、面倒な奴だよ」

レントは、ハハハと軽く笑う。その笑いを見て、刹那は声を張り上げる。

「ハハハ、じゃないですよ！　なんでそんな賭けなんかしたんですか!?!」

「え、だって、そうしないとアイツ本気ださねえし」

「だからと言って」

「なんで刹那が怒るんだよ?」

「そ、それは……その……」



何も言わず、もじもじとする刹那。

「オ、モシカシテ、才前」

「わーわーわー」

刹那が顔を真っ赤にさせ、チャチャゼロが何か言つのを遮る。

「ま、今回、エヴァは絶対に勝てないから、賭けは俺が勝つぞ。」

「ハ？ ドウイウコトダ？」

「えっ、本当ですか!？」

チャチャゼロは疑問の声を刹那は喜びを含んだ声で聞く。

「うん」

「そ、その根拠は？」

「教えません！」

「レ、レントさ〜ん」

刹那は懇願するような目つきをする。レントはそんな彼女の姿を意地悪そうな笑みが月に照らされる。

学園内の電気が復旧するまで後、87分。この闘いはクライマックスに向かって行く。

第十九話 裏切り……？いやいや、計画通りさ（前書き）

ユニークが10万を突破しました。

いや〜ありがとうございます。ゴールデンウィーク中に最低でも後、二話投稿したいと思っています。

これからもよろしく願います。

第十九話 裏切り……？いやいや、計画通りさ

チツ、奴らはいったいどこにいるんだ！？

エヴァは橋の上でネギ達を探すが未だに見つからないまま、数分経っている。

「むっ…… そこか！？」

建物の角の方から光が満ち溢れている。その光は現実には存在しない幻想の光だ。光が失せた後、角からネギ、アスナが駆けて出てくる。

「ふふっ…… どうした、ぼーや？ お姉ちゃんが助けに来てくれてホッと一息か……？」

「うぐっ……」

「何言ってるのよ！ これで2対2の正々堂々互角の勝負でしょう！？」

「互角……？ アハハハ。最強の魔法使いに勝つとでも言っているのか？ 面白い冗談だな」

「そんなのやってみなきゃっ、わかんないじゃないッ!？」  
「ほう……」

なかなか良い目をするじゃないか。フツ、面白い。全力で叩き潰してやるよ。

幼い正義を抱く魔法使いと自らを悪と称する魔法使い。互いに警戒しながら対峙する。物音一つもしない程、辺りが静かになる。

「その勝負に俺も参戦するぜ」

「「「なっ!？」」「」」

レンが空から中央に降り立った。何なんだ？ 手を出さないはずじゃなかったのか？

「何を言っている？ 約束が違うぞ？」

「約束なんてしてないじゃん。『魔法の射手 闇の1矢』」

私の方に向けて闇矢を放ってきた。戸惑いながらそれを防ぐ。

「いったい、何のつもりだ？」

「決まってんじゃない。暇つぶしだ」

いつものような笑みでそういい放った。許せん……怒りがふつつつと沸き上がる。

「貴様ツ、最初からそのつもりで…… 賭けの話も嘘なのかッ!？」

「賭けは本当だ。ただし、俺に勝てたらな!」

そう言った瞬間、こちらに向かって来る。茶々丸が相手をするが簡単に突破され、私の目の前だ。

「どりゃああああ!」

「チイツ……」

レントは次々と打撃攻撃を仕掛けて来る。だが、エヴァも負けずに仕掛けるが避けられ、後ろに下がった。

「ほらほら、ボサツとすんな『魔法の射手 炎の10矢』」

「わわっ!？」 『ラス・テルマ・スキル マギステル 光の精

霊10柱 魔法の射手 連弾・光の10矢!』」

ネギは練習用の杖を取り出し、呪文を唱えた。レントが放った炎矢を光矢と相殺し、かろうじて防ぐ。

どうする……ぼーやの相手をしつつ、レンの相手は出来ない。クソッ! 不本意だが仕方ないッ!!

「ぼーや、協力しろっ!」

「えっ!？ は、はいっ!」

瞬時に反応し、応えてくれた。

「ちょっ、ちょっと、ネギ。何言ってるの!？」

「隙だらけになってるぞ? 生卵アタックッ!」

「いやーッ!!」

「ア、アスナさーんッ!？」

レントはアスナにどこから取り出した生卵を投げつける。生卵は全弾命中し、たちまちアスナはべとべとになった。

「最悪ッ、中にも入ったし!」

アスナはレントに蹴り掛かるが……それは空を切った。そして、アスナの顔に生クリームを盛られた紙皿が投げつけられた。

「うぶっ。　　うえっ」

顔に付いた生クリームを必死に手で落とす。

ジー、カシャッ。レントがアスナを携帯で撮る。

「うん、良い表情だ」

「何、撮ってんのよーッ!？」



「引つ込めッ、神楽坂。ぼーや、合わせろッ」

「ハ、ハイッ！」

遠くで、エヴァとネギが  
合わせて呪文を詠唱する。

「魔法の射手 光（闇）の27（112）矢」

合計、139矢が交差しながら、レントに襲いかかる。

「ジャック直伝、気合い防御！」

レントは気を高め、矢を全て受ける。矢が着弾した影響で煙が上がって視界が遮られる。

これくらいじゃ足りんな。オーバーキル位じゃないと奴は止まらんな。

「リク・ラクラ・ラック ライラック」

続けて、魔法を行使しようとするど、

「おろし生ニンニク〜」

背後から気の抜けた声が耳元に入ってくる。その声に思わず反応し、振り向くとチューブのおろし生ニンニクを二本持つレンの姿を視認した。

「なっ!? いつの」

「悶え苦しめえええええっ」

レンはエヴァの口の中にチューブを入れて握りつぶす。エヴァの口の中には大量のおろしニンニクが注ぎ込まれる。

「ン~~~~ッ!!! ゲホツゴホツ うええ」

「それではまた明日、シーユアゲイン『眠りの霧』」

なっ…………… まずいッ!

おろしニンニクを吐き出している最中に仕掛けて来たため対応出来ず、術を食らう。

意識がもつろつとし、まぶたが重くなる。卑怯だ。こんなやり方なぞ絶対に認める

俺の目の前でエヴァがどさりと倒れ、すやすやと眠っている。うん、満足だ。

「さーて、帰るかな。茶々丸」

「はい」

「ちょっと待ってください!？」

エヴァの襟首を掴んで帰ろうとした所でネギに呼び止められた。

「何だよ? ゲームは終了したぞ?」

「どづいづこと何ですか？」

「そうよ、結局何がしたかった訳なのよ」

ネギとアスナが疑問をぶつけてくる。

「前も言ったように暇つぶしだ。後、それとネギの力が見たかっただけだ。ま、とんだ期待外れだったな。サウザンドマスターは結構強かったのにな」

「そ、そうだった。レンさん、決闘です。僕が勝ったら父さんの事を教えてもらいますよ」

は？ 馬鹿か？ コイツは……

「お前、弱いからヤダ。と、言うわけで決闘を受けません」

前に貰った決闘状を取り出し、ビリビリに破き捨てた。

「ええッ！ 何で」

「うるせえ!」

うざいので、ネギの懐に瞬動で潜り込む。そして、みぞおちに蹴りを入れ、首に手刀を入れて気絶させた。

「アニキ!」

「レン! 何してんのよ!?!」

「手っ取り早く、力の差を見せたただけだ。じゃ、また来週」

「待ちなさいよーっ!」

笑いながら、逃げるのみだ。あーあ、明日、エヴァをどっやってなだめようかな?

「レン、昨日のは無しだ!」

「や、でも、賭けは俺が勝ったから罰ゲームだな」

「イヤだ。私は絶対認めん」

現在、カフェにいるのだが、エヴァは朝から不機嫌だ。おかげで隣にいる茶々丸が心配そうに目を向けて来る。

「ただ、全授業にちゃんと出ろっっていう罰ゲームだけ。軽いもんだろ？」

「……パクティオーだ」

と、微かにボソリと呟いた。おそらく、交換条件なのだろう。

「いいけど、俺がマスターな」

従者の呼び出し召喚が嫌なんだよな。その話聞いてパクティオーで従者に絶対なるもんかって思ったしな。

「私がマスターに決まっているだろうが」

「じゃあ、賭けはいいや」

お前がマスターだと？ 断固拒否する。それだったら、茶々丸がマスターの方がいい。優しいしね。

「あつそ、勝手しろ」

不機嫌だったのがさらには不機嫌になっていく。めんどくさい奴だな。

「あ、こんにちは。レンさんにエヴァンジェリンさん」

「ん？ ネギにアスナに獣か」

ネギ達が飲み物を持ってこちらの席にやって来た。

「カモつすよ。カモミールっす」

「そっかい。覚えておくよ」

オコジヨ妖精の名前はカモミールと言っのか……変な名前だよな。

「フン！ 気安く挨拶を交わす仲になったつもりはないぞ」

「こんにちは。ネギ先生、アスナさん」

エヴァは冷たくあしらった。それに比べて茶々丸はちゃんと挨拶している。うんいい子だ茶々丸は……

「へえ、昨日は協力してたの？」

「うるさい！」

昨日の事を思い出し、突っ込んでみると、顔を赤くし、怒鳴ってきた。

「エヴァンジェリンとレンって仲良いわね」

アスナが顔をニマニマさせながらそう言ってきた。まあ、似た者同士だからか、安心できるんだろうな。

だが、そんなことを言うのは恥ずかしいので別の言い方にしよう。

「ああ、コイツを馬鹿にするのは楽しいからな」



「貴様つ、殺してやるッ！」

予想通りにエヴァはキレ始めた。うおっと、あぶねえ飲み物を投げて来やがった。

「マスター、落ち着いて下さい」

「止めるなっ、茶々丸！」

今にも襲いかかって来そうなエヴァを茶々丸が取り押さえる。さて、コイツは無視しよう。

「そっいや、もうすぐ修学旅行だな。確か京都だっけ？」

「え、そうなんですか？」

ネギは首を傾げる。クラスの旅行先を知らないのは教師としてはどうかと思うがな。

「クラスの総意で決まったのよ」

アスナが補足を加えてきた。もしかして、ネギに内緒で決めていたとかか？

「運がいいな。ネギ、京都にはサウザンドマスターの隠れ家があるぞ」

隠れ家と言うのは詠春から聞いた。あいつ等、俺抜きで京都を観光してたらしい。なんか、仲間外れみたいで妬ましく思う。

「ええっ！ 本当ですか！？ 楽しみだな」

ナギの手がかりがあることを知ってか年相応に喜び始めた。なんとなくか、アイツの事でこんなに喜ぶとは正直、キメエ。

「……………まだまだ子供だな」

「そうですねー」

俺の言葉にアスナも同意する。修学旅行が無事に行えるとは思えないがな。関西呪術協会とかがあるからな……

ま、どうにかなるだろう。それよりエヴァを静めさせなきゃだ。そ

の後、エヴァの機嫌を直すにかなり時間がかかった。

## 第二十話 さあ、修学旅行の開幕だ

「4〜6人くらいのグループを組んだら、班長は紙に班員を書いて俺んところに持って来いよ〜」

『はい』

生徒達が返事をした後、教室内は一気に騒がしくなる。今日のホームルームは来週の修学旅行の班編成だ。

大抵はこういう時間は担任であるネギが担当だが、さっき、学園長室に呼ばれたため俺が代理をしている。あんま、仕事を増やさないで欲しいよなあ。

京都に行ったら、何すっかな。有名な場所は前にほとんど回ったから、はつきり言って暇になりそうだ。願わくば何か起こってくれるといいんだが……

「レン君、決まったよ」

「ん、了解。残り時間は適当に潰しとけ」

「もちろん。言われずともそうしますよ〜」

一番目は柿崎が紙を持って来た。メンバーは、柿崎、釘宮、椎名

に鳴滝姉妹か。鳴滝姉妹は長瀬といっしょかと思っただがな。

「私達も決まったアルよ」

「お前が班長か……」

「何ネ？ その目は？」

「いや、何でもない」

馬鹿が班長で良いのか？ あゝ、でも大丈夫か。メンバー構成は古、春日、超、長瀬、葉加瀬、四葉だ。天才が二人もいるから安心だ。

「レント先生、できましたわ」

「委員長は予想通り、班長か」

「クラスのリーダーとして当然ですわ」

と、にこやかに微笑む、シヨタコン。中学生でシヨタコンってある意味レアだね……

三組目のメンバーは雪広、朝倉、那波、長谷川村上の一般人グループだ。いや、でも長谷川は結構、勘がよさそうなんだよな。那波も一般人にしては強いし。

「レーン君！ 出来上がったよん」

「あたし達もできたわよ」

「おう」

明石とアスナがメンバー表を持ってきた。明石の班は和泉、大河内、佐々木、龍宮でアスナの班は綾瀬、このか、早乙女、宮崎と。

残りの奴らは何しているんだ？ まだ来ない奴らを見てみると……

刹那……目を閉じて待機中

ザジ……鳥と戯れている

エヴァ……爆睡中

茶々丸……エヴァを起こそうとしている

うん、茶々丸はいいとして残りは何やってんの？ あゝめんどくさいな。

「第6班、班長は刹那、メンバーはエヴァ、茶々丸、ザジ。分かったか？」

こちらで編成し、確認を取る。俺の声に応じて、ザジと茶々丸と

刹那がコクリと頷いた。残る馬鹿一人は相変わらず寝ているようだ。もういいや。ほっとこ。

「じゃあ、来週は修学旅行だからな。遅れるなよ？」  
『はーいー！』

「では、解散ッ！！」

そう言って、教室から出ていく。さてさて、修学旅行はどつなることやら。

### 修学旅行当日in大宮駅

まだ、時間が早いというのに駅構内はすでに一般利用客の足音やらで喧騒に包まれている。大宮駅に着いてから約三時間位待っているのだがはつきり言って暇で眠い。それにプラス、

「何、腑抜けた顔をしている。京都へ行くのだぞ！」

「そのセリフは三十二回も聞いたよ」

エヴァのテンションが異様に高くてウザい。朝なんか四時に起こされてすぐさま出発だもん。

列車の中で寝ようにも隣で清水寺がどうの銀閣寺がどうのと話しかけて来るから、うるさくて眠れねえ。頼むから俺に睡眠時間をくれ！

「レン様、大丈夫ですか？」

茶々丸がこちらを気づかってくれる。ああ、優しさが染みる。

「茶々丸。俺の従者になつてくれ」

「え、え、え、えと、そのそれは……」

顔を赤くしながら、指をもじもじさせる茶々丸。その動作は萌えるぜ。

「おい、茶々丸は私の従者だ。お前なんかに渡さんぞ」

「えー。小学生にはもったいない人材だよ」

「黙れッ！」



エヴァは俺の腹を殴ってきた。本来ならば、魔力が込もっているかなりの痛みを生ずるが痛みは全く感じない。

何故か？ 至極、簡単な話だ。詠春からエヴァを京都に入れさせるのは不安を感じるので断る、という要望があった。

だったら、魔力を封じればいいですよ？ という、こちらの要望を渋々受け入れた。ちなみに封印は俺が管理している。

「魔力を封じたら、ただの可愛い嬢ちゃんだよな」

皮肉を込めて言葉を贈ってやる。そして、返ってくるであろう怒声に備える。

「か、可愛い？ ほ、本当か？」

「あ、ああ」

微かに赤みを帯ながら聞き返してきた。あり？ そこに反応しますか。なんだか拍子抜けだ。

「それでは3Aから順に新幹線に乗って下さい」

しずな先生がクラスに呼びかける。それに応じて、生徒達も次々と乗り込む。当然、俺もだ。列車内でSHRをやって、京都に着くまで自由時間が訪れる。

「さあ、トランプでもやろう」

相変わらず異様に高いテンションで何処からかトランプを取り出すエヴァ。

「却下」

トランプ系のゲームは俺は必ず負けるのでやりたくない。

「異議は聞かん。ほら、茶々丸、桜咲、ザジ、ババ抜きをやるぞ。コラ、逃げるな、レン」

極意、逃げる！

しかし、技の発動に失敗した。

「チツ！ そんなに言っんならやっっちゃらあ」

「わかりました。マスター」

「は、はあ……」

「……………（コクッ）」

今、ここで激しい戦いの火蓋が切られた。敗者の汚名を着るのは誰なのか！ それは天のみぞ知る……

…………… 1時間半後

「うっうっうっ……………」

「すまない。こんなに弱いとは思わなかったんだ」

「レン様、余り、気にしない方が……………」

「そ、そうですね。たまたまですよ」

「……………（コクリ）」

これで26連敗だ。皆が慰めてくれるが全然癒されない。俺はトランプの神にでも呪われているのだろうか？

「チクチョーッ！」

「お、おい、レン」

あまりの悔しさに俺は一目散に敗走する。トランプなんか嫌いだ  
あああつ。

「先生、肉まん食つかネ？」

「頂きます、超」

超から肉まんを受け取り、頬張りながら、乗客席外に出る。うん、  
うめえ。さすがは超包子特製だ。超の経歴が怪しいけど……

だってねえ、ジジイに聞いたら未来人だって言うんだもん。信じ  
らんねえ。時を越える魔法なんて聞いたことないし。

「レントさん。大丈夫ですか？」

背後から声が掛けられた。この声は刹那だな。そう思いながら振  
り返れば、刹那の姿があった。

「ああ、肉まん、うまい」

「そ、そうですか」

なんだその目は？ 困ったような笑いは何なんだ？

「そういやさ、せつかくの修学旅行なんだ。このかと昔みたいに戻っちゃえよ」

「いえ。それは出来ません」

当然のように言葉が返ってくる。頑固な奴だな。だからこそ、関西の協会の過激派に少し情報を流してやった。これで何らかのアクションが起きるはず。

「そ、でも今回ばかりは無理矢理にでも、このかに関わって貰うから」

「困ります！ 私はただ、お嬢様をお守りできればそれだけでいいんです！」

それだと、刹那は将来になって後悔することだろう。少し、荒療治になるかもしれないがやるしかない。

「そんなこと言っても、もう既に賽は投げられたんだ。諦め」

『わあー！』

『お菓子がカエルにーっ』

『しずな先生が失神してるーっ!』

次々と拳がる悲鳴。どうやら何かあったみたいだ。

「ちよっくら、見てくるか」

「あ、ちよっと待っ」

刹那が何か言いたそうだったがどんな騒ぎなのかが気になる。

一気に駆け出し、車内を見回す。そこにはカエル、カエル、カエルの軍団。ゲコゲコと鳴きながらピョンピョン跳ねている。これは中々面白いな。

そこにいたカエル一匹を捕まえ、エヴァの方に目掛けて投げてる。

「ッ!? (言語化できない悲鳴)」

ビンゴ! カエルはエヴァの口の中に入った。そして、慌てて吐き出した。

「貴様、何のつもりで口の中に入れた？」

「いや、手が滑った」

「嘘つけ！ 狙ってやっただろ！？」

ハハハ、ほんの冗談だというのに。ん？ なんかザジが少し笑っているような気がするな。分かりづらいけど……

「あーーーーっ！」

大声がした方へ振り向くとネギが鳥になんか紙を奪われ、追いかけて行った。あの紙は何なんだ？

「聞いているのか！？ レン！」

「無論オムロン」

真面目な顔で素早く返す。

「ふざけおって……」

ま、俺には関係の無いことだよな。今はこっちが問題だ。エヴァ

はこめかみを押さえ、青筋を立てている。

どつちら、この四日間<sup>ど</sup>は退屈しないで済みそうだな。



第二十話 さあ、修学旅行の開幕だ（後書き）

後、一話。明日中に投稿できるかわからねえ。

進み具合はと言うと全然、書いていません。どうしましょう（汗）

誰か、某シューティングのメイドさんを連れてきてくれー！

第二十一話 旅行にハプニングはつきものだ(前書き)

有言実行できたZ E

## 第二十一話 旅行にハプニングはつきものだ

### 清水寺

清水寺。それは飛び降りの名所。だが実際には生還率が高くて、自殺場所として向いていない。

「京都おーっ!!」

「これが噂の飛び降りるアレ」

「誰かつ!! 飛び降りるれっ」

「では拙者が……」

「おやめなさいっ」

生徒達はいい具合に盛り上がっている。だが、俺は非常に居心地が悪い。

「レントさん。どうかしましたか?」

刹那が俺の雰囲気がいっつもと違うことに気づいたみたいだ。

「そうだな。コイツの事だから、本当に飛び降りるかと思ったんだがな」

「一応、教師だしやるわけないじゃん。ハハハ」

「そうです。マスター」

茶々丸が援護をしてくれる。ナイスだ。……と、よそ見していたら人にぶつかってしまった。ぶつかった相手は女性らしい。

「あ、すみません」

とつさに頭を下げ謝った。そして、顔を上げると長い髪をした女性の顔が目に入る。京美人と称してもいい程だ。見知らぬ人ならそれで良かったんだがな。どうやら神様は俺が嫌いみたいだ。

「久しぶりやなあ、レンはんに刹那はん」

「鶴子さん！？ お久しぶりです」

「どちら様でしょうか？」

馬鹿長い刀を布袋に包んで、背負っている女性に対して惚ける。

刹那、コイツは鶴子じゃないただの女性だ。

「ほう……なんなら一発、技食らうてみるか？ 思い出すかもしれないし」

「今、思い出しました！ 鶴子さんでした」

本気で殺ってくるから絶対に嫌だ。ん？ いや、それは気のみで比べたらの話だ。と、いうことは全然怖くないんじゃないか？

「残念やなあ。刹那はんもコイツがスタボロなった姿見たいやろ？」

「あ、あははは……」

刹那はどう答えたらよいか分からずに苦笑いをした。頼むからそこはきっぱりと否定して欲しい。

「レン。誰だコイツは？」

エヴァは知らなくて当然だよな。よし、俺が紹介してやるか。

「コイツはな神鳴流最強の年」

ヒュン！ （鶴子の手刀が俺の頬をかする音）

「じゃなくて美人の青山鶴子さんだ」

無理だ……やっぱ、こえええ。

「ややなー美人だなんて、ま、よろしくな。嬢ちゃん」

「……レン。頬から血がだらだらと流れているぞ」

うん。わかってるさ。現在進行形で痛みが響いているもん。

「お前ら、先に行つてくれ。ちょっと、鶴子さんと話があるから」

「そうか。わかった」

「わかりました。なら先に行つてます。鶴子さん。失礼致します」

「ほな、またな」

他の皆が先に行ったのを確認し、人気のない場所に鶴子と移動する。

「ほんで、なんどすか？　　人気のない場所まで連れ出して。愛の告白やったら無理やで」

鶴子さんはわざとらしく、困ったような顔をする。嘘つけ、本当は俺をからかっているくせに。

「や、しないから。そんなことより何故ここにいるんだ？　　普段は自宅か道場にいるだろうが」

「ん、ちよつとなあ詠春殿に頼まれたんや」

「何を……？」

「呪術協会の過激派の一部に不穏な動きがあると言うから、あんたらの学校の護衛や。ま、ちゃんと報酬を渡してくれるから引き受けたんやけどな」

詠春め……余計な事をしやがって。しかし、まずいな。

「何かあったら、手を出さないでくれるか？」

「何でや？」

「経験を積ませたい奴がいるんだよ」

「うん。何かあった時はレンはんが全責任を負ってくれるなら、

ええかな」

少し考えて鶴子は条件をつけてきた。全責任……ね。ま、なんとかなるだろ。

「いいぜ。取引成立だ」

「知らへんで？ ホンマにどうなっても」

「さすがにヤバい時は呼ぶさ。むっ、そろそろ出発する時間だな」

時間を見るともうバスに乗り込む時間だ。急がないとまずい。俺は鶴子に背を向けて歩く。

「そやか。またな」

鶴子さんの声に伝えて、手をひらひらさせてその場を去った。俺はもう二度と会いたくないがな。そう思った瞬間、

「イデッ！」

石が飛んできて、俺の頭に命中した。あれ？ こんなことあったよな？ 歩きながら昔の事を思い出し、苦笑した。



おいおい、何があつたんだ？ バスに戻つてみると俺のクラスの三割が寝ている。なんか微妙に酒の匂いがするんだが……もしかして、これが鶴子さんが言っていた過激派の仕業なのだろう。

そう思いながら、ネギの隣に座る。そして、周りに聞こえないように小声で聞く。

「何で、あいつら酔つてんの？」

「えっ？ 何を言ってますかー つ、疲れて寝ているだけです  
よっ」

ネギはあからさまに動揺しながら話す。ネギよ。嘘をつくなら、動揺を隠せ。バレバレだ。

「ふーん」

突っ込むのも面倒なので、会話を打ち切る。旅館に着くまで寝てよ。俺は目を瞑り、しばらくバスに揺られながら、睡眠をとった。

結論から言おう。三十分では全然寝た気にならない。最低二時間は寝たいものだ。

と、まあなんやかんやでバスから降りて、旅館に入った。部屋に入っ  
つて、三十分間ボーッとしている。どうでもいいことだが昼寝の  
時間は二、三十分位が健康にいいらしい。

「レン君。風呂入ってきたら、どうだい？」

「瀬流彦はもう入ったみたいだな。その格好からして」

「うん。そうだよ」

そう俺に言ってきたのは部屋が一緒になった、浴衣姿の瀬流彦だ。

「んじゃ、ちよっくら温まっていますかね」

「ははは、ごゆっくり〜」

部屋から出て大浴場に入る。脱衣室で気がついたが今一人、入っ  
ているみたいだ。脱いである服を見て、すぐにネギとわかった。

だからどうということはない。小タオルを腰に巻いて浴場の扉を横  
にスライドさせて入る。ふむ、露天風呂とは中々だな。

そう感心しながら風呂に入る前に湯を浴びなくてはな。桶を持って、風呂に近づくと二つの人影が見えた。

その影はネギの首と男の大事なモノを絞めている少女だ。少女は透き通った肌に黒髪でサイドポニーテールをした刹那だ。

「ジーザス……」

そう呟くしか言い様が無い……

それと同時に手から桶が滑り落ちた。カラーンと音が反響する。その音に気づいて、二人ともこちらを向いた。

「えっ？ あっ！ レントさん。ち、違うんですっ。これは

」

刹那の顔がタコみたいに赤くなり、ネギから手を離す。ネギは逆に青くしながらガクガクと震えている。

「う、うんうん。大丈夫だ。わかってるさ

」

とりあえず、落ち着かせるように言う。そうすると刹那は安心したような顔つきをした。

「 刹那達の事は誰にも言わないよ」

俺はその場を回れ右をし戻る。まさか、刹那がネギが好きだったとは知らなかった。

「ち、違いますっ！ 全然ッ！ わかってないじゃないですか！  
？」

否、俺の言葉で顔つきがまた変わる。

「後な、ネギはまだ十歳だから優しくしろよ」

「だから、違うんですっ。あ、ネギ先生とはそんな関係じゃありませんっ！ だから、待っててくださいいいいい！！」

「ちよっ、引っ張るな！ 危ねっ  
」

「わっ、ひゃあ！」

刹那が後ろから俺の腕を引っ張った拍子に足を滑らし、背中から倒れた。頭と背中を強く打ち、激痛が走る。

「あゝ痛ッ。ん？」

起き上がるうとすると身体が動かない。目の前を見ると、そこには俺の身体に馬乗りしている、一糸纏わぬ刹那の身体が

「あ、あ、見ないでくださーいッ!!」

「きゅペッ」

俺が反応する前に涙目をした刹那から気を込めた拳が顔面に振り下ろされた。その瞬間を境に意識が……オ……ワ……タ……

第二十一話 旅行にハプニングはつきものだ(後書き)

今日でGWが終わりますね。明日からまた現実との戦いとなりそうです。  
o r n

第二十二話 鹿せんべいって食べた事ある？

「ん？ あり？」

レントは目が覚まし辺りを見回した。

見慣れない天井

見慣れない部屋

自分の隣の布団でぐーすか寝ている瀬流彦

これらを総合的にまとめる。

そついや、修学旅行中だったな。確か、風呂で刹那に殴られたんだ。記憶が曖昧でよく思い出せないが……

顔面がずきずきと痛む。不老不死であつても痛みはある程度残るのだ。窓の外を見てみると朝日が輝いている。

ん？ 朝……？

「まさか、俺はあのまま寝てしまったのかアアアッ！」

思わず力の限り叫んだ声は旅館中に響き渡る。レントの声で起きたものがあるの言うまでもない。

「ふああ〜っ。どうしたんだい？ 大声を上げて」

その一人である瀬流彦は目をこすりながら、レントの方を見ていると、

「俺の時間よ……カムバツアアアク！」

天に両手で仰ぐレントの姿が目に入った。それは周りから見れば大変奇妙な光景だろう。

「レン君……とりあえず落ちっこう」

「1、3、5、7、11、13、17、19……よし、瀬流彦。昨日の夕食は何だった？」

漫画で読んだ事を実践する。そうすると心が落ちついていく。今の状態なら何を知っても大丈夫なはずだ。

「えっと……すき焼きだったよ」

「ふざけんなっ！ やっぱ落ちつけねえよ！ すき焼きが食いたかったあぁっ。もう神様なんか嫌いだ。だけど昨日は良いもの見



せてありがとございまああす！ と見せかせ死ね。イエス・キリストオオッ！」

すき焼きという豪華な食事の単語を聞いた途端に全然落ちつけねえ。もう信じるものかあの漫画！ あ、でもプツチさんは好きだ！

はい。

「あゝそれとレン君。1は素数じゃないよ」

「……………」

お互いに暫し沈黙する。部屋の時計がカチコチと一秒を刻む音だけが聞こえる。

「ち……………」

「ち…………？」

「最初から教えるやッ！ お前のせいで間違えたじゃねえかアアアッ！……」

「ええええええええッ！？」

「すき焼きイイッ！ ローマ字でSUKIYAKI……！」

支離滅裂な言葉を発する狂乱状態のレント。このレントを落ちつかせるにどれ程大変だろう。そのことを瀬流彦は身をもって味わうのだった。

## 二時間後

「うめえ」

麻帆良中一行は大広間で朝食を食べている。レントは真っ白でホカホカなご飯を頬張り、実に幸せそうな表情を浮かべている。先ほどの狂乱状態だったのが治まっているようだ。

「あ、あの、レントさん」

刹那がこちらの表情を窺うように話しかけてきた。昨日のことだろうな。事故とは言えど見ちゃったしね。

「昨日のことなら、気にしないでいいぜ」

「あ……昨日はすみませんでした。その、あれは思わず手が出てしまいました」

刹那は顔を真っ赤にさせ、必死に俺が求めてもいない弁解を始める。

「お前達は何の話をしているんだ？」

刹那と話をしている途中にエヴァが眉をしかめながら入ってきた。その表情はどこか面白くないとでも言いそうな感じする。

「何を黙っている？ 早く吐け」

どうやって誤魔化そうか？ 刹那は刹那で不安そうな目でこちらを見つめてくるし。どうしようかと迷っている。

「せつちゃん。よかったらなんやけど……今日、うちの班と一緒にまわらへん？」

「えっ。いや、その……失礼しますっ」

「逃げるなっ！ 刹那っ！」

このかに話しかけられて、逃げようとする刹那を捕まえる。うまく行けば、エヴァの詰問から逃れられて、刹那はこのかと行動出来る。まさに一石二鳥！

「レ、レントさんっ。離して下さいっ」

刹那はジタバタと俺から逃れようとする。馬鹿めっ！  
誰が離す  
かっ！

「このかの班はどこに行くんだ？」

「奈良公園や〜。レン君も来はる？」

「ああ。同行させてもらっぜ」

刹那を逃がさないように注意し、このかのお誘いに乗る。

「むっ……桜咲。私達も奈良公園へ行くぞ。反対するなら民主主義に則って、賛成……二名。反対……一名。棄権……一名で可決だ。」

「……なっ！」

エヴァが強引に班の行き先を決める。なんともまあ素晴らしいエゴイズムだ。そこが長所であり短所なのだがな。

「ということとせっちゃん……」

「五、六班は奈良公園で決定ということになるわけだな。刹那」

「あ、うっ……」

完全に逃げ場を失った刹那は嬉しそうやら、一緒に行くことになるよう誘導した俺を恨めしくそうにと複雑な表情だ。だが決定したことだ。素直に行くしか道はないのだよ。

### 奈良公園

「スゴイスゴイ、見てください。アスナさん」

「はいはい」

何故かネギもついてきました。ネギだけに……なんてそんなわけじゃない。ちゃんとした理由があるぜ。

朝食後ネギ争奪戦が始まる 内気な宮崎もネギを誘う ネギが宮崎の誘いをのる 宮崎の勝利 そして現在に至る

「 という感じだ。わかったか? 」

「 …………… (コクリ) 」

「 はい。わかりやすかったです 」

その光景を見ていなかった、ザジと茶々丸に説明する。二人とも物覚えがよくていいね。

「何をくだらないことをやっている」

「ほれ、エヴァ。鹿にあげてこい」

エヴァにさつき買ってをおいた鹿せんべいを渡す。鹿せんべいとは鹿にあげるせんべいのことだ。別に人間が食べても問題は無いがあくまで鹿用なのでおいしくない。

「ふん。私がそんなものにハマるとでも思っているのか？

……お〜」

ぶつぶつ言いながら、鹿にやるエヴァ。見た感じかなりご満悦のようだ。

「マスター。とてもハマっていますね」

「俺でも予想外だ」

こうしてみると年相応の少女にしか見えない。実年齢は既に百を越えているというのに……

「ん？ ザジはどこへ行った？」

ふとするとザジがいなくなっていた。

「ザジさんでしたらあそこにいますが」

茶々丸の指さす方を見ている。そこには鹿がザジの周りをぐるぐると跳び跳ねながら回っている。

「スゲー……………」

「ザジさんは曲芸師ですから」

「いやいや。曲芸師っていうレベルじゃないからね！ どちらかというと動物使いだろ。うーん。謎多き生徒の一人に加えておこづ。」

「茶々丸。公園内を散策しようぜ」

「え、はい。では、マスターを呼んできます」

「あゝ、アイシつるさいから呼ばなくていいよ」

「そ、それは二人きりでということですか？」

茶々丸は一瞬、言い淀みながら言う。若干、困惑しているようだ。

「そうなるね。他の奴らはどっか行ったし、ザジはあの調子じゃん」

そう、ネギは宮崎と、アスナは綾瀬と早乙女に、刹那はこのかに追いかけられどこかへ行ってしまった。ザジは鹿に……って鳥も来てるし！

「そ、そうですね。ではお言葉に甘えて、よろしくお願いします」

固くペコリとお辞儀した茶々丸を連れて、公園内を散策する。天気もいいし、うるさい奴もいないので最高だ。

しばらく散策すると、見覚えのある奴を見つけた。

「何やってんだ？　あの二人？」

ここから遠くの茂みに隠れているアスナと刹那の二人プラス　がい



「行ってみるか……茶々丸」

「はい」

茶々丸と共にコソコソと隠れている二人の所へ行く。

「お二人さん。何やってんの？」

「「わーっ!?!?」「」

突然、後ろから声をかけられ慌てているようだ。そんなに驚くとは何かやましいことでもやってたのか？

「って、レンと茶々丸さんじゃない!」

「おう。アスナ、昨夜はご苦労だった」

「レントさん。昨夜のことを何故知っているんですか？」

刹那はどうしてそれを？とでも言いそうな顔をしている。まったく、ちゃんとホウレン草をしないと駄目じゃないか。あ、ホウレン草ってのは報告、連絡の事ね。

「ん？ 彼の魔法先生に聞いた」

昨日、このかが誘拐されかけたことは瀬流彦から聞かされたからな。

「他って……学園にまだ魔法使いがいるの!？」

「茶々丸。解説よろ」

「はい。学園には魔法先生だけではなく魔法生徒もたくさんいます。マスターから聞かされたのですが麻帆良学園は一種の魔法使いの機関だそうです」

「へ、へえ。そうなんだ」

学園の魔法使いの人数は百を越えるとかジジイから聞いたが正確な人数までは俺も知らない。

『あ、あの、先生……私……』

目の前の広場を見ると宮崎とネギが向かい合っている。まるで告白するみたいな雰囲気だ。甘酸っぱい感じがする。

「誰か説明頼む」

「あの嬢ちゃんが兄貴に告白する所なんすよ」

「何っ！ 宮崎いい。頑張れええっ」

そついつことなら宮崎を応援しよう。おもしろいものが見られそう  
だ。

「ちょっと！ レン。ネギはまだ十歳なのよ？」

「アスナの好きなタカミチは十二も年上だが？」

「う……それは……」

「レントの兄さんの言うとおりでい。愛に年齢なんてカンケーねえ  
よおー」

その通りだ。カモっち。本人が良ければそれでいいじゃん（笑）

「あ、どうやら告白するみたいです」

宮崎は息を吸い込む。そして、

『私、ネギ先生のこと、出会った日からずっと好きでした。 私

……私……ネギ先生のこと、大好きです！！』

一息もつく間もなく言いきった。俺は彼女の勇気を心の中で喝采する。

「刹那も見習えよな。アイツの勇気をよ。お前はいつまでも悩んでいるのに宮崎は数ヶ月で思いきって、自分の気持ちを伝えたぞ？」

「……………」

刹那が何を考えているのかはわからないがその表情は真面目だ。まあ、これがきつかけとなつて欲しいが行動に移すかは俺にはわからない。

『茶々丸ー。レーン』

遠くからエヴァの声が聞こえる。つーか人の名前を大声で呼ぶな。恥ずかしいだろうが。

「二人ともネギは任すわ。どうやら、俺らはわがままな家主をなだめなければならぬようだ」

「そのようです。アスナさん、刹那さん。また後で合流しましょう」

「あ、うん」

告白された数十秒後に倒れたネギはアスナ達任せて、俺と茶々丸はエヴァをもってなだめに行った。

追伸……ザジと合流した時鳥だけでなく猫や犬も加っていた。

第二十二話 鹿せんべいって食べた事ある？（後書き）

どうでもいいことですが。

私は修学旅行で奈良公園に回った時に罰ゲームで鹿せんべいを食べました。

第二十三話　キスの味はレモンの味……なわけねー

「よし。各班、十半までに私に選手二名を報告！！　十一時からゲーム開始だー！ー！ー！！」

「「「「「おー！ー！ー！」」」」」

朝倉の掛け声の後に続いて3　Aの生徒達が声を挙げる。鬼の新田教諭より下された班部屋からの退出禁止令の中でゲームの開催が決定された。

ゲームの題名は『くちびる争奪！！　修学旅行でネギ先生、レント先生とラブラブキッス大作戦』である。題名から読み取れるようにネギとレントにキスするゲームだ。

ルールは各班から二名ずつの選手がネギとレントを探しだし、キスをする。他の班への妨害はありだが、枕を使用した攻撃のみだ。上位の入賞者には豪華賞品が用意されている。

なお、鬼の新田教諭に捕まった者はロビーで朝まで正座させられることになる。正にドキドキ、ハラハラของเกมだ。

しかし、それは建前で本当の目的は……

「パクティオーカード大量GET大作戦さー！！」

「ほほー、これが豪華賞品のカードか……。これを沢山集めればいいんだね」

「おうよ。オリジナルはネギの兄貴が持っているけどな。こいつは俺の力で作ったパートナー用のカードさ」

お手洗いにて話をする、カモと朝倉。利害の一致ということで二人はこのゲームを仕組んだのだ。

カモはパクティオーの仲介料目当て。朝倉はトトカルチヨによる食券が目当てだ。

「でもさ、本当にレント君も対象にしてよかったのかい？ この事バレたらヤバくない？ さっきだって『魔法をバラしてもいいけど、朝倉が記憶を失うか、存在を消されても知らんぞ？』って平然と言ってたし」

「大丈夫つすよ！ レンの兄さんは面白い事には寛容だから」

カモの見解は半分正解だが、もう半分が足りない。レントは大抵、興味があるか無いかで行動する。実際、数時間前にネギが朝倉に魔法がバレたと知っても慌てる事はなかった。

朝倉が魔法の存在をバラそうとしても、どうでもいいといった感じだ。一般人に魔法をバラしても揉み消されるだけと分かっているから興味を示さなかつたのだ。

発言したことは朝倉に警告をしたことのみだ。

「パクティオーをするためのゲームとは獣にしては考えたじゃないか」

「わわっ！！ エヴァちゃんと茶々丸さん！？ えーと、このオコジヨの声は腹話術でして」



朝倉はしまったというような顔をし、その場で思いついた言い訳をする。

「何の用っすか？ エヴァンジェリン」

「へ……？ エヴァちゃんって魔法関係者なの？」

「ああ、そうだ。今回のゲームの件だが獣、私がパクティオーする時は私をマスターにするように設定しろ」

エヴァは我が物顔でカモに命ずる。カモはエヴァが何故、このような命令を下すのか、瞬時に察知した。

「いいっすけど、アンタの狙いはレントの兄さんだな？」

「フン。私がぼーやを欲しがると思うか。私が手に入れたいのはアイツだけだ」

エヴァはそれだけ言って出ていく。茶々丸も朝倉達にお辞儀をしてからエヴァの後を追いかけた。

「むむ……久々に特ダネかも……」

「姉さん。早く最終準備に行こうぜ」

「ん……。ああ、そうだね  
朝倉とカモは刻々と迫るゲーム開始に向けて、最終準備をし始めるのであった。

「修学旅行特別企画！！　『くちびる争奪！！　修学旅行でネギ先生とラブラブキッズ大作戦』~~~~！！」

各部屋のテレビに旅館内の映像と共に朝倉の声が流れる。そして、各班の代表選手が発表された。

一班代表選手

鳴滝姉妹

「お姉ちゃん。ほ、本当にやるんですか？」

「大丈夫だって。僕らは、かえで姉から教わってる秘密の術があるだろ」

「そんなこと言っただって」

・未知数の力で勝利か？

二班代表選手

古　菲&超　鈴音

「超が参加するとは驚きアルネ」

「まあ、ちょっと興味が出ただけヨ」

・馬鹿と天才の中国チーム。中国四千年の力で圧倒か？

三班代表選手

いいんちょ&千雨

「うぐぐ……。何で私がこんなことを……」

「つべこべ言わず援護してくださいな。ネギ先生の唇は私が死守します」

・偏愛と執着が衆知のいいんちょとやる気ゼロの千雨。チームワークに問題か？

四班代表選手

裕奈&まき絵

「よし。絶対に勝つよーっ」

「エヘヘー！。ネギ君とキスかー！。んふふ」

・運動能力、コンビネーション共にバランス最高

五班代表選手

のどか&夕映

「ゆ、ゆ、ゆえ〜」

「全くウチのクラスはアホばかりなんですから……。せつかく、のどかが告白した時にこんなアホなイベントを……」

・気合いは十分!! 知力とハートで勝負!!

六班代表選手

エヴァンジェリン&茶々丸

「さつさとロビーに行くぞ。アイツは今日はロビーでハッ橋でもパクつくと言っていたしな」

「そう……ですね」

「? どうした?」

「いえ、何でもありません」

・どうやら、レント先生一本狙い。戦力は一切不明!

「現在、ネギ先生は教員部屋にレント先生はロビーだよ。それではゲーム開始!!」

朝倉の合図によってゲームが開始する。情報によるとそのゴール地点であるネギは教員部屋にレントはロビーで新田とハッ橋をパクついている。

「古、ロビーにいるレント先生狙うネ」

「ん、確かにネギ坊主は競争率が高いアルネ」

超と古はそう言葉を交わし、階段を降りていくと三班と四班が戦闘状態になっている。古は階段から飛び降り、

「チャイナピロートリップルアターック！」

裕奈、千雨、あやかの三方向に枕を投げつける。投げられた枕は三人の顔に見事に命中する。ちなみに直訳すると『中国三つの枕攻撃！』である。

「によほほ」と古は実に楽しそうに笑った。

「ぐぐ、やりましたわね〜」

攻撃を受けた方もやらねばなしではない。あやかはくらった痛みを返さんと枕を当てに行く。

それに乗じて、裕奈、まき絵も参加し、乱戦状態となった。もう既に枕投げではなく、枕を使った格闘戦だ。その隅でこっそりと階段を降りようとする六班がいた。

「エヴァンジェリン。行かせないネ」

その道を枕を持った超が阻む。

「茶々丸」

「了解です」

茶々丸は枕を両手に持ち、超に枕攻撃を仕掛ける。右手の枕から振り下ろし、左手の枕を腹を狙って振るう。

「甘いヨ」

超はその攻撃を枕によって威力を相殺し防いだ。そして自分も攻撃を素早く加えようとすする。

『コラ長谷川何やっとなるかー』

『ぎゃぴいーっ』

新田の怒鳴り声に続いて千雨の悲鳴が旅館内に響く。どつやら、彼女は新田に捕まったらしい。

「今の声は！？」

「やばっ！ 鬼の新田だ」

「逃げますわよ皆さん」

乱戦中のまき絵、裕奈、あやかがそつ反応する。

「茶々丸！」

「古ー」

超とエヴァは双方同時に呼びかける。

「了解です」

「んじゃ。お先ーっ！ アルよ」

茶々丸はエヴァを抱えて、古は裕奈を馬跳びのように飛び越えて逃げる。あやかとまき絵もそれに続いてその場を離れた。

「明石！ お前もかっ！！」

だが、古によって逃げ遅れた裕奈だけは新田に捕まり、地獄行きとなった。

「お前もかよ」

新田先生に連れられて来たのは明石だ。戒厳令が出されてもなお、部屋の外をうろつくとはおかしいな。

「ほら、明石。長谷川の隣に正座しなさい」

「うっ……。レン君」

そんなうつろとした目でこっちを見んな。

「諦めろ。自業自得だ」

「そんな」

明石は新田に言われて渋々と長谷川の隣に正座する。こ愁傷様だ。

「レント君。私はまた見回って来ますね」

「あ、はい。わかりました」

新田先生はまた旅館の見回りに行った。さて、何が起きているか尋問するか。

「さて、二人とも　モグモグ　何故　ング　出歩いていたか吐け」

「ハツ橋を食いながら話すんじゃないよっ!」

ん？　別に良いじゃん。旨いんだし。それにしても、長谷川って実に熱いツツコミするな。

「食つか？」

「え？　ホント？　じゃ、頂きまーす」

二人に差し出すと明石は即刻、手に取り口に頬張る。長谷川はため息をついて手に取った。

「で、理由は？」

「知りたい？」



そう聞くと明石は怪しげな笑みを浮かべた。何やら企んだ顔だ。

「新田先生〜」

「班の代表選手を選んで、ネギ先生とレント先生にキスを言うゲームのせいです。ちなみに私は巻き込まれただけです」

長谷川、説明乙。と、なるとまだ他にうるついているということか。うっん。俺も狙われているとはね。

「なんで、千雨ちゃん話しちゃうの〜。あ、どうしてレン君、離れんの？」

「お前に襲われないようにだ。長谷川は部屋に戻っていいぞ。ほいっ」

長谷川に新田先生に見つかっても弁明できるように、理由を書いた紙を渡した。

「あ、どうもありがとうございます。後、言い出しっぺは朝倉らしいです」

「そんなところだと思ったよ。ま、今日は災難だったな」

「千雨ちゃんだけずるいよっ」

明石がそんな事を言ったが長谷川は気にかけることなく、俺に頭を下げて部屋に戻って行った。



偽ネギは最期にカメラ目線でピースし、軽い音と共に煙となって消え去った。その後、『よぎ・すぷりんぐふいーるど』と拙い字で書かれた人型の紙がヒラヒラと舞い落ちた。

「なるほど……式神か。これなら何故兄貴が六人もいるのか説明がつくぜい」

「おおーつと！　ネギ先生四人が大集合！　各班。いったいどーするのか？」

「って、聞いちゃいねーな」

朝倉は報道者としての使命感からか、司会役をきちんと務める。この長き夜に終止符は打つのは誰なのだろうか？

「ダンボールに認識障害をかければ、移動してもバレないもんなんだな」

先ほどまで被って、隠れていたダンボールをそこらへんに捨てて置く。さつきは何かと思ったよ。なんせ、ネギが四人も集まって来たからね。新田先生大丈夫かな。ネギに気絶させられたけど。

「や、レント先生」

「優秀なお前もかよ」

超も参加するとはどういいう事だよ。悪魔に魂を売り渡した科学者じ

やなかつたつけ？

「早速だが失礼するネ」

超の姿がスツと消えた。いや、下にしゃがんだだけか。不意打ち狙いか？

「つと危ね」

「おや、防がれた力」

足払いで態勢を崩されるのを防いだ。予想以上の動きだ。さきほどの動きは確か

「中国拳法か。本当に万能な奴だな」

「さすがはレンだネ」

あんな素早い動きと言ったら拳法しかないしね。何故、達人並みの強さなのかは知らんが。

「今回は見逃してやるから部屋に戻れ。まだ、続けるって言うならお前も明石と同じ目に合う事になる」

「そつだネ。ここは素直に下がるとするネ。貴方に拳法で勝てないのは昔からだしネ」

超は肩をすくめながら言葉を紡ぐ。コイツの話におかしな点がある。

「昔？ 超に会った事なんてねーぞ」

超は昔からと言った。俺は超には以前、会った事なんて無いし、戦った事も無い。

「おつと喋り過ぎたヨ。私はここで退散させてもらっネ」

超は意味深な笑みを浮かべて、去って行った。意味分からん。昔つてなんだよ？ 全くもって謎だらけな奴だな、あのチャイナ人。もういいや、ロビーに戻る。おや？

「刹那ちゃん。就寝時間だよ」

イタズラ心に動かされて、刹那の背筋をすいっとなぞる。

「ひゃわわわっ！？ レントさん何するんですか！？」

うんうん。いい反応だ。

「あ、レンじゃない」

「二人して何を見ているだよ？」

ロビーの方を見してみると

偶然というべきか、宮崎が態勢を崩してネギにキスをするシーンを目撃した。その直後にぼわっとした光が微かに浮かんだ。ついでに俺の服が後ろに引っ張られている。

「あの光は……パクティオーのか？」

更に強く服が引っ張られる。うざったいなあ。

「なんなんだよ？」

刹那

「ンブ!?」

後ろを振り向いたら、飛びかかれ、口を口で防がれた。え？

目の前に映るのはエヴァ……？　ってヤバっ！！　仮契約が！

そう思った時、光が発生した。横には呆然とする刹那とアスナ。それに見守っている茶々丸だ。

「　　ぶはっ。フッフッフ。これで晴れて我が従者だな」

「……………」

「どうした？」

私の従者になれて嬉しくて言葉も出ないか？」

あゝ、今めっちゃ誰かぶん殴りたいなあ。この全ての元凶を殴りてえなあ。まず、エヴァだろ、朝倉だろ、カモだろ、そして火種の元となったのがネギ・スプリングフィールドだろうがッ！　うん。

まずは手始めに目の前の奴を狩って、次に朝倉狩りじゃあッ！！

最後がカモネギ狩りだあッ！　よしそうと決まったら……

「くられ、このロリ吸血鬼！」

「ちよっ、ダメですよ！　レントさん！」

「そ、そうよ。仮にもエヴァちゃんは生徒なのよ」

「レン様。落ち着いて下さい」

止めるな三人共。今回ばかりは許せねえ！　　コノウラミハラサデ

オクベキカアアア！！

こうして、夜が明けていく。このゲームの参加者で旅館内をうろついていた者と主犯とネギは朝まで正座する事になった。

再び狂乱状態になったレントは誰も殴る事無く、落ち着いた。レントを鎮めさせた功労者は瀬流彦教諭である。一日に二度も鎮める役割をするなんて、彼は本当に苦勞する人だ。

瀬流彦教諭に幸あれ！

第二十三話　キスの味はレモンの味……なわけねー（後書き）

うん。しちやいましたね。パクティオー……

ぶっちゃけ、レントにアーティファクトなんて必要無いんだけどなあ。なにせ、チートキャラですしね。



第二十四話 お前は確か……

俺は今瀬流彦がいない部屋でエヴァと二人でいる。

今日は無性にイライラする。その原因は決まってる。昨日のパクテイオーの事だ。起こった事については仕方ないと思うしかない。

「ほら、お前のコピーカードだ。カードを見た限り鏡のアーティファクトみたいだ」

エヴァからコピーカードを受け取る。色調は黒だった。珍しいアーティファクトじゃないみたいだな。

「鏡？ とすると考えられる能力は真実を映し出すか反射といったところか。うん、シヨボいな」

「いいから、出してみろって」

まあ、エヴァの言葉も一理あるし、出してみつか……。

「アデアット」

そう唱えるとカードが光と共に人、一人映し出せる位の鏡が浮いて現れた。

「うん、能力が分からないな。これは……」

「エヴァでも分からん事があるんだな」

この鏡、自由に動かねえかな？ 俺の意思で移動するとか……。と思った瞬間に鏡がくるりと俺の方に反転した。

「……………」

エヴァは驚きで声が出せないようだ。俺も予想外の出来事に放心してしまった。

「おいっ！ 今、何やった!？」

「知らねえよッ！ 俺の方が知りたいわ!!！」

ん？ 鏡に映っているのが俺では無くエヴァだと!？ どういう事だ？ 鏡のエヴァと目の前にいるエヴァは同じ動きをしている。もしかこれって……

俺は手元にあったペンを鏡のエヴァに向けて投げてみる。すると、ペンは鏡の中に入っていった。

「あでっ！ どこから飛んできたんだこのペンは？」

目の前のエヴァに命中した。これは鏡と現実が繋がっているとしか考えられない。

「多分、空間歪曲だな……エヴァ、ちょっと動くなよ」

「は？ まあ、いいが。」

無機物だけ通すのか生き物も通す事が出来るのかという疑問がわき上がる。

その疑問を解消するために自分の手をつっ込んでみる。

「ふひゃあつ!? どこを触っているんだお前はッ!?」

「え? 胸だけど?」

結果は鏡を通してエヴァの胸にふにふにと触る事が出来た。エヴァの方を見ると何も無い空間から俺の手がエヴァの胸を触っている。それにしても全く無い胸。無い胸を表現する四字熟語と言えば……

「断崖絶壁だな……」

そう、これ程ぴったりな熟語無いだろうな。

「触っておいて言うことはそれかッ!」

全く無い胸を触っても何も感じ無いし、興奮もしてこない。うん、ノーマルな俺が言うこと何も無いな。

「さて、今日はどこで暇を潰すとするか。もういつそのこと詠春の所に顔を出すのも良いかもしれないな。」

あの壮大な本山を思い浮かべる。それに呼応してか鏡が本山を映し出す。これって俺自身が飛び込めば移動出来んのかな? 試しにやってみるか。

「エヴァりん、さいなら!」

「おいッ! 待て」

エヴァの制止する声を聞かずに俺は鏡へとダイブする。鏡に入った

時ズブリと呑み込まれるような感覚がした。さよなら、ホテル嵐山  
今行くぜ、詠春。

鏡には飛び込んで数秒も経たないうちに本山に移動していた。これ  
は中々、使えるか

「ゴホツ、ゲホツ！　うええ、気持ちわりいい」

激しい乗り物酔いしたような気分が悪さを感じた。歪曲だから、空  
間の歪めて通って来たからみたいだな。まあ、ともあれ今日はここ  
で暇を潰そう。そのためには詠春をまず呼ぼう。

「詠　　ッ！　そうだったパクティオカードには　　」

俺の足下に魔方陣が展開された。これはパクティオカードの機能  
の一つである従者を召喚するやつだ。すっかり忘れてたーッ！

「全く、お前はいつも勝手動くから困りものだよ」

戻って来ました。ホテル嵐山に。何これ……もうアレと同じじゃん。  
人が気持ちよく寝ようとしたら、家族に「ちよっと手伝いなさいよ  
アンタ」って言われて手伝って、改めて寝ようとしたら「お兄ちゃ  
ん勉強教えて」ってまた頼まれて寝れない時の気持ちと同じだよ。

「最悪なマスターだ。俺は絶対にお前には屈しないッ！」

「そうか、私は絶対にお前を屈服させてやる」

にらみ会う二人の戦いが今にも始まると思われる程だった　　や、  
ゴメン。自分でも何言っているか分かんないや。

「フ、ハハハッ（フ、クククッ）」

何か可笑しくてエヴァと笑いあった。笑う所は無いが何故か笑えた。

「ま、ロビーに行こうぜ。刹那達待っているだろうし」

「そうだな。ふふっ」

俺らは六班の待っているロビーへと他愛もない話をしながら移動した。

大音量のゲームの音。

流れるアーケードゲームのデモ。

はしゃぐ子ども達。

どっから見てもゲームセンターである。五班と六班はゲームセンターで暇潰しである。や、お前らちゃんと修学旅行しろよ。

学を修めるという意味が含まれる修学旅行だよ？　なのに旅行先で非行の元となる事やるってどうよ？　ゲームセンターは非行の原因だってよく言われるけどさあ。

そういう非行者がいるのってごく一部なんだよね。本当は皆、ゲームをプレイする時の暗黙のルールを守っている良い人ばかりなんです。だから、これは社会勉強の一環として俺も思いつき遊びたい

と思います。あれっ？ これ、作文？

「ほら、レンくんも一緒に撮ろうや〜」

「了解〜。ほら、刹那来い」

「は、はい」

このかにプリクラに誘われたので一緒に撮る事にした。そういや、プリクラって正式名称はプリクラッシュユーザーシステムだった？あ、違うなこれは自動車のシステムだった。

「俺が真ん中か。まさに両手に花だな」

「ウチらが花やなんて照れるわ〜。なあ、せつちゃん？」

「なあ、せつちゃん？」

俺もこのかの後に続いて、刹那を呼んでみる。う〜ん、呼び名を変えるとなんだか新鮮な気分だな。

「……………」

「ふふっ、せつちゃん、顔が真っ赤っかやな〜。あっ、そやかあ〜。もしかして、レンくんに」

「それは言わないで下さいっ！ お嬢様ー！」

「うおっ！ もうすぐ撮るって刹那」

このかが次に言う言葉を手で口を塞ぎ、遮るうちにプリクラのカメラのシャッターが切られた。出てきた写真はカオスな状態だったが、楽しそうな画だったからよしとしよう。

「レン、私ともだ」

「うん、茶々丸も混ぜてな」

「無論だ。茶々丸は大事な従者だからな」

従者じゃなくて家族でしょ？ エヴァ。と言っても素直じゃないから言っても無駄か……。

「こうして並ぶと恋仲って感じたな」

「な、な、何をいきなり言い出すんだお前は!？」

「恋仲……ですか？」

エヴァが動揺し、茶々丸は首をかしげた。

「エヴァじゃなくて、俺と茶々丸。お前は茶々丸の妹」

「私がレン様の……」

「だあああつ！ お前はいつもそうやって私を貶しおって!！」

「痛っ！ 暴れんなっエヴァ」

キレたエヴァは俺に対して殴ってくる。全部、人間の急所を的確に突いてくる。

「落ち着けて」

「抱えるなっ！ 離せ！」

無理やり暴れるエヴァを抱える。俗にお姫様抱っこ状態だ。

「ああ……、マスター……羨ましい」

「おいつ、こらっ！ ロボっ、助ける！」

「はい、はい。笑顔、笑顔。茶々丸、もうちょっとこっち寄って」

「はい……」

茶々丸がさらに俺の側に寄って来た所でシャッターが切られた。うん、中々良い感じだな。

プリクラから出てザジが居ないのが気になったので探してみる。

『すげえ、あの子何者だ？』

『神が現れやがった……』

一般客達の様子は何やらおかしい。ザジが何かしたのか？ 遠くでザジの姿を見かけたので近づくと神と呼ばれた理由が分かった。

「これは凄いな……」



俺の見た先には足で踏んでプレイするタイプの音ゲーをミス無しでやっているザジの姿だ。パーフェクトとかどんだけだよ。

「ん……？」

視線を感じた。じっと見られているようでうざったい。わざと俺に分かるように見ているな。はあ、面倒だが問い詰めるか……。

俺は視線の主を早歩き追いかける。あの白髪の少年か……。アイツは……二十年前の奴か。ちっ、店を出やがった。

奴を見失わないようにするために駆け出した。人混みに紛れて逃げているが、こちらをチラチラと見る限り誘っているなありゃあ。

奴は角を曲がったので俺も後を付いて行く。付いて行った先には人気の無い路地裏で表情の無い少年がこちらを向いて一人佇んでいた。

「やあ、初めましてだね。レント・A・ツヴァイヴェルク」

抑揚の無い平坦な声だ。

「二十年前と同一で異なる地のアーウェルンクスだなお前は」

「そつだ。主の願い通りに動く人形さ」

やはりか……。まだ、諦めていないと言うことが。

「おや、珍しいね『混沌王』貴方は悪の手先の話なんて聞かずに殴り掛かると思ったのに。ああ、そうか……貴方も魔法世界の秘密を

知った者でしたね」

「何の事がさっぱり分からないな」

いつ、戦闘になっただけいいように相手から視線を外さない。

「とぼけないでもいいですよ。幻想の者達を消さないで救う方法を模索しているんだろう？ それは実現不可能な理想だ。僕達の方法が正しい」

「黙れ。お前らのやり方は気に入らない」

「よく言うよ。世界の」

奴が言った言葉に瞬時に反応し断罪の剣で体を引き裂く。だが、奴からは赤く迸る血は溢れなかった。

「やはり、この言葉に反応したか。また、会おう」

「幻影か……」

奴の体は水で出来た幻影だった。奴は軽く音を立てて、水となり地面に落ちた。

「まずいな……。早く方法を見つけないと」

リセットする以外の方法を奴らが実行する前に見つけなければ、魔法世界の救済が始まる。俺は未だに他の方法を見つけられない。

世界の　か……。俺は存在してはいけない人格なのだろう

か……？

いや、考えるのはよそう。俺は俺だ。自由気ままに行動する魔法使い。世界とは繋がりが無い存在だ。

うん、よし完璧だ。さて、エヴァ達の所に戻るとしよう。

## 第二十四話 お前は確か……（後書き）

今回はアーティファクトの説明の回でした。

最初は空間移動系とか気配と姿を消す指輪など考えていました。

また今回、決まった鏡の能力に文中で出てきた過去の真実を映すのと攻撃を反射させるのを追加したのも考えました。

でもどうせ空気になりやすそうだからいらなくね？ と言うことで省きました。

やっぱり、設定を考えるのが一番楽しいですね。

まだ、決めてないのがパクティオーカードの称号とアーティファクトの名前なんですよね。良い名が早く思い浮かばないかと思う今日でした。

第二十五話 シネマ村で初めまして（前書き）

PV100万アクセスを突破致しました！

これを機に私は最初から読み直して見ると……

拙い文章に思わず赤面しました。どれほど恥ずかしいかと言つと全部削除したくなるほどの恥ずかしさです。

あ、本当に削除する訳では無いですからご安心下さい。

他の作品には全く及ばないと思いつつ投稿し続けます。

## 第二十五話 シネマ村で初めまして

「あそこか」

シネマ村にある城の頂上に敵側にアーウェルックス、女、式神三体がネギとこのかと対峙している。刹那は橋の方で眼鏡を掛けた嬢ちやんと殺り合っている。

「お前が途中でいなくなるからこうなったんじゃないか」

「それは否定しない」

アーウェルックスの野郎、最初からそのつもりで俺をおびき寄せたな。

「何を焦っているんだ？」

「あの白髪野郎いるだろ？ アイツは二十年前に倒した、一応悪の組織の生き残りだ。俺と同等に強い。という事で『闇の精霊よ 今ここに汝との契約を破棄するなり』手伝ってもらうぜエヴァ。茶々丸は巻き込まれないように避難してくれ」

エヴァの魔力を封印していた契約を破棄した。二人がかりなら少し楽になるだろう。

「面倒なんだがな。クラスメイトの危機だ。手伝ってやるよ」

「わかりました」

二人は同意してくれた。そして、奴の所へ向かうと道の真ん中に立ち塞がるようにしている仮面がいる。コイツも敵か？

「ぬっ!？」

「誰だ!?!」

通り過ぎろうとしたら仮面は俺のみを狙って水矢を放って来た。

「いや〜、初めましてですね。アウレリアンよお」

「レン、誰だ？ アイツは？」

「いや、初めて会ったが何となく分かる。アイツは俺と同じ存在だ」

仮面の銀色の髪が風で揺れているのが見えた。声のからして少女だと推測する。また、その名で俺を呼ぶということは……

「ご名答ですよ。アタシはアルゼントウムと申します。アウレリアンの妹的な感じをやってんだよ、チビ女!」

「お前にこんなに口調が安定しない妹なんていたのか？」

「妹なんていねえよ。アイツは同じ存在。俺とアイツは取り替え子チェンジ・リングつまりは種族が同じ」

口調が安定しないのは知らん。分かっているのは俺を狩りに来たという点のみだ。

「聞いてないぞ！ そんなこと！」

「そりゃあ、言って無かったからな」

エヴァは驚愕し、こちらを向いてくる。

「アタシらは世界の殺戮者だろ！ なのにアンタは命令通りに動か  
なかった。そのアンタを還元するためにアタシが創られた」

「エヴァ、先に助けに行け」

先ほどの攻撃は俺だけに狙って来たし、話を聞く限り俺のみが対象  
だ。エヴァは狙って来ないと判断。

「ああ、分かった」

「我々は所詮世界に創られた魂を持つ『世界のプログラム』。ただ  
世界の命令のままに動けば良いじゃん」

「それも聞いてない」

また再びこちらを見てくるエヴァ。まったくよお、反応せずにさっさと  
行って欲しかったな。

「後で必ず話す。さっさと行け！」

「ちっ！ 絶対だぞ！」

今度こそ行ったか……。やれやれ、今日は尋問責めで大変そうだな。



「あらあら、行っちゃったね。さあ、タイムンだあつ！」

「さつきから余計な事ばかりバラシやがって……」

「アタシ達が人間と仲良く出来ると思ってたの？ 馬鹿なんだね。私らは偽人格なんだぜ。どれほど人間に歩み寄ろうが人間にはなれない」

コイツの言葉一つ一つが感に触る。仮面は手を大げさに振るう。原理は分からないが衝撃波みたいなのが来る。

避けても良いけどね。でも周りには一般人がいるからな。避ける事は出来ない。俺は障壁を展開し風を切りながら迫る衝撃波を楽々と防いだ。

「いや、俺もお前も人間だろ。感情というものがあるからな」

「アウレリアンって面白い事言うね！ 『炎竜・水竜』！」

「気合い拳！」

竜の形に型どられた炎と水奴の攻撃を気をまとった拳圧で粉碎する。今度はこっちからだ。

俺は間合いを詰める。魔法を使えば絶対に奴は避けるだろう。故に魔法は使えない。接近戦でやるしかねえ。

仮面の女が慣れた様子で素早く肘で打撃して来たのを受け流し、俺は顔を目掛けて殴り掛かる。

だがこれはフェイクだ。相手が防ごうとする直前に拳を止める。

「ホイッ！」

そしてすぐに鳩尾に肘を入れて空いている方の腕で足の踏み込みに乗せて突く。

これも防がれたか……

相手は蹴りや殴りの後に衝撃波を織り混ぜてくるのであまりスキが無い。ならば

相手の目の位置で軽く魔力を使って簡易フラッシュを発生させる。仮面の女は一瞬硬直する。

俺はその一瞬のスキは見逃さず足を払って態勢を崩してから渾身の一撃を放つ。

「ぶっ！」

一撃を入れるところで飛んできた衝撃波をくらってしまった。俺の一撃は当たったは当たったが威力があまり出せなかった。

「さすが、強いですねー」

「お前もな」

おもしろい。アーウェルンクスのような機械的な動きでは無く人間的な動きだ。

相手は仮面を被っているため表情は分からないが楽しんでいるような気がした。

「なあ、お前が白髪の野郎に俺の正体を教えたのか？」

質問しながらも、攻撃の手を休めない。相手から繰り出される衝撃波と拳を防ぎ、こちらも技を繰り出しては防がれるの繰り返した。

「おうよっ！ あ、勘違いしないで頂きたい。白髪さんとはただの利用し合う関係だからね」

「そうか。じゃあ、本来の機能である人間を滅亡させるのを実行しないのは？」

「と！ 今度は後ろからか。衝撃波は俺の後ろに来たが障壁によって阻んだ。」

「アタシも知らないよ。ただ言うことを訊かない機能を殺せとしか与えられて無いからね」

拳圧を数発バラバラの部位に打ち込む。ちえっ、これも防がれたか

……

「俺は不老不死だが……？」

よっと、また衝撃波か……。うん、スペック的には俺と同等な感じだな。

「なら死ぬまで殺すまでですよ」

仮面は実に愉しそうに笑う。俺ね背筋が冷える。本気でコイツは殺しに来ている。

恐怖するどころか命のやり取りをしていると思いつくワクワクする。

「死ぬまで死に続けるってか？ それは勘弁して欲しいね。ん……？」

城の方から強力な魔力を感知した。このかが魔法使いとして覚醒したみたいだ。それにしてもナギよりも魔力量が多いな。

「あちゃー、時間切れですか」

「なんだ退くのか？」

「ええ、いけ好かない白髪からの伝達でね。ここは一度退きます」

仮面は水になって退いて行った。あゝ、アーウェルンクスに仮面女か……だんだんおおごとになって来たな。

「お、エヴァ、どうだった？」

「逃げられた。しかし、アレは人形的な感じがしたな。それよりもだ。『世界のプログラム』とは何か話せ」

「それは、本山に行ってから話そうぜ。詠春にも今回の事について話がしたいしな」

「なら、早く行こう」

あんま急かさないうで欲しいよなあ。早く知りたいのは分かるけどさ……ま、いいか。

「レントさん！ 本山へ向かいますよ」

「レン君、一体これどうなってる？」

刹那とこのかがパタパタとやって来た。

「むっ！ 二人共変装衣装がかなり似合っているな」

「ホンマに？ うれしいわ」

周りから見れば美少女と美少年にしか見えないだろうな。

「それどころじゃありませんよ！」

「わーってるよ。本山だろ？ 俺もそう思っていた所だ」

刹那って真面目な表情も可愛いなあ。つい、頭をなでなでしたくなるが我慢しよう。

「桜咲と近衛、さつさと着替えて来い」

「え、アレ？ エヴァンジェリンさん、居たんですか？」

「馬鹿にしているのか？」

「はいはい、二人共早く着替えに行って来いよ」

エヴァが青筋を立てたので二人を着替えに行くのを促して避難させた。

「刹那はちょっとに抜けている所があるけど許してあげてね」

「なんだ？ 私はそんなに存在感が無いのか？」

あれれれ。落ち込んだじゃったよ。

「いや、ちゃんとあるよ。ほら、カリスマ（笑）があるじゃん」

「待て、（笑）は余計だ！」

「わりい、間違えた。カリスマ（爆）だったな」

「余計に悪化しているぞ！ 普通にカリスマにしろ！」

エヴァが元気になった所で

「茶々丸を探しに行こうぜ」

「急に話を逸らすな！」

茶々丸を探しに行く事にした。

## 第二十六話 創られた魂（前書き）

今回の話も色々と突っ込まれそうな気がするなあ……  
ですが、これが精一杯……

## 第二十六話 創られた魂

盗聴防止の術が施された和室にて茶を啜る。この部屋には自分を含めて五人いる。詠春、鶴子、エヴァ、俺、そして後方に座す茶々丸。

「さつきは良いもの見れてよかったな、詠春」

「ええ、冥福でしたね。今頃の中学生は発達が早いものですね」

先ほど、詠春はネギと風呂に入っているところで生徒達が間違えて入って来たのを見たのだ。

俺も見たかったー！！

「でもなあ、アイツ等は旅館に強制帰らせた方がよかったんだが……」

アイツ等とは朝倉達五人の一般人の事だ。これからドンパチが起こる可能性があるというのに詠春が本山に泊まらした。はつきり言うて、危険だ。

「スイマセン……」

詠春は頭を掻きながら謝罪する。

「やけど、本山には強力な結界が張ってあるんやで。攻めて来んやろ」

「いや、向こうはチートが二人もいる。結界なんか簡単にすり抜け



て来る」

アーウェルンクスと仮面女の事だ。もうすでに侵入しているような気がする。

「ええですから、敷地内を警戒させています。何かしら異変があれば報告するよう命じました。また、天ヶ崎千草においては現在捜索させています。今私が出来る事はこれくらいです」

「まさか、千草はんがこんな事を起こすなんて信じられへん」

メガネを掛けて猿の式を操る女の事を話したところ、鶴子さんの知り合いだと判明した。その人って鶴子さんと似たような性格なんだろうか？

「家にも居なかったんだろ？ だったら怪しいじゃねえか」

「ええ、彼女は前の大戦で両親を亡くされていますからね。西洋魔術師への恨みを持っていて、そこをアーウェルンクスが煽ったと考えられます」

「やけどなあ……」

どうしても信じたくないようだ。葛藤する鶴子さんを見るのは初めてだな。

「まだ、話は終わらんのか？」

「そうですね。ここまでにしておきましょう。お互い気を付けましょう」

「ああ、特に詠春がな」

紅き翼の中で一番衰えているのは詠春のみだろう。

「ええ」

詠春は軽く苦笑いしながら立ち上がり部屋から出ていく。その後、続いて鶴子さんも出ていった。

「さあ、吐け」

「さつき食った物か？」

手を喉に突っ込む仕草をする。今日は宴会だったからな。豪勢な物が出てくる事だろう。

「違うわっ！ チエンジ・リング（取り替え子）の事だ！」

「あゝはいはい。じゃあ、まずどこまで知ってる？」

「精霊に連れ去られて帰ってきた奴で巨大な力を持ち、人間に害を与える者」

「正解」

うん、知っているようだから説明が楽そうだ。これから話す事はエヴァ達が初めてだな。

「その精霊ってのは世界から独立した力とを考えてくれ。で、俺らは

世界に創られた魂を持つ人間。その魂には人間を滅ぼせみたいな機能と言うかプログラムみたいの刻まれている」

「レン様はそんなことをしませんか？」

茶々丸のもつともな疑問がきた。

「俺もよくわからんが、恐らく覚醒する前に不老不死の術によって機能の所にバグが発生したんじゃないかと推測している。不老不死になる過程で分解と構築が何度も繰り返されていたからな」

あの奴には一応感謝しておいていいのかな？ 微妙だな。

「何故、世界は人を滅ぼそうなど考えている？」

「さあ？ 知らん」

「知らんって、お前……」

呆れたような眼差しを向けてくる。だってねえ？ 知らんもんは知らんし。

「ん？ 覚醒する前って言ったな。それは潜伏期間のような物か？」

「うーん、多分……時限装置みたいな物じゃないか？」

「はつきりせんな」

あの時に自分がチェンジ・リング（取り替え子）という情報が頭に入ったからなあ。

「でね、エヴァ、茶々丸……」

「なんだ？」

「なんでしょうか？」

二人は改めてこちらに向き直る。俺はうつ向きながら話す。

「この体の本来の魂とも言わべき人格は、アウレリアンという名の創られた魂が殺した。俺はレント・ツヴァイベルクの肉体を持つ唯の偽人格なんだよね。そんな俺でもいいか？」

本来のレント・ツヴァイベルクの輝く未来を俺が奪ったのだ。これを聞いて二人はどう反応するだろうか？

責める？

蔑む？

見限る？

「顔を上げる」

「……………」

ゆっくりと顔を上げて、エヴァ達の方に向く。さあ、どんな言葉が投げられるか？

「いいか？ 本来の魂を殺した事を慚愧の念を感じているのか知らんが、くだらん。実にくだらんぞ。お前は前の大戦で大勢の命を奪ってきただろ！ その命と同じだ。何、一人の命を引きずってる



と、どこかで怯えていたのだろう。

「ありがとよ、スッキリした……」

エヴァの金色の瞳を見つめながら先ほどの言葉を頭の中で再生する。  
『全てを受け入れてやる』という言葉が響く。

ああ、本当に身を任せたくなる。

彼女の言葉は頼もしく聞こえたから……

ああ、俺も惹かれてしまいそうになる。

彼女は全てを受け入れてくれるのだから……

「どうした？ そんなにジツと見て？ とつとつ私に惚れたか？」

「それを言わなきゃ、完全に惚れてたのに……」

一気に萎えた。先ほどまでの気持ちはどこかへ吹き飛んでしまった。

「な、何っ！ さっきのは無かった事に」

「わりい。俺、ぺったんこには興味ねえ。後、幼女趣味もな」

胸は無いよりもあつた方が好きなんです。

「げ、幻術があるぞ！」

エヴァは術で大人バージョンへと変化する。胸はでかい、でも所詮、幻術だからなあ。

「何か不自然なんだよなあ」

「文句が多い奴め！」

「やっぱり、エヴァよりも茶々丸がいいな。」

可愛いし、性格がいいし、何故だか癒されるからね。心のオアシスといった所だな。

「え、ありがとうございます」

茶々丸の動揺している姿はそられるものがある。

「茶々丸は私の従者だ！ 何度言うが絶対に渡さん」

そうエヴァが言いきった後だ。近くで魔法が行使されるのを感知した。

やはり来たか。

「さて、やりますかね」

「ああ、そうだな。茶々丸気を引き締めろ」

「はい、マスター」

膨大な魔力が発散されているのを感じる。高等魔術を連発しているようだ。まずは、狙われているこのかの保護だな。その次に生徒達だ。詠春は一番最後だ。

障子を開けて俺達は月夜に照らされた闇へと飛び込んだ。

詠春と鶴子がレント達との話が終わった時間にもう一度遡ろう。

二人は部屋を出て並んで廊下を歩いている。廊下には灯りなどは無いが月に照らされているためそれほど暗さではない。

「ハア……石化の術は面白くないから、あんま使いたくないんだけどなあ。」

近くの茂みに仮面女　アルゼントウムが気配を消して隠れていた。その声から察するにあまり乗り気では無いようだ。

石化の術とは相手が抵抗したとしても未熟な相手なら防ぐことができず石にさせることが出来る高等魔術だ。

それは一撃死に等しいためアルゼントウムはつまらないのだ。彼女が望むのは命のやり取り　殺るか殺られるか死合いだ。

「でもまあ、アウレリアンを見つけたことだし協力関係も終わりや」  
彼女はアーウェルンクスが何をしようとするのかなんてどうとでも良かった。レントの場所が判明すればそれまでなのだ。

つまりはアーウェルンクスが情報を提供する代わりに力を貸す。ギブアンドテイクの薄っぺらな関係。その関係はこのか嬢誘拐が成功しようが失敗しようが今回で終わりだ。



「ああ……アウレリアン」

彼女はレントとの再戦を恋い焦がれていた。

今まで戦う事はそこそこ楽しめた。だがシネマ村でレントとの戦いはそれ以上だった。

早く殺りたくてたまらないと体が求めるのだ。彼は不老不死で簡単には死なない。だから

脳天を割ってみたい。

心臓を抉り出したい。

骨をねじ曲げてみたい。

身体をバラバラに引き裂いてみたい。

腹の中に手をつ突っ込んで掻き回してみたい。

その時の彼はいったいどんな声を聞かせてくれるのだろうか？

このアルゼントウムの想いは狂おしいほどにまであっていた。

アルゼントウムが未だ隠れ続ける中で

『……ッ!』

『詠春はん!』

本山の敷地内のどこかで魔法が行使されたを感じた。詠春と鶴子の二人は警戒レベルを一気に上げる。

詠春は御札を持ち、鶴子は野太刀に手を掛けて背中合わせで辺りを見回す。この辺りには二人の他、誰もいない。だが気を一切抜かない。

隠れていたアルゼントウムはこの魔力がアーウェルンクスが動いたのだと知り、自らの任務を開始する。

「『水精霊召喚』」

アルゼントウムが自分に似せた水の精霊を数えきれぬほど召喚する。

「なっ………!!」

その量に詠春と鶴子は驚愕した。水の精霊は庭一面を埋め尽くしていたのだから。

「突撃イイイツ!!」

術者の合図によって精霊は詠春と鶴子に次々、降り注ぐように特攻する。

「百花繚乱ッ!!」

鶴子は刀を抜き、迫り来る水精霊に対して刀を奮う。デタラメに斬っているように見えるが一闪、一闪が水精霊を真っ二つにする。

その剣筋の残像はまるで咲き乱れる花を彷彿する。

「『小さき王 八つ足の蜥蜴 邪眼の主よ 時を奪う 毒の吐息を

』」

「マズイツ! 『破ッ!』」

「斬空剣 弔の太刀！」

アルゼントウムは始動キー無しで詠唱に入る。

詠春達は魔法の詠唱を止めるために声の方向へ仕掛ける。先に鶴子の剣から曲線状の気が切り裂き、詠春の不動明王の炎の効果を持つ札が燃やし尽くす。

だが、そこには水のみが残っていた。そう、水のみ。

「いったいどこへッ!？」

「『石の息吹!!!』」

アルゼントウムは詠春達が予想だもしていなかった後ろから掛けて来た。彼女は水精霊が破壊された後の水を通して移動したのだ。

「にやるッ」

鶴子はすぐさま刀を奮ったが遅かった。刃がアルゼントウムに届く前に石化の煙が効果を發揮したのだ。

鶴子は刀と共に石になった。

「うんうん、サムライマスターもすぐに石化するから文句なしだな。任務終了、では失礼！」

詠春は抵抗をしたのはしたのだが、少し間に合わなかったため、足から石化がジワジワと進んでいる。

アルゼントウムはそんな姿を見てすぐに石化すると判断し、水にズブリと入り移動してしまった。

「……くっ。なんて情けない。」

詠春は顔を歪めながら必死に歩く。盟友であるレントに話すために動かしづらい足を一歩ずつ動かし向かった。

## 第二十七話 天ヶ崎千草の反乱

周りを警戒しながら廊下を駆ける。

先ほど刹那に携帯で連絡を取ったところ集合場所が浴場ということ  
で向かっている。

「ちっ！ 詠春もか！」

途中で石化した詠春を見つけた。さっきは石化した鶴子を見つけた。  
石化を解くことは出来るのは出来るが治癒術は得意ではないためか  
なり時間がかかる。よって後回しだ。スマン、詠春。

『だからよー、レントの兄さんとぶちゅーっ』

浴場からはカモの声が聞こえた。何の話をしてるんだ？

「俺がどうかしたか？」

「あ、レントさん」

「お、レントの兄さん、刹那の姉さんと仮契約をいっちょ、やって  
くれ」

浴場に入るとネギと裸のアスナに顔を真っ赤にさせている刹那とカ  
モが何やら話していた。

「オイ、獣、私がいる限りレンに仮契約はさせんぞ」

「ま、魔力と気が合わさればパワーアップするんじゃないかと思っ  
てっすよ！」

「あゝそれ無理だぞ。魔力と気は相反するから逆に弱くなる。融合  
させる方法はあるけど練習しないと使えないぞ」

タカミチがかなりの時間をかけてやって習得できた技だ。俺は一発  
で出来たけどね。

「ずいぶんとガツカリした顔するじゃないか。え、桜咲イ」

「い、いえ、そんなことはありません」

「エヴァ、そんなことしてる場合じゃない」

刹那に突っかかるエヴァを制止させる。

「というか刹那、そんなに俺と仮契約したかったのか？　なんかそん  
な顔をするとしてあげたくなる。」

「このかが居ないということは連れ去られたんだな？」

「すみません、レントさん。僕のせいで生徒達が……」

申し訳なさそうにネギが頭を下げる。

「なんでコイツは全部自分の責任だと感じているんだ？」

「責任を負うのはお前だけじゃないぞ。防げなかった俺にも責任が  
あるからな。急ごう、奴らを追っぞ」

「は、はい！」

気と魔力の後を追いかければ着くだろうな。

「え、あ、ちよつと待って！ 私も行くわよ！」

「え、裸で？ 意表を突くことができていると思つが止めておいた方がいいんじゃないか？」

「なわけないでしょー！ ちゃんと着るわよ！」

「きゅへー！！！」

アスナのアーティファクトで顔面を殴られた。障壁を無効化させられたのでかなり痛い。

「あの急がなくてよいのですか？」

「ああ、悪い茶々丸。オラ、早く着替えろや！」

「わかつてるわよ！！！」

アスナが三十秒で服を着る。下着は着なかつたのでそのことを指摘したらまた殴られた。

そうして、このかを奪還するために奴らの魔力を辿って追いかける。

「はあ、はあ」

「階段くらいピヨーンと降りろよ」

「出きるわけないでしょ！」

現在、本山の階段を降りている。俺や茶々丸、エヴァは楽々と降りているが後の三人は体力を消耗して降りている。

段差というのは昇るよりも降りる方が足に負担がかかるから仕方がないな、これは。

最後の一段を降りた先には仮面の女が待ち構えていた。

「やほー！アウレリアン」

「だっ、誰ですか！」

ネギ達が身構える。

やはりなあ、来ると思ったよ。

「足止め役だよ。野菜野郎達は通っていいが、アウレリアンとチビ女は通行止めだ」

「はた迷惑この上ないな。ネギ、先に行け。俺達は後から行く」

「そうだな。茶々丸、お前もだ」

「わかりました！先に行かせてもらいます！」

そう言うとネギ達は先に行った。

この場にいるのは俺とエヴァと仮面女だけだ。



「ふうーじゃっさつさと倒すとするか」

「早速、勝利宣言かよ。気が早いねー。アウレリアン、アタシの眼を視口！」

仮面女はいきなり仮面を脱いだ。

俺はまじまじと見てしまった。端麗な顔を、そして真紅に染まった女の眼を見てしまったのだ。

その瞬間、視界がフツと消えて真っ暗になった。

「え……」

目を擦る。

だが何も視認出来ない。ただ黒のみが映る。

「何だ？ ハツタリか？」

左隣からエヴァの声はする。姿は視認は出来ない。

「やられた……」

「何がだ？」

「奴の『妖精の瞳』で目が見えねえ」

迂闊だった。何故、俺とアイツが同じだと分かっていたのに警戒しなかつたんだ！？

「オイ、女。今すぐレンの視力を戻せ」

「それは出来ない相談だぜ。どうしてもというならアウレリアンの命と交換デスッ！」

後方から魔力を感じ、俺は障壁を張る。

「ゲホッ」

障壁を破られ、心臓部位を貫かれる痛みを感じた。

障壁突破を付加した魔法か！！

貫かれた部位から血が吹き出る。

魔力を使つての損傷部位の自己再生を行わせる。数秒足らずで再生は完了したが痛みはまだ残っている。

「こつち、こつち！」

声に惑わされる。殺気などが抑えられていて厄介だ。

「レン、伏せろ！」

エヴァの声に応じて伏せた。鋭い何かを通り過ぎる音が聞こえた。

「そんな避けかたじゃ駄目だよ？」

「そこだな？ 『魔法の射手 炎の53矢』」

声の方へと放つ。避けられるだろうが構うか。

「二死目デス！」

「させるものか」

エヴァが迎撃してくれたようだ。

「……後ろ」

頭に鈍器で殴られたような痛みが走る。

くそっ！ 見えないと全然反応出来ねえ！

「 斬ッ！」

空気中を斬る音が幾重にも重なって聞こえる。

俺は障壁を張りながら後方へ下がる。

目が見えないなら別の方法で感知すればいい。

神経を細く……鋭く……折れそうなほどに針のように研ぎ澄ます。

風の音、足音、声が頭が割れそうなほど耳に入ってくる。

「クツ、このちょこまかと動きやがって『氷爆』」

「当たらなきゃ怖くないね!」

気を限界まで練り上げ、周囲に広げる。そこに何かあるのかわかる。

木、茂み、人。

「余所見は厳禁!」

………来た。衝撃破だ。

左右から迫っている。

避ける?

答えはノー! 奴は俺の一直線にいる。ならば近づくべきです。

瞬動を使い懐に入る。

「ふえ？」

「だらあっ！！」

横蹴りを入れる。

不意を突いたはずだったが避けられた。

探る。

奴が斜め前方にいるのを感じた。

「エヴァ、お前は後衛を頼む。俺は前衛だ」

「は！？ おい！」

また、間合いを詰める。

「凄い、視界を奪っているのに的確だよ！ でも、残念。斬ッ！！」

目前で刃が来る。

だが、足は止めねえ。

左腕を切り落とされた。

腕に斬られた痛みが走るが残っている方の腕を相手に向けて奮う。

轟ッ！

俺の拳は地面に穴を開けただけだった。やはり、感覚だけだとかかなりの誤差があるな。

「『魔法の射手 闇の231矢』」

エヴァの声だ。

「『生命の源 母なる海原よ 数多の者を飲み込み恐れたまえ 大海の嵐』！」

これは……！ 水？

気で周りを読み取るといくつもの膨大な水の塊が俺らの方に降り注いでくる。

その際にエヴァの闇矢を取り込んで魔力が強まっているように感じる。

水の塊のようなものが降り注ぐ中俺は奴のところへ跳んだ。

「アハハハハ！！」

斬撃が俺の肉を切り裂き、魔法の射手が体内を抉る。  
その度に体中に激痛を感じる。

それらの痛みを我慢する。

取った！

断罪の剣！！

降り下ろした時障壁によって少し軸がぶれたが肉を斬った生々しい  
感触があった。

「クウウウウツ！ 腕がやられたか」

どうやら、片腕を斬ったようだ。

「『闇の吹雪』」

「マズイね。劣勢だわ」

エヴァの中級魔術が後方から来たので俺は横に跳んだ。

「転  
」

「逃がさねえ！」

仮面女が転移して逃げようとするのを防ぐため拳圧を連続して放った。

「ああ！ もう！」

後少しだ。

「これで終わりだ。女」

エヴァは何か膨大なものを投げつけた。多分、氷神の戦鎚かな？

「アタシをなめんじゃねー！」

魔力！？ いや、気の密度が更に上がった。エヴァの魔術がただの拳で打ち砕かれた。

「レンといい、貴様といい、いくらなんでも規格外過ぎるだろ！」

エヴァは余程も悔しいのか叫んでいた。

『グオオオオオオオオオオツ！！』

大気中に膨大な魔力と共にこの世の全てを憎むような雄叫びが響いてくる。この禍々しいまでの負の塊は……

「スクナが復活したのか！？」

「今だ！ 『転移』」

「あ！ クソツ！」



俺がスクナの復活に気を取られたせいで仮面女を逃してしまった。  
なんたる油断だ。

「視力が戻った……」

「む、そうか」

目の前の風景がだんだんと見えてきた。辺りに血溜まりがいくつか  
出来ている。

「ふう、結構血を流して貧血気味だが急がないとだな」

「無理なら休んでいいんだぞ？ レン」

「いやいや、若い子達が頑張っているのに休んでいられないで、し  
よっ……」

スクナがいるであろう場所に向かって飛んだ。  
その後、慌ててエヴァも来る。

「デカイな……アレは」

「そうだな、これはもう一般人に見られてるな。ま、CGでしたと  
いう理由で記憶操作されるだろうね」

遠くの方に二面四手の大鬼神リョウメンスクナが見える。む……あ  
の白い羽根は刹那か。

ネギとアスナもアーウェルリンクスを相手に粘っている。別の場所で

は大量の鬼かな？ それらを相手に茶々丸とえーと、古と龍宮かなあれは。

「白髪を先に叩きに行くわ」

「そうか、わかった」

虚空瞬動を使いアーウェルンクスのもとに近づく。

奴のところまで後二、三分というところだな。遅延呪文を三つほど用意しておく。

「アーウェルンクス！」

「む、貴方が……」

「レ、レントさん……」

地上に降り立ってアーウェルンクスに向かって、瞬動で近づく。

「あの子は殺られたのかい？」

格闘の攻防を繰り返している中でそんな事を言い出した。

「半殺しまではやったが逃げられた『解放 千の投擲』」

雷の槍をアーウェルンクスに向けて投げつける。アーウェルンクスが下がったところで、

「『解放 魔法の射手 炎の896矢』」

魔法の射手を放ち、アーウェルンクスとの距離を詰める。

「そんなに不用意に近づいていいのかい？」 『障壁突破 石の槍』」

石でできた数本の槍が目前に花が咲くように地面から伸びてくる。

「ああ、いいんだよ。ここなら二人つきりだ」

ここならネギからかなり離れている。

俺はアーウェルンクスの体を掴んだ。

「『解放 終焉の光』」

石の槍が俺の身体を串刺しにすると同時に殲滅型の魔法を放出する。

俺はこれを自分でくらうのは初めてだ。果たしてどれほど痛いかな？

眩しい光が拡散する。

障壁を破壊し肌を焼き、突き刺さり、爆破される様々な痛みが生じる。

「クツ！！ ここまでか」

そう俺と同じくボロボロになったアーウェルンクスは言うなり転符で逃げ去った。

「なんや勝手に逃げ去りおって。お嬢様も奪われたし、もう構わへん！ スクナ！ 全て破壊したれ！」

メガネさんが自暴自棄になって叫んでいた。

「デカイといい的にしか思うけどな」

前の大戦でも鬼神兵は力は強いが結構のろかったから攻撃が当てやすかったな。

『私の出番だな。ぼーや、よく聞け、このような大規模な戦いで魔法使いの役目とは究極的にはただの砲台！ つまりは火力が全てだ』

エヴァが何やらネギに指南している。

「『リック・ラクラ・ラックライラック 契約に従い 我に従え 氷の女王 来れ とこしえのやみ！ えいえんのひようが！』」

スクナの足下の水が氷に変わりスクナを急速に凍結する。  
さすがだな。んじゃ、俺もやるか。

「『アフ・アン・リ・マダミュ・ケイオウス 契約に従い 我に従え 炎の霸王 来れ 浄化の炎 燃え盛る 大剣』」

全力の魔力を籠める。エヴァとメガネさんが何か言ってたけどよく聞こえなかった。

「『全ての命ある者に 等しき死を 其は安らぎ也』」

「『ほとばしれよ ソドムを焼きし火と硫黄 罪ありし者を 死の塵に』」

うん、いいタイミングだ。

「『おわるせかい』」

エヴァが詠唱を唱えきりスクナが砕け散ったところで、

「『燃える天空』」

空間の温度を急激に上げ、焚焼する魔法を放った。確か、急激に温度が下がったり上がったりすると細胞崩壊を引き起こすと聞いたことがあったがスクナって細胞あんのかな？

まあ、いいか。見事バラバラになったし。

「エヴァ、へい！」

「ん、ああ」エヴァとハイタッチを交わした。

「すごいよ、二人とも何あの魔法！？ カチンコチンやパワーって」

「す、スゴかったです。エヴァンジェリンさん、レントさん」

ネギとアスナ達のもとに行くと言賞賛をあげた。ん？ ネギの右腕が石化してるな。

「話をしてる場合じゃないな。ネギ、石化を治すから横になれ」

「え、は、はい、すみません」

「治療術も使えるのかお前は？」

「苦手だけどな。覚えておいて損はない『治療』」

ネギの石化の治療を開始する。うーむ、治りが遅いな。仕方ない、アレを使用するか。

影に手を突っ込み倉庫から前に買った液体状の薬を取り出す。

「レントさん」

「皆……」

声からして刹那とこのかだ。

「刹那、よくやった。このかを救出するところは正に姫を救い出す騎士っていう感じだったぞ。ほい、ネギ、これを飲み干せ」

「こ、これは……？」

「いいから、飲み干せ！」

「ンゲツ！？」

さっさと飲まないネギに苛立って魔法薬を口に流し込んだ。よし、治りが早くなった。この調子なら……

最後の右手の部位の治療を慎重に少しずつ治して行く。

「ふーっ、終わった」

「あ、ありがとうございます。で、あの……さっきの薬は……？」

「薄めのイクシール。値段は五年は遊んで暮らせる位かな？」

「本当は薄めてないイクシールが欲しかったんだけどね。全部、富裕層に買い占められた。」

「……」「……」「……」「……」「……」

エヴァ以外あまりの値段に驚愕している。

「あの、僕、そんなに……」

「あー、大丈夫、大丈夫」

ネギを手で制する。

「詠春と妖怪ジジイに請求するから」

「ええー!?!」

「というわけで本山に戻って詠春達を治してやらないとな。あ、エヴァ、逃げたメガネさんをつまえて」

「いいだろう」

こうして、後に天ヶ崎千草の反乱と言われる事件はこの日、幕を閉じた。

## 第二十九話 修学旅行最終日

昨夜のリヨウメンスクナノカミを使って、関東魔術協会を滅ぼそうとした天ヶ崎千草の企みを防いでから夜が明けた。

人命は失われ無かったがその後片付けが大変だった。例えば、戦闘によって荒れた場所の修復、リヨウメンスクナノカミの再封印、不審な音やリヨウメンスクナノカミを見たという一般人への情報操作などなど。

これらを関西呪術協会と関東魔術協会の合同で作業が行われた。この件により過激派の中から穏健派になるものがちらほらと出てきた。いずれ、関東と関西の対立は徐々に無くなって行くだろう。

とまあそれはともかく、朝 である。それもかなり早い時間帯の朝である。そんな中、刹那は本山から人知れず出ていこうとしていた。

理由は一族の掟で自分の正体がバレてしまったら、そこから出ていけないといけないのだ。

「お嬢様……レントさん……」

心残りはある。本音を言えば離れたくなどない。このかやレントとこれからも一緒に過ごしたい。

されど、一族の掟に従う。愚直なまでも刹那は生真面目なのだ。

刹那は重い足取りで出口へと到着したが、これ以上足が進まない。



ここまで来て胸の辺りが締め付けられるように苦しくなるのだ。

離れたくない。

「なんだ？ 出ていかないのか？」

刹那の後ろから声が聞こえた。振り向けば、エヴァと茶々丸の二人の姿があった。

「行きたいのですが……心残りがありまして……」

「レンの事か、アイツは私のものだからな、気にしなくていいぞ」

「……決めました」

刹那はエヴァの言葉を聞いて決心した。

「私は出ていきません」

刹那は淀よりも自分の欲を選んだ。

「む……」

「出ていけるわけがありません。レントさんがエヴァンジェリンさんに振り向くとは思えませんが、万が一そうになったら嫌ですから」

それを聞いたエヴァンジェリンの眉がピクピクと動く。

「貴様、私を馬鹿にしているのか？ アイツは昨日は振り向いたぞ」

「その後、マスターの余計な一言で無駄になりましたが」

「うるさいぞ！ 茶々丸！」

補足を付け加えた従者に声を荒げた。

「前にレントさんが私にエヴァンジェリンさんは煩いしストーカー  
みたいで恋愛感情は無いと言ってましたよ」

刹那は思い出しながらさらりと言った。

「そ、それはアイツが素直じゃないからだ」

「マスターの態度が悪いからだと思いますが……」

「さっきからお前はどっちの味方だ！」

「私は事実を述べているだけあああああつ。そんなに巻かれては  
あああああつ」

「最近の貴様の生意気な言動が目にも余るぞ？ このっ、このっ」

茶々丸を黙らせるためにエヴァはゼンマイを過剰なまでに巻き続け  
る。

「とにかくだ。アイツは渡さん」

「私もです」

お互いに胸を張ってを宣言し合う。

「ど、どういう状況ですか!？」

「これは修羅場だね」

「特ダネ、特ダネ」

「さ、三角関係」

「せつちゃんもレン君か」

「このか、アイツの事が……?」

そんな声がゴソゴソと聞こえる。きっとネギ達だろう。

「お前ら! 何を盗み聞きしている!？」

「いや、その、ねえ?」

「すみません! そんなつもりじゃなかったんです!」

「せつちゃん、一緒にがんばろーや」

「え、あ、お嬢様!？」

次々と出てきたネギ達一連によって更に騒ぎが大きくなる。

「朝からギャーギャーうるせーんだよ! テメーら! 人がせつかく休んでるのによお」

そこへ頭を掻きながらレントが来た。もう何というか顔に疲労感が現れている。

「ああ、後な……お前らの紙型がとんでもない事になっているらしい。何だっけな……えーと、ストリップを始めたらしいぞ」

「……えっ?」「」

レントは瀬流彦から送られたメールを確認しながら話す。その衝撃的な内容突きつけられた女子達に動揺が走った。

「皆早くホテルに戻るわよ!」

「おい! それは私もか!」

「さあ? そこまで書いてないな。行けば分かるんじゃないか?」

「クソツ!」

次々に走ってホテル嵐山へと目指す。レント以外の者は走っているのに対し、

「……眠っ」

レントは夢うつつの状態で歩いていた。

皆がホテル嵐山についた後、暴走した紙型をどうにか止める事が出来た。特に刹那とエヴァが対応でなんとかあった。レントはゆっくり歩いてきたためそれから一時間後に到着した。

「あゝ、だりいゝ」

ホテル嵐山の自分の部屋にて横になっている。窓から入ってくる太陽のほどよい暖かさが疲れた身体を癒してくれる。

「えと、まあ、昨夜はお疲れ様でした」

「ああ、ホントだよ……」

隣でテレビを見ていた瀬流彦が労いの言葉を掛けてきた。

昨夜の出来事を思い浮かべてみる。昨夜は……激戦だったな……

「石になった奴らを治したり、戦闘になって荒れた場所を元通りにしてやっと休めたと思えば朝早くに何か皆騒いで眠れやしねえ！」

やはり、昨夜の出来事を思い返せば、愚痴らずにはいられない。

「そっぴゃ、今日最終日だっけ？ 修学旅行」

「うん、今日で最後だよ」

「やっと終わりか……何とか激動の三日間だった。何かしら起こると思ってたけど、命を賭けた修学旅行だとは予想がつかなかった」

アーウェルンクスが出てくることも含めてな。

「僕もこんな事が起こるとは思わなかったな。昨夜は結構疲れたし」

「昨夜は一晩中の結界、ご苦労様だな」

「はははは、どういたしまして」

瀬流彦は昨夜のリョウメンスクナノカミが復活を感知して俺達が帰ってくるまでホテルに結界を掛けていた。そのおかげでホテル内の人の身の安全を確保していた。

とっさに結界を張れるとは中々の魔法使いだ。前にタカミチに聞いた所、結界系の魔法に関しては学園の中でトップらしい。

『すみませんレント君居ますか?』

いい気分でだらけていた所に部屋のノックと共に生徒らしき声があった。

「……………」

無視だ。無視！今日は動きたくない。

そう思っつて瀬流彦にアイコンタクトを取ろうとしたが

「あ、報道部の朝倉さんですか。レント先生なら休んでいるけど、どうかしたかい？」

「班写真にレント君も混じってほしいと思ひましてね」

瀬流彦ーッ！ 何対応してくれちゃってんの!？

「ああ、いいよ」

「ありがとうございます」

そして何でお前が決めてんだよ!？

「と言うわけでレント君、来て下さいね」

朝倉が部屋に上がってきて俺の服を引っ張る。

「分かった、分かった。だから引っ張んな」

立ち上がって、首を軽く回す。あゝ、完全に肩凝ってるなこれは。

「はいはい〜レント君連れて来たよ〜」

朝倉に連れて来られた場所はロビーだった。

ロビーにいたのはなんて事の無い三 Aの第六班だ。

「む、遅かったじゃないか」

この声の主はエヴァなのだが……

「何故に着物姿なんだ？」

エヴァは薄ピンク色の京着物を着ていた。長い髪は少し縛ってあつ

た。

「なに、少し試着してみただけだ。どうだ、似合うか？」

「うん、普通に似合っているし、良いんじゃないね？」

「そ、そうか……」

適当に褒めてみるとほんのりと赤みを帯びていた。

まさか、照れるとは考えていなかったな。ああ、こっぴやってエヴァの好感度が上がるのに比例してヤンデレ度が上がるのか……

「レントさん！ 班写真を早く撮りましょう！」

刹那がその声を張り上げて俺の手を引っ張る。

「……………桜咲め」

その際にエヴァが恨むように刹那の名を呼んだのが聞こえた。えーと、ドロドロフラグ？

「レント君は真ん中がいいね」

朝倉の言う通りに真ん中に立つとザジと茶々丸が俺の斜め後ろに、刹那とエヴァが横に立つ。

「よーし、撮るよー」

「早いとこ終わらせてくれ」



なんかね、居づらいんだよね。刹那とエヴァの間が特に。これって  
やっぱ、朝の騒ぎに関連してるよな？ 後で茶々丸にそのシーンを  
見させて貰うか……

「ハイ、チーズ」

と、深く考えている間にカメラのフラッシュが起こった。

「うん、オッケーだね。さて、次の班は……っと」

朝倉はそう言うと次の撮影する班に向かって行った。忙しい奴だな。

「あゝ、じゃ俺は部屋に戻るか。詠春との約束の時間まで寝てるか  
ら」

「はい、分かりました」

「そうか、なら私も休むとするか」

刹那達と別れて、俺は約束の時間まで睡眠を取るために部屋に戻っ  
た。

約束の時間にナギの隠れ家へと向かった。家に入るなり図書館組は  
中にある本をあさり始めた。

「オイ、いいのかアレ」

「素人が仮に読めたとしても単なるオカルト本にしか見えないから大丈夫だろ」

「ええ、そうでしょうね。ですが一応、注意しておきますか。お嬢様方、故人の物ですからあまり手荒には扱わないで下さいね！」

詠春が大きな声で注意を促した。

「レン様はここに来た事はあるのですか」

「いや、今日が初めてだな。前に『紅き翼』のメンバーで京都観光したらしいが……俺だけ仲間外れ」

時期的にはまだ電話つばいマジックアイテムを壊していない時だったのに……

「えと……元気出して下さいレン様」

「ああ……ありがとう、茶々丸」

やはり、茶々丸には謎の包容力があり安心感がある。

「ふう……さて、探すか……」

「何を探すつもりなんだ？」

俺の近くから離れないエヴァが聞いて来る。

「空間系の魔術書だな」

ナギも魔法世界の真実を知ったはずだから魔術書が置いてあるはずだ。……まあ、多分無いだろうけどな。ダメ元で探して見るしかない。

「術開発でもするのか？」

「茶々丸、手伝ってくれるか？」

「はい、私でよければ」

「じゃ、茶々丸はそっちの棚な。俺はこっちを調べる」

茶々丸と二手に別れて搜索を始める事にした。

「オイ、レン無視す」

「うーむ、ざっと見た感じ無いなあ」

どれもこれも読んだ事がある本だ。

「無視するな！」

「グエツ！ ぐるじい」

ずっと無視した応酬にエヴァに首に手を回され全体重を掛けられ首が絞まって行く。

「ちょっとしたイジ じゃない冗談だろ」

「言い掛けた単語が気に入らん！」

更に締め付けが強くなる。

「俺が悪かった……から……絞めるのを……止めてくれ……」

声を振り絞って出てきた声は掠れて聞こえる。

「そうだな……ここを出る時に絞めるのを止めてやるっ」

コイツ、絶対に今楽しんでやがる。

「離せ、洗濯板」

エヴァの手を振りほどく。

「洗濯板は酷いだろ！ 洗濯板はっ！」

「うるさい、怒鳴るな。事実だろうが」

「なんだ？ お前は胸が好きなのか？」

「まあ、無いよりはあった方が好きだね」

でかい過ぎず、小さすぎず、中くらいが好みだ。

「決めたぞ」

エヴァの目に光が宿る。

「成長薬を作る」

「はいはい、期待して待つてるから頑張ってねー（棒読み）」

「うつつ、見てる。絶対に作ってやる」

エヴァの発言を流して本に目を移す。不老不死だし成長とか無理だろ。

「このか、刹那君、こっちへ……明日菜君も。あなた方にも色々話しておいた方がいいでしょう。あ、レントもよろしかったらどうぞ」

三階に居た詠春に呼ばれた。

「オツケー、オツケー。今行く」

詠春の所へと行く。ついでにエヴァと茶々丸も付いてきた。

「お、これ二十年前のか」

「ええ、『紅き翼』の記念写真です。黒い服が私で赤毛のナギの左にいるのがレントです」

三階の隠し部屋に入ると目に入ったのは前に撮った写真だった。

「ええー！　なんでレンがっ！」

「全然、変わってへん……」

アスナとこのかは写真を見るなり驚く。

「アレ？ 昨日の戦闘で俺の傷が治るの見てなかった？」

「レンも吸血鬼って事？」

「いえ、レントさんは不老不死だけだそうです」

俺の代わりに刹那が答えてくれた。

「ほんまは何歳なん？」

「んーと、百年戦争の辺りだから六百歳くらいだったかな？ はつきりと覚えてねえや」

昔の事はあまり思い出せないからなあ。

「父さんとは仲がよかったですか」

「そりゃな、もうなんていうか拳で語り合う仲みたいな感じだったな」

今もまだどこかにいるとは思いが、前みたいには無理だろう。

「私はかつての大戦でまだ少年だったナギと途中から入ってきたレントと共に戦った戦友でした。……二十年前に平和が戻った時、彼は数々の活躍から英雄 サウンドマスターと呼ばれていたのです」

手すりに寄りかかって語る詠春にネギと刹那が相づちをする。アスナとこのかは首を傾げている。この二人はよく分かってないようだ。

「天ヶ崎千草の両親もその戦で命を落としています。今回の彼女の行動は西洋魔術師への恨みが原因かもしれませぬ」

昨日もそんな事を言っていたな。……ん？ 綾瀬が盗み聞きしてるのか。賢い奴だから魔法の事バレてるよなあ。ま、綾瀬はネギに任せよ。

「以来、彼と私は無二の友であったと思います。しかし……彼は十年前、突然姿を消す……」

十年前に何かがあったんだろうな。

「彼の最後の足取り、彼がどうなったかを知る者はいません。ただし、公式の記録では一九九三年死亡」

そついや、アリカ姫って今どうなってんだろ？ 一瞬忘れてた。ナギと同じく行方不明か？

「ハーイ、そっちの皆さん難しい話は終わったかなー。記念写真撮るよー。下集まって」

話が終わった所で朝倉が飛び込んで来た。

「写真なら俺らは撮ったはずだろ」

「いやー五班がまだなんで」

まだ、終わって無かったのか。

「ふーん、エヴァ達も混ぜて貰え。俺は詠春と少し話があるから入れないけど」

「は、んなもん、もういい」

「はい、行こうね、エヴァちゃん」

「あ、コラ、朝倉頭を掴むな！」

朝倉に頭を掴まれて下に連れて行かれるエヴァは滑稽な姿だった。

ネギ達が一階に下りると三階には詠春と俺の二人きりになる。

「で聞きたいんだが、このかをどうする？」

「私としては普通の人生を歩んで欲しいのですが……もう無理でしょうね」

「ああ、もう知ってしまったからな」

詠春は哀しそうな表情を浮かべた。子を持たない俺にはどういう心情なのかはよく分からない。

「そうですね……このかの好きなようにやらせます。娘が魔法使いになりたいと言うならばお願いしても良いですか？」

「教えるのは得意じゃないんだが……ま、友人の頼みだ。やってやるよ。あ、でも俺、多分厳しく行くよ？ いいの？」

詠春は煙草に火を着けて口から紫煙を吐き出し一服する。



「ええ、裏の世界で生き延びるためには仕方ないでしょう」

「了解した」

下で朝倉のカメラが切られた。恐らく、詠春と俺も写っている事である。

この日、俺は早くもこのかの鍛練メニューを考え始め、翌日も考えながら学園へと帰宅した。

### 第三十話 日常へ戻る

修学旅行から帰ってからの臨時休日。なんで休日になったかという  
とアレだ、修学旅行の疲れを取るためらしい。

だというのにエヴァが花粉症を再発したと朝、茶々丸から聞かされ  
た。

それを聞いて苛めに行こうと思いついた。胡椒と油性ペンを手に持  
ちエヴァの寝室へと続く階段を音を立てないように上がって行く。

「エヴァ〜？ 寝てるか〜？」

「……………」

ふむ、返事が無いただの屍のようだ。冗談、寝ているようだ。まあ、  
こちらとしては好都合だ。

寝ているエヴァを起こさないように慎重に足を運ぶ。顔を見ると安  
らかなそうな顔をしていた。ま、どうでもいい、悪戯をするために  
ペンを開けて行動に移す。

まずは定番のデコに肉と目を描くことだ。前髪を退かして肉と描く。  
うん、上等、上等。次はまぶたの上に目を描こうとペンを近づける  
と、

「うっっん……………」

エヴァがうなされたように呻く。マズイ、起きるのか？

「フッフ……レン……ひざまずけ……そうだ……丹念に舐めるんだ……」

寝言からして夢の中では俺を下僕にさせてアブノーマルな事をやらせているのが安易に想像ついた。  
そう思うと思わず腕に鳥肌が立つ。

「最悪な気分だ……」

何故、朝からコイツの寝言で胸くそ悪い気分にならなければならないんだ。

「フハハ……コレが……良いのか？……変態め……」

プチン……と何かが切れたような感じがする。訂正、『よつな』じやなくて完全に切れたわ。

「変態はてめえだろうが！」

そう怒鳴りながら、エヴァの口を手で抉じ開けて、大量の胡椒をザァッと流し込む。

「ぐむツ!? ゴツゲホツエホツ！」

「うわっ! きたね!?!」

せつかく、流し込んだ胡椒を吐き出しやがった。

エヴァは直ぐ様俺の胸ぐらを掴んでベットの上に引き寄せられた。

そして俺の両腕を膝でガツシリと押さえられた。こうなると人間は腕はおろか、上半身が起こせなくなるという アレ? マウント

ポジション？

「朝っぱら何だお前は、クシュン！」

「本格的にきたねえ！」

エヴァのくしゃみが顔面に掛かって気持ち悪い。

「お前の所為だろうが。全く人の口に胡椒なぞ入れおって……グジユ。覚悟は出来ているんだろうな？」

「とりあえずどけよ。パンツ見えてんぞ」

相変わらず似合わない下着をはいてんな。そして色は黒だ。好きなのかね黒。それとも悪の魔法使いだから黒なのか？

「ふ、ムラムラするだろう？」

「や、それは無いな。ナエナエはするがムラムラはねーわ」

だって俺のセンサー反応してねーし。ペタンコなエヴァには一度も反応した事が無いモノだ。

「グ……だが、身体は正 アレ？」

俺の股のアレがあるところをエヴァの手で擦られる。少々くすぐったい程度だ。

「変態さん、止めてくんない？ というか前々から思ってたんだがそんな薄着で寝るから風邪やら花粉症やらに掛かると思うんだけど」

「変態言うな！」

顔を赤くしながら怒り狂っている。この辺で苛めを止めておかないと機嫌を損ねて大変なのだが……

「へ〜んたい、へ〜んたい、へ〜んたい！」

エヴァの反応が面白くて、止められない、やめられない。

「このっ、黙れ！」

エヴァの手が俺の口を左右に引つ張り、痛みが生ずるが変態コールはやめねえよ。

「ふえんひゃい、ふえんひゃい」

「まだ言うか！」

更に引つ張られる力が強くなる。そんな中でこの家の呼び鈴が鳴ったのが聞こえた。この魔力を隠そうとしないのはネギだな……。となれば、苛めはここまでにしておいた方が良さそうだ。

「エヴァ、客が来たぞ」

「ああん！ そんなもの知るか！ そんなことより謝罪が先だ」

面倒な奴だな……。コイツ。さっさと謝ってどいてもらおう。

「この度は俺が悪かったです。これでいいだろ？」

「ダメだな。誠意が感じられないな。嘆かわしい奴め」

エヴァはわざとらしく片手で目を覆い上を向く。

まあ、こう切り返してくるのは予想通りだな。だってねさっき一瞬だけ企み顔になっていたからな。

「許してほしかったら、キスさせる。濃厚なやつをな」

エヴァの顔が自分の鼻の近くまでにグツと近づく。

そんなところだろうと思ったよ。ま、そんな要求を今出されても大丈夫ですけどね。何故かと言うと、

「あの……マスター……」

「今良いところなんだ。話なら後で聞く」

茶々丸が困ったように部屋の出入口から声を掛けてきた。茶々丸だけなら問題は無い。重要なのは茶々丸と共にいる人物だ。

「えと……ネギ先生とアスナさんが訪問して来たのですが……」

「んなもん、追い返せ。さあ、レン」

俺が顔を逸らさないようにかエヴァは手で向きを固定する。

「今、お二人はマスターの行動に絶句しておられます」

「は？ なっ！？ 貴様ら!?!」

エヴァが部屋の出入口の方に振り向く。表情は見えないが、おそらく驚愕しているに違いない。

「えーと」

「お邪魔しています?」

ネギ、アスナが戸惑いつつそう返答する。恥ずかしさからの怒りなのか、邪魔された事の怒りなのかはよく分からんが、エヴァの体が微かに震える。

「何の用だ!」

そんなエヴァの叫びと共に腕を押さえていた膝が、少しずれて力が緩んだ隙を逃さず力いっぱい上半身を起こした。

「ブツ!？」

「あ、悪い。力入れすぎた。あっはっはっは」

力余ってエヴァをベットから落としてしまった。今、床に車に轢かれた蛙みたいになっている。

「グググ、そこに直れ! この馬鹿!」

立ち上がったエヴァが鼻から血を流しながらこちらに指を突きつけてくる。

「あああ、マスター……鼻血が……」

そんな情けない姿を見兼ねて茶々丸がハンカチでエヴァの鼻血を拭く。

「エヴァの反応は飽きたから、もういいや。で二人共、何用よ？」

今もなおギャーギャーと何か言っているエヴァをその辺に置いておいて、ネギの方に体を向けた。

「あ……ハイ。エヴァンジェリンさんとレントさん！ 僕を弟子にして下さい！」

ネギは床に屈みそんな事を言い放った。

「何？ 弟子だと？ アホか貴様。そんなもん、そこにいる英雄なのかよく分からん奴に頼め。私はやらん」

や、それさりげなく酷くない？ 英雄なのかよく分からん奴って……まあ、俺も同感だけど。

「弟子ねえ……金さえ払ってくれば、やってやらない事も無いけど」

「アンタ、ネギのお父さんの友なんでしょ！？ なのに金って何よ！」

金というワードに反応したアスナが問いただしてきた。

「バカヤロー、英雄なんざただの名誉だ。金なんて全然入って来ねえんだよ。今は給料貰えているからいいが、大戦の時なんてほとん



どただ働きだぞ。で、最終的に貰えたのが『偉大なる魔法使い』ってなんだよ！ 飯すらまともに食べねえし！」

はあ、はあ、少し息が切れたな。なんだよ、その目はよ？ 同情すんだったら金くれよ！？ 落ち着け俺。COOLになれ。

「とにかくだな。その、なんだ、アレだ。俺なんかよりも修学旅行で圧倒的な力を見せつけた、容姿端麗かつ悪の大魔法使いとして尊敬できるエヴァンジェリン様の強さが学びたいんだろ？ そうだろネギ」

この言葉は十割の嘘で出来ているが、エヴァのやる気を焚き付けるのに必要な事だ。

「え、まあ、大体……」

「だろ？ 聞いたか、エヴァ。悪としてのエヴァンジェリン様に尊敬しているそうさ。弟子にしてもいいんじゃないか？」

「それはち むぐぐぐ」

否定しようとするネギの口を塞ぐ。テメーは頷くだけでいいんだよ。

「ふむ……」

エヴァの反応を窺ってみると若干嬉しそうな感じだ。このままなら……イケる！

「まあ、いいだろう。だがな、私は悪の魔法使いだからな。この私にモノを頼む時にはそれなりの代価が必要だぞ、ぼーや」

「ん？」

エヴァは足をくんでニヤリと笑い、部屋がいつになく緊縛した空気になる。お、この感じは久々に悪モードか？ いいねえ。

「まずは足を舐める。我が下僕として永遠の忠誠を誓え。話はそれからだ」

「アホかーッ」

「へぶう！？」

アスナのハリセンがコンマー一秒で反応しエヴァの左頬に叩き込まれた。

「何突然子供にアダルトな要求してんのよーっ」

「あああ、貴様。神楽坂明日奈！！ 私の随時張っている魔法障壁をテキトーに無視するんじゃないっ！！」

まあ、何せ完全魔法無効化能力の持ち主ですからそんな事言っても仕方ないんじゃないかな。

「それにエヴァちゃん。後それとレンもネギがこんな、一所懸命頼んでいるのに、ちょっと酷いんじゃない」

「頭下げたくらいで物事が通るなら世の中苦労せんわー！！」

いやいや、エヴァの言っている事は至極普通の正論だが、アダルト

な要求をするのもどうかと思う。

「ハン……それより貴様……。何でばーやにそこまで肩入れするんだ？ やっぱりホレたのか？ 十歳のガキに」

エヴァが痛むであろう左頬を擦りながらそんな事を言い出す。すると、アスナの顔が面白い程にみるみるトマトみたいに赤くなっていく。そして、直ぐ様反論しながら、二発目のハリセンを打ち込んだ。二人はケンカはまるでガキの争いみたいだ。

アスナはアリカ姫の妹さんだったからネギの叔母に当たるはず。科学上では遺伝子が近い者同士は恋に落ちにくいとも言われているが、どうなんだろうか？

「ああああ？」

「マスターに物理的なツッコミを入れられるのはアスナさんだけです  
ね」

「ま、見ている分には楽しいがそろそろ止めるか」

ガキ同士みたいなケンカを止めるため二人の首根っこを掴んで引き  
離れた。

「二人の意見が対立して終わる気がしねえから、妥協案として弟子  
入りテストなりすればいいんじゃないか？」

「む……。わかったよ。テスト内容はレン、お前に任せる」

「あゝ？ テスト内容は……」

まかさ、俺が決めるとは予測していなかった。うーむどうするか？

「じゃ、俺にどんな手を使ってもいいから一撃を入れるって事で。日にちは……今週の土曜でいいや」

「え、はい、ありがとうございます！」

ネギは嬉しそうな声を出して、アスナと帰って行った。

「お前のテスト内容甘すぎないか？」

「や、でもそうしないと絶対クリア出来ない」

あのテスト内容にはかなり穴を開けておいた。重要なのは『どんな手を』だ。だから、誰かの手を借りてもいいし、近代兵器を使ってもいい。と言えども一撃をくらってやる訳ないがな。

「ふ、それもそうだな。さて、先ほどの続きだ、レン」

「ん？ ああ、アレか、エヴァが生ニンニク三十個食うんだったな。茶々丸」

「既に用意出来ています」

茶々丸がニンニクが入ったポウルを手にはさすがは茶々丸。俺のやりたい事を理解している。

「違っわ！ この馬鹿従者共！」

「そ、じゃあ茶々丸馬鹿同士で愛を深めよう」

茶々丸の手を握り顔を近づける。

「え……あ……ははは、はい……」

茶々丸はオーバーヒートの所為で顔に熱を持った。

「オイ、コラ！ 茶々丸から離れろ！！」

俺の首を絞められるのはさすがに苦しいが、エヴァの反応はたくさんパターンがあるのでやはり弄りがいがあるな。

それはさておき、ネギはどこまでやれるか楽しみだ。

期待しても……良いよな？

### 第三十一話 力ある者は勢い余って壊す事がある

弟子入りテスト当日、世界樹前広場にてネギを待っていた。テストの日にちななのだがなんかエヴァと佐々木の一悶着があったらしく土曜から日曜の午前零時になった。

「やってみる？」

「ルールマデハ知ランケドナ」

「な……な……えーと、何でやねん！ ゲ、『ん』がついちまった」

約束時間の一時間前から待機しているので暇潰しにチャチャゼロと茶々丸で話し言葉でしりとりをやって待っていた。

「レン様の負けですね」

「罰ゲームダナ。ケケケ」

「よっしや、早くやれ！」

俺は手で目を覆いデコを晒す。

負けた者への罰ゲームはデコピン一発だ。

「それでは失礼して」

一番手は茶々丸だ。足音が近づき数秒経って、遠慮がちに軽くペン

ツとデコピンが打ち込まれた。

「クケケ、妹ヨ、モット中身ガ出ルクライ勢イヨクヤレヨ」

「レン様にそんな酷い事はできません。姉さん」

「デコピンツテノハヨー、コウヤルンダヨー！」

チャチャゼロから弾丸のようなデコピンが      じゃなくて拳が飛んできた。

「くらってたまるかアアアッ！」

「避ケンジヤネーヨ」

「デコピンだつて言ってんだろ、このオンボロ！」

どこをどう解釈したら拳が入れる事が出来るんだよ!?

「お前らはよくそんな無駄な体力使えるな？」

と、エヴァが呆れたような目でこちらを見ていた。

「マスター、その秘密は私達、青春していますから」

「青春ダゼ」

「エヴァはもう歳があんな感じですからババ臭くなってんだ」

青春……良い言葉だ。

「お前も年齢的にはジジーだろうが」

「男って生き物はな単純でいつまでも少年の心を忘れないでいられるんだよ」

少年の心を忘れない方法は友情・努力・勝利の三原則を持つ漫画を読むことだ。

アレを読むと心が燃える。コスモを燃やせだ。

「そーいやさ、気づいたんだけど一時間前に来る必要無くな？ 退屈なんだけど」

「貴様が帰宅するなり寝るからだ。お前は一度熟睡すると中々起きないだろう。テスト時間に遅れては敵わんから早めに来ただけだ」

「さいですか」

暇だねえ。む……エヴァにあの事を話してみるか。

「なあなあ、エヴァ、エヴァ」

「な、なんだ？ レン」

エヴァの首に腕を回して呼びかける。

エヴァの声に若干の動揺が感じられた。

「俺が帰宅早々に寝た理由を知ってるか？」

「昨夜から夜が明けるまで私が買ったRPGをやってたからだろ」



「うんうん。王道ストーリーのね」

そう……エヴァが買ってきたゲームが面白そうだったので、エヴァがやっていない時にゲームを進めてきた。

このゲームのセーブデータは二つ。つまりは勇者エヴァと勇者レンで埋まっていたわけだ。

「そのね……何時間も夢うつつの状態でぶっ続けていたらな、勇者エヴァのセーブデータに上書きしちゃった。テヘツ」

俺は舌を出してブっしてみる。

「は……？ 嘘だろ？」

「ホント、ホント」

衝撃の真相を明かされたエヴァは茫然自失としていた。その姿はまるで魂の入っていない者のようだ。

「おーい、エヴァ？ あり？ 反応しねえ」

「コレハアレジャネーカ？ 返事ガ無イタダノ屍ノヨウダ」

それには俺も同感だ。おや、突然震えだしたな。

「貴様アツ！ 何故そんな事をした！？」

エヴァは胸ぐらを両手で掴み俺の首をガクガクと揺さぶる。

「故意じゃない、事故だ事故。色々な要因が重なって起きた事故だから、許してね、ね」

「事故だあ？ ふざけた事を抜かすな。アイテムをフルコンプし、キャラのレベルをMAXにしてラスボスを四ターンキルにしたり、裏面まで看破したこの私のプレイ時間、百時間超の結晶をどうしてくれるんだ!!」

不老不死者ってこういうところが得だよな。

どれほどゲームに時間を注ぎこもつが自分の身体の時は動かないんだもの。

「どうにも出来ないね。また、新しく始めればいいじゃん」

「上等だ。貴様のデータを消してから始めてやる」

呪うような笑みを浮かべながらエヴァはとんでもない事を口にしようがった。

「ハア!? 意味わかんねえし。ふざけんなよ! もうすぐラスボス戦なんだぞ!」

「お前も私と同じ気持ちを味わうがいいさ!」

「同じ気持ちってか、明らかに俺の方がダメージが大きいんだけど!」

後一步でクリアで全ての真相が分かるというのにその直前で消されるって……。

「ぬ、だったらラスボスを倒した後の話をしてやる。ラスボスと思われた魔王だが、実は黒幕が味方の中にいてソイツが真のラスボスでな、そのキャラは」

「あーあーあー、聞こえなーいーい！ 何も聞こえてなーいーい」

いきなり、ネタバレをし始めたエヴァの声を耳に入れないように大声を出す。

「よく聞け！ ライルが黒幕でな」

「聞きたくなーい！ 俺が悪かったから、叶えられる範囲だったらエヴァの言うこと聞いてやるから！ もうネタバレしないでええええっ！！」

「ほう、私の言うことを聞いてくれるのか？」

あ、つい言っちゃった。面倒な展開だなコレ。

「叶えられる範囲で一回だけでお願いします」

「一回？ 駄目だな。永遠にしろ」

「無理です。永遠なんてヤダ、そんなん言っただったらもう学園から逃げるわ」

永遠って……どれだけ欲望があるんだよ。  
そんな奴だったら一緒にいたくないな。

「……………」

「そんな無言の圧力を掛けても無駄だ、無駄」

「データ……消すぞ？」

「どこか別の部屋に引っ越すよ？」

脅迫合戦がここに始まった。

どちらが折れるまでこの戦いは続けられる。

「グ……わかったわかった。一回だけでいい」

「さすがはエヴァ。聞き分けがいいぜ」

「フンッ！」

素直に承諾したかと思えば忌々しそうな表情を浮かべ、そっぽ向いた。

しばらく放っておこう。そろそろ時間だ。

「エヴァンジェリンさん。ネギ・スプリングフィールド、弟子入りテストを受けに来ました」

ネギが到着すると同時に時刻は十二時になった。

「フン、ギリギリか……まあいい。早速始めるぞ。このバカにどのような手でも構わないから一撃を入れられれば合格。手も足も出ずに貴様がくたばればそこまでだ」

「その条件でいいんですね？」

「ん？ ああ、いいぞ」

くたばるまでつていうのが、よくないけど……まあいいや。俺が負ける事は決して無いし。

「てか、オメーら何でいんの？」

ネギの後ろの方に目を向ければアスナ、クー、このか、刹那、和泉、明石、佐々木、大河内のギャラリーがいた。

「はあ、ついてきてしまいました……」

「ああそう……言及する気が失せるな」

そんな事を口にしながら、ネギと向かい合う。後ろから「ネギ君やつちやえー」とか聞こえて煩い。

「よろしくお願いします。レンさん」

「ふーん、一対一……か」

仲間らしき者にも頼らないのか。ハンデと言えるかどうか分からないがハンデをつけられるルールを指定してやったのにな。

「では、始めるがいい」

エヴァの合図で試験が開始される。

「『契約執行九十秒間 ネギ・スプリングフィールド』」

ふうん、自分への魔力供給か。めちゃくちゃな術式だな。

「接近戦を望むか？ となるとカウンター狙いだな。だったら攻めにいくのは止めておこう」

ネギが一瞬ビクツとなった。凶星ですか。

ネギが構えながら顔面を狙って来た拳を払う。だが、勢いは止まらず攻め続けてくるのをいなし、避ける。

ネギの魔力供給が切れるまで守りに徹するか。

腹への正拳を防ぐとネギは身体を回転させる勢いを乗せた裏拳を見舞ってくるが 遅い。強化してもこの程度のスピードじゃぬるいな。

この裏拳も容易く防いだ。あゝ、防ぐに飽きてきた。攻めよう。

ネギの拳を受け止めて大きめの蹴りを放った。

「ぐううっ」

ネギは両腕で防ぐが衝撃までは殺せなかったらしく後ろに引きずられるように移動していた。

地面を軽く蹴る。ネギの目の前まで跳びまっすぐとした拳を突き出した。

その突き出した方の手首を掴まれて、肘うちが迫って来る。

「おせえッ！」

そんな遅いものをくらうものか！

肘うちの軌道ずらしてネギの顎に遠慮なく打ち込んだ。

ネギはボールのように数メートル空に浮かび嫌な音を少し立てて地に墜ちた。

「カハッ！」

『こんなものだな。九歳にしては出来るほうだが……終わりだな……』

エヴァが試験終了の合図を出そうとする。

「ま、待って下さい……」

ネギは身体を重々しく起こした。

「は？ 貴様は負けたんだ。ガキは早く帰って寝ろ」

「まだ試験は終わってねーぜ、エヴァ。だってネギがくたばるまで試験は続けられる、だろ？」

『あ！ お前、まさか！』

ネギはニツと微笑み頷いた。

「だけど、それに気づいたんなら『どんな手を使っても』というルールを何故使わなかった？ 誰かの手でも借りれば一撃を入れる可能性が上がるだろうに」

「その事は刹那さんから言われました。ですが、これは僕の弟子入りテストですから、自分の力だけでやらないといけないんです」

その言葉には偽りは無いようだ。ナギとは違う考え方だ。仮にナギがこのテストを受けるとしたらルールを最大限に利用するだろう。あるいはルールそのものを破るだろうな。

「うんうん、その意志はいいね」

ネギの瞳が一瞬だがアリカ姫のとダブって見えた。ネギの行動を思い返せば案外似ているのかもしれない。特に自分だけで解決しようとするところや、くそ真面目なところが。

「だけど……そんなもの、圧倒的な力の前じゃ塵に等しい！」

縮地と言っているほどの瞬動でネギの後ろに回り込む。両手を組んで首筋に迅速に打ち込んだ。

『え？ え？ 瞬間移動？』

『いや、あれは……瞬動か縮地という武術の一つアルヨ。しかし、あのレベルは達人クラス……勝ち目が無いネ』

そんな声の中、ネギは立ち上がり、向かってくる。

ネギが拳を振るいそれを受け流して吹き飛ばすというループが続け



られる。

「こっち、こっち」

「ハアハア……」

その繰り返しの中でネギの身体は傷が次々作られていく。

『もう見てらんない！ 止めてくる!!』

『オ、オウ、アスナ』

我慢が出来なくなつたのかアスナがこちらに向かって来ようとする。二人を相手するのもまた一興か。

『だめー！ー、アスナ！！ 止めちゃダメー！ーッ』

それを佐々木が防ぐ。

佐々木とアスナの話聞きつつ、ネギの攻撃を交わしてカウンターをくらわせ続ける。

佐々木、曰く。ネギは覚悟があり目的がある大人だと……。

あやふやな夢みたいじゃなくて明確な目的を持っている人はいるのかと……。

これを聞いて、少し首筋の辺りが痒くなった。

若さとは甘酸っぱいものだな。

『ネギ君は大人なんだよ。だって目的持ってがんばってるもん。だから…… だがら今は止めちゃダメ』

その言葉と同時に、あるいはコンマ差で最大限の気を込めた蹴りをネギの鳩尾に入れて、吹き飛ばした。

蹴りを入れた時に、魔法障壁を確かに破った感触が確かにしたのだ。マズイ、死んだかも……。

一同沈黙。それもそうだろうな。

吹き飛ばされたネギは壁に衝突し頭から血がドバドバと留まることを知らぬが如し流れ出ている。

あの調子では間違いなく死に至る出血量だ。

『ネギくーん?!』

『ヤバイってこれは!! 救急車呼ばないと!!』

「オイ、馬鹿か! 貴様は勢い余って本気を出すな!! 死んだらどーする!?!」

ネギに駆け寄る生徒達、俺のところ詰り寄って来るエヴァ。この場の空気が緊縛していく。

「あう……ハアハア……」

「ネギ、大丈夫!?!」

苦しそうに息をするネギにアスナが呼びかけるが、ネギが再び立ち上がるうとする。

「ちょっと!?! 動いちゃダメだって」

「いえ……まだ、戦えます……」

「ネギ坊主、このままやったら死ぬアルヨ！」

アスナ達の制止を振り切つてネギは今もなお立ち上がることをする。

「だあああつ！ もうこのバカガキがつ！ 合格だ！ 合格にしてやるから安静しろ！！」

合格という言葉聞いたネギは永遠の眠りに着くよう倒れ込む。えー、何それ？ 納得ができない。

「おいおい、俺は一撃もくらつて無いぞ？」

「うるさいわ！ こうでもせんと止まらんだろ！！」

エヴァに本気で怒鳴られた直後にタカミチが突如現れる。おそらく、どこからか盗み見していたのだろう。

「ネギ君は僕に任せて、君達は寮に戻りなさい」

「そんな！」

「寮の就寝時間に出歩いてた事は不問とする。だから、戻るんだ」

「……はい」

タカミチのいつもと違う雰囲気には圧されて生徒達は渋々と戻っていく。

「スマン、少し本気出しちった」

「あなたはいつたい何を考えているんですか!? ネギ君をこのよ  
うな目に合わせるなんて!」

穏健なタカミチにしては珍しく怒りを露にしていた。

「何って……弟子入りテストだけど」

「そういう事を聞いているんじゃない。あなたは何故、彼を大怪我  
させるような事をするんだ!?!」

「はあ……何を言ってるんだろ?」

「大怪我させるような意図はしてねえよ。それにこちらの世界でケ  
ガをする事なんざ珍しくねーだろ?」

「あなたはネギ君が再起不能になったらどうするんだ!?!」

「そこまでの器だったとして諦めるね」

そう言い切ると共に無音の拳圧が飛んでくる。

「っと、危ないな。何を怒ってんだよ?」

「あなたの態度にだ」

タカミチは手をポケットに突っ込み臨戦態勢をとる。  
まったく、何か俺、間違ってるのか?

俺はタカミチに呼応するよう魔力を高める。

「お前ら、止めんか！ そんな事をしてる暇があったらばーやの治療をしろー！」

そんな戦う気満々だった空気はエヴァによって破壊された。

「それもそうだな。タカミチ、話は後でいくらでも聞いてやる」

「その言葉に偽りは無いでしょうね？」

「ああ、我が親友、ナギに誓って」

タカミチの殺気が急速に引いていったのを確認して、ネギの治療へと取り掛かった。

### 第三十二話 会談・密談

ネギの傷口を治療した朝、俺は学園長室へと赴いた。

今現在、学園長室は空気が重苦しい状態になっている。

向かい合って座っている俺とタカミチ。間を取るように中間に座すは妖怪ジジイだ。

「あなたはネギ君が死んでもいいと言うのですか！」

「ただ、死んだらそこまでの奴だったと思うだけで死んでもいいなんて言っただけでねえだろ」

死んだら、運が悪かったとしか言いようがない。

「それは、死んでも死ななくてもどちらでもいいと言っているようなものだ」

「はあ、何でそうなるのかな」

もう、一時間前からずっとこの状態だ。

いい加減不毛な論争は飽きてきた。

「もし、本当に死なせる気がないなら手加減をきちんとしてください。彼はまだ未熟なんですよ」

タカミチの言い分が頭にきた。

未熟だから　　という理由はおかしい。

「未熟だろうが何だろうがこの世界に踏み込んだら、いつ死んでもおかしくないという心構えを持っていて当たり前だ」

そう、これは魔法使いとして、裏世界の住人として、いつも胸においておく事だ。

「仮にそうであったとしても彼は子供なんだ。注意して見守らないといけない」

「まあまあ、高畑君もレント君も落ち着いて」

ジジイが仲介に入り、タカミチがこちらを睨み付けたまま黙り込んだ。

そんな事を気にせず俺はお茶を喉に通す。

ああ、お茶がすっかり冷めていやがる。

「そもそもさ、子供扱いするなら教師なんてやらせないよね？ それに、学園には魔法生徒なる子達がいるというのに何故ネギだけが特別扱いなんだ？ 答えてみる、タカミチ」

「……それは」

タカミチは眉間にしわを寄せて、言葉を詰まらせた。  
更に深く追求する。

「ナギの息子だから……だろ？ 英雄の息子、期待の天才少年、偉大なる魔法使い候補。うん、素晴らしい肩書きだな。周囲からは期待と羨望、仮に何か失敗しても英雄の子だからといって罰を与えられない。すごい寛大な処置だな」

ジジイの顔から汗が流れ出る。心当たりがありまくりなんだろうな、きつと。

「疑問さえ抱かなければ楽な人生だろうね。だって、周囲から押しつけられたレールの上を歩いていけばいいだけだもの」

「押しつけてなどいない」

声に力が入る。

「そうか？　じゃあズバリ言おう。お前、ネギを見てないだろ」

タカミチは何を言っているのか分からないというような表情を浮かべる。

「お前さ……ネギにナギを重ねてしか見えていないんじゃないか？」

「僕はそんな風に見ていたりしていない！」

タカミチは声を荒げ、手を握ってテーブルを叩く。

「そうか？　ま、もういいや。追求すんのが面倒だ。話はこれで終いにしよーや」

軽口を叩きつつ、席を立って出口へと向かう。

扉に手を掛けて開けようとすると後ろから声を掛けられた。

「レント君、君には真の意味でネギ君を成長させる事ができるのかのう？」



「んー、俺がする事は挫折を味わせる事くらいだな。そこから成長できるかどうかは彼自身の行動次第ですよ。基本的な事はエヴァに任せるから、俺はほとんど出番が無いと思うがな」

エヴァは人間の醜さを体感している分、真理をぶつけてくるからね。偏った考えをしているネギにとって良い師になる事は確かだろう。

「そうか、すまないな呼び止めて。後、このかの事じゃが……わしからもよろしくお願いする」

ん？ 何の事だ。このかに何かあったっけ？ えーと……

「あーっ！ やべっ、すっかり忘れてた。サンキューなジジイ」

「え、婿殿との約束なのに……忘れられるって……」

思い出した。

このかに魔法の使い方を教えなきゃいけないんだった。

とりあえず、急ぐ。

扉を分造作に閉め、廊下を軽く駆ける。

このかに連絡を取るために携帯を取り出したところで、角を曲がる。

「や、レント先生。奇遇だネ」

制服姿の超鈴音とエンカウント遭遇しますた

「今日は学校は休みだ」

「やだなあ。それくらい、知ってるヨ」

相も変わらず、作ったような笑みを崩さない。アルと同様なタイプだ。

「そうか、部活か。頑張れよ」

俺は避けるようにして超の横を通り抜ける。

「部活でも無いヨ。レント先生に話があてネ」

「今日は用事があるんだ、じゃあな」

一時、立ち止まったが再び歩き始めた。

だが、超は諦めない。

「可愛い教え子が話があるというのに立ち去るなんて酷いヨ」

超はそう言いながら、腕にガツシリと組んできた。

ためらいも無くというかコイツ、わざとやっていやがる。

「胸あたってる」

「うん、知ってるヨ。ネ、お願いだよ、内密な話が見たいんだ」

更に一層に胸を押しつけてくる。しっこい。エヴァ並みにしっこい。

「わかった、話を聞こう」

「ホントか？ なら、人気の無いところを歩きながら話そう」

人気の無いところと言つことは聞かれたくない話と言つ事なのだろう。

「つーか、腕離せ！」

「いいじゃないか、減るものではないしね」

そうだけど……。

「誰かに見られたら、俺が困るんだよ」

「アハハハ、その割りには慌ててる様子が見えないネ。案外、満更でも無かたり？」

「ああ、本音は胸の感触にもものっそい喜んでる」

胸があるっていいね、やっぱり。

家にいる主はよく抱きかかってくるけど無い からなあ。

「……最低な教師だネ」

超は俺から少し離れて冷たい目で見てくる。

「自分から振つといて何その反応!？」

「そのような事を考えていただなんて弟子として複雑な気持ちネ」

超は何故か悲しそうな表情を浮かべてため息をつく。

「弟子なんてとつた覚えは無い」

「いやいや、これホントヨ。私はレント先生の弟子アル」

校舎から出た矢先に超はこちらに振り返って微笑む。

「なんだよ、お前、未来人とも言いたいのか？」

冗談混じりにそんな事を言ってみた。

過去に弟子はとっていないから可能性としては未来だが、時間移動なんて無理。

「そだヨ。私は未来から来た」

やっぱ、んなわけ無いか……って、

「ええええええええつ!？」

「アハハハ、驚愕する師匠は初めて見たネ」

「……お前、それ本気で言ってるのか？」

一時、驚いたが冷静に考えよう、まだ未来人であるという確証が無い。

「ウン、世界を救うためにやって来たヨ」

人気の無い道を歩きながら朗らかな声でそんな事を言う。

「ふーん……」

「む、信じて無いの力？」

「さっきは思考が先走ったからな。冷静に考えるとお前が未来人であるという確証が無いじゃん」

未来から来たというのを証明する物が無ければ、信じられん。

超は俺の耳元に口を近づけて、囁いた。「魔法世界の崩壊」と……。

「……誰に聞いた？」

「これは私自身が身を持って体験した事ネ。どうか、信じて欲しい」  
超の瞳に悲哀の色が浮かび上がる。

「頭がお花畑になっているようでもないようだな……んー、一応信じよう」

「やっぱり、性格が違うナ……」

未来の俺っていったいどうなっているのか、かなり気になるんだが……。

超に聞いてみると、今みたいな軽くてスケベな野郎じゃなくてとても優しく、厳しいとの事。

例えるならイギリス紳士の厳しくなったタイプだとか。

ハッキリ言おう、誰ソレ……？

「で、本題に入ってくれ」

軽く話をしたからそろそろ本題に入って欲しい。

「単刀直入に言おう。私の計画に協力して欲しい」

「うん、何が言いたいのか全然分からん。計画の内容を話してから人に聞こうね」

「むう、何故かあなたに言われるとカチンと来るものがあるネ」

超は口を尖らせる。

俺は何一つ間違った事はいつていない筈なのに、自分が間違っているような錯覚を受けた。

「いいから、早く言え。弟子（仮）」

「グツ、まあいいネ。世界に魔法の存在を認識させるのを手伝って欲しいヨ」

「どうやって認識させる気だ。魔法使い達の隠蔽工作は早いぞ」

魔法の存在が一般人に目撃されても、魔法使いはありとあらゆる理由をつけて隠蔽する。

例を挙げると、作り物だった、原因不明の幻覚だった、とある映画の撮影だった、と理由をつける。

仮に俺が魔法使いだとメディアを通して報道しても、最低一日後には彼は錯乱していたと報道され、頭の可哀想な人に認定される。

「世界樹が発光する魔力を使い、世界の十二ヶ所にある魔力貯まりを共鳴させて強制認識させるネ」

「無理じゃね？」

強制認識とは人の心に意図的に植え付ける魔法だが、無い事をいきなり在る事に認識を変えるのは不可能に近い。

「いやいや、ただ少しだけ魔法への認識を下げるだけヨ。後は魔法が行使されている映像を流出すればいいだけネ」

「……なるほどな。それなら確かに可能だな」

「では」

おもちゃを期待する子供のように超の目が輝く。

「少しだけ返答を待ってくれねーかな？ 魔法をバラす事のデメリットについて心の踏ん切りがつかない」

一番の懸念が世界に魔法の存在が知れわたる事によって、魔法が兵器に転化される可能性がある。

「仕方ない力。じゃ、麻帆良祭が開幕するまでに返答を待つヨ。できればこの話は内密にしてほしい」

「もちろんだ。一般的な魔法使いに耳が入ったらマズイからな」

「助かるヨ。それではまたネ」

超との話を終えて別れた。彼女の姿を見ながら一息する。

魔法がバレれば魔法世界の人達の移住が可能になるが、簡単にこちらの人々は彼らを受け入れる事が出来ないだろう。だって、今もなお人種や民族の問題で争っている。

全て　　までとは言わないが何割かの人々を移住させる事が出来れば御の字だ。

「今はそんな事を考えるより、このかの方が先か……」

先ほど連絡しそこねた、このかに宛ててメールを打ち、エヴァの口グハウスへと足を向けた。



### 第三十三話 温厚な人は怒らせない方が良く

頭の中がぐるぐる、かき混ぜる。

我が自宅もといエヴァハウスの道程を歩きながら超との言葉を脳内再生をする。

「世界に魔法をバラす……か……」

魔法が明かされれば間違いなく歴史が変わる。

それに、未来からわざわざ来たというくらいだから、魔法世界を救う方法を考えてあるだろうな。

「か考えていねえと移住だけじゃあ、根本的な解決には至らない。

なんたつて、魔法世界と魔法世界の人々は同一だからなあ。」

中々難しい問題だ。今の時点での答えは解答不能、答えが見つからない。

もたもたしていると『完全なる世界』に追い越されてしまう。

世界の造り方も全然わからないし、俺の手は八方塞がりだ。

何かあるはずだ。魔法世界を造った『始まりの魔法使い』だって元は人間なはずだから、俺にだって出来るはずだ。

そんな風に思索しながら歩いていると、自分の視界に何かが入った。エヴァのログハウスだ。いつの間にか着いていたらしい。

「ただ……いま？」

中に入った途端に陰険な空気を感じ、恐る恐ると声を出す。

リビングの方へ目を向ければ、このかと刹那が、不機嫌そうなエヴァと向き合って座っていた。

「お帰りなさいませ、レン様」

「おう」

そんな中で始めに迎えてくれたのは茶々丸だった。ふうふう癒される。

「レン君、お邪魔しとるえ」

「あ、お邪魔しています」

「悪いな呼び出して」

このかは顔を綻ばせて、「そんなことあらへん。むしろ、嬉しいよ」と言葉を返してきた。

最後の方の言葉と共にエヴァは眉間を寄せる。

「お前が呼んだのか？」

そして、えらい位不機嫌そうなオーラをこちらにぶつけてくる。

「まあ、このかは呼んだな」

「そうか、桜咲は呼んでないんだな」

エヴァは刹那に視線を移し、威圧する。

えー、つまりはアレですか？ 生徒とはいえ女子を呼んだことへの

嫉妬？

「刹那は……このかの護衛があるからいいんじゃないか」

「ええ、お嬢様の護衛です」

刹那に視線を送ると俺の声に続いた。

「嘘つけ、桜咲」

「嘘ではありません」

互いに睨み合う、エヴァと刹那の間に激しく火花が走る。

この二人って、これほど仲が悪かったわけ？

「レン様、コーヒーをお持ちしました」

「サンキュ、茶々丸」

砂糖スティックを一本使用して一口飲む。うん、やはり茶々丸の淹れたのはうまい。

「レン君、大事な話って何なん？」

このかは指をモジモジさせて、何かを期待するような眼差しをする。

「ああ、詠春からこのかがもし、魔法を学びたいのであれば教えてやってくれと頼まれたからな。魔法を学びたいかどうかの意思を聞きたい」

「他には？」

「他？ この話だけが」

「え？ パクティオーとか愛の告白とかじゃないん？」

「……何でその話なんだよ？ ほら、そんな話するからエヴァの鋭い視線が俺に突き刺さってくる。」

「……はあ」

そこで、刹那も残念そうにため息をつくなよ。

「で、どうする？ 魔法側の世界に入るか、前と同じゆうに日常生活を送るのかの選べ」

「選択技なんて、あつて無きようなものやん。もう、魔法を知ってしまったんじゃ、知らんふりをして過ごすなんて出来へんよ」

「まあ、そうだな」

このかは素直な眼差しを向けてくる。

「魔法を教えて、レン君」

コーヒーを飲み干して、再び、このかの方へ顔を向ける。

「おう、体力的な事ならな。理論的な事はエヴァに教えて貰ってくれ」

「ヤダ」

エヴァから一秒も経たないうちに拒否された。断るにしても、少しは検討して欲しいものだ。

「私はそんな仕事なぞ引き受けてない。お前一人でやれ」

「けっ、頭の固い女だな。いいぜ、俺一人でやったるうじゃねえか」

本音を言うと無理。基本的な魔法理論とか、初歩的な仕組みとか教えられねえ。

理由は簡単。そんなん知らなくても、自分は大抵の魔法を行使できるからだ。

「クククク……」

「あんだよ、いきなり笑い始めやがって」

「何でもないさ。ま、せいぜい頑張れ」

エヴァは終始、ニヤニヤしながら二階へ上がって行った。腹立つ！あの自信満々で見透かしたような顔がムカつく。

「という事は……」

「レン君とマンツーマンや」

「まあ、そういう事になるか。よし、早速授業だ」

うまく説明できるか、分からんが、やれるだけやってみよう。

「私も同席してもいいでしょうか」

「当然の如く、このかのパートナーとして魔法の仕組み位は頭に入れてもらおう」

「ぱぱぱ、パートナーアア？　そ、それはどついう意味で……」

刹那の顔がゆでダコのように、耳まで赤くなっていく。  
その隣のこのかは嬉しそうに笑っていた。

「いろんな意味で」

「いろんな……意味……ということとは……」

俺の一言で刹那は頭を抱えて考え始めた。

やばい、楽しい。エヴァ以外の人をイジルのが楽し過ぎる。

「せつちゃん、考えすぎや〜」

「や、やっぱりダメですつ。同性同士が結婚だなんて」

このかが刹那の肩を軽く揺ると、反射レベルで珍発言を繰り出してくれた。

「へえ、将来はこのかと結婚か〜。式を挙げる時は呼んでくれ」

「せつちゃん、ウチ、うれしい」

「えっ、ああーッ、違いますつ！　今のは忘れて下さいー！」

無理。しっかりと脳内フォルダに記憶しておいた。  
やっぱり、若い子っていいねえ、初々しくて。

「フフフフフ」

「レントさん！ 笑ってないで話を進めて下さい！」

「オーケー、時間も惜しいし、真面目にやりますかね」

刹那が必死さに免じて、授業に入る。

「まず、魔法がどうやって行使されるかイメージ出来るか？」

「イメージ？ ぬーとな、こうなんかドバーって使う感じ？」

このかが大げさな身振りで自分のイメージを伝えてくる。  
俺も行使する時はそんな感じだけど……。

「そついう事じゃなくて……」

「自動車という魔法を動かすのにガソリンという魔力を注ぎこんで  
動かすという風でしょうか？」

「おっ、その喩えはわかりやすい」

ナイス、刹那。

「それにつけ加えらしたら車にガソリンを容れられる量が人によ  
って違う。」

容れらる量が多ければ多いほど、扱いにくい。このかの魔力はネギをもしのぐ」

「ほえ〜、すごいなあ〜」

他人事のように感心するこのか。……大丈夫なのか？ この子。

「で、だ……、修行方針としては自分の身を守れるくらいのレベルまで育てて、従者と組んでの戦闘の仕方を覚える事だな。あと、治癒術」

「大変やなー」

「まあ、じっくりとやって行くしかない。あ、刹那、お前、いつそのことここで、このかとパクティオーしちやえ」

「ななな、何を言い出すんですかアア」

またもや、テンパリ始める。このかの従者をやるのは刹那かいない。それに、パクティオーの機能の一つである、マスターからの魔力供給する練習をさせたいからだ。

「マスターから供給される魔力は気と相反するからな、気を消して魔力を受け取る練習だ。緊急時にパクティオーして魔力、受け取れませんでしたじゃ話にならないぞ」

「あついつつ……」

「せつちゃんはなく、ファーストはレン君にして モゴモゴ……」



「お嬢様アアツ!!」

刹那はこのかの口を塞いだ。  
さつきから同じようなパターンの繰り返しだな……。

「じゃ、パクティオーの件は後にしよう。まずは魔法だ。『プラ・クテ・ビギナル 火よ灯れ』『プラ・クテ・ビギナル 風よ』」

「おおー、すごいな」

練習用の杖を取り出して、初歩の魔法を披露する。

「この二つを一週間くらいで習得してこい」

「魔法というのは、そんな簡単に覚えられるものなんですか？」

「普通は無理。初歩の魔法、一つ習得するのに一週間ちょっと掛かる。才能の無い奴なら一月は掛かる」

このかは魔力量が多いから、一般よりはマシじゃないかと思う。

「ま、寮で練習しろ。習得したら報告してこい」

「わかったで」

このかに練習用の杖を渡した。

何秒かするとこのかは何かに気づいた。

「はい、はい。習得するコツは何なん？」

「その魔法が起こす現象を、脳内でイメージする事だな。他に分か

らない事があつたら　ネギに聞け」

「丸投げですね……」

刹那は呆れたような目を向けてきた。

だってさ、秀才がこのかと同室なんだぜ？　これを利用しない手は無いだろ。

「ネギに聞けばこのかは上達して、俺の仕事が減ってゆっくり出来るから、皆が幸せになるじゃん」

「結局、それが一番の理由ですか」

「刹那のくせに生意気だ」

デコピンの嵐をお見舞いするが、腕をガシリとこのかに掴まれた。

「レンくん。せつちゃんを苛めたらアカンよ」

「ハイ……、スミマセンデシタ……」

このかの背から溢れでるナニカに圧倒される。

逆らえる雰囲気じゃなかったから、素直に謝った。

今日の戒め

このかの前で刹那を苛めるな　以上

### 第三十四話 一生懸命に……ね

学園内の結界の境の近くにて、エヴァがネギに修行を付けるそうなので、それに同乗してこのかの修行をそこでする事にした。

「『プラ・クテ・ビギナル 火よ灯れ』」

このかが呪文を詠唱するが火は灯らず魔力だけが離散する。

「あ〜ん、灯らん」

「はいはい、続けて、魔力だけ放出しているんじゃない意味が無い」

「レン君、休まへん？ ウチなんだか身体がだるくなってきた」

二時間半経過した今、このかは肩で息をする状態まで疲れはてていた。

呪文を唱える度に放出される魔力量が莫大に垂れ流しになっているので、当然の結果だろう。

魔力を放出する所までは出来ているのだが、使用するには至っていない。

「んーじゃ、ネギの修行見学に切り替え」

「ほな、了解」

休憩を伴ったの見学に切り替えると、待っていたかのように刹那がこちらに来た。

「お嬢様、飲み物をどうぞ」

「ありがとな、せつちゃん」

刹那はこのかにスポーツドリンクを手渡した、二人の間にほんわかムードが流れる。

「レントさんもどうぞ」

「サンキユ」

刹那から缶コーヒを受け取り、フタを開ける。そして、飲みながら三人で数メートル離れた所にいるネギの修行場所まで歩いた。

ちょうど、ネギがアスナと宮崎に魔力供給しているところだった。

「五分間維持した後、上空へ向けて魔法の射手を249矢放て」

「ハイッ」

ネギは一呼吸をして神経を集中させる。

ネギの現在の修行は魔力の扱いか……。これ、後でこのかの修行メニューに入れよ。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル 光の精霊249柱 集  
い来りて 敵を射て 』」

従者への魔力供給を維持したまま、249矢が上空に向けて放たれ、学園結界にぶち当たって花火のように拡散した。

「わー、キレーやな」

「いずれはアレ位は出来るぞ」

「ウチもあんな風に花火を上げられるのか」

なんか、このかが魔法の事について話をすると、なにもかもメルヘンな雰囲気しか流れない。どうしたら、いいんだろ？

心を鬼にしてビシバシ行ってもいいんだが、ストレスが溜まりそう  
だ。

いや……待てよ。回避訓練と称してバカスカ魔法を打ち放つ方だつたら、楽しそうな気がする。主に俺が。よし、決定！ ある程度まで進んだらやろう。

「ふふふ……」

「レントさん、何を邪悪な笑みをしているのですか？」

恐る恐ると刹那が尋ねてくる。む、表に出ていたか。

「いや、何にも」

「嘘ですよ。それ……」

「うん、そだよ。嘘だよ」

素直に白状した。

刹那はまたか、というような顔をする。  
そんな顔を見ると、もっと苛めたくなってくる。

「刹那がメイド服を着て、給仕したらいいな、と思ったただけだ」

「な、何で今そんな事を考えるんですか?!」

「えっ、せつちゃん、メイド服着るん?」

「着ません!!」

顔を真っ赤にさせて否定されたこのかは「なんや、つまらんや」「  
と言いながら、249矢放った後に気を失ったネギの所に歩んできた。」

「まだ、続きがあるんだが、聞きたいか?」

「もう、結構です」

「そうか、聞きたいか。メイド服を着た刹那が脱ぐんだ。で、最終的には白パン、黒ニーソ、カチューチャで胸を一所懸命に恥じらいながら隠す」

「どんな状況ですかっ、それ!」

そついう状況にはならないからこそ、想像するんだ。想像、もとい妄想に理由を求めるのは無理だ。  
何故なら、理性ではなく感性で生み出すものだからだ。

「半分は冗談だ。真に受けるな」

「もう半分は？」

「メイド服を着てくれ。つーか着ないと刹那が刹那じゃなくなる」

「私ってどういう風に見られているんでしょうか？」

刹那は若干落ち込みながらそう呟いた。

刹那は表は堅物だけど、裏ではカワイイ服を着て、自己陶醉しているイメージがある。

まあ、そんな事は隅に置いて。

「あんま、世間体は気にすんな。気にし過ぎると自分が自分で無くなるぞ。それで無くてもお前は自分に厳しくしすぎだ」

刹那を励ますように肩を手をおいた。

彼女は修学旅行以来、少しは柔らかくなったが、人の性格というのはそう簡単には変えられず、まだまだ固い。

「そつでしようか？」

「うん、もっと肩の力を抜け。欲望の従うままに行動しろ」

「よ、欲望のままに……」

刹那の目が交錯し、拳動がおかしくなる。ちと、言い過ぎたか？この子、生真面目だからなく、暴走すると止まらない感じがする。

「ストップ、言い過ぎた。欲望のまま動くのは少しだけにしろ。なんか、お前は危険だ」

「欲望のままに……。欲望のままに……」

本格的にヤバいぞ！ 完全に自分だけの世界に入っていやがる。

「おい、帰って来い」

中指の先に少しだけ気を集めて、デコピンを軽くした。

「うあっ！？」

刹那は一瞬仰け反り、何が起こったのか分からないといったような顔をした。

そして、こちらを見るなり狼狽しつつも話しかけてくる。

「あの、レントさん……。そのですね……。わ、私はっあなたの事が……」

遅かった、もう既に暴走モードだったか……。

だが、しかし刹那よ。もう少し考えた方がよかったのでは？ 他の皆がいる近くで告白なぞしない方がいいぞ。

今、かなり視線が集中しているから。その中でも真祖さんの殺気が混ざった視線がダントツに降り注いでいる。

「私はあ……えと……」

視線が集まっている事に刹那も気付いたらしく、朱に染まっていた顔は、これでもかと言わんばかりに赤くなった。

「何でもありません！！」



「速っ」

刹那は疾風のように身体を翻して、どこかへ消え去ってしまった。まあ、放っておいても大丈夫だろう。

「さて、ネギの様子はどうだ？」

「全然駄目だな。自分の魔力を使いこなせないようじゃ、ただの宝の持ち腐れだな」

「まあ、確かにな」

少し厳しいがエヴァの言っている事は正論だ。

「それにだ。私に師事するからには、必ず強くなってもらわなければ困る」

「となると……いずれは『闇の魔法』を教えたりして」

『闇の魔法』について口を出すとエヴァは怪訝そうに眉を寄せた。

「バカかお前は？ あの術は人間が扱えるよう物じゃない」

「なに、言ってみただけだ。気にするな」

あの術はエヴァだけの専用スキルみたいな物だからな。昔、俺も試してみたけど、うまく制御出来なくて自爆した。どうも、相性が合わないらしく術の発動がままならない。

「『闇の魔法』って何ですか？」

「お前は知らんでいい」

復活したネギが術について、聞いてきたのをエヴァは一蹴した。

「エヴァのいう通りだ。そんな事よりネギ。お前、図書館島のドラゴンから逃げてきたらしいじゃないか」

「え、なんで知っているんですか!？」

「茶々丸からの情報提供があった」

映像付きで見せて貰った。

あそこまで辿り着くまでの罠に逃げ惑う姿はかなり愉快だった。

「ドラゴン……何の話だ？」

「ドラゴンって何の話なの？」

エヴァとアスナがすかさず聞いて来た。

それに応じて、昨日あった出来事について説明した。

「何であんた、私を連れて行かなかったのよ」

「それはどんな危険があるかわからなかったし……」

「それは今聞いた！ ドラゴンだか知らないけどいたんでしょ？」

何だか、雲行きがだんだん、怪しくなってきたな……。

ケンカが始まりそうだ。ここは今すぐ避難しよう。

「このか、続きを始めるぞ」

「ほへ？ でも……」

「ほら、行くぞ」

このかの手を取り、この場から離れる。

二人のケンカのせいで修行が止まるのは避けたい。

「別の場所でやろう」

「アスナとネギ君、ケンカしそーやったな」

歩きながらそんな事を喋るとアスナの怒鳴り声らしき物が聞こえてきた。

「現在進行形だな。修行だが、寮でやろう」

「寮、皆がおるのに？」

「人払いの術を使うから大丈夫だ」

基礎魔法の練習だから、屋内でも問題ない。

「え、まだやるん？」

「だって、後ちょっとだけ。頑張れよ」

「むっ、だったらご褒美が欲しいな」

求めるような目をこちらに向けてくる。

上目遣いが……カワイイ……。

「二つの基礎魔法を後一週間以内に出来たら、考えてもいいぞ」

「ホンマに？」

確かめの疑問を浮かべると同時に表情は明るくなった。

「叶えられる範囲でな」

「じゃ、約束や」

「は？」

このかは薬指を向けてきた。

俺は何が何だかわからなかった。

「ゆびきり。約束しような」

「ああ、そゆこと。いいよ」

このかの提案を承諾し、薬指を絡ませた。

彼女の指は女の子のだけであって、大変可愛らしい。

「ゆびきりげんまん、嘘ついたら、針千本飲ーます。指きった！」

「破ったら、針千本も飲むのか、怖いな」

「ふふふ、約束はきちんと守ってもらうぞ」

嬉しそうに微笑む。

「習得出来たらな」

「もちろん、一週間以内に習得して見せるんよ」

自信満々に宣言したこのかはこの後も修行を懸命に励んだ。

俺の予測では、二週間位で習得するだろうと推測したので問題無いだろう。

### 第三十五話 どんな人にも黒歴史はあった

休みが明けて、すぐに休みになった今日。なんかもう仕事、退屈になってきた。

かといって、リフレッシュするために、どこかに行こうという気持ちが起こらない。

正反対にこのかとかネギとかクラスの三分の一位は、なんか海へ出かけた。よくそんな出かける気になるよな。

だってさ、どこかに行っても最後は麻帆良に帰るから鬱になるだろ。ならない？ そう……ならないのか。

そろそろ、辞めたいなあ……教師の仕事。

働いて金を貰えるのはいいが、なんか仕事メンドイ。

「でさ、お前何やってんの？」

朝からずっと地下でゴソゴソやっているエヴァに聞いてみる。見た感じ、魔法球の調整と改装をやっている。

「魔法球の調整だ。見て分からんか？」

「それは分かってる。何でやってんの？ という意味だ」

エヴァはこちらを振り向かず作業を進めながら、「ああ」と納得した声を上げた。

「ぼーやの修行場所だ。それと、私の研究時間の確保のためだ」

「あ？ 研究だあ？ 何のだよ」

エヴァが研究をするなんて想像もつかねえ。

コイツは最強 いや、最凶か？ どっちでもいいや。

まゝなんか、魔法使いの中でも、最強の位置に入る真祖が、更なる力を求めるはずがない。

現にこの俺だってこれ以上強くなる意味が無いから、研究も修行なんてしていない。そのせいで修学旅行で致命傷までの攻撃をくらったけどな。

「む、忘れたのか……。まあ、そっちの方が都合いいから良いが」

「何かあったっけ？」

何なんだ？ 何か俺、エヴァに研究をさせるような話をしたのだろうか。

少し思い返してみるが、心当たりがない。

いや、待てよ。修学旅行で確か……世界の造り方を俺が探してたから、その事か。

「修学旅行で話をしたやつの事か」

「うん、そうだ」

エヴァは小声でそう言った。

まさか、エヴァが世界の造り方について研究してくれるとはな……見直したぜ。

「意外だな。そんな事をやり始めるなんて」

「そうか？」

エヴァは頬を少しかく。  
どうやら照れているようだ。

「ああ、少し見直したぜ。で、どこまで分かった？」

「さっぱりだな。だが、完成させてみせる」

中々の意気込みだな。少し、期待できるような気がする。

「それとな……先に言っておくが、研究経過、見るなよ」

「何だよ？」

意味が分からない。研究の内容が同じだからいいんじゃないかね。  
マジ、何なん。

「うるさいな。とにかく、見るな、踏み込んで来るな！」

ビシリと指を突きつけられ、一方的に命令された。

「まあ、いいけどよ……」

研究が完成したら、教えてくれるという事なのだろう。

先ほどの態度からして、想いは固そうに見えたから、キツチリやっ  
てくれるだろう。

「こんなもんか……」

「調整が終わったのか？」



「とりあえずはな。まだ、追加する物があるが後でやる」

魔法球の調整を終えたエヴァは、魔法球を部屋を中心に置く。そして、魔法球の中に入るための魔法陣を設置した。この作業は数分ほどで終了した。

「これ、一日が何時間のだ？」

「魔法球の一日がこっちの一時間だ。早速、入るか？」

どうするといったような雰囲気を匂わせながら、顔を向けてきた。んー、どうすつか？ 一日が一時間なあ。魔法球の中で二十四日過ごすと丁度、こちらの一日か……。

「そうだな。アーティファクトの確認でもするわ」

自分のパクティオカードをヒラヒラと見せる。

これの能力確認をよく把握してないから、この際やっておこうと思う。

「なら、決まりだな。茶々丸、チャチャゼロ、別荘に行くぞ！」

「俺は先に行きますよっ」

「おい、ま」

皆よりも先に魔法球の中へと入る。眩い光に一瞬包まれて、跳ばされた。

「うおおお、あつたけー！ 海まであるしー！」

周りを見渡せば、綺麗な景観である、青い海、青い空、光り輝く太陽。  
まるでリゾート地みたいだ。

前方にはデカイお城。城についてはどうでもいいや。  
まあ、ともかくだ。テンションが上がってくる。魔法球ってスゲー。  
俺も作ってみようかな？

「エヴァの奴、こねえな……」

俺は魔方陣の前でエヴァ達の到着を待った。

……十分経過

「待ってらんねえや。勝手に家探してもすつか」

待つのも飽きたので、エヴァの別荘を探索する事に切り替える。

「酒じゃん。しかも1900年物とか……」

いや、待てよ。時の流れが違うからそれ以上か……。  
むむ……、よし貰っておこう。

赤ワインと白ワインの二つを片手に持って探索を続ける。

「ここは……エヴァの寝室っぽい」

向こう透け透けのカーテン付きのベットだもん。  
ここで寝るのエヴァしかないだろ。

近くの横型タンスの上にはコルク抜きが置かれていた。丁度良いの

でいただく。

赤ワインのコルクを抜いて、らっぱ飲みで一口含んだ。

「くうく、たまらん」

舌に残る熟成した甘みがグッドだ。

赤ワインを飲みながら目をあちらこちらに動かしていると、ベットの下にあった一冊の本に気づいた。

手にとってみると埃が積もっていた。その埃を表紙を見たが、何も書いていない。

「何なんだろう？」

何気なく、一ページ目をめくってみる。

『赤毛に登校地獄を掛けられて、麻帆良とやらに閉じ込められた。

これも、レントが逃げたせいだ。とりあえず、次に赤毛にあったら全殺し、レントは半殺しだ。』

「……………」

すぐさまに本を閉じた。

これって……日記？ アイツが日記を書く……だと。

無い無い無い無い。全然、アイツが日記を書くところなんて想像できねえ。

多分、これは日記でも何でも無い筈です。それを証明するためにも、続きをパラパラとめくる。

『高畑とかいう奴に別荘を貸す事になった。聞けば【紅き翼】と行動していたと聞いたのでレントの場所を知っているかと思ったら、

何も知らないとか役に立たない野郎だった』

へえ、そーなのかー。

『今日はレントの夢を見た。レントは私を抱きしめて』

なんで、夢を日記に書くんだよ！

『夢のレントは私に甘えて来て』

またかよ！

『激しく腰をふっ』

アウト、アウト、アウトーッ！ 何ぞこれ。日記じゃなくて、ほとんど夢日記ってか、ただの妄想じゃねえか！！

「ダメだ……危険すぎる……」

その後も、めくり続けるが大体夢の事くらいしか書かれていない。

『卒業式を終えた。けど、レントは呪いを解きには来なかった。また、来年から一年からだ』

乱暴に書きなぐったように文章が並んでいた。そして、最後の方の部分は滲んでいて読めない。泣きながら書いたってところか？

「なんか……すごい罪悪感が沸き上がるんだが……」

エヴァはナギに呪いを掛けられて……。その呪いを掛けるナギに押し付けたのが俺だから……。俺が元凶じゃん。

少しばかり悩むとこちらに向かってくる複数の足音が聞こえてくる。エヴァ達じゃん。どどど、どうする!? この本!

手に持ったエヴァの日記をどうする事も出来ずに、三人が入ってきた。

「こんな所にいたのか……。その本はなんだ? って、貴様ツ! それは私が楽しみにしていた秘蔵酒じゃないか! 勝手に飲むなツ!」

おや、日記の存在はエヴァの記憶から抜け落ちていたようだ。命拾いしたぜ。

「オ、ソノ本、ゴ主人ガ、ニヤニヤシナガラ書イテタ日記ジャーナカ」

「マスターが日記……ですか?」

「オウヨ。ココニ来テカラ三年ダケツケテイタナ」

なんてこった。チャチャゼロが知ってやがったとはな。つーか、空気読んで発言しろよ。これ、言い逃れ出来ねえぞ。

「……日記、読んだのか?」

チャチャゼロの発言によってエヴァは思い出したらしく、身体を震わせながら尋ねてきた。

完全に怒っていらっしやる。もう素直に白状するしか手はないな。

「それはもう……すっかりと」

「その、なんだ。違うからな！ 私はいつもこんな事など考えていないな。だからな……、早く忘れる。忘れてくれ！」

エヴァは今まで以上に戸惑いながら、早口で弁解した挙句、部屋から飛び出して行った。

よほど恥ずかしかつたのであろう。まー、そりゃな……この内容を誰かに見られたらそうもなるよな。

「ポンコツ！ どうすんだ！？ めっっちゃ、気まずいぞ」

「クケケケ、オモシロクナッタジャーナールカ」

「てめえはな！ 俺はおもしろくも何ともねーよ」

チャチャゼロに詰め寄るが、反省の欠片もなくただ、酒を飲んでい  
るだけだ。

「どんな内容が……」

「茶々丸も読もうするな！」

エヴァの日記を読もうとした茶々丸から引つたくる。これ以上事態  
をややこしくしたくない。

「レン様だけ内容を知っているのは、ズルいです」

「ズルいとかじゃなくて、エヴァが死にたくなるほど恥ずかしい物だから、読むな」

「死にたくなるほど恥ずかしいですか？」

茶々丸は首をかしげた。むー、恥ずかしいという感情は分からないのかな？

「異性に裸を見られるとか、キスをしたとか想像してみ」

「キス……」

茶々丸は何か考え始めたきり、その場から微動だもしなくなった。

「茶々丸？ 大丈夫か？」

「はひい！ らいじょうぶです。わたひは少しマスターの様子をみてひます」

茶々丸は言葉を囁みながら、逃げるように立ち去った。とうとう、この場には二人だけになった。

「チャチャゼロよ。自覚が無いんだが……俺って茶々丸を落としていたりするか？」

「多分ナ、才前ガ来ルマデ言葉ヲ囁ムナンザ、ナカッタカラナ」

やっぱりか。まあ、好きだからいいけど。

問題はエヴァだな。気まずい空気をなんとかしないと。

でも今日は会っても話すら出来ないだろうから、しばらく日が経つ

てから話をすすめていこう。



### 第三十六話 女子は昔の事を結構、根に持つ

「いや、さすが容赦ないね」

「ああ、修行というよりもサンドバックの練習に思えてくるっす」

「カモよ。何かを覚えるにはとりあえず実践するのがいいんだぜ」

カモにそんな事を言いながら、ネギの修行風景を見やる。

現在、エヴァ、茶々丸、チャチャゼロを相手にネギが模擬戦をしている。

いや、模擬戦じゃないね……。一方的なリンチに近いか。

「ほらほら、守りが薄いぞ。ぼーヤッ！」

そして、ノリにのったエヴァ。確実に楽しんでいるような気がしないでもない。

あ、ネギがぶっ飛んだ。

「クケケケー」

チャチャゼロ、お前の笑いは怖いから自重しろ。  
完全にホラーだから。

「……………」

茶々丸は 黙々とやっている。うん、特に言うこと無しだな。

「『雷の斧』」

「くうううっ！」

エヴァが詠唱した術がネギに命中する。  
得意では無いのに威力は十分だ。

「やっぱスゲーな、あの女」

「まあ、長く生きているからね」

生き延びるためには強くならざるを得なかったということか……。  
歳をとらない化け物として教会から追われ、魔法使いから追われた。  
誰も信用できず、安息の場所を求めて逃げ続ける。

俺には理解が出来ねーな。最初から絶大な力を持っていた俺にはな。

「どうしたっ！ 十四秒しか保てないぞ」

「は、はい……」

これで確か……二十回目だな。そろそろ、休憩を入れた方がいいよな。

全力戦闘だから、体力も魔力の消費がかなり速い。

短距離の練習のように、全力で走ったら長く休憩するという練習が望ましいと思う。

「エヴァ、休憩しないのか？」

「もう一回だ。ぼーや」

エヴァの身体が一瞬、硬直したが無視された。  
諦めねえぞ、諦めねえぞ。

「エヴァ」

「ほらほらっ。後ろにも注意を張れ！」

ダメでした。

なんか、悲しくなってくる。

「兄貴の声に反応しないなんて何があったんすか？」

「まあな……。エヴァが赤面するほどの秘密を見てしまっただけ以来、あまり口を利いてくれない」

カモにこの前、あったことについて、あやふやながら話す。

これまで起きた出来事をまとめてみようと思う。

はい、回想シーンほわわわん

今日はいつもよりも早く起きる事ができた。

なぜ早起したかという点、あの日記を見て以来、エヴァに避けられているからだ。

この微妙な空気をなんとかするためにも向かい合っただけ話をしてはいけない。

「無理ジャーネーカ？　ゴ主人、機嫌ヲ損ネタラ、シバラク直ラネーシ」

「その原因がお前だけだな」

「ソウトモ言ウナ」

チャチャゼロは実にあっけらかんと軽口をたたく。

「完全にそうだろ」

そう言つて、エヴァの部屋と続く階段を上る。

そんな時に後ろから、「マ、ガンバレヤ」と適当そつに声を掛けられた。

なんか……腹立たしい。

「エヴァく、朝だぞ」

エヴァの肩を軽く揺らす。

しかし、反応が無いのでしばらく揺らし続けた。

「むにい？ 朝か……」

「おう、朝だぞ」

数分して、ようやく目を擦りながら起き上がった。

ふらつくエヴァの身体を支えるべく、腕に手を伸ばす。

「……………」

エヴァは無言で俺の手を振りほどき、下に降りていった。

完全に避けられているレベルじゃないぞ。むしろ、拒絶されている。

『おはよう、茶々丸』

『あ、マスター、レン様に起こされたのではなかったのですか？』

『……知らん』

『ケケケケ』

……なにこの疎外感。つーか、チャチャゼロの笑い、マジで苛立ってくる。

ここはもう一度話しかけてみるか。

「おい、エヴァ」

「……………」

声を掛けてもエヴァは黙々と朝食を口に運ぶ。  
ならば、

「キティちゃん　ぶっ!？」

「スマン、手が滑った」

エヴァの嫌っている名前で呼ぼうとしたが、即座にトマトジュースをぶっかけられた。

謝罪されたものも、俺の事なぞ視界に入っていない。

これは……手強いな。それに、なんだか俺が悪いみたいで言葉を紡ぐ事ができない。

結局、このままだんまりで朝食を終えて、登校する事となった。

学園にいる時も何度か声を掛けたが、全部無視された。

「で、現在に至る」

「うーん、どうしようもねえな、それは」

「ホントになー」

このままここに居てもしょうがないな。  
外に食いにでも行くか……。

「あれ、どこ行くんっすか？」

「外に戻るわ。エヴァに話しかけるのはもう少し時間が掛かりそうだからな」

そうして、この場を後にして魔法球の外へと出た。  
そして、地下室の階段を上っていく。  
一階に到着すると生徒達がいました。

「まあ、そろそろとご苦労なこった」

「おおー、いいタイミングでレン先生はっけーん」

待っていましたと言わんばかりに、迫ってくる朝倉。  
なんなの、コイツ。

「聞きたい事があるんだけどさ。ネギ先生は何やってんの？ もし

かして、エヴァちゃんと禁断の……」

「刹那、この馬鹿の脳天をかち割れ、中身を捨ててくる」

「レントさん、それ、やったら死んじゃいます」

刹那は真面目に切り返してきた。うむ、冗談が通じないな。

「朝倉！ 前からお前の事が好きだったんだ。結婚してくれ！」

「えええ、ちよつ、待って、いきなりそんな事言われても」

朝倉の手をとり、真剣に見つめる。そうすると、いきなり朝倉は慌てでした。

「なんてな、冗談だ。バーカ」

「なっ………！」

おお、驚愕する表情も面白いな。

なんかこつ、もつと苛めたくなる。

エヴァ苛めをしていないから、いつもより心がくすぐられるな。

「レ〜ンく〜ん？ そういう冗談は禁止や」

「え、なんで？」

このかが微笑みながら詰めよってくる。

微笑ってもんじゃない。冷笑というのが正しい。

「き・ん・し！」

「わかった、わかったから、襟を掴むな」

このかから解放されると安堵の息が出てくる。  
いや、怖いやこの子。目が冷たかったもん。

「なんか……このかが姑に見えるアルネ」

「ん？　なんか言ったん？」

「なんでもないアル！！」

クーの方に振り向いたこのかの背中から黒いオーラが見えたが、気のせいだよな？  
うん、気のせいだ。

「それよりも、ネギはどこに居んのよ！？」

「ほほう、彼氏の行方が気になるのか？」

ニヤニヤと笑いながらアスナをからかう。

「違っつての！！　私はただ保護者として気になるだけで」

「まあ、みなまで言うな。ネギなら地下室でエヴァに（模擬戦で）ヤラれてるよ」

「え、それマジ？」



朝倉が即座に食いついてくる。  
朝倉、目が輝いてんな。

「ああ……何回も（模擬戦で）ヤラれてる」

「ななな、何でッ！ アンタ止めなさいよ！」

「えー、俺、今、エヴァに避けられてんの。だから、声が届かねんだよ」

「そ、それほど激しく……？」

「ん？ 自分で確かめれば」

この話である者は涙目になり、ある者は赤面し、ある二人はにこやかにコソコソと相談し、記者はハツラツした。  
うん、見事に勘違いしてくれているな。

「じゃ、俺は出かけるんで。後は勝つてにやってくれ」

生徒達にそう言って、俺は外に出掛けた。

外の天気は曇り空だった。こりゃ、雨が降るかね？

あーあ、傘持って来ればよかったのかもしれぬ。

でもまあ、いつか。

さて、何を食いにいくのか？

中華、和食、洋食の三つから、選ぶとすると。洋食かな？

今日はピザを口に入れたい気分だ。となれば、イタリアンレストランか。

……一人でだと少し寂しいな。誰か誘うか。

瀬流彦は今日は彼女とデートと朝、ウキウキしながら言っていたから無理だな。

タカミチも論外だな。この前、対立して今も引きずっているし。携帯の登録を見ながら歩く。

そして、生徒達のアドレスの所を見ていると、『超鈴音』に目が止まった。

正体不明の自称俺の弟子という天才未来人だ。

この前の返答も兼ねて、誘ってみるか……。

俺は超を食事に誘う事にした。

「もしもし？ 今から食事しに行こうぜ」

食事先で彼女の事について聞いてみるもの楽しいのかもしれない……。

### 第三十七話 ピザを切る「コロコロ」って、何て言うの？

テーブルの中央に置かれた大円のピザ一枚。向かい側には相も変わらず何を考えているか、わからない超の姿がある。

まあ、何を考えているかはどうでもいい。それよりもピザだ。ピザ。これなんていうんだっけ？ ピザカッター？

ピザカッター？ を使って、食べやすいように八分の一の大きさに切る。

「さ、食おうぜ」

「……食う前にこの前の返答を聞きたいのだが？」

神妙が顔つきで言われると、どうにも堅苦しくなっちまう。食事とというのは楽しく、騒ぎながら食うものなのにな。

「その話は後でな。それよりも相互を理解するために、質問しあわないか？ 黙秘権有りだ」

「ふむ、そんなに私の事が知りたいか？」

「ああ、それに逆に超の方が俺の事を知りたいんじゃないか？」

まずはピザを一口、頬張りながら超の反応を待つ。まあ、俺の事を知りたいかどうかなんてどうでもいいが。

「おや、どうしてそう思うか」

「質問を質問で返すって事は凶星だな」

「どうかナ？」

超の表情に変化は無かった。その代わりに、胡散臭い微笑みををしている。

「どうやら、嘘をつくのに慣れてるタイプの人間だな。」

「質問タイム開始！ スリーサイズと体重はいくつだ？」

「教えないネ」

「彼氏は？」

「いないヨ。私の質問」

切り出させないぜ、超。この場の主導権は俺が支配する。

「好きな人は？」

「答えられないネ。わた」

「今日の下着の色は？」

「いい加減にするアル！！」

超が声を張り上げてテーブルを強く叩きつけた。およっ？ キレるの速いな。まだ、質問したい事がいっぱいあんのに……。まあ、でも、ちよっぴり本性を出してくれたので超の素顔を知ることができた。

「大体、何ネ。あなたの質問、全部親父くさいじゃないカ！」

「精神は肉体にひっぱられるはずだから若々しいはずだぞ？」

この持論はエヴァのだ。当てはまってそうで当てはまっていないよ  
うな気がするがな。

たしかに若々しいんだが……変化とかが無いと墮落して年寄り臭く  
なる。で最終的にエヴァみたいなめんどくさやがりの引きこも  
りになる。

「それは肉体的に言えば、そうかもしれないが、あてにならないネ」

「正解……。で、パンツの色は？」

「また、それ力……」

超は目の前で深いため息をつく。ため息をつくところって、あんま、  
誰も見た事無いんじゃないか？

もしかしたら、俺が初めてだったりして。

「俺の希望としては白系がいいな。なんか、清廉潔白って感じがす  
るからな。逆に黒はヤダ。エヴァの見ているみたいでムカつくから」

「誰もそんな事聞いてないヨ。そういう話は止めてくれないカ？  
私のイメージが崩れる」

ああ、未来の俺ですか……。イメージが崩れるとか言われてもね。  
これが素だからね。性格は変えられないし。

「知らねえよ、んなもん。多分だけどな、お前、未来の俺に遊ばれてるよ」

「そんな事は億万分の一もあり得ないネ」

「や、だって、俺が赤の他人を弟子にしようとは思わないし。なんならかの興味があつて、弟子にした可能性が高いぜ」

「む……、まあ、興味という点では、その要素を持っていたガ……。遊ばれているのは無いネ。そんな素振りすら見せないヨ」

「かーっ、絶対に何か企んで超を弟子にしようと思うんだがな。現に、弟子っぽいので少し遊んでいるところがあるし。」

「お前がそれでいいなら、別にどうでもいいが、……その時が来るまで夢を抱いているがいいさ。絶対、何かするが」

未来の自分が何か企んでいる方に千ウオン賭けてもいいぞ。俺が勝つから。」

「質問、行くヨ。アナタはこの世に正義はあると思うカ？」

「ははあ、哲学的なもんを聞いてくるなあ。もっと、楽しい質問して欲しかったなあ」

「スマナイネ、つまらない質問で」

ニツと、胡散臭い微笑みを返してくる。それにしても、正義……か……。

自分自身の生きざまはどうなんだろな。善い事も悪い事とか考えな

いでやってきたからなあ。

「正義は、無いとも言えるし、あるとも言えるからな。俺の考える正義の定義は大多数が決めた善い事を行う事が正義なんじゃないか？ 結論づけると、本当の正義なんて存在しない。この世にあるのは独善の正義だけだと思っな」

ふう、なんか達成感が起こる。俺、いい事を言ったような気がするぞ、これは。

「と、いうことはダ。戦争を終結させるといふ皆の願いを叶えるためには何百人、殺そうがそれは正義でいいの力」

「そんなもんだよ。戦争を終結するのにはどちらかを迅速に圧倒すればいい。ま、相手側の犠牲者はたくさん出るがな」

「それは、大戦の時に感じた事力ナ」

「ん……まあな。あれは方法をまずった。どちらかを負かせばいいと思ったら、原因が別のところにあつて、犠牲者が増えるばかりだった」

戦争当時は力を思う存分に奮えて楽しかったのと同時に、目を隅に向ければ、死者やら苦しむ人々がいた。俺ら自身は彼らを救う手立ては持っていない。もし、救いがあるとしたら、武力で戦争を終わらせるくらいしかない。

ナギ達は戦争終結後、放浪しながら人々の救済をしていたみたいだが、救えた人は微々たるものだろう。

全ての人を救いたい　という、ナギの考えに感化されて、俺もやってみつかと思っただ。

「果たして、どのくらいの人を救う事ができるかな。超の計画で」

「少なくとも、十年経ったら戦争が起きないというのは保障できるネ。後、崩壊を止めるのも」

「十年経ったらか……」

十年経つまでは戦争らしい事は起こるといふ事か。そりゃあ、そう  
だろな混乱は確実なものだからな。

「で、この前の話の返答は……？」

「そうさな」

答えはもうすでに決まっている。俺には手の打ちようが無くて、超  
には救済する方法を持っている。

それに、十年間は戦争が起きるとなれば、戦争を起こす者を殲滅さ  
せるのは俺の役目にぴったりだ。

「お前の計画とやらに乗ってみるかな」

「うむ、アナタならそう言ってくれると思ってたヨ」

超は目を細めて不敵な笑みを見せる。う、胡散臭い……。なんでだ  
ろ？ このモヤモヤした疑念は。

信じきれない思いが胸の半分を占めてんだけど。

「何ネ？ その胡散臭いものを見るような目つきは？」



「なんか……策謀キャラみたいなのだと思ってるな」

『世界をこの手に!』とかの言葉が似合いそうだな。うん、想像するとスゲー似合う。

おや、超が手に持っているピザが地球みたいに見えるよ。

「そんな事ないヨ。私は純粹ダヨ」

「欲望にな。ククク」

「その笑いはやめた方がいいと思うヨ。アレな人に見えるから」

「何？」

アレな人って、頭がパーンな人か？ エヴァみたいに頭がお花畑な奴だな〜と思われる人の事か？

え？ 俺もアレと同一の存在なの？

「はつきり言っつて、キャラ付けしているようで痛い子に見えるネ。たまに突然、笑いだすエヴァンジェリンのようにダヨ」

「そ、そうか。今日から、この笑いやめよう。うん、決めた」

エヴァにそんなに似ていたのか……。なんか、ショックだ。

「まあ、頑張るといいネ」

「上から目線の発言にカチンと来たぞ。年下のくせに生意気な奴だ」

「そういう時だけ実年齢を引っ張りだすのはおかしいと思うヨ。爺

さん」

「誰がジジイだ!!! 張り倒すぞ!?!」

外見はジジイじゃねえぞ!?! いうならば……えーと、アレだ。エ  
ヴァの合法ロリと同じような感じだ。

……合法シヨタ? 違うな。シヨタっていう顔じゃない。

「フ、中々、短気な爺さんだね。そうカツカすると頭ハゲるヨ?」

「てめえ、覚悟しやがれよ。将来、てめえを探しだして泣かしてや  
っから」

「別に構わないヨ。もし、会ったとしても、それは私ではないから  
超ではない? ピザをツマミながらちよっぴり、思索してみる。

えーと、将来、超と会っても目の前の超ではないだから。現在と未  
来は別であるという事なのかな。

つまりだ……、現在と未来は一直線上にあるわけではなく、別次元  
の線にあるわけで、現在をA、目の前の超がいた所をBと置くと

「よく分からん……」

「ごちゃごちゃして来て、頭がオーバーヒートした。

俺の頭は論理的思考が、よほど苦手らしい。

「私が説明してあげようか?」

「いやいや、待て待て。あと少しで分かるからな? 説明できるか  
ら俺でも」

BからAに飛んで来るときは次元を超えているわけですし、つまりところ、別の世界……。ああ、なるパラレルワールドか。それなら、現在の俺と違う性格の俺が存在していてもおかしくはない。

しかし、パラレルワールド理論だと……。

「お前、未来に帰っても魔のつく世界は滅びたままだろ」

「ウム、そうダヨ。戻る時は私がいた世界の時間の枠に入るからネ。」

じゃあ、超がする事は無駄に終わるのではないかと思うのだが……。

「無駄だと思っているかもしれないが、私の願いは世界を変える事ネ。せめて、滅びない世界くらい作りたいヨ」

「だとしたら、すでに変わっているんじゃないか？ ほら、超が来た事によって……チヨウチヨ効果つての起こっているはず」

「バタフライ効果ダヨ。やはり、アナタは馬鹿ダ ひょうふあい！？」

あまりにも口が過ぎるので両頬を引っ張る。馬鹿とか言うな。少し長く生きていると、なんか頭の中に入らないだけだ。

「いやー、お前の事あんまし好きになれそうもないな。すぐ、馬鹿にするし。俺、そういう上から目線する人種が一番嫌いなんだよ。今までの中でもお前の言葉はいちいち、感に触る」

「いひゃ、ふあい」

しばらくすると手を払われる。うむ、超の頬は赤くなっているし、  
こちらで満足しておこう。

「痛い……、生徒に対してここまでするのは酷いネ」

「知らねえよ。生徒であっても手は抜かないのが俺の信条だ。……  
嘘だけだ」

「フム、そうやって、その場その場のノリで言って女子生徒達を虜  
にするわけだな」

超は赤く腫れた頬を擦りながら、ぼそりと呟く。  
コイツと話をする、本当に嫌いになりそうだ。

「何の事だよ」

「知っている癖に、エヴァンジェリン、近衛、桜咲、茶々丸はアナ  
タの事を好いているネ」

「……………あ、雨降ってるな」

超から目を窓の方へ背ける。雨が結構強い雨が降っているのが目で  
見ても分かる。

「あくまで、現実から目を反らすの力……。まあ、それでもガ。刺  
されても知らないヨ」

「おおいにあり得る状態になってるよ……………」

最近は、このかかな？ だんだん、黒い一面を出してくる。  
エヴァは今シカトされているから、放置しているけど……何とかし  
ないと、後が怖い。

刹那はたまに、自爆と暴走するし、茶々丸は意味不明な行動を起こ  
す。

「そうか……、頑張るネ」

超は俺の肩に手を置き、満面の笑みでそう言った。  
……ぶっ飛ばしてえ。本気でイライラと来るし。

「もう話終了！ 帰るぞ」

「先生、傘を持っていないみたいだが、大丈夫な力？」

そついや、傘……持ってこなかったな。って事はびしょ濡れコース  
かよ。

クソツ、素直に傘持ってくればよかった。『多分、大丈夫だろう』  
がまずかったな。『もしもかもしれない』精神で行かないからこう  
いう目に合うんだな。

「もし、よかつたら、私が送って行ってあげるネ」

超は一本の傘を取り出して、見せつけるように左右に振る。  
その行為を見た俺は

「マジ、よろしくお願いします」

低姿勢でその申し出を受け入れた。

第三十八話 あ、くまだ……

傘の下に二人が入っている事を相傘、もしくは相合い傘とも言つらしい。

これが異性同士だったら、デキてる可能性が高い　なんて生徒が言つてたけど、無いわ。

俺は単純に濡れるのが嫌だから、超の傘に入っているだけだし。

決して、生徒達が言うような状況じゃないからな！  
だつてさ

「傘を寄越せ！」

「何ネ？　私の傘に入れてあげているんだから、私が持つのは道理  
ヨ」

「ふざけんなゴラァッ！　俺の半身が完全に雨に晒されてんだよ！  
傘の主導権を争いながら歩いているんだもん。

店から出てから相傘になつていたが、身体を寄せあつても傘の範囲は超よりなわけだ。

そんなわけで、傘の中に入りきれない半身が雨で濡れている。

「もう半分は濡れていないんだからいいじゃないか」

「いいわけねーよッ。つーか何ッ？　なんか恨みでもあんのかよ？」

もうこれは完全に悪意を持ってやってるだろ。

じゃなかったら、こんな嫌がらせするはず無い。

「いやいや、そんなはずあるわけないネ。あなたは過去の存在といえども、私の師匠ダヨ。感謝こそすれど恨む要素なんてないネ」

そうやって超は傘を振り回した。

傘の上に乗っていた水滴は慣性の法則によって、俺の顔面にヒットした。

キレていいかな？ 言っている事とやっている事が全然違うんだもん。

「超鈴音く、調子に乗りすぎだ。いい加減にしねえとシバくぞ？」

「ア、アハハハ、痛いヨ」

頭ぐりぐりの刑に科したが、ただ苦笑するだけだった。

あまり効果が無いとはな……。どうしたものか。

「ん？」

刑を執行直後に違和感を感じた。よく分からないが、微弱な魔力が何処からか発している。

侵入者か？

「どうかした力？」

「いや、なんか、侵入者が入ったような……。気が」

「ほう……。それはご苦労ダネ」

仮に侵入者だったら、エヴァが狩りに行くだろうから放置して。微弱な魔力だし、きつと雑魚だろうしな。

「はいはい、さっさと行くぞ」

「あつ、傘を返すネ」

超から傘を引ったくって、先を進んで行く。置いていった超は駆け足で傘の中に入ってくる。

「……なんでまた、胸を当ててくるんだよ」

「おや、嫌いカ？」

「嬉しいぜ。できるなら、じかに揉みしだいたっていいんだぜ」

おっぱい、おっぱいってな。大きすぎず、小さすぎずの中くらいの大きさがいいだろう。

また、侮蔑混じった目で見られると思ったが、それは無かった。

「変態……」

今回は離れるなんて事はなく、むしろ抱きつく力が強くなっている。どんな顔をしているのかと思ったが、明後日の方向を見ており、表情を見ることは叶わない。

嫌われているのなら、こんな行動をしてくれるわけは無いだろう。多分、好意を抱いているんだろうな 未来の俺に。

そう考えると、未来の自分に嫉妬と侮蔑を覚えた。

なんかさ……光源氏みたいな事をしているなと思うとね……。



かなりムカつきますよね？　だって、超が好いているのは未来であつて現在の自分じゃない。抱きつかれても未来の方を想像しているんじゃない、嬉しくもない。や、胸の感触とか味わえるのは嬉しいぜ。でもなんと言つたらいいか分からないが、とにかく複雑だ。

「未来の自分、とにかくもげろ」

「自分に嫉妬した人をこつちに来てから初めて見たネ」

楽しむな、笑うなこのヤロー！　超はヤローじゃないけど。

俺の一番嫌なことその一、自分について笑われる事だ。

逆に他人の不幸を笑うのは好きだ。他人の不幸は自分の蜜つてな。

「どうせ、外見だけだろ？」

「まあネ。あなたの性格は見ている分は楽しいが、親密にはなりたくないヨ」

「そうかい」

指を立てて、面と向かって言われた。

分かつちやあいるけど、言葉に出されるとやはり落ち込むな。

後少して密集したショッピングモールを抜けようとしたところで、立ち止まる。

「……超。お前、今日、ついてないかもな」

目の前にあからさまな姿をした二メートルと三メートルくらいの大  
小の悪魔に加え、骨だけの人型悪魔が立っていた。

「召喚された悪魔とは初めて見るネ」

アレ？ あんまし驚いていないな。むしろ、興味深々の表情を浮か  
べていた。

「AGYAAAAA！」

「GURUUA！」

「おや、二体は言葉が通じないタイプの悪魔だね。そちらさんはど  
うかな？」

「……………」

骨さんはだんまりとして雨に打たれていた。

このタイプの悪魔は中位くらいだから、言語能力があるはず。他の  
二体は下級悪魔だ。それもかなり下の。

話を骨さんに戻すが……………なんかめっちゃくちゃ震えていた。

「あー……………大丈夫か？　なんか震えているが」

「……………無理無理、足止めなんて絶対無理。今すぐ帰りたい。マジ、  
オッサンだけでやってくれればいいのに」

聞いちゃいねーな、自分の世界に閉じこもっていやがる。  
まあ、この骨の発言から他にも呼び出されたみたいだな。

「G A A A A !」

大の悪魔が大木くらいの腕を問答無用で降り下ろしてきた。

そばには超もいるので、反撃というわけにはいかない。

反撃したらその隙に超がドンなんて事になりうるので、彼女を抱えて後方に下がった。

大の悪魔の拳は地面を陥没した。そして、再び腕を地面から引き抜くと、ぺしゃんこになった傘の姿が現れる。

「おおっ！ スリル満点ダネ」

「お前な……楽しみすぎだろ?! ちつたあ危機感持てや!」

「フ、守ってくれるだろう?」

そらな……一応、大切な協力者で生徒だし、傷つけはさせないがな。守ってもらう事を前提に上から目線で発言すな!

「つーか、お前も戦うくらいできんじゃね?」

「それは無理ネ。私のスペックはただの一般人と変わりが無いヨ。拳法は使えるが、あまり強くないネ」

「役立たずめ。お前、ホントに俺の弟子かよ」

俺はそれだけ言って、人が無く広い場所へと超を抱えて逃げる。当然のように悪魔は追って来る。はあ……なんで魔法教師達は来ねえんだろな?

気づいていないのか?

「GOAAA!」

「うるせえ! 還れ!」

飛び掛かって来た小の悪魔の首に足蹴を加えて、脳震盪を起こさせようとしたが、無理だった。

足蹴は悪魔を少し、吹き飛ばしただけだった。

下級悪魔と言えども身体は丈夫らしい。

けっこう気を込めたんだけどなあ……。

「超、十メートルくらいの高さから落下しても受け身を取れるか?」

「三メートルならなんとか大丈夫だよ」

「オーケー、アデアット。『アフ・アン・リ・マダ・マユ・ケイオ  
ウス』」

見晴らしのよい芝生に到着したので、反撃開始といきますか。

アーティファクトを出すと空を浮いた鏡が現れる。

これは多くある魔鏡の一つで、これといったモデル無く、ただの魔鏡だ。

映す者の本当の姿を見せる能力ではない。この能力は千里眼機能と攻撃補助、移動補助だ。更には分割機能もついている。

ターゲットである悪魔の姿を鏡に補足させ、広域殲滅魔法をぶちこむために詠唱する。

放つ魔法は『燃える天空』だ。理由? 後始末が楽だし、悪魔を一気に還す事ができるからだ。

「超、受け身取れよ！ ふん！」

悪魔達との距離を開けて、超をぬかるんだ地面に投げて、手を悪魔が映っている鏡に向ける。

「『燃える天空』」

火種は飛んで行き、後方で天を貫くほどの爆発音と共に熱を感じた。悪魔はどうなったかと思い、振り向くと炎が目前に迫っており、反応も出来ずに俺も炎に巻き込まれる。

「なんでえええええつ?!」

「AGAAA?!」

「GUOOOO?!」

悪魔二体の壮絶な咆哮と俺の疑問の叫びが見事に八モった。肉体が炎に蝕まれて焼け溶けていく。水分も蒸発していく痛みは尋常では無い。

エヴァが体験した火あぶりの刑もこんな感じだったのだろうかなあ  
あああつ!!

ヘルプヘルプ！ おかしいぜ。俺まで巻き込まれる  
ほどの魔力を込めていねえのに!?

ブツツと視界が暗転して、数秒後に視力が戻ってきた。  
肌を刺すような痛みも消えた代わりに、雨が降り注ぐ感触を全身で感じていた。

あー、なんだ、その……。服が全焼してスツパになった。

「へ、へへへ変態だー！」

「好きで脱いだんじゃねえッ！ 焼けたんだ！」

骨さんの叫びに直ぐ様、反論した。

クソッ、なんでこんな目に遭うんだ？

パクティオーカードの機能を使うか……。機能の一つである戦闘衣装を装着するために、アーティファクトを一回閉まって、もう一度出す。

出すと同時に衣装が装着された。正統派メイド服だけだな。

「むう、似合っているが……。師匠の姿で女装するのはやめて欲しいネ」

「じゃ、なんだ？ スツパで戦えって言うのか？ 泥女」

「それは、あなたがぬかるんだ地面に落とすからだヨ」

泥、泥、泥 超の服にはべつとりと泥水などがついて、台無しになっっていた。

まったく、ケガをしないように衝撃の少なくなりそうな場所を選んで投げてやったのに、なんて言いぐさだ。

「ま、無駄話はこちらまでにしといてだ……。下がってる超。骨さんよお、召喚者は誰だ？ 答えによって魔界に還す時の苦しみが変わるぞ？」

「ここに答えられない。私だって悪魔の端くれだ！ 契約内容は遵守する」

悪魔にしちゃあ珍しいな。契約者の命を守るとはな。だからどうって事はないがな。なんの情報も得られぬのならば、用は無い。

「そ、じゃあ、再起不能になるほどのダメージを与えて還すまでだ」

「ヒイイツ！ 痛いの勘弁して下さいいいっ！」

右と左から三本の肋骨が変則的な動きをしながら身体を貫こうと迫る。

鋭い肋骨を腕で防ぐ。腕から鮮血が飛び散った。

さっきの爆死よりも痛みはマシだ。

突き刺さった肋骨を片手で捕らえられるだけ捕らえ、引き寄せる。

「安心しろ……一撃で済む」

「来るなああっ！」

骨さんは手をこちらに向ける。何をするのか分からんが『断罪の剣』を発現させておこつと。

相手との間を縮めて『断罪の剣』を脇から振るう。

「あがつ?!」

身体の四方に何かが食い込んだ。その中でも痛みがはっきりと分かったのは眼球だ。

左目に白っぽい物体を視認したと同時にズブリと貫いて来やがった。こりゃあ、深いとこまで入ったな。

だがな……痛みなんて我慢すりゃあ、すぐ治るんだよ！

「オラアアッ！」

「アアアアアッ！」

足を踏み入れ、横に薙ぎ払う。だが、両断出来ず、動きが止まる。

「『アフ・アン・リ・マダ・マユ・ケイオウス』」

威力が不十分でもいいので術を最速で練り上げる。

「このオ！」

「貫きやがれ！ 『千の投擲』」

相手は雷の槍に貫かれ、地面に突き刺さった。

そして、一分も経たずに塵に紛れて消え去った。

魔界に還ったか、それとも力尽きたかは判断できないが、学園を守れただけでも上等だろう。

空を見やれば、いつの間にか雨は上がっていた。通り雨だったか。

「終わったんだけど……メイド服がボロボロだ」

「いや、やっぱりスゴいネ。さすがは英雄ダ」

「うん？ まあな。不老不死だから負けはあり得ないだろ？ ふう

……それにしても、何故だ？ 何故、威力を間違えたんだろな、俺」

もちろん『燃える天空』の時だ。ありゃあ、想像以上の威力だった。



「ああ、それは水蒸気爆発紛いのを起こしたみたいだね。水蒸気爆発というのは急激な燃焼熱のところに、水が入ると一瞬で蒸発し、その蒸発した水が拡散しながら、引火を起こすというものだヨ。芝生に焦げ後がついている事からして、コレに引火したんだろウネ」

「ふむ、なるほど……」

水蒸気爆発かー。なるほどなー。

「全然分かん。水蒸気爆発？ 何それ？ おいしいの？」

「なら、きつちりと説明してあげようか？」

「あゝパス。意味分かんからな。それよりも……今ごろ到着たあ、遅すぎじゃないか？」

この場所にノコノコやって来た魔法教師達にそういい放つ。やって来た魔法教師はガンドル、瀬流彦、シャークティだった。

「侵入された事に気がつかなかった事は謝罪します。それにしても……何ですか？ その格好は？」

「メイド服」

シャークティの問いに単純明快に答えると、超を除く三人は頭を押えた。

「俺の答えに何か不備でもあったか？」

「何故、そんな格好を　　と言う意味だったのですが……まあ、いいです」

「ところで、レントさん、侵入者は何体いたんだ？」

「中位悪魔が一体に下位が二体だな。撃退したけど」

撃退した結果がこの焼け野原になった芝生なんだよなあ。

「そうか……侵入者の合計は七体か……。生徒が傷つけられなかっただけでも幸いか……」

「あ？　他にあったのか？」

「うん、そうだよレント君。別の場所で高位と中位三体が確認された。そっちはネギ君が撃退してくれたよ」

「へえ、そう」

ネギが……？　嘘くさいな。誰かと協力したんじゃないの？

「さて、超鈴音の処分を考えましょう」

「処分する必要はないんじゃないか？　シスター」

超を処分の対象にしてもらっては困るので反対意見を出した。すると、ガンドルとシャークティは眉をひそめ、瀬流彦はその間で困惑する。

「彼女はただ巻き込まれただ。なにより未来人の話が聞けなくなるのは困る」

「君は……彼女からどんな話を聞かされたんだ？」

「世界情況以外の事はいろいろとな」

世界情況の事を話したらマズイ方向に向かいそうなので省いておいた。

こんなんでどうだろうと超に視線を送ると、ダークな笑みを一瞬浮かべた。

判断に困る笑みだな……。

「ともあれだな、超の処分は無しだ。後、治療班の所に案内してくれ」

「何かあったのかい？」

瀬流彦は神妙な顔つきで疑問を声にだした。治療班を要求するのはちゃんと理由がある。

「なんかな、左目の奥がゴリゴリして痛いんだよ。自分で抉って摘出してもいいけど、痛くない方がいいからな」

「え……摘出するの？」

「細胞再生が速いけど期待してるぜ」

三人に向かって、親指をグッと立てる。麻帆良の技術ならなんとかなるだろう。

大丈夫……だよな？

### 第三十九話 女心は秋の空

悪魔襲撃事件の事後処理を終えて、エヴァとの仲が戻らぬまま六月に入った。

六月の麻帆良祭準備期間が始まる頃に、このかが魔法を習得したそうなので朝早くから人目を盗んでテストを行うことにした。

場所は女子寮のこのかの部屋。アスナもネギもまだ寝ている時間帯だ。他の生徒も寝ている……と思う。そんな静かな女子寮に入るのって、犯罪的な香りする。

「ふああ……眠い……早くやってくれよ」

「ウチかて眠いの我慢しとるんやから、急かさんといて」

パジャマ姿のこのかは神妙な顔で杖を持ち、瞼を閉じて深呼吸を始めた。

息を整えて精神を集中させている彼女に対して、言いたかった事を口に出す。

「なあ……なんか飲んでいいか？ 喉渴いてるんだよな」

「今からやるところやから、我慢しといてや」

即座に却下されるとはガツカリだ。勝手に入れて飲みますかね？

何か飲み物を探すべく、物音を立てぬようにキッチンに行く。そして、冷蔵庫を開けてドアボックスを見やる。

何も無いな……。若いから清涼飲料でもあるかと思っただけだな。仕方ない、お茶にするか。

急須に茶葉とお湯を入れて、すぐ近くのマグカップに注ぎこむ。

「よし、『プラ・クテ……』って……おらへんし」

あ、バレた。ま、なるようになるだろ。こちらに近づく足音の主を待ちながら熱々のお茶を啜った。

うん？　なんか味に深みが無いというか、お湯に近いというか。茶々丸の淹れるお茶じゃないな。

「なんで勝手に飲んでるん？　それにそれウチのマグカップやん」

「へえ〜、そう。気にしなくてもいいから、早く行使しろよ」

カップの中のお茶を飲み干して、適当なところに置いた。さっさと終わらせて眠りたい。

「複雑な気分や……」

「まだか？」

「すぐやるんよ『プラ・クテ・ビキナル　火よ灯れ』」

ポツと軽く音を立てて、杖の先に火が灯った。やはり、このかの魔力が膨大なため並みの威力以上に激しく燃えている。

その光景は数十秒続いた後に火は消え去った。魔力が供給出来ずに消えたのでは無く、意図的に消された。

魔力の簡単な調節までしつかりと出来ているな。これなら合格だな。

「次や『プラ・クテ・ビキナル　風よ』」

魔力が確かに練り上げられ、小さな風を巻き起こす。威力としては扇風機の強くらいあった。

うん、完全に習得したな。次のステップはどの属性に向いているかの判別をして、方向を決めるか。

俺のイメージとしては光、火、地かな？ 光は性格の明るさ、前向きな感じから。火は治療術師としての才能からだ。

火と聞くと燃やす。つまりは破壊的な感じがするが、火は不死鳥の死と再生から命を司るという連想もできる。

治療術師と聞くと得意な属性は癒しの象徴である水と思い込みしやすいが、意外にも得意な属性が水よりも火が多いらしい。

地は母なる大地、包み込む母性というような感じだ。なんか適当な感じになったけど、大体そんな感じだ。

「えへへ、ウチ、上達したやろ？」

「やっとかという感じだな。このかの魔力量から見ると成長速度は少し遅いな」

嬉しそうな笑顔を見せるこのかに対して淡々と本音を出した。

予定では二週間で習得するはずだったのだが、結果は二週間と五日掛かった。

「むー、もっと褒めてくれたってええやん」

「俺としては一週間以上二週間以内で習得して欲しかったんだよなあ。だから、あんま褒められないな」

「そんなんゆるたって……努力したんよ？」

このかは若干、涙目でこちらを見つめてくる。まあ、努力していたってのは知っているけどさ。

毎日のように時間の合間を見つけては健気に練習していた。大人しい性格だと思っただけけど、以外に負けず嫌いなんだなと、このかの新しい一面を知った。

「だからな……頑張ったご褒美を」

「却下。約束は一週間以内だろうが。目標には届かなかったんだから、無しだ」

このかの要求を一蹴するとしゅんと頂垂れてしまった。

何なんだ？　なんか俺が間違った事を言ったか？　俺の言っている事は正しいよな？　一瞬たりとも間違っていないと主張できる。

「レン君って案外ケチなんやなあ」

「あー、わかったわかった……次の課題の時にも適用してやるから頑張れ。」

頭を掻きつつ、そう呟くと頂垂れた姿から一変して目を輝かせてきた。

変わり身早いな、オイ。そんなになんか叶えて欲しい事があるのか。いったいどんな願いなのか聞くのが少し怖いな。

「後、麻帆良祭準備期間と麻帆良祭当日は修行は休みだ。ちょっと仕事の方で、このかを見てやれないほど忙しくなりそうなんだな」

「ほえ？　仕事って？」



「生徒が羽目を外しすぎないように監視するための校内の見回りと、その麻帆良祭で警備が少し緩くなるのに乗じて侵入してくる馬鹿への警戒だな」

表も裏も仕事でいっぱいだ。俺は仮にも英雄なのにさ、英雄の子のネギは免除というのは何故なんだろうな。

やっぱし、アレか？ 期待度の違いか？ 世界を救った英雄の子を操って英雄にして自分達の思惑通りに動かしたいってのがあるんだろうな。

それを考えているのはメガロなんたらの元老院の総意。この学園もメガロなんたらの一部に入るんだけど、ジジイが黒か白か判別がつかん。

ま、メガロなんたらが何を考えているなんて、どうでもいいんだけどな。

「じゃあ、学祭中は暇が無いん？」

「んー、どうせ仕事は手を抜くから暇は作れると思うがな」

表も裏も全力で取り組んだら完全に過労になるから、表のだけやって裏のは他の奴を当てにさせてもらおうと思う。

もちろん超との約束も忘れていない。今のところの指令は超が買収する格闘大会に参加する事と、三日目の最終計画実行時に学園側の魔法使いを無力化する事。

エヴァを最低でも中立を、できたら仲間に引き込んでくる事。この交渉役が俺なんだよなあ。

アイツ、まだ俺の事を無視し続けている。茶々丸が説得を試みているが、どうにも上手くいかない。

ふう、今日にでも強引に話をつけてみるか……。

「じゃあ、ウチとせつちゃんと一緒に回らん？ もちろん、暇があればの話やけど……」

モジモジと俯きながらそう言ってくる。このか達と一緒に……楽しそうな感じはするな。

「うん、まあいいぜ。三日目以外だったら……」

「……三日目、誰と行くん？」

「は？ ぐえ！」

いきなりこのかに襟を引き寄せられ、首がギリギリと絞まっていく。何か俺は言っではならない事を言ったのか？

思い返してみるが気に触るような事言った覚えが無い。

「三日目に誰と学祭を回るん？ エヴァちゃん？」

「いや……違う……けど……」

「じゃあ……誰なん？」

戦闘など味わう心地よい恐怖と違って、得体の知れない恐怖が首筋を削っていく。

嫉妬だと仮定してもここまで反応するのだろうか？ このかの反応からして三日目に何かあるみたいだが……わかんねえ。

計画がバれているとかそんなんじゃないみたいだが、この場をさっさと乗り切るか。

「三日目は誰とも回る予定は無いから安心しろ」

「ホンマに？」

確かめるような声と共に絞めあげられていた襟が緩んだ。  
この後に続ける言葉を何したらよいか。うくん、やっぱ仕事を理由にするべきか。

「仕事だ仕事。その日だけの仕事はしっかりするようにと何度も念を押されたしな、面倒だが真面目にやらなきゃなんねえんだよ」

「なんや、そうやったんか」

このかはふにやりと笑みを溢した。ふう、なんとかなったな。

三日目の見回りはしっかりやるように、と言われたのは本当の事だ。ジジイに遊んでいてもいいけど三日目だけはしっかりやってくれる事を言われた。

まあ、学園の仕事じゃなくて、超からの仕事だけをしっかりやるんだけどね。

「んーと、一日目はウチも部活の催し物があるから、二日目と一緒に回ろうな」

「二日目な、了解。んじやあ俺は帰るからな」

「あ……うん。おやすみや」

影のゲートの転移魔法を使用し、足下から入って沈んでいく。

影の中に沈みきる最後にこのかを見ると、嬉しそうに俺が飲んだマグカップへと手を伸ばしていた。

ああ、洗っておけばよかったな。このかに洗わせる羽目になったな

ありやあ。

そうして、見慣れたエヴァのログハウス前と転移した。

「あり？ 灯りがついてる」

魔法球から帰って来たばかりだろうか？ まあいいか、聞いて見れば分かるだろう。

聞くのは茶々丸だけだな。エヴァに聞いてもどうせ無視されるからな。

ドアのノブを捻って、中へと入る。

「あ、レン様、お帰りなさいませ。どちらへお出かけでしたか？」

「ただいま、茶々丸。このかが魔法を習得したってメールで送ってきたんでな。成果を見に行ってきた」

「そうですか、ご苦労さまでした」

入ると茶々丸が迎えてくれた。うん、やっぱりいいわ。迎えてくれる人がいるっていうの。

茶々丸を思わずギュッと抱きしめたくなるがそこは自重する。

「待ってたぞ、レン。お前も飲め」

しばらくぶりで懐かしいエヴァの声が聞こえた。え、声を掛けられただと！？ テーブルの方へ向くとずっと不機嫌だったエヴァが上機嫌にチャチャゼロと酒盛りをしていた。

「……………茶々丸、何があった？」

声を掛けても無視していたエヴァがいきなり上機嫌になるなんて、意味が分からない。

「はい、それはですね」

「茶々丸、レンに絶対に話すな」

「分かりました、マスター。この事ですので私からは話せません」

茶々丸が理由を話すところでエヴァに遮られた。すごい気になるんだけど……。

何があっただんだ？

エヴァ本人に聞くべく、テーブルについた。

テーブルにつくなりグラスにエヴァからワインを注がれる。さあ、飲めと仕草を送ってくるので遠慮せずに頂いた。

「……」

本当に機嫌がいいな。

「なんか良いことでもあったのか？」

「ああ、最高に良いことがあったぞ。ムフフ、だけどレンには秘密だ」

「クケケケ……」

エヴァはウキウキとしながら質問に答えてくれた。そうして、一杯、また一杯と飲んでいく。

なんだか知らんが今が仲を修復するチャンスかもしれない。

「なあ、エヴァ……日記の件はスマン」

そう切り出すとエヴァの手が止まった。うそん！地雷踏んだ？エヴァはため息をつくとグラスを置いた。その傍らでチャチャゼロは気にせず飲んでいる。

「全く、酒が不味くなるような事を引つ張りおって……」

「本当にすみませんでしたア！」

テーブルに手をつき、エヴァに向けて頭を下げる。さあ、伝わってくれ！俺の誠意よ！

「ケケケ、面白クナツテキタナ」

「姉さん、大事な所ですから黙って見守りましょう」

「ダツテヨ、妹ヨ。カツテナイホドニシリアスナ空気ヲ出シテルンダゼ？ コイツ」

よおし、チャチャゼロ。お前は後でゴミ箱にダンクシュートしてやる。

泣いても許さないからな。

「その、なんだ……珍しく反省してるようだし、許してやらないこともないぞ？」

「マジ……いや、本当か？」

「……ああ、学祭で一日中付き合ってくれたらな」

一日中か……ならなんとかなるな。エヴァにしては比較的易しい案件だな。

もっとうろ……えげつない要求でもされるかと思ったんだけどな。身構えて少し空回りした。

「そんなんでいいならいいぞ」

「よし、じゃあ三日目を空けておけ」

「え、いや無理無理。三日目は用があるから」

エヴァもこのかと同じ事を言うんだな。本当に三日目に何があるんだ？

「何だと……お前、誰と学祭を回る気だ？」

眉をひそめて不機嫌を露にした。今すぐに弁明せねば！

「待て待て！ 話を聞け！ 三日目は超との約束が」

「超？ ほほう……あのチャイナ娘との逢い引きか？」

「茶々丸！ 俺じゃ駄目だエヴァに説明してくれ！」

「分かりました」

どうにも俺の説明じゃ、誤解が誤解を招くので茶々丸に助けを求めた。

茶々丸はすぐ応じて、エヴァに超との関係と計画を細かく説明する。やはり、最初から茶々丸に説明役を任せておいた方がよかったな。

……茶々丸が説明する事、約数分。  
説明を聞き終わってエヴァはグラスの中を飲み干して、答えた。

「魔法の存在をバラそうがバラしまいが、私にはどうでもいい」

「まあ、そう言うと思ったぜ。じゃ、どちら側にも不干渉の態度でよろしく」

やはり、か……。最初から予想できた事だし、別段驚く事など無い。

「ではマスター、超さんのお手伝いをしてもよろしいのですか？」

「構わん、一切干渉せん。勝手にしろ」

エヴァは不干渉で見物するだけという事で話がまとまった。チャチャゼロが人を切れるなら参加するとか言い出したけど、人を殺してはいけない事を話すと一気に興味を失って酒を飲む事に没頭した。動く殺人人形なんて仲間に入れたらろくな事ならない。こちらからお断りだぜ。

「三日目は諦めてやる。二日目ならいいだろう？」

「あ、先約が入っているから無理だ。一日目ならまだ誰とも約束はしていない」

「おいこら、誰だ先約というのは？」

またまた、眉をひそめるエヴァ。うーん、女心は秋の空という通りに付き合いが中々難しいな。



まあ、引つ張るとどうせ癩癩を起すから、ここは素直に吐きますか。

「このかと刹那」

「チツ、目障りな奴め……。癩だが一日目にしてやるっ」

「悪いな。そうだ、茶々丸も一緒にどうだ？」

回る人数は多いほど楽しいはずだ。という理由からじゃなくて、ただ単にエヴァと二人で行動するがなんか嫌な予感がするんだよな。

「いえ、そこはお二人で楽しんで来てください。私は超さんからの仕事がありますから」

「え、そうなんだ……。残念だな」

「ああ、全くもって残念だなあ？ レン」

や、お前の顔は残念そうな感じじゃなくて、したり顔だぞ。内心ではとてもよれこんでいるだろ？

「あ、でも一日目に野点がありますから、来てくれると嬉しいのですが」

「野点？」

「野外で茶を飲む事だ。茶道部主催だからな私も邪魔させてもらっ。その日は一日付き合ってもらっんだからな、当然お前も参加だ」

「なる。茶かあゝいいね。行くよエヴァとの付き合いは別にしてな」

抹茶のあの味わいは最高なんだよな。茶類の中で断トツ一位だ。ちなみに二位はコーヒ―。三位は烏龍茶かな？ どれも渋みの中に甘さがある物だ。

「ありがとうございます。レン様が来る事を心待ちします」

「いやゝ、学祭が楽しみだなー」

「ふ、まあ今年はお前らが暗躍する事だし、楽しめそうだ」

学祭まで後ちよっと、それまで真面目に仕事をして影を潜めていようっと。

## 第四十話 もうすぐ学園祭

「世界樹……伝説……？　なんだこれ？」

超包子でブランチを取りながら麻帆良新聞を見てみると、世界樹伝説についての噂がデカデカと一面を飾っていた。

告白すればカップル成立百パーセントとか書かれていた。アホらしいな。

確かに世界樹は魔力が集中しているけど、それだけだ。魔力が充分にあっても一般人には意味の無いことだ。

「この記事書いたの誰なんだよ」

文の中から記者の名前を探し出す。　あつた。名前はつと、朝倉か……。

うん、これはガセネタ決定だな。朝倉が担当した記事は基本的に誇張とでつち上げだ。信憑性が低い。

まあ、前の幽霊事件は本当だったけど、その時は偶然だろう。

しかしなあ……永い事生きているけど幽霊なんて見たこと無いから信じてなかったが、いたんだな。

世の中俺が知らない事がまだまだあると実感されたよ。

「世界樹伝説なんて、面白いものを見ているじゃないか」

「でうわっ！？」

いきなり耳元で後ろから聞こえてきたので、心臓がドキリとすると共にすっとんきょうな声を上げてしまった。

こんな突然に話しかけてくる奴なんて、ここでは一人しか知らない。多分、アイツだろうなと内心でイライラしながら振り向いた。ああ、やっぱり超か。

「いきなり後ろから喋るなチャイナ娘。心臓に悪いんだよ。その団子頭、もぐぞ」

「驚かせてしまってスマナイ。で、その記事の事は本当らしいヨ？」  
心底からなのか演技なのか分からない笑みで言われても、胡散臭さが増すだけだ。

「ふん……中華マン二個追加注文」

「中華マン二個ネ。了解したヨ」

そう言うなり厨房の方へ向かって行った。向かう途中でも注文を受けていたが、難なくこなしていた。

しかし凄いな。アイツ、手に伝票も何も持っていないのに注文を受けているし……。

ま、天才だとその場での暗記など造作もないんだろう。

超の行動を見る事に興味を失って、再び新聞の方へ目を移す。ある文に目が止まった。

「世界樹が発光する三日目が告白日和……？」

世界樹の発光つてアレだろ。溜め込んだ魔力が外に溢れる時に起る現象だろ。

まさか、その魔力が作用してカップル成立率が上がるとでも言うのか！

うーむ、超の計画じゃあ世界樹の魔力と魔力溜まりを利用すると聞いたが、世界樹の魔力単体でも一般人に力を与えるんだろうか？

しかも三日目と言えば、このかとエヴァがかなり異様な反応を示したのはこのためだったみたいだな。

いや、待て、早とちりし過ぎだ。エヴァは俺の事を手に入れたっていうのがあるから、三日目にこだわったのは分かるがこのか達はそうと決まった訳じゃない。

単なる偶然かもしれん。……偶然だと……いいなあ。

ふう……分かつちゃあいるさ。このかと刹那に好かれている事くらい、これまでの反応をみればな。

まあ、告白された時の答えは始めから決まっているけどね。

「中華マン二個、お待たせしたヨ。……珍しく神妙な顔をしているネ」

超が注文通り中華マン二個を持ってきた。その二つを受け取り片方にかぶり付いた。

もっちりした生地の中から熱々の具が溢れ出てくる。熱さに耐えながら咀嚼し飲み込む。

「この記事がホントだとしたら、学園祭を回る相手が本気なんだろうなと思ってな」

「オ、相手は誰ネ？」

「エヴァ、このか、刹那。このかと刹那は一緒に回る」

「なるほどネ。で、もし三人に告白されたら誰に応えるの力？」

面白そうに問いを投げ掛けてきた。メンドイなコイツ。

「答える必要性が見られないのでパスしておこう。

これは本当なのか？」

「だから本当らしいヨ。条件としては魔力溜まりですると叶うらしいネ。告白以外の願いも……。でも、願いが大きいほど使用する魔力が増えるヨ」

願いが大きいほど使用する魔力が増えるね……。個人単体ならその場で充分だが、人類全体だと世界中に魔力を行使しないとイケないから、術式を作り上げる。  
告白以外というと……

「じ、じゃあ、金をくれって言ったら叶うのか!？」

「さあ、やった事無いから分からないが、叶うんじゃないか？」

「うおおー！ 世界樹よ、俺に莫大なお金をくれー！」

世界樹の方に身体を向けて天を仰いだ。さあ、さあ、どうだ！ お金はどこからやってくる。

どこに落ちてもいいように、いつでも走れる態勢を作っておく。

しかし、お金はいつまでも待っても降ってこなかった。降ってきたのは

「アハハハッ！ 素晴らしい行動力だね。恐れいったヨ。アハハ」

超の笑い声と周囲の好機の視線だけだった。……もしかして、騙された！？

「……………」

「はあく、久々に楽しめたヨ」

片手の関節をゴキゴキと鳴らす。うん、激しくやっても問題無いな。今も微かな笑いを発している超を逃がさないように肩を掴む。

「アハハ、そんなに怒らなくてもいいじゃない力。願いが叶うというのは本当ダヨ。ただ、学祭の間だけネ」

「それを先言えよ！」

手を振り上げ、超に向かって加速させる。対一般用最終必殺攻撃

「デコピンクラッシュ！」

指に火花を走らせるかのように超のデコに命中……しなかった。

最強必殺の いや最終必殺だったか？ あー、もうどっちでもいいや。その場で命名した技だし。

まあ、そのデコピン（強）は超が後ろに下がったせいで空を切っただけだった。

「いきなり、仕掛けてくるとは危ないじゃないか」

「人をからかうからだ。あゝ、もう時間か……」

時間を見れば、自分が担当する見回りの時間になった。今から約三時間ほどの見回りをしなければならない。

「じゃ、そゆことで……」

「そうか、お仕事頑張つてネ」

にこやかな超に見送られながら見回りを開始する。

「　　と、待つネ！　会計済ましていないじゃないか！」

「チツ、んなもんツケとけ」

「ツケは無しダヨ」

ふう……払わず行けると思ったんだけどなあ。素直に払うか。

素直に代金を払った後、すぐに見回りの仕事を始めた。見回りといっても、なにも一人で学園を回るわけじゃない。

ツクか、一人で広大な学園を見回るのは無理。だから、学園をブロツクみたいに分けて、見回り時間を決めている。



で、俺の担当ブロックは龍宮神社があるブロックだ。今のところ異常無しだ。喧嘩や不審者など見かけていない。

「すげーダルい……やっぱ、真面目に仕事するたちじゃねーな」

そろそろ、休みたい。うん、休もう。異常なんて見かけなかったから、多分、見回っていないところも異常無しだろ。

そうと決まれば、どこかで休める場所を……。

「屋台がいつぱいだ」

ふと、龍宮神社に焦点を合わせるとそこは屋台と大勢の人々で賑わっていた。

む、これは見回りをせねばならんな。

ただ単に見回りをするだけでなく、屋台の出し物に危険が無いかどうか調査しないといけない。

そう、これは遊びじゃない！ 仕事だ！ という訳で……

「焼きそば、一つ」

「はいよ！」

威勢のいいオッサンに代金と引き替えにパックに入った焼きそばを受け取り、歩きながら食べ始める。

うまうま、ちよついと濃いめのソースが香ばしい。

食べている間にも次の調査対象を選ぶ。わたあめにしようかラムネかたこ焼き……お、あれはトルコのドネルケバブだ。肉の焼き具合がいいんだよなあれ。

「ど・れ・に・し・よ・う・か・な」

焼きそば食った後にくるのはわたあめ……いやたこ焼きだな。  
たつこ焼き、たつこ焼き？

たこ焼きの屋台を見つけた。見つけたのはいいんだが、屋台の名前が気になった。

『ロシアンルーレットたこ焼き』 面白そうだ。よし買いだ。

ロシアンルーレットたこ焼きを買って、まずはどんなものか外見を見る。

六個入りの一見普通のたこ焼きに見えるが、二個だけ異様に赤い色をしていた。

おいおい……バレバレなロシアンルーレットだな。危険ですって色をあからさまに出しているんじゃないか。

「レ〜ン君」

「およ？ なんだ、このかか」

「なんだじゃ、あらへんよ。ちょっとこっちに来たって」

意味も分からず引つ張られるままについて行く。着いた場所は物影だった。物影にはカモと刹那がいた。

「お前ら何してんの？」

「アスナ達の尾行や」

「そりゃあ、見れば分かるよ。というか、隣の赤毛誰だ？」

アスナと並んで歩く赤毛の方に目を凝らす。んー？ アレは……。

「……ナギ？」

「いえ、違います。年齢詐称薬で大人になったネギ先生です」

「アウト」

「へ？ 何がでしょうか？」

二人は何に対してアウトと言ったのか分からないというような表情を浮かばせる。逆にカモだけは汗を流していた。

お前が犯人ですか。

「年齢詐称薬は一応、禁止されているぞ。カモミール」

「いや、俺たちは何にも知らなかったっす」

「知らぬと言うか……まあいい。少しだけ貸してくれ!!」

「お……い、いいけ」

カモが承諾を口にしたと思ったら、

「ダメです」

刹那に遮られた。

「一体、その薬で何をするつもりなんですか？」

「そりゃあ、自分で使用したり、イタズラで誰かに飲ましたりと…  
…そうだ！ 刹那、小さくなる方を飲まないか？ お前の幼き姿は  
どんなもんか知りたいしな」

「それやったら、写メつといたで」

「お嬢様……ッ！」

このかから携帯が手渡されると、刹那が奪い掛かってくる。  
絶対に見てからじゃないと渡さないぞ。

「待て、刹那。まだ、見てないんだ」

「見なくていいですから、携帯をこちらに」

左手にたこ焼き、右手にこのかの携帯というわけで両手が塞がって  
いる。

奪いに掛かってくる刹那の手から逃れながら、携帯に写されている  
画像に目を向ける。

「かわええやる？」

「ふむ……これは中々……」

画像を見るとぶかぶかの制服を身に纏っていた幼い刹那の姿があっ  
た。  
若干照れているところがいいね。

「見んといて！」

「いや、見るなど言われても可愛いから目が離せないいつ!?!」  
ビュンと鋭い音が空を切った。刹那が野太刀を縦に振るっただけだった。

「いいから、携帯を渡して下さい」

真っ赤に染まった顔で怒気を含んだ声で脅された。野太刀を引き抜いた事で痴話喧嘩かと、勘違いした野次馬が沸き上がった。

「わ、わかった、わかった。ほら」

「お嬢様、私の写真を削除させていただきます」

「え……そんな殺生な」

このかの声も無視して携帯をカチカチといじくり始める刹那。恐らく、幼児化した自分の写真を一つ残らず削除しているのだろう。

「はい、お嬢様」

「あかん……ちっちゃい、せつちゃんが全て消されてもった」

「くく、何と惜しいことを」

あの天使のような可愛い姿が全て消えてしまったとは嘆かわしい。機会があれば年齢詐称薬を飲ませるか……。そうしよう。

「いったい何を考えているんですか？ まさか、私に年齢詐称薬を

飲ませようだなんて事……思っていませんよね？」

「……ははは。南無三ツ！」

チャキと野太刀を少し引き抜く音がしたので、その場から全速全力で逃げ出した。

あの場所にずっといたら、きっと酷い目にあったことだろう。だって、今日は珍しく刹那がキレかけていましたから。

数時間後、刹那から謝罪の電話があった。なんでもあの時は思わずやってしまったそうだ。

## 第四十一話 ハラハラ、ドキドキ

学園祭の前日、出し物が充実し賑やかになってきた。出し物が完成したところもあれば、まだ作業しているところもある。ウチのクラスはまだ入り口だけしか完成してない。

大丈夫か？ アイツら……。まあ、超がなんか考えていたみたいだし、なんとかなるんじゃないかな。

よくよく考えると、超のことがよく分からんな。目的があつて現在こゝに来たのだから、普通は目的を優先するはずだよな。

それが目的と同じくらいに、クラスのことを力を費やしている。計画に支障がないか不安に思うが、まあいいや。超にとっては最後の学園祭だろうから、思うところもあるんだろうよ。俺は何も言わんぞ。

計画通りに魔法の存在が世界に知れ渡り、魔法世界救済の一手となるならば、俺はそれでいい。

計画通りに進むならなね……。

計画通りに動かないような、又は支障が出るようなことを超が行動したなら、全力で修正する。その修正方法が超を行動不能にするこどもであつてもだ。

不意に携帯が震えた。  
いったい、誰なんでしょうか？ なーんて、見る前から予想できる。  
ぜってー、学園側の仕事関連だ。

準備期間中の事故の発生率が多くて、その処理によく狩り出される  
だよ。一日に何件だったっけな？ よく覚えていないが、頻繁に呼  
び出されていた気がする。

「ハロハロ、今日一番の仕事は何だ？ 動物が逃げ出した？ それ  
ともロボットが暴走したか？」

昨日は花火が暴発したり、どっかのクラスの出し物で使う生きてい  
るウナギが道に誤って落とされたという事故があったな。

火を消火したり、ヌルヌルするウナギを捕まえたりと大変だった。  
もう、ウナギは勘弁して欲しい。感触が気持ち悪くて……うえっ、  
思い出すだけで鳥肌が立つ。

『いや、そういう仕事の連絡じゃないよ』

「んあ、瀬流彦か……。なら飲みの誘いか？ 学園祭前日に仕事サ  
ボって飲むと思うと、より美味しく感じられそうだな」

皆が働いているのに自分は美味いもん食って飲んでいるという背徳  
感が悦だ。

飲みの誘いだと思っていたが、電話越しから瀬流彦の苦笑が漏れる。  
どうやら違うみたいだ。

『それはやってみたいけど……飲みの誘いじゃないんだ。電話を掛  
けたのは業務連絡だね。学園祭に関して注意事項があるから、魔法



関係者は世界樹前広場に集合だそうだよ』

「あー、結局また仕事かよ。何？ ジジイの徴集か？」

『うん、そうだね』

「はいはい、了承しましたー」

意を告げて通話を切った。

世界樹前広場って……ここから、すげー遠いんだが……。あーあ、転移の魔法を使って行きたいが、今の学園内はどこもかしこも生徒で溢れているからなあ。転移が使えん。

ゆったりと徒歩で行くしかねーな。どうせ、あんまし重要な話でも無いだろうし、寄り道でもするか？

「うーん、でもなあ……かなり遅れるとネチネチ言われっからな。急いで行った方がいいのはいいが、真面目に働くのもどうかと思うけどな」

真面目に働いたって給料は上がんない。あんのジジイ、おかしいだろ？ 学園の見回りや警護を真夜中とかやってんのに、魔法教師と一般教師の給料がほぼ同じだなんて。

たぶん、一般教師と同じなのは、魔法関係の仕事は基本的、無償でやるというのが常識になっているんだと思う。

ほら、大抵、普通の魔法使って『偉大なる魔法使い』を目指しているじゃん。だから、魔法関係の仕事は無償でやるのが当たり前という認識がされている。

まったく、めんどい考えをしている。そういうのって自覚して目指すものじゃないと思う。『偉大なる魔法使い』だったら、そんな称

号なんて気にせず自分の頭で考えて動いていると思うだが。

例としてそういう奴がいたのを知っている。

俺達だ。俺達『紅き翼』だ。アレは最初から世界救済などという理念を持っていた訳じゃない。単純に戦いたい馬鹿に有名になりたい赤毛、仲間というのに興味を持ち面白そうだという理由で入った自分。

何というか、中々私欲にまみれた人柄だった。

そして、世界が破滅に向かわせついる真犯人を知り、世間が耳を傾けない中で各々で考えながら行動を起こした結果、いつの間にか『偉大なる魔法使い』とやらになっていた。

ま、自分自身が『偉大なる魔法使い』か？ というのは疑問があるけどね……。

つと、こんなことしている場合じゃないな。世界樹前広場に行かんと。

歩みはゆったり……で到着は一番最後。考えた結果、これがいつも通りの俺だと思う。

「どーも、遅れましたー」

あれから四十分後に世界樹前広場に着いた。どうにも、ジジィがネギ達に説明しているところだった。

周りを見渡せばそこその数の魔法教師及び魔法生徒が、こちらを見て訝しんでいた。

「やっと来てくれたようじゃが……その箱は何じゃな？」

「見てわかんねーか？ タイ焼きだぞ」

ガソゴソと箱を開けて、一つタイ焼きを取り出して見せる。ただのタイ焼きと馬鹿にすることなかれ。普通、タイ焼きというのはつぶ餡だが、このタイ焼きはカスタードだ。

「いや、それは見れば分かるのじゃが……」

「だろうな。別のもんに見えていたら、精神科か眼科に行きだしなあ、なんか話をしていんだろ？ 俺の事は構わず、続きを」

ネギ、刹那に学ランした男子が並んでいる場所を通り過ぎて、瀬流彦の隣に立つ。

その際に刹那と目があったが、すぐさま俯かれた。耳が朱に染まっているからにして、学園祭を回る約束のことを思い出したのだろう。

「で、何の話なん？ 要約でよろしく」

「ああ……世界樹伝説って知っているかい？」

「おけ、把握した。願いを叶えるのを阻止だろ」

瀬流彦に話の要約を聞いて、一発で召集された理由がわかった。

「だいたい合っているけど、少し違うね。人の心に作用する願いだけ叶うんだよ」

「……………え？ 願いが叶うんじゃないの？」

「即物的な願いは叶わないよ」

肩をがつくりと落とす。それじゃあ、お金が手に入らねえんだ。自分の気持ちを慰めるようにタイ焼きを口に入れた。

「食べる？ 瀬流彦に弐集院先生」

「そうかい？ 頂くよ」

「どうも、ちょうど小腹が空いていたもんで」

近くの先生、生徒にも勧める。本来ならまあ、上げるなんてことはしないんだけどね。

なぜ、タイ焼きを分けたかというところ……皆の気を逸らしている。なんか上空にカメラっぽい変な機械が飛んでいるんだ。

超だろ…………あれ。あんのチャイナ…………何を考えていやがる。この会合を覗いたらただじゃ済まないぞ。バレたら、記憶消去される。

「……………見られていますね」

ホウキを持った魔法生徒がカスタードを口に付けたまま、そんなことを言った。

あゝ、バレたぞ。俺、限界まで手を出さんぞコレ。

何先生だったか、ヒゲグラがタイ焼きを加えたまま、飛んでいる機

械の方に手を向けて、指を鳴らした。  
その鳴らした矢先に風を切りながら鋭い刃が放たれた。見事に刃は  
機械を真つ二つ。

「魔法の感じはしなかった……機械だな」

先生方が何やら雑談の中、俺は気が気じゃなかった。

これって……今行動に移した方がいいのか？ ああつ、クソツ！  
ふざけた行動をしゃがって！

今、俺が動くつてのはマズイ。ここで超に肩入れするような素振り  
を見せてみる。思いつきり不自然だ。  
どうしたらいいですかー！

「あ、あのレントさん……大丈夫、ですか？ すごい汗ですよ？」

「ん、あ、ああ……刹那か。どうした」

心配そうに刹那は気遣ってくる。そんなに態度が表れていたのだろ  
うか。

むむむ……誤魔化さんと。

「会合は終わったのに動かないからどうかしたのかと思ひまして…  
…」

「少々、考えごとをしててなばーっとしてた。ま、気にすんな」

「そうですね、よかったです」

あゝ、刹那の笑みを見ていると考えが落ち着いてくる。ここは動き  
を抑えよう。動くのは超が魔法関係者に捕まって記憶消去さそよう

になっただけ動く。  
よし、決定！

「あ……えと……レントさん」

「うん？ まだ何かあったか？」

まずは超を見つけようと決意した時に刹那から再び呼ばれる。だが、呼ぶだけ呼んだだけで、その後に何も口にしない。

目があつちこつちに移動していて、手も忙しく動いていた。何が言いたいのだろう。

「………………。ふう、ががが、学園祭二日目に私のような者と一緒に戻ってくれるというので……その……ありがとうございます！  
それでは！」

返事をする間もなく、刹那は全力で走り去って行った。二日目はこのかと刹那で学園祭回るって約束したね。確かに。

「あ……転んだ……」

顔を地面にぶつけた刹那は鼻を押さえて立ち上がり、再び駆け出した。

まあ……可愛らしく感じられる。あゝイカンイカン。超を見つけたさないと。

俺も駆け出し、人混みの中へと入って行った。

時は移すって夜。飛行船の上に超派が集合。と言ってもハカセ、茶々丸、超、自分の四人しかいないけどね。まずは一番言わなくてはいけない。

「お前はいきなり何しとんだ、ボケっ！ 会合の内容なら後で教えてやる」

「アハハっ、まあ……結果オーライネ。そんなに怒ることはないヨ。茶々丸」

確かによお、ネギによって記憶消去されるのは回避された。しかも、学園祭の計画について何も知らないみだから、一安心した。しかし、見ていてハラハラ、ドキドキともしていた。そんな気分になったのは何年ぶりだろうか？ よく分かん。

「レン様、もう済んだことなので気になさらない方が良いかと。大事なのはこれからの動きだと思います」

うっう……茶々丸に言われると従わざるをえないような魅力がある。チラリと超の方を一別すると……にやにやと笑みを絶やさないでいた。

謀られたな、こりゃ。

「わかった、茶々丸の言うことに一理ある」

「ふーむ、レント先生は茶々丸の言うこと聞くんですねー」

ハカセが興味津々な感じで聞いてくる。おかしいと思えばおかしい

のだろう。人間がガイノイドに従っているのが。でもなあ……茶々丸は茶々丸だ。ガイノイドと言われようが、俺にとっては茶々丸にしかすぎない。

「そりゃあな、我が家の唯一の家政婦？ いや、常識人だしな」

「それは自分は常識を持ってないと言っているようなものだガ？」

「ああん！ なんか文句あつか！？」

「レン様……落ち着いて下さい」

優しき微笑には決して逆らえない。茶々丸の意に逆らうと、とても悲しそうな表情を浮かべるんだ。だから、逆らえん。

「わかったわかった。落ち着くよ」

「アハハ」

超の笑いはいつも癪に触る。くっ、我慢我慢だ。

超の笑いを我慢しつつ、これからの計画についての確認を開始した。



## 第四十二話　こんなにも意識したことは無い

憎らしい太陽の光がまぶたに降り注ぎ、俺の睡眠を邪魔する。

もう、朝かよ……くあああつ、昨日というより今日の夜中まで超と確認してたせいか、身体がすごく重い。

また、下敷きになっている左腕が痺れていた。

この痺れを解放しようと思返りを打とうとするが、びくもしない。

「んー？」

何かがおかしい。呼吸しづらいし、なんか……上から重しが乗っかってるみたいだ。

うつすらと重いまぶたを開いて見ると、ウェーブの掛かった長い金髪をした少女が乗っかっていた。

そのことを確認してまぶたを閉じる。中々、大人びた子だったな。

……誰っ！？

誰この人っ！？　学園にこんな生徒いたっけ？　っーか、見たこと無いんだけど。

よ、よーし、もっかい確認しよう。たぶん、誰かと見間違えたんだ。再び、まぶたを開いて乗っかっている少女を確認する。

「……………」

「……………」

視線が交わり、二人して見つめ合った。

胸がそこそこあって、脚もスラリとしている。肌はとても白く、つやも張りもある。

ヨーロッパ系としては美人の内に入るな。いったい誰なんだろうか？

まじまじと見つめ続けると、謎の少女がニコリと微笑み掛ける。

鼓動が一瞬高鳴り、思わずまぶたを強く閉じてしまった。

あ、あわわわわっ！　すごい緊張するんですけど！　どうしたらいいんだ！？

もう一回。もう一回だけ確認しよう！　一二の、三っ！

ぱちくりとまぶたを開いてもう一度確認する。。。

「うおわっ！？」

「危な」

鼻の先に彼女の顔があったので、びっくりして顔を逸らそうとしたら、ソファから一緒に落っこちた。

頭と腕がジンジンと強い痛みを発する。

「いつつっ……」

痛みのせいで眠気が全部吹っ飛んだ。身体感覚も徐々に戻ってくる。

その中で腕にふくよかな感触がする。結構、この子デカイぞ。

じゃなくて！　なんか行動を起こさんと！

「……ククク、クハッハッハッハッハッハッ！」

彼女は何かおかしいのか、いきなり高笑いを始めた。

おいおい……この声、かなり覚えがあんだけど……。明らかに同居

人の声なんだけど。

んー？ よくよく見ればエヴァに似ているような、似ていないような……。

「エヴァ……なのか？」

恐る恐ると半信半疑であったが、口に出してみた。彼女は、さも愉しそつに口を歪ませる。

「ククク……そうだ、私だ。ギリギリだが、学祭までに間に合った」

「なんだ、幻覚の年齢違いか……。人がやりたくもないメンドイ仕事をやってんのによお。腹立つな」

謎の少女がエヴァと判明すると、先ほどまでの高鳴りが嘘みたいに離散した。

「いや、これは幻覚じゃないぞ」

相も変わらず、ニヤニヤと笑みを見せてくれる。幻覚じゃないって？ 何を馬鹿なことを言ってたんだ？

エヴァの発言に呆れて、彼女を押しつけて立ち上がり、顔を洗うべく洗面所へ向かう。

「オイ、待て。黙って立ち去るんじゃない。なんだ？ その呆れたような目は？」

その通路にエヴァが回り込んで立ち塞がった。とても違和感がある。その違和感とはエヴァと俺の目線がほぼ同じなことだ。昨日まではコイツを見下ろしていたのにな。

「あのな……一夜にして急成長なんて出来ねえだろ。そもそも、お前、身体の時が止まっているし」

「ホラ、魔法球に入り浸って研究してたる？ あれは、肉体を強制的に成長させる研究をやってたんだよ」

「……………え？」

誇らしげに研究の成果やら経過をエヴァが次々と語り始めるが、頭に入って行かない。

「ちよっ！ 待て待て！ 世界の造る方法を研究してたんじゃないのか？」

「なんで、私が奴らのために研究せんといかんのだ？」

エヴァは眉をひそめて答え、俺の頬に手を添えた。

「まったく……………修学旅行の時に言っただろ？ 成長薬を作るってな」

「うえ、あの話本気だったのかよ。エヴァの事だから忘れていると思っただが……………」

言われて今思い出した。確かにあんどとき、言っていたな。

「そりゃあ……………お前が欲しいからな」

「……………」

欲望丸出しで獲物を狙うようにキラキラと瞳を光らせてくる。  
一瞬、ゾクリと悪寒が走る。うはあく、やはり女というのは怖い。  
というか……エヴァの執念深さからして、逃げられないような気がするんだが。大丈夫かなあ？

将来のことを考えるだけで不安事案が横切る。  
追い掛けられる俺。物理的に拘束される俺。薬物で精神支配される俺。

無さそうであり得そうだ。

「あー、諦めてくれ。俺は縛られるのは嫌なんでね」

「無・理」

爽やかな笑顔のもと、拒否された。なんてワガママな奴だ。  
まあ……そう来ると思ってたけど。

「レン、今日は分かっているよな？」

「あゝはいはい、ほぼ一日付き合いますよ」

「よし。軽く朝食を摂ってから行くからな。覚悟しろ」

太陽の光で輝く髪を嬉しそうに揺らしながらエヴァは、食卓の方へ向かっていった。

覚悟って何の覚悟だよ。よく意味が分からん。とりあえず、顔、顔。顔を洗わんとな。

「……………茶々丸は？」

テーブルに着いて、料理の有り様を見て思わずそう言い放った。これは茶々丸らしかぬ料理だ。料理のところどころに綻びが見える。要するに詰めが甘い。

目玉焼きの黄身は全て固まっているし、ベーコンを巻いたアスパラガスは少々焦げすぎている。食パンは逆に焼きが足りなくて、焦げ目が薄い。

たぶん、この料理はエヴァのだと思う。

「朝早くに学園に向かった。あと、チャチャゼロもだ」

「ああ、そうなの。……………最悪だ」

「聞こえてるぞ」

コーヒーを淹れたカップを二つ持ってきて、鋭く言った。

「いただきます！」

この後にネチネチと責められるのもイヤなので、食べ始めた。ふむ、味は悪くない。普通においしいと感じる。

「うまいな。エヴァがまともな料理が作れるとは思っていなかった」

「茶々丸が来るまでは一人でやっていたからな。一通り出来るぞ」

そういや、そうだったな。茶々丸は超が来てからだもんな。料理か。俺は作れないな。料理とは言わない料理だったら作れる。作り方は至って簡単で、食べそうな動物を丸焼き。植物は熱して食う。

味なんて二の次だ。腹が膨ればそれでいいような代物だ。

「ほら、早くコーヒー飲め。時間が惜しい」

「うーすっ」

コーヒーを飲み干す。

……ん？　なんか味が変だったが、あまり気に止めない。

「……………よし」

「あ？　なんか言ったか……………」

ボソツとエヴァが何か言ったので、いぶしかんで顔を向けると言葉を失った。

なんだろう？　エヴァがなぜか可愛く思え、鼓動が再び高鳴り始めた。

「あ、いや、なんでもない。行こうか？」

「……………」

ハツとなり冷静さを表現するエヴァが気になる。彼女の動きに心が惹かれる。

「レン？　いきなりぼーっとし始めてどうした？」

「おおつ、悪い。少し考えていた」

「何をだ？」

「あー、アレだアレ。魔法バラシ計画のことだ」

即座に思いついた言い訳で誤魔化す。言えるわけないだろ。お前に見とれていただなんてよ。

まったく、何を考えているんだ、俺は？ 今のエヴァは、ただ成長しただけだろうが。

落ち着いて行こうぜ。うん、今日の付き合いだって、いつもと同じように行動すればいい。

よし、オーケーレッツゴー。

「さ、行くぞ」

「ああ、なんでも来いや！」

「なんだ？ 変なことを言い出して」

「なんでもねーよ！」

ぶつきらぼうにいい放って、学園への道を先に歩んだ。その後をエヴァが走って追いかけてくるわけだが、その時も気になって身体がソワソワする。

視線はエヴァの魅力的になった身体や横顔を終始、移し眺めていた。だって気になって、気になって、たまらないんだ。



そんなこんなで学園に着いて回り始める。少し調子がおかしいのだが、エヴァに付き合うしかない。でも、二人で並んで歩くのが恥ずかしくて、つい、歩みを早めてしまふ。

「オイ、歩くのが早いぞ。速度を落とせ」

「ああ……それは悪い」

「まったく……何度目なんだお前は？ こっちに来い」

呆れたようにエヴァは、俺の腕を引き寄せてガツシリと手を握って来た。

歩みを同じにするためにそっつい行動を取ったのだろう。

「うむ、これでよし」と

「何なんだよ？ 握ってきて」

「何度も先に行くからだろう？ 握られるのが嫌なら歩みを私に合わせろ」

「へいへい……返す言葉がねーよ」

極力、エヴァを見ないようにするために周囲の出し物に目を向けた。興味のあるものに対して、よく見ようと向かう。 引き寄せられる。

……向かう。引き寄せられる。向かう。引き寄せられる。向かう！ 引き寄せられる。向かう！ 引き寄せられる。

「いい加減にしるよ！」

「ふらふらと、どこかへと行こうとするな。一緒に回らなければ意味がないだろうが。それともなんだ？ 約束を破る気か？」

「……………チッ」

ぬぬぬ……………悔しいが今日のエヴァは正論しか言っていない。

腹立つはずなのに、不思議と逆らう気も起きない。マジ、今日は調子がおかしい。

「んで……………何を見に行くんだ？」

「学園祭は何度も体験して飽きているからな、どこかに回りたいたいというのは無いな」

「じゃ、適当に散策ということになるな」

散策なら見回りの仕事をやっているように見えるから、俺としては好都合だ。

「ああ、それでいいぞ。私はお前と一緒に過ごすだけで満足だからな」

「ハア……………いつも休日は一緒じゃん。休日と同じ行動を取って、おもしろいか？」

「休日は全然だ。お前はすぐ馬鹿にするし、ゲームくらいしか過酷させてない」

エヴァは陰りを見せながら不満を口にした。そうだったっけな？  
けっこう、一緒に過ごしている気がする。休日でもエヴァの顔を見て  
ない日はなかった。

「そうか？　俺は」

「　　恐竜時代に行きたいな」

「…………この声はアイツか」

すぐ近くで聞き覚えのある声の方へ向くと、懐中時計を持ったネギ  
とカモ、刹那が何やら話している。

恐竜時代に行くって…………頭がおかしくなったのか？

しかし、あの懐中時計…………魔力的なものを感じる。たぶん、アレは  
マジックアイテムだ。

エヴァも気になるらしく、不遜な笑みで頷いた。

「その懐中時計、微かに魔力的なものが感じるな」

「えっ!？」

「それを私によこせ」

「レントさんと　　誰ですか？」

弟子の言葉にエヴァが盛大にずっこけた。ありやりや、自分の弟子  
にすら気づいて貰えなかったな。

ま、俺ですら分からなかったんだからな。初見じゃ、誰が誰なのか

分からないのは当然の結果だろう。

「……もしかと思うのですが、エヴァンジェリンさんですか？」

自身なさそうだったが、気づいたようだ。半信半疑といった感じだ。

「ビンゴ。よく分かったな。ちなみに決め手はなんだ？」

「声と反応ですね。しかし……」

エヴァを複雑な顔をしながら目を見やり、俺の方に向けて、またエヴァの方へと移した。

何か言いたそうだな。何を言いたいのかは分かりそうな気がするがな。

「しかしなんだ？ 桜咲。文句でもあるのか？」

「いえ、別になんでもありません」

互いに見据えて視線を逸らさない。二人の間で一瞬、火花が散るように見える。

ああ、面倒なことになってるな、ホント。今更ながら思うが……安請け合いしなきゃよかった。

俺は一日の遊び相手もとい暇つぶし相手な気分なのに、女子はデートとして認識しているようだ。

「あの〜、マスターはレンさんと何を……」

「ああ、暇つぶし( )デート( )だ」「」

恐れながら馬鹿なことを質問してくるネギに答えると声が被った。互いの答えは百八十度違っていた。答えが違うのは当然っちゃあ当然だが、被ったのがなんか嫌だ。

嫌なはずなんだが……心がズキリと痛んだ。何故だ？

「……………よしっ」

勝ち誇るように刹那が、グツと手を握りしめた姿をエヴァが睨み付けた後、顎に手を当てて考え込み始めた。

「……………完璧な……………効いて無い……………そんな筈は……………」

「いきなり、ブツブツ言い出し始めてどうかしたか？」

「あ、いや、なんでも無い。……………レン、言いたいことがある」

「うん？」 思案状態から戻ってくるなり、真剣な目をしてくる。偽りの無い目だ。

そんな目を向けられると、どぎまぎして目が合わせられず周囲をフヨフヨと見る。

「ふむ……………問題無いな、うん。今日はデートだ。分かるな？」

「は、はあ？ エヴァがそう思いたければ、そう思えばいいと思うが」

「そっか、なら」

エヴァは微笑を溢して、左腕に絡みついて身体を密着させてきた。独特な甘い匂いがする。いい匂いだ。

「何をしているんですか!!」

驚愕を隠せずに動揺した刹那が糾合した。思わずといった感じだ。

「今日はデートなんだ。身体を密着するくらい当たり前だ。それにレンも満更では無いみたいだぞ」

「え……ああ、まあいいんじゃない？」

特に深く考えずに適当に口に出した。今日、エヴァに抱きつかれてもそれほど嫌ではないし。うーん、こうなんて言うんだろ。一緒にいることが特別な感じがしてくる。

「……そんな」

「ふふふ……そういうことだ」

がつくりと項垂れる刹那を見て、エヴァが勝ち誇った。あ、なに？ この結果は俺のせいかな。不意に腕を引っ張られる。

「行こう、レン。ふふっ」

「あ、ああ……。じゃあ二人共」

「あ、はい」

「……本当にどうしたら……お嬢様に……うん……」

ネギはペコリと一礼したが、刹那は周りが見えないほど思考に没していた。

もう一度声を掛けようとする間もなく、エヴァにやや強引に引っ張られながら二人と別れた。

「あー、あの懐中時計、奪わなかったな。良かったのか？」

「そう……だったな。桜咲の奴のせいで忘れてた。でも、もうどうでもいいさ。お前とのデートの方が大事だ」

「そうかい」

エヴァが依然と左腕に絡みついた状態に、緊張しながら歩む。

動きづらいが心地よいので、離せとかは言わない。

まったく、なんでだろ。表現出来ない感じが心を満たす。

ああ、もしかしたらこれは………かもな。

頬を緩ませてたまにエヴァの方を見ながら散策を続けた。

## 第四十三話 ゴールしてもイイヨネ？

時計の針が正午にさし掛かるうとした頃に、少し早い昼食をとることにした。昼食をとったあとは野点に行く予定だ。

昼食をとる場所は超包子。俺は出し物の店でもよかつたんだが、エヴァは超包子じゃないとダメらしいので超包子にした。

「……………ふざけているだろあいつら」

「単なる偶然じゃない……………よなあ。エヴァ、見逃してやれ」

「まあ、本格的に邪魔しない限りは見逃してやるさ。仮に邪魔でもしてみる。明日のを邪魔してやる」

満面な笑顔が見られると思っていたのだが、現在のエヴァはやや不機嫌。原因は俺の後ろの席に座っている刹那とこのか。

「いったいどんな手を使って、何千もいる群衆の中から見つけ出したのか謎だ。」

『エヴァちゃんが……………ほんまに成長しとるし……………』

『く……………やはり、明らかに私よりも胸がありますね……………。レントさん、外見に騙されないで下さい。エヴァンジェリンさんに身を寄せたら自由の終わりです』



「……なあ、振り向いちゃダメか？　すごく気になるんだけど……」

少しだけならいいだろうと顔を後ろに向けようとすると、頬に手を当てられ妨げられた。柔らかい指の感触だ。

「今日は私だけだぞ。他の女のことなぞ考えるな」

「え、ああ……」

『……………ジーツ』

戸惑いながら返事をすれば背中に謎の圧力が掛かってくる。

ああ、もう……腹が痛くて食が進まない。注文した炒飯が四分の一くらい残って冷めてしまっている。

「レン、手が動いてないぞ」

「今の状態で食えって言われてもな……無理がある」

針のムシロに座っているような感じなのだから仕方ないだろう。するとエヴァは何かを思いついたように手を叩いて、向かい合いから俺の隣に席を移動した。

「なら、ちよつとゲームしよう。この炒飯を二十秒以内に食えたら、好きなところを触らしてやる。食えなかったら私が好きなところを触らしてもらつからな」

「何故、今やるんだそのゲーム」

バキリ、メキイ！

『すいませ〜ん、割り箸折ってしもうたので新しいのください』

『あ、私もお願いします』

怖い……後ろ、超怖いんだけど。嫉妬の圧力が余計に強くなっているし。

ここは明日の身の安全のためにゲームをやめさせよう。残念だけどもね。

「はい、スタート」

「え、ちよつと!?! 俺、やんねえ」

「知るか。強制参加だ。十秒」

うわっ、すごい良い笑顔だ。つと、見惚れている場合じゃない。

炒飯、食わねえと。……やっぱ無理だな。食えねえ。残り十秒以内じゃ無理。

「終了、食べなかったな」

首に手を回されて、顔を近付けられる。鼻先同士がチヨンと当たる。だが、そんなことは問題ではない。見えるのだ。服の隙間からエヴァの胸が。下着は黒ではなく、白だった。

なるほど、今日の服が白系だから統一しているのか。なら下も白か。ガーターベルトと合わせてエヴァのを連想した。やべ、想像が止まらぬ。

「んちゅ……」

「!?!?!?!?!」

口に柔らかいものを押し付けられる。エヴァとの二度目のキスだ。一度目は修学旅行で……二度目は往来でか。どちらも共通することはエヴァからしてきたことだ。

『な!?!?』

『また、やられた……』

落胆の音が後ろから上がるが、さほど気にならない。抱きしめてよいのか分からずに手が中に浮く。

「失礼だがお二人さん、往來で見せつけないでくれるか？ 男性客の殺気が並みならないネ まあ、その中でも後ろの二人が断トツだけどネ」

横からいきなり乱入した言葉に反応してエヴァが少し離れた。  
我らのボスである中華娘 超だ。トレイを持っていることから、  
どうやら今はここで仕事をしていたみたいだな。

「何か用かチャイナ娘」

「良いところで邪魔したのは悪かたヨ、エヴァンジェリン。でも、二人がそうしていると店に損害が出るネ」

辺りを見渡せば納得だ。男性客のみが割り箸をギリギリと噛んでいた。

あ、でもカップル客がキスしてんじゃん。後ろの人は言わずもなが、割り箸を折る音が連続して鳴り響いている。

二人共、怖いなオイ。

「超、のんびりしてても良いのか？ 忙しいんじゃないのか？」

「ウン、忙しいネ。やることが沢山あって中々消化づきないヨ」

ちよっと計画の準備具合が気になったので、当たり前障りのないよう

に聞いてみると、どうにもハードのようだ。

「ふん、コイツが忙しいかどうかなんてどうでもいいだろ。もういい、勘定しろ」

「はいはい……ちょっと待ってな」

「代金はこちらネ。随分と楽しそうじゃないか」

エヴァから離れて代金の会計を済ましながら、超は口を開いた。

「そうかい？ いつも通りだと思うんだが」

「いつも、あんなに密着するの力？」

「……………しないな」

「非常におかしい状態ネ。一日でラブラブになるにはクスリでも盛らないと無理があるヨ」

クスリ……？ ラブラブにさせるクスリ…惚れ薬？

エヴァが盛ったとでもいうのか？ そんな怪しい素振りは見られなかったし、何より誇りを持つエヴァがするわけがない。

チラリとエヴァの方を少し見てみる。ついでに刹那とこのかの姿も見えたが何やら禍々しいのですぐに視線を逸らした。

エヴァの立ち振舞いはいつもと変わらずだ。変わったところは体格くらいか。

「その可能性は極めて低い」と言えるのか？「……といいなあ。参考までに聞きたいんだがソツチはどんな感じに……？」

超の世界ではどうなっているか興味を持ち聞いてみた。

世界は違えど思考パターンは同格のはずだから、こちらと大差ないはず。

「さあ？ 一度も彼女を見たことがないから、知らないネ」

「ふーん……そうか」

会ったことが無いってことは、向こうの自分はエヴァと行動を共にしていないってことだ。いったいどうやって逃げたのが気になるな。超から領収書と釣り銭を受け取ってエヴァのところに戻る。並んで歩むと当然のように引っ付いてきた。何の悪い気もしない。

「何の話をしていたんだ？」

「例の件……だよ。で、すぐに行くの？」

超の話が引っかかっていたので、ここは誤魔化しておく。

この感情は確かなものだとは信じている。偽りであるはずがない。しかし、コレは前例のない感情なのでどうしても疑ってしまうのだ。

「ああ……でもアレを撒かないとだ」

顔の動きで冷ややかな目をしたエヴァは後ろの二人を示す。耳を済ませば、すぐに聞こえてくる位に近い。

『ウチらもあれくらい密着したろ』

『そうですね。あれくらいしないと……いけない……ですよね』

二人の意気込みがひしひしと伝わってくる。ははあ……エヴァに対して対抗意識を持っているのがよく判る。

でもな、バレバレな付きまといを行うのはどうかと思っぞ。やや妨害みたいなものだから。

「んじゃ、あの角で二、三回転移してGOな」

「どうせなら私を抱き上げてやって欲しいな。アイツらに見せつけてやりたい」

「マジかよ……」

現在の地点から数メートル離れた建物間の通路つばいの中に入って、二人を撒くことを告げると無茶振りされた。本心を明かせばその提案はものすごく良い。どんな身体つきかを確かめられるからな。でもそれを二人に見せるのはマズイ。嫉妬心を煽ることになる行為だと俺にも判る。

その場は良くても後が大変になる。惜しいが却下しようとしたが。

### 無言の圧力

エヴァは若干顔を下に向けて、目をこちらに向けてジッと見つめる。こ、小悪魔だ。良心を破壊する小悪魔がいる！

「わかったわかった……やってやるよ、エヴァ。だからそんな上目遣い禁止」

「ふむ、やってみると成功するもんなんだな」

「何を参考にした？」

「ゲームだよ。アレだアレ、」 は仲間になりたそうにこちらを見ている『のヤツだ」

冗談っぽく言ったそんな姿にまたグツと来る。

今日のエヴァは何でもかんでも破壊力がありすぎる。



「アレな……んじゃ、行くぞ」

一息ついてからエヴァを抱える。エヴァは振り落とされないように俺の首に両手を掛けて、嬉しそうに微笑む。柔らかい物腰をしていて、意外に軽かった。同じくらいの背丈だから体重も同じくらいだと思っていた。全く違うんだな。男と女って。

『飛んだー!? しかも、姫さま抱っこや』

『マズイッ!』

やはり、跳ぶと周囲がどよめくが……ここじゃあ軽い非常識な現象はすんなりと受けいられるから、問題は無いだろう。

「周囲はゼロつと……」

「待ってください!」

予定通りに角に入り、無いとは思いつつも一般人がいなか確認し、影の転移を始動させると刹那の荒げた声が響く。結構、足が早いんだな刹那。



E、って思いながら見てた。

その中で不思議に感じたの町で見かけた舞妓さんの化粧。おしろい、べったりなのに汗でよく落ちないよな。

「俺、着たことないから着方なんて知らないぞ」

「安心しろ、茶々丸が着せてくれる。なんなら私が着せてやろうか？」

「いい！ 茶々丸にやってもらおうから！」

「そうか……残念だ。茶々丸、頼んだぞ」

「はい、マスター」

本当に残念そうな顔をしながら、エヴァは部屋から出ていった。さつきがさつきだ。なにちよっかい出されるか分からない。

「つか、アイツ一人で和服なんて着れんのか？ 強制的って言うていたし、茶道部の部員が着けるのを手伝うのだろうな。」

「それではレン様、脱いで貰って良いですか？」

「任せろ、パツと脱いでやる。確認しとくけど下着以外だよな？」

「はい、そうです」

上をまとめて脱ぎすて、靴下を脱いでから下つと。そして、人形のように茶々丸に和服を着せられていく。そんな中で先ほどの超の言葉を思い出した。

「あー、茶々丸……」

「なんででしょうか？」

「エヴァが成長に関して研究してたっていうのは知っていたんだよな？」

「はい」

手を動かしながら茶々丸は質問を肯定した。予測された答えだ。さらに質問を続けていく。

「じゃあ、その研究以外に何か俺に内緒で行動していたことはあったか？」

「いえ、それ以外にはありませんでした。それがどうかしましたか？」

いつもエヴァの近くにいる茶々丸でも知らないとなると潔白じゃん。超の深読みすぎだな。

「何となく聞いてみただけだ。答えてくれてありがとな」

「はい。……あ、そういえば」

「うん？」

「一昨日ですが、マスターがカモさんに自分から話しかけていました」

「カモ……カモ……ああ、あのオコジヨか。何の話をしてたんだ？」

カモとはな……珍しいこともあるもんだ。あいつらに共通の話題あったのか。

「音を拾うことができませんでしたので分かりません。ただ、カモさんはマスターに脅されているようでした」

「へえ……脅されていたねえ……」

脅迫か。何かそこはかたなく事件の匂いがする。

馬鹿正直にエヴァに聞いてもはぐらかされるだろうから、カモに脅し聞いた方がいいな。

今度会った時にじっくりいたぶってやる。

「ん〜、動きにくい服だな、やはり」

「とても似合ってますよ」

「そうかい？ ま、茶々丸がいうならそうなんだろうけど」

ひらひらと袖を振り回しながら鏡を見てポーズを決める。うーむ……和服に合うかつこいいポーズが決まらない。

そんなことを思案していると、茶々丸に手を引かれながら外へと連

れられた。

「レン様、着きました」

「そう？ ふんぶん、なかなか見晴らしがよくて清々しいな」

陽射しもあっていいな。それに和服なのに風通しが良く、気持ちいい。

むにむにと背中当たるものも気持ちいい。……………むにむに？。

「えええ、エヴァか！ いきなりなんだ？」

「色仕掛けだ。こんな風にな」

振り向けば着物姿のエヴァが垂れかかって、誘惑してきた。俺、そろそろ無理かも……………。

「おお、最高かも」

「ふん、やはりいいなお前は……………」

「いつになく激しいアプローチですね、マスター」

「あと少しだ。あと少しで落ちるぞ。なあ？ 今日は私を受け入れてくれてるよな、レン」

息遣いが耳に掛かる。そのあとヌルリと生暖かいものでなぞられる。ゾクゾクとして快感すら生ずる。もう俺は確定なのかもしれない。何が確定かって？ 言うまでもない。コイツが 好きだ。何故、今までそう思わなかったのだろうか。

「単純かもしれないがエヴァさ、もの凄く可愛い。……好きになるかもしれない」

「！ よしっ、落ちたか」

「あ、いや、かもしれないだ。まだ好きになったわけじゃねえよ」

「体温が三度上昇しました。気分が昂ってます」

茶々丸に指摘されると恥ずかしくなる。今、顔が赤くなっているんだろな。

ちと、目線を遠くの風景に逸らした。いったい、エヴァはどんな顔をしているやら。

ま、たぶん良い笑顔だと思っけどね。

「ククク、いずれにせよ陥落寸前だ。だめ押しに仕掛けていこう」

その言葉通り、エヴァは野点であれやこれやと嬉々しながら色仕掛けをしてきた。

どれも魅了されるほどであった。エヴァとのデートをいつまでも楽しみたいが……超の仕事も忘れてはいない。

夕方、武道大会に参戦しなければな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1364k/>

---

バグキャラの気まぐれ

2011年6月8日21時18分発行